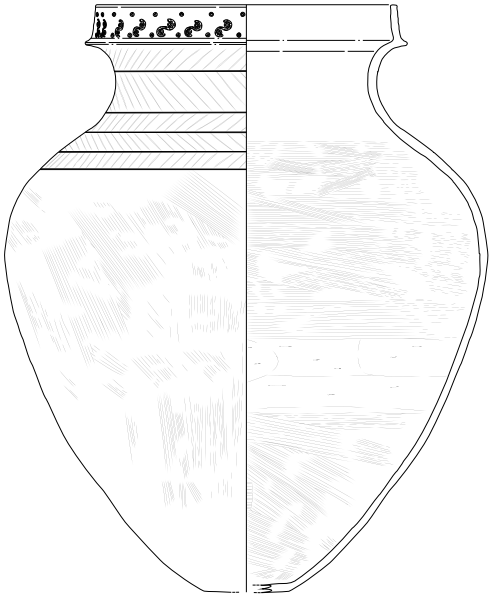
一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

御崎谷遺跡
間谷東遺跡
浅柄北古墳
間谷西Ⅱ遺跡
間谷西古墳群



２００９年３月

島根県教育委員会

出雲インター線建設予定地内空撮写真

浅柄北古墳空撮写真（南から）

序

本書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成 18・19 年度に実施した一般県道出雲インター線建設予定地内に所在する御崎谷遺跡、間谷東遺跡、浅柄北古墳、間谷西Ⅱ遺跡、間谷西古墳群の発掘調査成果をとりまとめたものです。

これらの遺跡は出雲市東神西町及び知井宮町に所在し、神西湖の東岸に展開する低丘陵と谷部に立地しています。周辺には出雲平野では数少ない古墳時代前期の山地古墳や出雲部最大級の前方後円墳である中期の北光寺古墳、戦国時代には尼子氏・毛利氏の合戦の舞台となった神西城跡など重要な遺跡が存在し、出雲平野の歴史を語る上でも注目される地域の一つです。

今回、５箇所の遺跡の調査を行い、弥生時代から中世にかけての集落跡や墓など多様な性格をもつ遺構が見つかりました。中でも御崎谷遺跡では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての多量の土器が出土していることから、この地域に古墳時代を中心とした大規模な集落が存在していたことが推測されます。浅柄北古墳では山地古墳とともに出雲平野では数少ない前期の古墳が見つかりました。また、この古墳の周辺では、古墳時代後期の墓である横穴墓も多数造られていることがわかり、古墳時代の墓制を考えるうえで貴重な資料となりました。

これらの調査成果は島根県の歴史を明らかにするうえで欠くことのできない貴重な成果であるといえます。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や、出雲市ならびに島根県土木部をはじめとする関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成２１年３月

島根県教育委員会
教育長　藤　原　義　光

例　言

1．本書は、島根県土木部道路建設課から委託を受けて、島根県教育委員会が平成 18・19 年度に調査を実施した一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査地は下記のとおりである。

平成 18 年度

出雲市東神西町 183-2 他　　御崎谷遺跡

出雲市知井宮町 1685 他　　間谷東遺跡

平成 19 年度

出雲市知井宮町 2412-2 他　浅柄北古墳

〃　　1503-13 他　間谷西Ⅱ遺跡

〃　　2501-1 他　間谷西古墳群

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成 18 年度　現地調査

［事　務　局］　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（総務グループ課長）、川原和人（調査第 1 グループ課長）

［調　査　員］　今岡一三（調査第 1 グループ主幹）、大田晴美（調査補助員）、田中裕貴（同）

平成 19 年度　現地調査

［事　務　局］　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（調整監）、坂本憲一（総務グループ課長）、廣江耕史（調査第３グループ課長）

［調　査　員］　今岡一三（調査第３グループ主幹）、大田晴美（調査補助員）、岡本育子（同）

平成 20 年度　報告書作成

［事　務　局］　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（同副所長）、赤山　治（総務グループ課長）、廣江耕史（調査第３グループ課長）

［調　査　員］　今岡一三（調査第３グループ主幹）、岡本育子（調査補助員）

4．発掘調査ならびに報告書作成にあたっては以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して謝意を表させていただく。

田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暲（同）、渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）、花谷　浩、川上　稔、曽田辰雄（出雲市文化財課）

5．挿図で使用した方位は、測量法による第３座標系Ｘ軸方向を指し、平面直角座標系ＸＹ座標は日本測地系による。また、レベル高は海抜高を示す。

6．本書で使用した第２図は国土地理院発行の 1/25,000 地図、第３・４・88・93・129 図は出雲市都市計画平面図を使用して作成したものである。

7．本調査に伴って行った自然科学的分析は、次の機関に委託して実施し、その成果については第８章に掲載した。

人骨分析（土井ヶ浜遺跡　人類学ミュージアム）

木製品の樹種同定及びＡＭＳ年代測定分析（文化財調査コンサルタント株式会社）

８．本書に掲載した写真は、空中写真を除き今岡が撮影した。

９．本書に掲載した遺物実測図の作成は調査員・調査補助員が行った。

10．本書の執筆、編集は各調査員の協力を得て、今岡が行った。

11．本文・図版中の表記に用いた遺構略号は次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑、ＳＲ：自然河道、ＳＸ：その他の遺構

12．遺物実測図の断面は、縄文土器、弥生土器、土師器を白ヌキ、須恵器を黒塗りで示している。また、赤色トーンは赤彩土師器の赤彩の範囲を示す。

13．本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過・・1
第１節　調査の経緯
第２節　調査の経過
第２章　位置と歴史的環境・・5
第３章　御崎谷遺跡・・・9
第１節　調査の概要
第２節　低丘陵部の調査
第３節　平地部の調査
第４節　小結
第４章　間谷東遺跡・・・115
第１節　調査の概要
第２節　小結
第５章　浅柄北古墳・・・122
第１節　調査の概要
第２節　横穴墓の調査
第３節　古墳の調査
第４節　小結
第６章　間谷西Ⅱ遺跡・・160
第１節　調査の概要
第２節　小結
第７章　間谷西古墳群・・177
第１節　調査の概要
第２節　小結
第８章　自然科学的分析・・・183
第１節　御崎谷遺跡発掘調査に係る出土木質遺物の樹種同定
古野　毅・渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）
第２節　御崎谷遺跡発掘調査にかかるＡＭＳ年代測定
渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）
第３節　出雲市浅柄北古墳出土の人骨
松下孝幸・松下真実（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）
第９章　総　括・・・211
第１節　神西湖東岸地域における集落の様相
第２節　出雲平野における前期古墳の様相
第３節　横穴墓の様相

挿図目次

第 1 図　御崎谷遺跡・間谷西古墳群・間谷西Ⅱ遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳の位置
第 2 図　出雲インター線建設予定地内遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第 3 図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第 4 図　御崎谷遺跡　位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第 5 図　御崎谷遺跡　全体図及びグリッド配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 6 図　御崎谷遺跡　調査区西壁セクション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 7 図　御崎谷遺跡　調査区東壁・南壁セクション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第 8 図　御崎谷遺跡　加工段位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 9 図　御崎谷遺跡　加工段１～５位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 10 図　御崎谷遺跡　加工段１・２実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 11 図　御崎谷遺跡　加工段１・２出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 12 図　御崎谷遺跡　加工段３・４遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第 13 図　御崎谷遺跡　加工段３・４セクション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第 14 図　御崎谷遺跡　加工段３出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第 15 図　御崎谷遺跡　加工段３出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第 16 図　御崎谷遺跡　加工段３出土遺物実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第 17 図　御崎谷遺跡　加工段３出土遺物実測図４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第 18 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第 19 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第 20 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 21 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第 22 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図５・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第 23 図　御崎谷遺跡　加工段５遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第 24 図　御崎谷遺跡　加工段５出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第 25 図　御崎谷遺跡　加工段５出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第 26 図　御崎谷遺跡　加工段５出土遺物実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 27 図　御崎谷遺跡　加工段６・７位置図及びセクション図・・・・・・・・・・・・・・・34
第 28 図　御崎谷遺跡　加工段６平面及び遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第 29 図　御崎谷遺跡　加工段６出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第 30 図　御崎谷遺跡　加工段７平面及び遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 31 図　御崎谷遺跡　加工段７出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第 32 図　御崎谷遺跡　加工段７出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 33 図　御崎谷遺跡　ＳＫ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 34 図　御崎谷遺跡　ＳＫ０１出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第 35 図　御崎谷遺跡　建物跡及びピット群位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

第36図　御崎谷遺跡　ＳＢ０１～０４位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第37図　御崎谷遺跡　ＳＢ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第38図　御崎谷遺跡　ＳＢ０２実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第39図　御崎谷遺跡　ＳＢ０３実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第40図　御崎谷遺跡　ＳＢ０４実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第41図　御崎谷遺跡　ＳＢ０５実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第42図　御崎谷遺跡　ＳＢ０６実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第43図　御崎谷遺跡　Ｐ１０８遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第44図　御崎谷遺跡　Ｐ１０８・Ｐ２８０出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第45図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１・ＳＫ群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第46図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第47図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１及びＳＫ群完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第48図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第49図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１出土木製品実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第50図　御崎谷遺跡　ＳＫ０２～０７実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第51図　御崎谷遺跡　ＳＫ０３・０５・０６出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・55
第52図　御崎谷遺跡　土器だまり甕出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第53図　御崎谷遺跡　土器だまり遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第54図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第55図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第56図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第57図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第58図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図５・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第59図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図６・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第60図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図７・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第61図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図８・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第62図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図９・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第63図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図10・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第64図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図11・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
第65図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図12・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
第66図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図13・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第67図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図14・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
第68図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図15・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第69図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図16・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第70図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図17・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第71図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図18・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
第72図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図19・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
第73図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図20・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

第 74 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 21・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第 75 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
第 76 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第 77 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第 78 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第 79 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第 80 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第 81 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
第 82 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 8・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第 83 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 9・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第 84 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 10・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
第 85 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 11・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第 86 図　御崎谷遺跡　包含層出土木製品実測図 1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
第 87 図　御崎谷遺跡　包含層出土木製品実測図 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
第 88 図　間谷東遺跡　位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第 89 図　間谷東遺跡　全体図・セクション図及び遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・116
第 90 図　間谷東遺跡　ＳＤ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第 91 図　間谷東遺跡　出土遺物実測図 1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第 92 図　間谷東遺跡　出土遺物実測図 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
第 93 図　浅柄北古墳　位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第 94 図　浅柄北古墳　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
第 95 図　浅柄北古墳　1 号横穴墓実測図 1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第 96 図　浅柄北古墳　1 号横穴墓実測図 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
第 97 図　浅柄北古墳　2 号横穴墓実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第 98 図　浅柄北古墳　2 号横穴墓遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第 99 図　浅柄北古墳　2 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第 100 図　浅柄北古墳　3 号横穴墓実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
第 101 図　浅柄北古墳　3 号横穴墓閉塞石・遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・130
第 102 図　浅柄北古墳　3 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
第 103 図　浅柄北古墳　4 号横穴墓実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
第 104 図　浅柄北古墳　4 号横穴墓閉塞石・遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・133
第 105 図　浅柄北古墳　4 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
第 106 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第 107 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓閉塞石・石床出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・136
第 108 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓人骨・土器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
第 109 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138
第 110 図　浅柄北古墳　6 号横穴墓実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139
第 111 図　浅柄北古墳　6 号横穴墓遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140

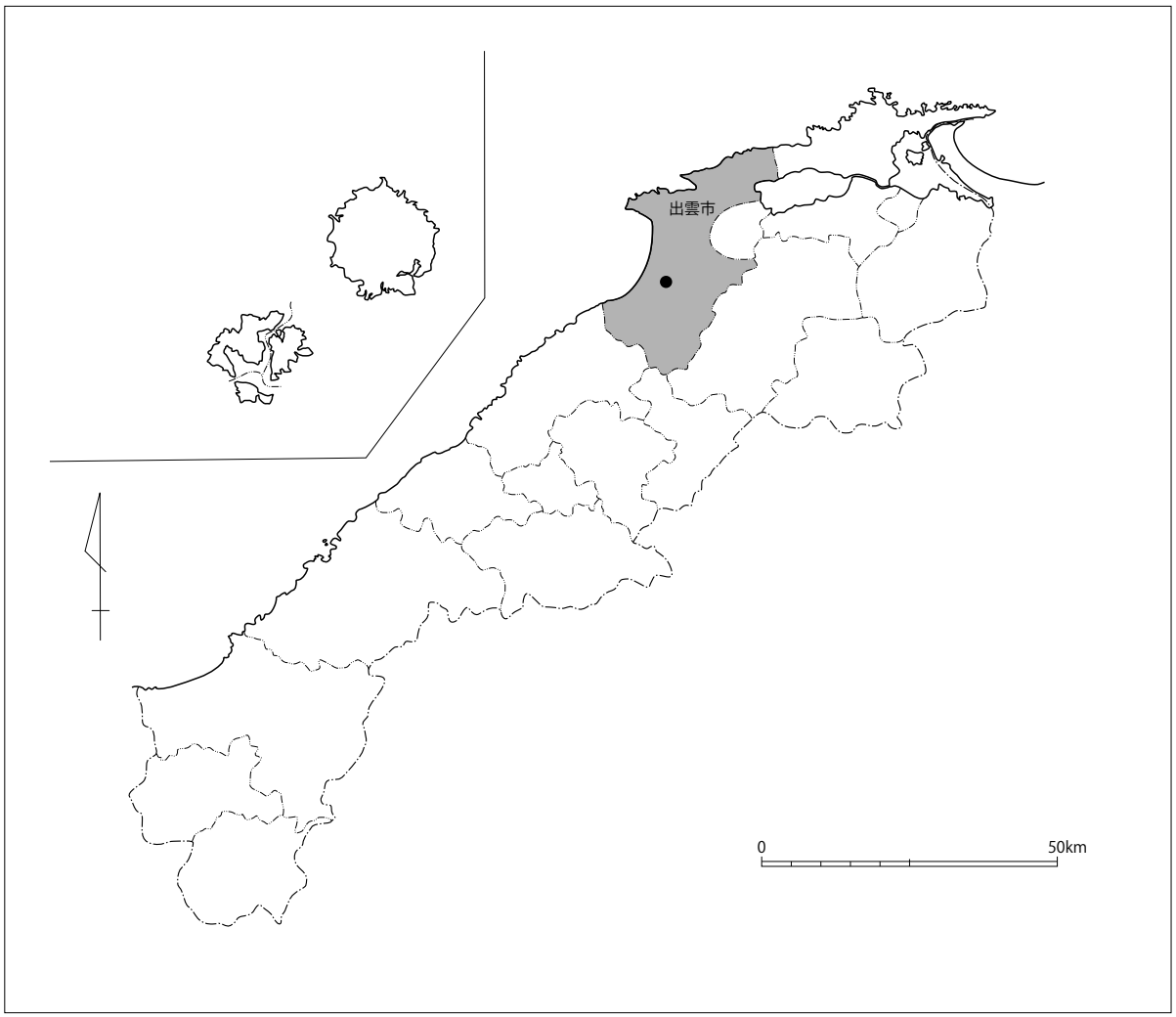
第 112 図 浅柄北古墳　６号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
第 113 図 浅柄北古墳　７号横穴墓実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第 114 図 浅柄北古墳　７号横穴墓遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
第 115 図 浅柄北古墳　７号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第 116 図 浅柄北古墳　８号横穴墓実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
第 117 図 浅柄北古墳　８号横穴墓遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・145
第 118 図 浅柄北古墳　８号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
第 119 図 浅柄北古墳　１号・２号土器棺出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
第 120 図 浅柄北古墳　１号土器棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
第 121 図 浅柄北古墳　２号土器棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
第 122 図 浅柄北古墳　土器棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
第 123 図 浅柄北古墳　１号墳セクション図及び遺物出土範囲・・・・・・・・・・・・・・・150
第 124 図 浅柄北古墳　１号墳・土器群１遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
第 125 図 浅柄北古墳　１号墳・土器群２遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
第 126 図 浅柄北古墳　１号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
第 127 図 浅柄北古墳　墳丘２・３遺物出土状況及びセクション図・・・・・・・・・・・・・154
第 128 図 浅柄北古墳　墳丘２・３・その他出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・155
第 129 図 間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群　位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
第 130 図 間谷西Ⅱ遺跡　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
第 131 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅰ区全体図及びセクション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
第 132 図 間谷西Ⅱ遺跡　ＳＢ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
第 133 図 間谷西Ⅱ遺跡　ＳＲ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
第 134 図 間谷西Ⅱ遺跡　ＳＤ０１～０４実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164
第 135 図 間谷西Ⅱ遺跡　集石遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
第 136 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅰ区遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
第 137 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅰ区出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
第 138 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅰ区出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
第 139 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区全体図及びセクション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
第 140 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区加工段１・２実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・170
第 141 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区加工段２遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
第 142 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区加工段２出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・172
第 143 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区加工段２東側出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・173
第 144 図 間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区包含層出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・174
第 145 図 間谷西古墳群　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・177
第 146 図 間谷西古墳群　１・２号墳実測図及び遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・178
第 147 図 間谷西古墳群　１・２号墳セクション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
第 148 図 間谷西古墳群　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・180
第 149 図 間谷西古墳群　３号墳実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181

第 150 図 出雲平野の前期古墳位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・214
第 151 図 出雲平野の前期古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・215
第 152 図 神門横穴墓群と浅柄北古墳位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
第 153 図 石床実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・218

写真図版目次

御崎谷遺跡　図版１～図版 65
図版１　上：御崎谷遺跡調査前風景（西から）　下：加工段３遺物出土状況
図版２　上：加工段４遺物出土状況　下：加工段４完掘状況
図版３　上：加工段６遺物出土状況　下：加工段６・７完掘状況
図版４　上：調査区西壁セクション　下：土器だまり遺物出土状況１
図版５　上：土器だまり遺物出土状況２　下：土器だまり遺物出土状況３
図版６　上：土器だまり遺物出土状況４　下：棒状土錘出土状況
図版７　上：ＳＢ０１・０２完掘状況　下：ピット群完掘状況
図版８　上：ＳＸ０１遺物出土状況　下：ＳＸ０１完掘状況
図版９　上：ＳＫ０５遺物出土状況　下：ＳＫ０６遺物出土状況
図版 10　上：横鍬出土状況　下：御崎谷遺跡調査後風景
図版 11 ～図版 65　御崎谷遺跡出土遺物
間谷東遺跡　図版 66 ～図版 69
図版 66　上：ＳＤ０１検出状況　下：間谷東遺跡調査後風景（西から）
図版 67 ～ 69　間谷東遺跡出土遺物
浅柄北古墳　図版 70 ～図版 91
図版 70　上：浅柄北古墳調査前風景（東から）　下：１号横穴墓検出状況
図版 71　上：１号横穴墓完掘状況　下：２号横穴墓検出状況
図版 72　上：２号横穴墓遺物出土状況　下：３号横穴墓検出状況
図版 73　上：３号横穴墓閉塞石の状況　下：３号横穴墓遺物出土状況
図版 74　上：４号横穴墓検出状況　下：４号横穴墓耳環出土状況
図版 75　上：４号横穴墓遺物出土状況　下：５号横穴墓検出状況
図版 76　上：５号横穴墓玄室内人骨出土状況　下：５号横穴墓玄室内石床
図版 77　上：５号横穴墓玄室内完掘状況　下：５号横穴墓完掘状況
図版 78　上：６号横穴墓遺物出土状況　下：６号横穴墓完掘状況
図版 79　上：７号横穴墓検出状況　下：７号横穴墓半裁状況
図版 80　上：７号横穴墓遺物出土状況　下：８号横穴墓検出状況
図版 81　上：８号横穴墓大刀出土状況　下：８号横穴墓土器出土状況
図版 82　上：８号横穴墓完掘状況　下：１号土器棺検出状況１
図版 83　上：１号土器棺検出状況２（南から）　下：１号土器棺検出状況３（東から）
図版 84　上：１号土器棺口縁部の状況　下：２号土器棺検出状況

図版 85　上：１号墳検出土器群１出土状況　下：土器群２出土状況
図版 86 ～図版 91　浅柄北古墳出土遺物
間谷西Ⅱ遺跡　図版 92 ～図版 103
図版 92　上：間谷西Ⅱ遺跡調査前風景（西から）　下：Ⅰ区ＳＲ０１遺物出土状況１(北から)
図版 93　上：Ⅰ区ＳＲ０１遺物出土状況２（西から）下：Ⅰ区ＳＲ０１及び集石遺構（南から）
図版 94　上：Ⅰ区集石遺構　下：Ⅰ区ＳＲ０１完掘状況
図版 95　上：Ⅰ区ＳＢ０１検出状況　下：Ⅰ区ＳＢ０１完掘状況
図版 96　上：Ⅰ区ＳＤ０１～０４完掘状況　下：Ⅰ区完掘状況
図版 97　上：Ⅱ区加工段１検出状況１（西から）　下：Ⅱ区加工段１検出状況２（東から）
図版 98　上：Ⅱ区加工段１・２完掘状況　下：Ⅱ区完掘状況
図版 99 ～図版 103　間谷西Ⅱ遺跡出土遺物
間谷西古墳群　図版 104 ～図版 106
図版 104　上：１・２号墳調査前風景（西から）　下：１・２号墳調査後風景（西から）
図版 105　上：３号墳調査前風景（南から）　下：３号墳調査後風景（南から）
図版 106　間谷西古墳群出土遺物



第１図　御崎谷遺跡・間谷西古墳群・間谷西Ⅱ遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳の位置

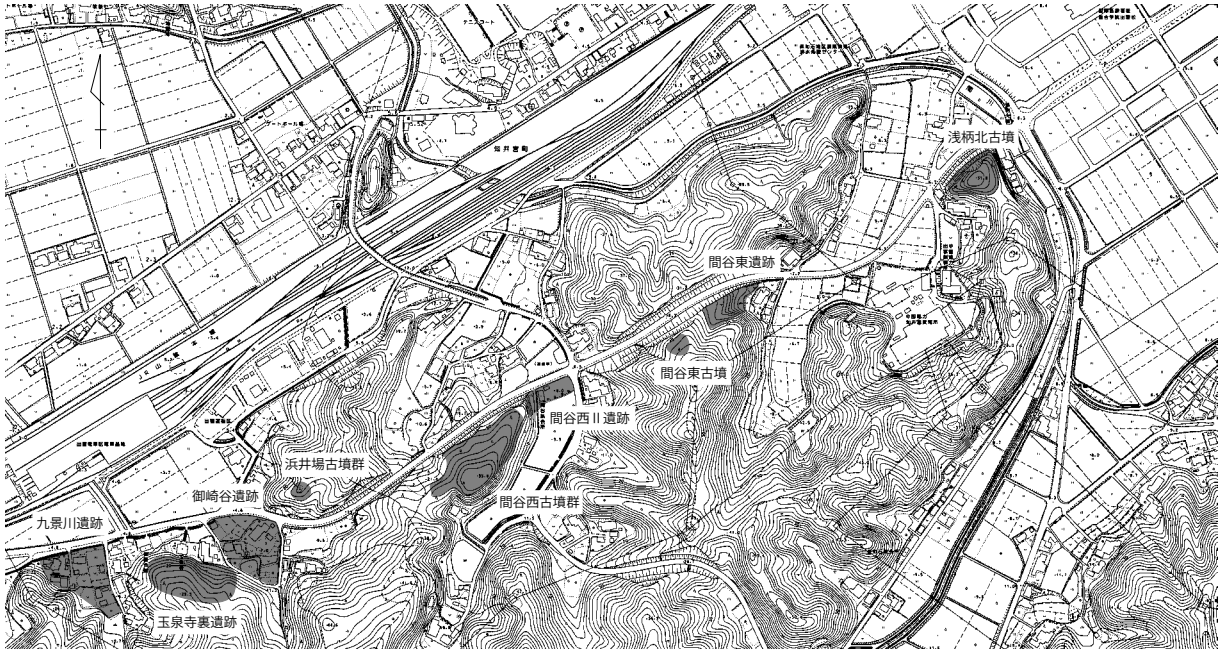
第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯

一般県道出雲インター線は、山陰自動車道「鳥取益田線」の出雲インターチェンジ（仮称）と一般国道９号及び一般国道 431 号を直接結ぶ道路であるとともに、出雲インターチェンジ（仮称）を起点とした宍道湖・中海都市圏の連携を強化する地域高規格道路「境港出雲道路」の重要な部分を担う道路として計画されたものである。

平成 15 年４月 14 日、島根県出雲土木建築事務所より出雲市文化観光部文化財課（以下、出雲市文化財課と称す）に対して、当道路予定地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。出雲市文化財課では事業予定地内には浜井場古墳群や間谷東古墳が存在し、その周辺には大規模な前方後円墳である北光寺古墳が所在していることから、事業予定地内に新たな遺跡の存在する可能性が高いものとして、確認調査が必要な旨を回答した。それにより同年から翌年にかけて合計３回の確認調査を実施し、新たに発見された遺跡について島根県教育委員会あて 10 月 23 日付けで遺跡発見の通知を行い、同日及び翌年５月 11 日付けで事業者である島根県出雲土木建築事務所から島根県教育委員会あてに周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事の通知が提出されるに至った。これを受けて島根県教育委員会では平成 16 年５月 13 日付けで工事着手前に発掘調査が必要な旨を回答した。なお、浜井場古墳群のうち２号墳の存在する丘陵については早急に工事着手が必要であったことから、平成 15 年 11 月から出雲市文化財課により発掘調査が実施され、平成 17 年２月に報告書が刊行されている。

平成 16 年度以降の調査について、出雲市文化財課は多数の事業を抱えていることから市単独での対応が困難な状況であったため、島根県教育委員会及び島根県出雲土木建築事務所との間で協議を重ねた結果、平成 16 年度に対応が急がれる九景川遺跡Ｉ区については、県教育委員会が実施す



第２図　出雲インター線建設予定地内遺跡（S=1/10000）

ることになり、出雲市内の東林木バイパス発掘調査班から１班を派遣して応急的に対応することとした。平成 17 年度以降については、県と市の２パーティ編成による合同調査を実施し、予算執行、契約等については県が受け持ち、市は調査員１名を派遣して事業地内の調査に対応することとなった。

平成 17 年度の調査は、県は九景川遺跡の調査を継続して行い、市は玉泉寺裏遺跡の調査を実施した。平成 18 年度の調査については工事が急がれる御崎谷遺跡について合同で調査を実施した後、県は間谷東遺跡、市は浜井場４号墳、間谷東古墳の調査を実施した。平成 19 年度の調査は現地調査の最終年度にあたり浅柄北古墳、間谷西Ⅱ遺跡、間谷西古墳群の３箇所が調査対象遺跡であったが、調査面積が計約 4,000㎡と１班で対応可能な面積であったため、県１班で現地調査を実施した。市は平成 17・18 年度に出雲市が担当した遺跡の報告書作成を実施し、平成 20 年３月に報告書が刊行されている。

本書は平成 18・19 年度に島根県教育委員会が担当した遺跡の報告書である。

第２節　調査の経過

平成 18 年度の調査

平成 18 年度の県対応の調査は御崎谷遺跡と間谷東遺跡の２箇所であったが、第１節で述べたとおり、御崎谷遺跡については工期の関係から８月中に調査を終了する必要があったため、県と市の２班合同で調査を行った。調査対象面積は約 4,000㎡である。

調査区域は玉泉寺裏遺跡から派生する低丘陵部の先端とそれを囲むような平地部に分かれており、低丘陵部の調査に平成 18 年４月 25 日から着手した。この低丘陵部は後生に改変を受けたものと考えられ、頂部は著しく削平されていた。頂部からは遺構、遺物は確認できなかったが、北側及び東側斜面で加工段７棟と土坑状遺構１基を検出した。５月 17 日からは平地部の調査も併行して開始した。調査開始から古墳時代前期～後期にかけての土器が多量に出土したため、多数の遺構の存在が推測されたものの、遺構の密度は低く、調査区北側で掘立柱建物跡６棟とピット群、大型の土坑状遺構１基等を検出しただけにとどまり、特に調査区東側では遺構は検出されなかった。

土器が多量に出土していることから調査終了期間が危ぶまれたが、遺構密度が低かったことが幸いしてか調査は順調に進み、８月 29 日に無事終了した。

間谷東遺跡は伐採が遅れたことにより９月 13 日から調査に着手した。調査地は出雲市担当の間谷東古墳の存在する丘陵の東側斜面に位置し、調査対象面積は 700㎡である。粘土質の遺物包含層

御崎谷遺跡作業風景

御崎谷遺跡ＳＸ０１作業風景

が２m近く堆積し、遺物は古墳時代前期～中世までの土器が混在していた。これらの土器は小片が多く、かなり磨滅を受けていることから、調査範囲外の北側及び南側斜面から流れ込んだものと考えられる。この他に用途不明の溝状遺構を検出し、12 月 11 日に調査は終了した。

現地説明会は 11 月 19 日に出雲市担当の間谷東古墳を中心に行い、現地のプレハブでは御崎谷遺跡から出土した遺物展示を行った。雨天にもかかわらず約 80 名の見学者の参加を得た。

平成 19 年度の調査

平成 19 年度の調査は出雲インター線発掘調査の最終年度で、県１班で現地調査を実施した。調査対象遺跡は浅柄北古墳、間谷西Ⅱ遺跡、間谷西古墳群の３箇所であり、工事工程等の都合で浅柄北古墳から着手する予定となっていた。しかし、事業地内を通る高圧線等の問題があり、伐採がかなりずれ込む事態が生じた。出雲県土整備事務所と協議を行った結果、昨年度中に伐採が終了していた間谷西古墳群から調査を行い、浅柄北古墳の伐採が終了した時点で間谷西古墳群の調査は一時中断して浅柄北古墳に移る計画となった。

平成 19 年５月 21 日から間谷西古墳群の調査に着手した。調査対象面積は約 2,200㎡である。古墳は３基存在し、南側丘陵に位置する１・２号墳から開始したが、埋葬施設やそれに伴う遺物等は確認できなかった。ただし、２号墳からは縄文土器、須恵器や石器などが少量であるが出土したことから、３号墳の位置する丘陵斜面等に遺構が存在するものと予想された。１・２号墳が終了した後、３号墳及び周辺の斜面の調査に移った。３号墳の測量を行いながら、斜面に 13 本のトレンチを設定して調査を行ったが、期待に反して遺構、遺物は全く検出されなかった。

トレンチ調査の終了間際に浅柄北古墳の伐採が終了したこともあって、７月 25 日の午後現地を確認したところ、伐採後の地形は狭小な尾根で南側と東側は急斜面であることが判明した。また、南側と東側斜面下はすぐに民有地となるため、調査は極めて困難な状況であり、東側と南側斜面の西側を除く約 800㎡が調査対象となった。調査は７月 26 日から開始したが、まず、古墳と考えられる尾根上の３基の高まりにトレンチ４本を設定して調査を行った。その結果、すべてのトレンチから須恵器が出土したことから、古墳以外にも横穴墓が存在する可能性が高いと考えられたので、若干緩やかな北側斜面と南側斜面の東寄りにトレンチ８本を設定して調査を進めた。北側斜面では遺構、遺物は確認できなかったが、南側斜面で横穴墓を確認したため、拡張して調査を行った結果、６穴存在していることが判明した。また、尾根上の一番高所に存在する墳丘から土器棺２基も検出された。横穴墓６穴のうち５穴は天井部等が崩落し、内部には須恵器等が少量残存している状況であったが、崩落を免れた１穴には石床及び人骨が遺存していた。これらの横穴墓の調査は急斜面であることから斜面に土留め柵を設け、排土を詰めた土嚢袋を土留め柵の内側に積み重ね、その上に排土を載せていくといった方法で行った。毎日点検等を行い安全に十分配慮しながら行っていたが、ある日排土面に亀裂が見つかり、早急に調査を終える必要があった。また、崩落している横穴墓のうち３穴は調査中にも崩落を繰り返していたため、これ以上調査するのは危険と判断して調査を打ち切った。９月 25 日に土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長松下孝幸氏によって人骨を取り上げ、10 月２日まで実測等の補足調査を行って終了したが、このように調査地が非常に危険な状態であったため、現地説明会を開催することは難しく、すぐに埋め戻しを行った。また、調査が不可能であった東側斜面等については、横穴墓の存在している可能性が極めて高いと考えられたため、出雲県土

整備事務所と協議を行い、工事中に発見された場合に対応することとなった。

浅柄北古墳終了後、間谷西Ⅱ遺跡の表土掘削工事と併行して、残っていた間谷西古墳群の３号墳の調査を行ったが、埋葬施設やそれに伴う遺物は検出できなかった。間谷西Ⅱ遺跡の調査対象面積は約 1,000㎡で 10 月 4 日から開始した。遺構は少なく加工段２棟、自然流路等を検出して、12 月 18 日に調査は終了した。

平成 20 年度の調査・報告書作成作業

遺物の洗浄・注記・接合の一部は現地調査と併行して実施していたが、平成 20 年度から本格的な報告書作成作業を埋蔵文化財調査センターで行った。遺物接合、実測やトレースを主として作業を進めていたが、６月以降浅柄北古墳で２回にわたり横穴墓（７・８号）が確認されたため、２度の追加調査を実施した。

７号横穴墓は６月 24 日に未調査箇所の東側斜面から発見された。翌日から調査を行い、７月１日までの５日間で調査は終了し、土器や大刀、人骨等が出土した。８号横穴墓は７月 22 日に発見され、翌日から調査を開始した。この横穴墓は昨年度調査が終了した南側斜面に存在していたことから、途中で断念した１～３号横穴墓の可能性も考えられたが、調査の結果、３号横穴墓の約 2.4 m下方に位置していることが判明した。調査は７月 25 日まで３日間行い、土器や大刀が出土した。

その後は順調に報告書作成作業が進み、遺物写真撮影、割付、原稿執筆等を行い、平成 20 年度末に報告書刊行の運びとなった。

浅柄北古墳作業風景

浅柄北古墳横穴墓調査風景

土器棺接合風景

間谷西Ⅱ遺跡作業風景

第２章　位置と歴史的環境

本報告書掲載の遺跡は、御崎谷遺跡、間谷東遺跡、浅柄北古墳、間谷西Ⅱ遺跡、間谷西古墳群の５箇所の遺跡で、出雲市南西部の東神西町と知井宮町に所在する。この周辺一帯は『出雲国風土記』に「神門水海」と記載され、現在の神西湖にその面影を残す入海の南岸地域にあたる。それぞれ丘陵上あるいは丘陵に挟まれた谷間に位置し、浅柄北古墳のある尾根上からは北東に広がる出雲平野が一望できる優れた場所でもある。

出雲平野は、斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された県内最大の平野であり、有数の穀倉地帯として知られている。約 7000 年前頃の縄文海進から徐々に沖積作用が始まり、それによって形成された自然堤防や沼沢地が至る所に広がり、現在の地形は近世に定着したと考えられている。

縄文時代

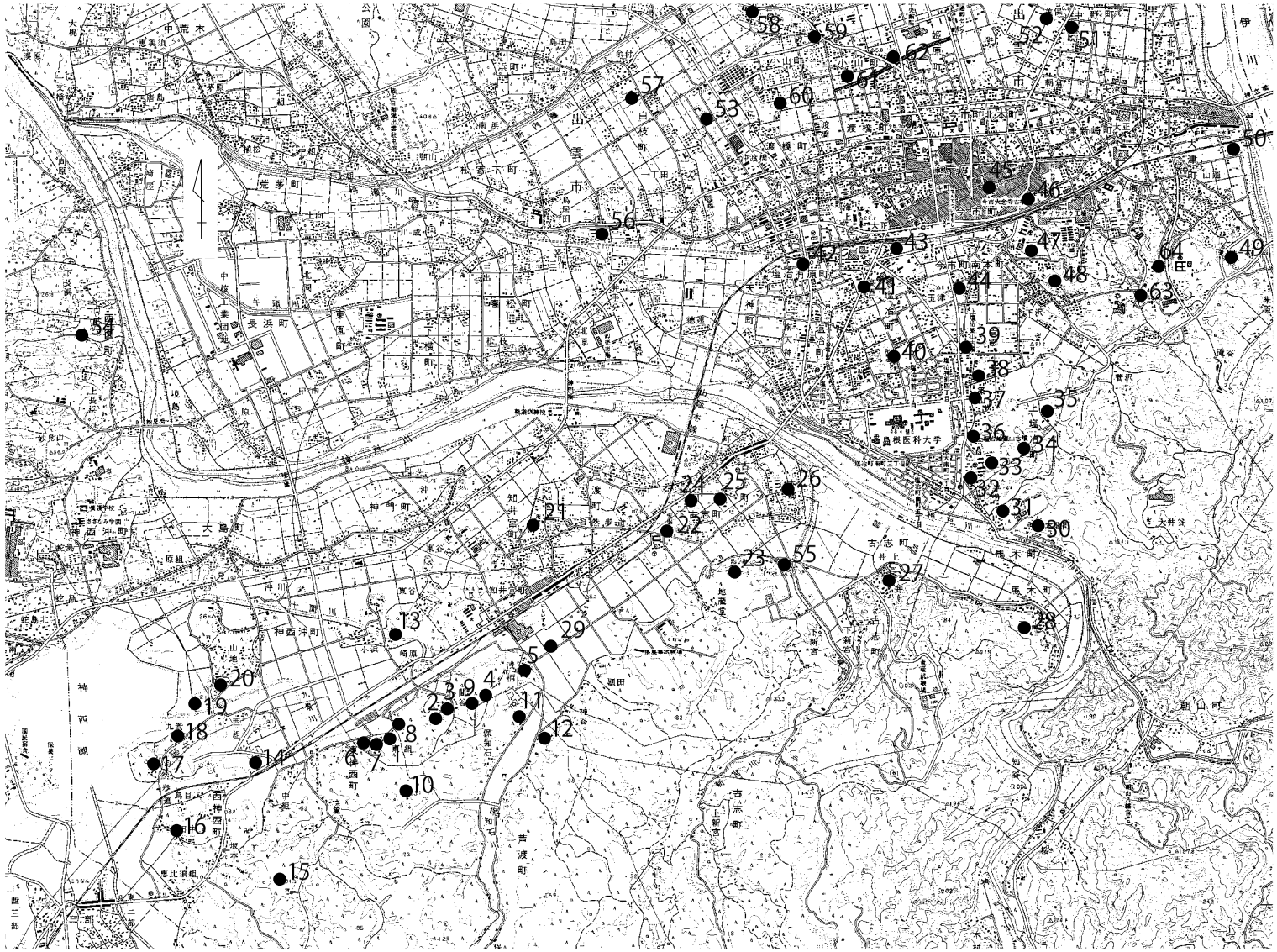
旧石器時代の遺跡は出雲平野ではまだ確認されていないが、最も古い遺跡としては縄文時代早期末の菱根遺跡や上長浜貝塚が確認されている。後者は本書掲載地域に近く、海岸砂丘上に立地する遺跡で、中世の大規模な貝塚の下層から菱根式に近い早期末の繊維土器が検出されている。中期の遺跡は確認事例が少なく、後・晩期になると斐伊川・神戸川流域に遺跡の増加が認められるようになる。その事例として三田谷Ⅰ遺跡では土器の他にドングリピットや丸木舟などが確認され、自然堤防の発達していた矢野遺跡では古墳時代初頭まで集落が形成されている。当地域周辺を見ると保知石遺跡では川跡に堆積した土層から土器が出土し、御崎谷遺跡や九景川遺跡でも当該期の土器が出土していることから、明確な集落跡は確認していないものの、当地域周辺に当該期の集落が成立していたことを物語っている。

弥生時代

弥生時代になると平野全域に集落が形成され始め、前期には縄文時代から続く矢野遺跡や原山遺跡などに加え、三田谷Ⅰ遺跡や蔵小路西遺跡などが認められる。当地域では保知石遺跡や九景川遺跡などで遺物が出土しているが、集落としての様相は不明である。中期に入ると遺跡は急増し、神戸川によって形成された自然堤防上には古志本郷遺跡、白枝荒神遺跡、天神遺跡、下古志遺跡、知井宮多聞院遺跡、小山遺跡などが知られ、環濠集落の様相を呈した大規模な集落も出現してくる。後期になると中期に形成された多くの集落が継続して営まれ、遺物量も大幅に増加する傾向にある。平野中央部や北部では姫原西遺跡、青木遺跡、山持遺跡など新たな遺跡も加わり、山持遺跡では吉備系特殊土器やその模倣品が確認されているほか、西部瀬戸内系の土器や、朝鮮系無文土器も出土するなど、他地域との交流が活発に行われていたことを窺い知ることができる。

墳墓遺跡では平野南側の丘陵上には最大級の四隅突出型墳丘墓である西谷３号墓をはじめとする西谷墳墓群が出現し、平野低地部の中野美保遺跡や青木遺跡からも中小規模の四隅突出型墳丘墓や方形貼石墓が築造されていることが明らかとなった。特に青木遺跡では最古形式の四隅突出型墳丘墓が築造されていることから、この墓制の起源論について再考を促すこととなり、今後の研究が期待されている。当地域では玉泉寺裏遺跡で弥生時代終末から古墳時代初頭の木棺墓が検出されているが、平野中央部や北部のような四隅突出型墳丘墓は今のところ確認されていない。

古墳時代



1. 御崎谷遺跡
2. 間谷西古墳群
3. 間谷西Ⅱ遺跡
4. 間谷東遺跡
5. 浅柄北古墳
6. 九景川遺跡
7. 玉泉寺裏遺跡
8. 浜井場古墳群
9. 間谷東古墳
10. 北光寺古墳
11. 浅柄Ⅱ遺跡
12. 保知石遺跡
13. 神門横穴墓群
14 神待山横穴墓群
15. 神西城跡
16. 田中谷貝塚
17. 九景川横穴墓群
18. 正久寺横穴墓群
19. 湖東屋山横穴墓群
20. 山地古墳
21. 知井宮多聞院遺跡
22. 宝塚古墳
23. 妙蓮寺山古墳
24. 下古志遺跡
25. 田畑遺跡
26. 古志本郷遺跡
27. 井上横穴墓群
28. 刈山古墳
29. 浅柄遺跡
30. 光明寺古墳群
31. 三田谷Ⅰ遺跡
32. 半分古墳
33. 半分城
34. 上塩冶横穴墓群
35. 大井谷城
36. 地蔵山古墳
37. 築山遺跡
38. 上塩冶築山古墳
39. 宮松遺跡
40. 神門寺境内廃寺
41. 高西遺跡
42. 天神遺跡
43. 善行寺遺跡
44. 角田遺跡
45. 今市塚山古墳
46. 今市大念寺古墳
47. 久微園横穴墓群
48. 大廻城 (向山城跡)
49. 西谷墳墓群
50. 石土手遺跡
51. 太歳遺跡
52. 中野美保遺跡
53. 小畑遺跡
54. 上長浜遺跡
55. 放れ山古墳
56. 余小路遺跡
57. 白枝荒神遺跡
58. 矢野遺跡
59. 小山遺跡
60. 渡橋沖遺跡
61. 蔵小路西遺跡
62. 姫原西遺跡
63. 菅沢古墓
64. 長者原廃寺

第３図　周辺の遺跡（S=1/50000）

古墳時代の集落は基本的には弥生時代から継続して営まれているが、古志本郷遺跡のように前期には大溝への土器廃棄後、衰退する事例が多く、出雲平野の集落は前期以降減少する傾向が認められるようであり、中・後期になると三田谷Ⅰ遺跡や中野美保遺跡など数例しか知られていない。当地域では浅柄遺跡から古墳時代前期後半～中期前葉にかけての住居跡が検出されており、御崎谷遺跡では明確な集落跡は検出されていないが、中期を中心とする多量の遺物が出土していることから、この地域に古墳時代中期頃を中心とする大規模な集落が営まれていたものと推測される。

このように出雲平野の集落の様相は不明瞭な部分が多いが、古墳の様相はある程度明瞭といえる。前期から中期初頭の古墳としては今まで斐伊川左岸の大寺１号墳、神西湖東岸の山地古墳が知られる程度であったが、ここ近年の発掘調査で浅柄Ⅱ古墳、間谷東古墳、浅柄北古墳の３例が新たに増加した。この新発見例にはいくつかの特徴的な様相が見られ、一つはこの３例とも出雲平野南麓の当地域で発見され、山地古墳とあわせて４例の前期古墳が神西湖東岸に集中していること、さらには山地古墳、浅柄Ⅱ古墳、間谷東古墳は埋葬施設に礫床を備えていることがあげられる。山地古墳は径 24 mの円墳で、筒形銅器や銅鏡など豊富な副葬品を有する古墳である。間谷東古墳は奥才型木棺と称される棺底礫敷の組合式木棺を有する古墳で、奥才型木棺の分布は北部九州から北近畿に限定されていることから、海上交通を中心とした広域な地域間交流が存在していたことが窺える。このことは神西湖が「神門水海」の名残であり、入海という当地域の地理的特性が活かされた結果といえよう。

中期中葉には当地域の御崎谷遺跡のすぐ南側丘陵上に出雲平野を見下ろすように北光寺古墳が築造される。全長約 70 mと中期では出雲部最大の前方後円墳である。

後期になると平野中央部に出雲最大の前方後円墳である大念寺古墳や上塩冶築山古墳、地蔵山古墳などに代表される出雲西部で最大クラスの古墳が築かれるようになり、有力首長の存在が窺える。当地域周辺では神戸川左岸地域で妙蓮寺山古墳や放れ山古墳などが存在し、大念寺古墳などの大首長クラスに次ぐものとして位置づけられている。後期後葉以降は横穴墓の造墓が盛んに行われ、平野南部の丘陵には上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群などの大規模な横穴墓群が営まれるようになる。

奈良・平安時代

奈良時代の出雲平野は律令制下の行政区画でいう「神門郡」と「出雲郡」に編成され、当地域は神門郡滑狭郷に属する。出雲平野の官衙関連遺跡は近年の発掘調査の成果により、神門郡家は古志本郷遺跡が、出雲郡家の関連施設として斐川町後谷Ⅴ遺跡が比定されている。この他に天神遺跡や三田谷Ⅰ遺跡、小山遺跡などが神門郡では官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。集落としては建物跡や多量の遺物が確認されている九景川遺跡や多数の掘立柱建物跡が検出された浅柄遺跡などが知られている。寺院跡としては、『出雲国風土記』記載の新造院に比定される神門寺境内廃寺や長者原廃寺が知られている。墳墓としては火葬骨を納めた石櫃が出土した光明寺３号墓のほか、石製骨臓器を納めた小坂古墳、浅山古墓、菅沢古墓などが知られている。

中世

中世の遺跡としては、幅約４mの堀や掘立柱建物跡、12 世紀～ 15 世紀の陶磁器類が見つかった蔵小路西遺跡、総柱の掘立柱建物跡やミニチュア五輪塔が確認された渡橋沖遺跡があり、前者は朝山氏または塩冶氏の居館と推定されている。墳墓としては、青磁碗・皿を副葬する荻抒古墓や木棺墓が確認された姫原西遺跡、余小路遺跡、蔵小路西遺跡など当時の墓制の様相を窺うことができ

る貴重な資料がある。この他に当地域周辺には中世の貝塚としては全国屈指の規模を備える上長浜貝塚が知られている。

室町時代から戦国時代にかけて多数の山城が築かれるようになり、当地域の代表的な山城として神西氏の居城であり出雲十旗に数えられた神西城があげられる。

以上のように、本書掲載遺跡の所在する出雲平野南麓を中心とした地域は縄文時代以降重要な地域であったことが窺える。特に古墳時代前期末～中期初頭の古墳の出現はこの地域の特徴を表しているとも考えられ、今後の研究の進展が期待される。

〔参考文献〕

島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980

出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲』1997

出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』1986

出雲市教育委員会『上長浜貝塚』1996

出雲市教育委員会『天神遺跡第７次発掘調査報告書』1997

出雲市教育委員会『光明寺３号墓・４号墓』2000

近藤　正「出雲・荻抒古墓発見の骨臓器」『考古学雑誌』54-3 1969

出雲市教育委員会『浅柄遺跡』2000

鹿島町教育委員会『奥才古墳群第８支群』2002

島根県教育委員会『三田谷Ⅰ遺跡 Vol. ３』2000

島根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅴ斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅥ』2003

島根県教育委員会『山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』2005

島根県教育委員会『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』2008

出雲市教育委員会『小浜山横穴墓群Ⅰ』1995

島根県教育委員会『玉泉寺裏遺跡・浜井場４号墳・間谷東古墳　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』2008

島根県教育委員会『蔵小路西遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告２』1999

島根県教育委員会『渡橋沖遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』1999

島根県古代文化センター『北光寺古墳発掘調査報告』2007

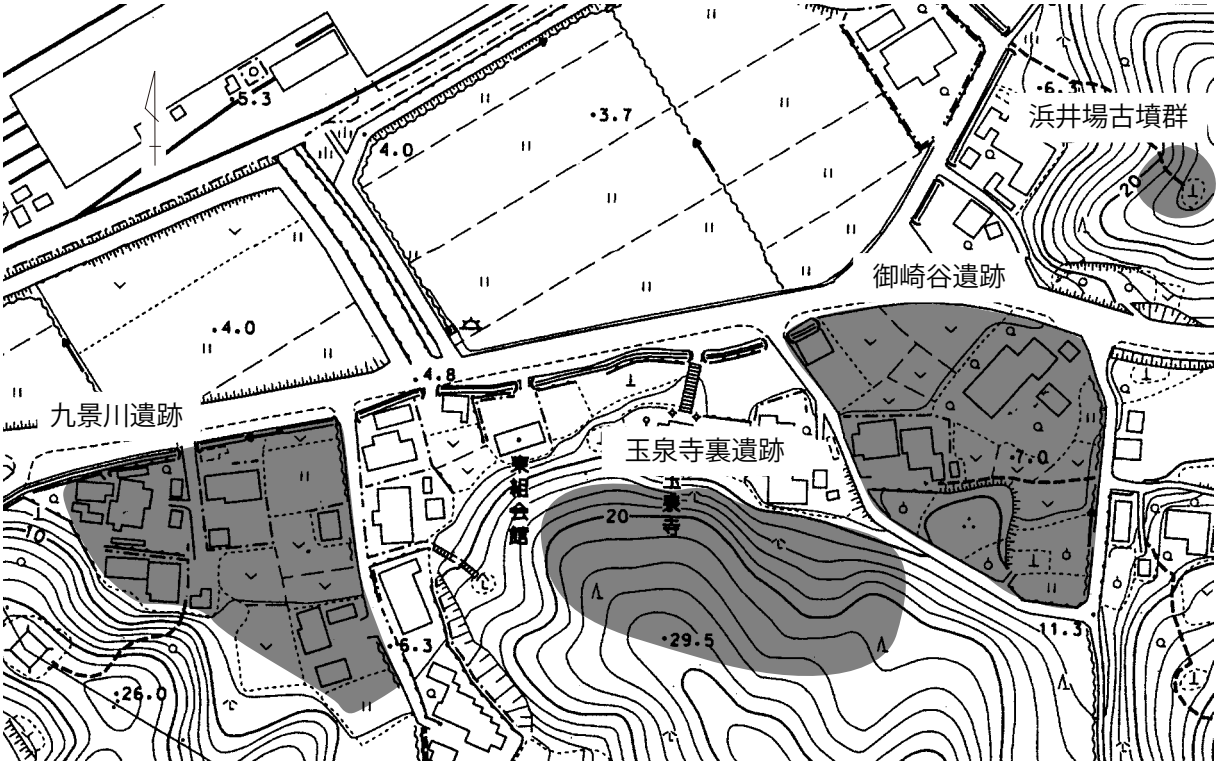
第３章　御崎谷遺跡

第１節　調査の概要

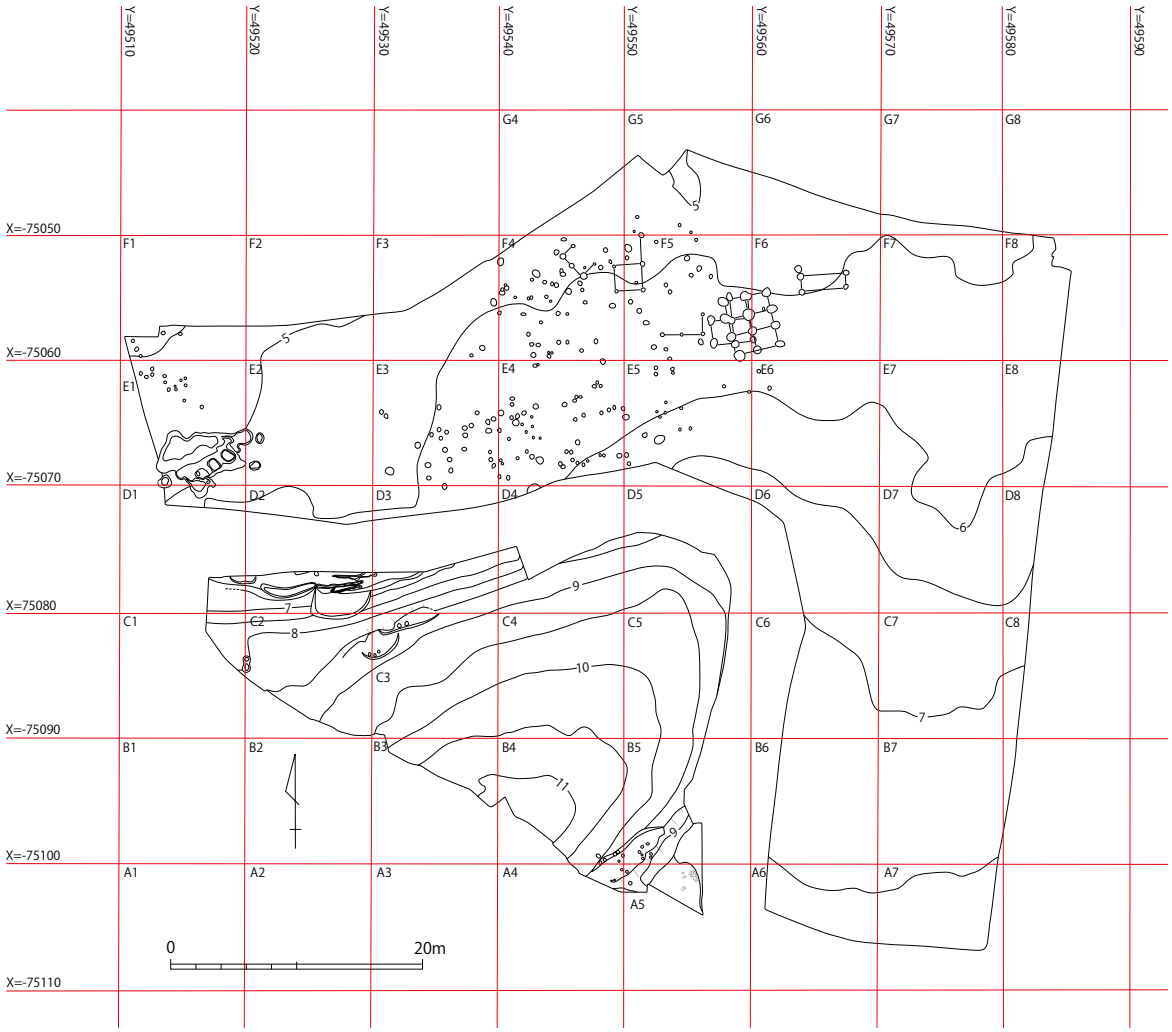
御崎谷遺跡は出雲市東神西町 183-2 他に所在し、出雲平野南麓の低丘陵に囲まれた谷間に広がる遺跡である。調査区域は玉泉寺裏遺跡から派生する低丘陵部の先端とそれを囲むような平地部に分かれ、調査対象面積は約 4,000㎡である。調査区には第Ⅲ座標軸系に基づいた 10 m四方のグリッドを設定して調査を行った（第５図）。グリッド名は、北西杭を原点として東へ向けてアラビア数字順、北へ向けてアルファベット順に付け、これに基づいて遺物の取り上げ等は行っている。調査時には大きな区分けをしていないが、本書では調査区を低丘陵部と平地部に分けて説明することにする。

低丘陵部の尾根上は後世に著しく削平を受けていることから、遺構が存在していてもその大半は破壊され遺存率はかなり低いと予想できた。調査の結果、予想どおり尾根上では遺構、遺物は確認できず、丘陵斜面側で加工段７棟と土坑状遺構１基を検出しただけである。加工段はそのほとんどが重複、または削平を受けていることなどから検出作業に手間取ったものの、丘陵北側斜面で５棟、東側斜面で２棟確認できた。北側斜面の３棟は覆土中にかなりの遺物を含んでいたが、東側斜面ではそれに比較して若干少なかった。これらの遺物は弥生時代終末頃～中世までとかなりの時期幅があったため明確な時期を押さえることができた加工段は少ない。また、これらの遺物の多くは磨滅が著しく実測可能であったものだけを掲載している。土坑状遺構は北側加工段の西側で検出し、内部からは古墳時代初頭頃の土器片が出土しているが、その性格については把握できなかった。

平地部の調査区域は現状では水田及び畑地と宅地跡である。確認調査の結果で表土面から約１～



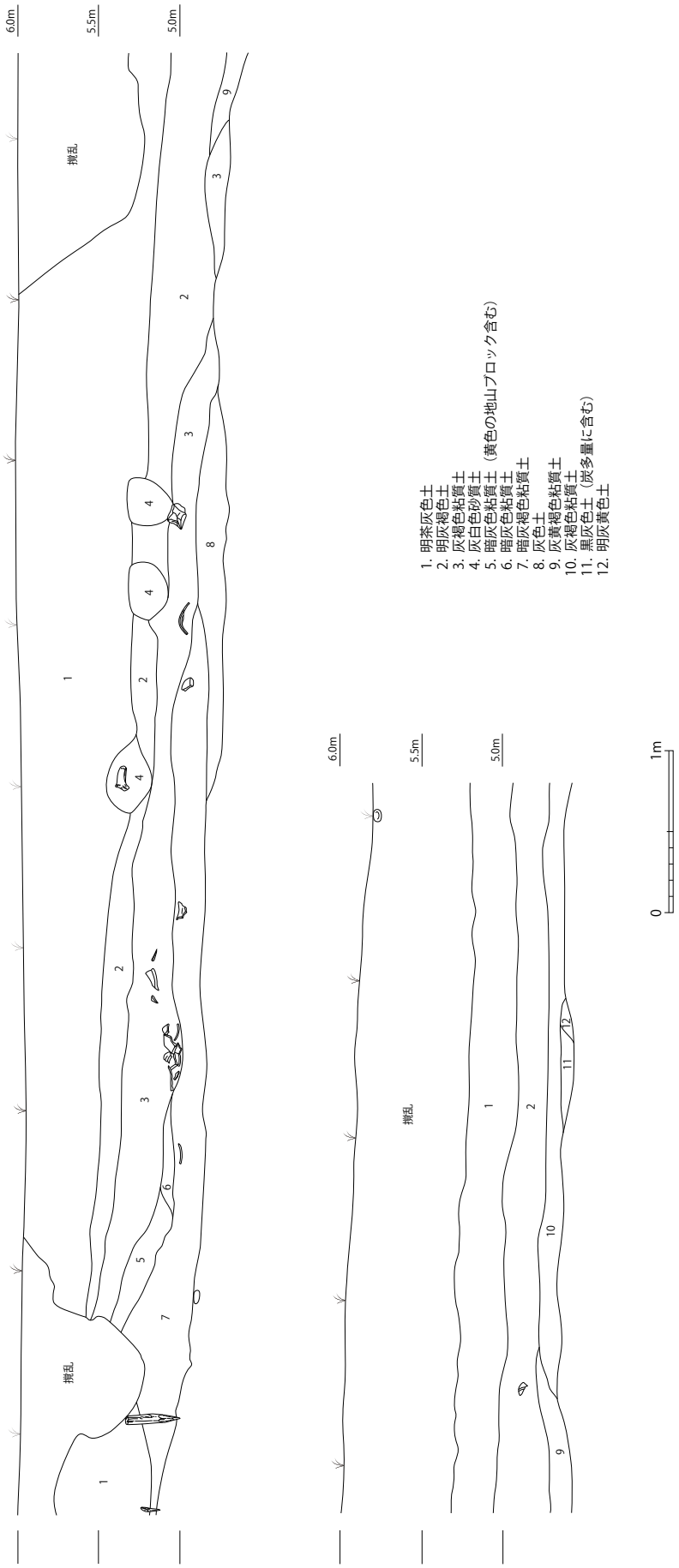
第４図　御崎谷遺跡　位置図（S=1/2500）



第５図　御崎谷遺跡　全体図及びグリッド配置図（S=1/600）

1.5ｍ下方に遺物包含層が存在していることが判明していたため、表土は重機によって除去し、遺物包含層は人力で掘り下げた。調査の結果、掘立柱建物跡６棟、ピット群、大規模な土坑状の遺構であるＳＸ０１と土坑群、土器だまり及び多量の遺物を検出した。調査区域の西壁側では表土下約 1.2ｍと比較的浅い位置で地山を確認したが、東側に向かうにつれ徐々に深くなり、東壁側では２ｍ下方の位置で地山に達する。遺物包含層は西壁側では第３層の灰褐色粘質土から下で厚さ約 50cm（第６図）、東壁側では第５層の明青灰色粘質土から下で厚さ約 40cm（第７図）を測る。調査当初は大まかに２層に分かれているものと考えられたため包含層１・２として遺物を取り上げていたが、整理段階でさほど時期差がないことが判明したため１層の包含層として一括して整理を行った。遺物の出土状況を見ると、西側のＤ１～Ｄ３、Ｅ１～Ｅ３グリッドは土器だまりとなっており、足の踏み場が無いぐらいの多量の遺物が出土している。東側ではＤ７、Ｅ７グリッド周辺に集中して出土し、それ以外のグリッドでは少なかった。これらの遺物は古代のものも認められるが、弥生時代終末頃～古墳時代後期を中心とするものが大半を占めている。

遺物量に比べて遺構密度は低く、遺物の出土状況を反映したかのように遺構は調査区西側に偏って検出された。掘立柱建物跡は総柱建物３棟を含む６棟確認できたが、それに伴う遺物は皆無で、時期については判断できなかった。ＳＸ０１は長軸８ｍ、短軸４ｍとかなり大きなもので、内部からは古墳時代前期頃を中心とする土器と共に木製品や流木等も出土しているが、その性格について



第６図　御崎谷遺跡　調査区西壁セクション図（S=1/40）

は把握できなかった。また、このＳＸ０１上面に土坑群、東側にピット群が確認されている。

第２節　低丘陵部の調査

１．加工段

加工段は丘陵北側斜面と東側斜面の裾部から重複する状況で検出された。北側のものを加工段１～５、東側のものを加工段６・７として調査を行った（第８図）。

加工段１（第 10 図）

加工段１は丘陵北側斜面の標高約９ｍの地点で検出した。平面形は円形に近いと考えられるが、東側を加工段２によって切られ、北側は削平を受けているため、現状では半円形を呈している。残存する規模は長さ 3.2 m、幅 2.4 m、深さ 70cm を測り、中央付近の床面は若干窪んでいる。床面には壁帯溝は認められず、ピット３穴と焼土が確認できた。ピットは床面の南西側で検出し、規模は径 10cm ～ 22cm、深さ 15cm 前後と小規模のものである。焼土は床面北側で２箇所検出したが、15cm ～ 20cm 程度の小範囲のものであった。

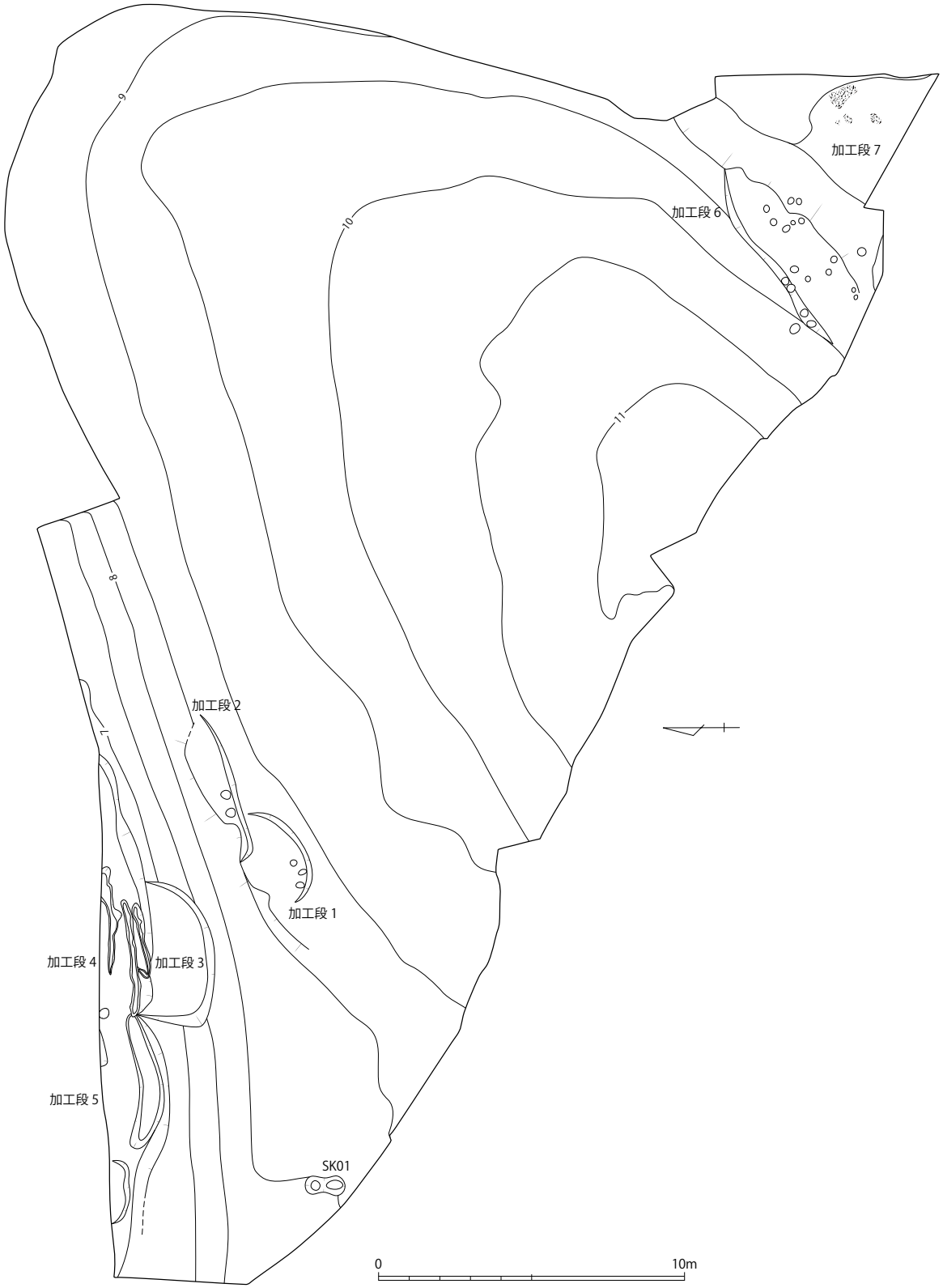
遺物は床面付近から磨滅した土師器、須恵器の小片が少量出土したが、図化できたものは３点である。これらの遺物が加工段１の明確な時期を示している

第７図　御崎谷遺跡　調査区東壁・南壁セクション図（S=1/80）

かわからないが、遺物の時期は８世紀中頃と考えられる。

加工段１出土遺物（第 11 図）

３点とも須恵器であるが、１・２は焼成不良で土師器のように見える。１・２は蓋で１はつまみ



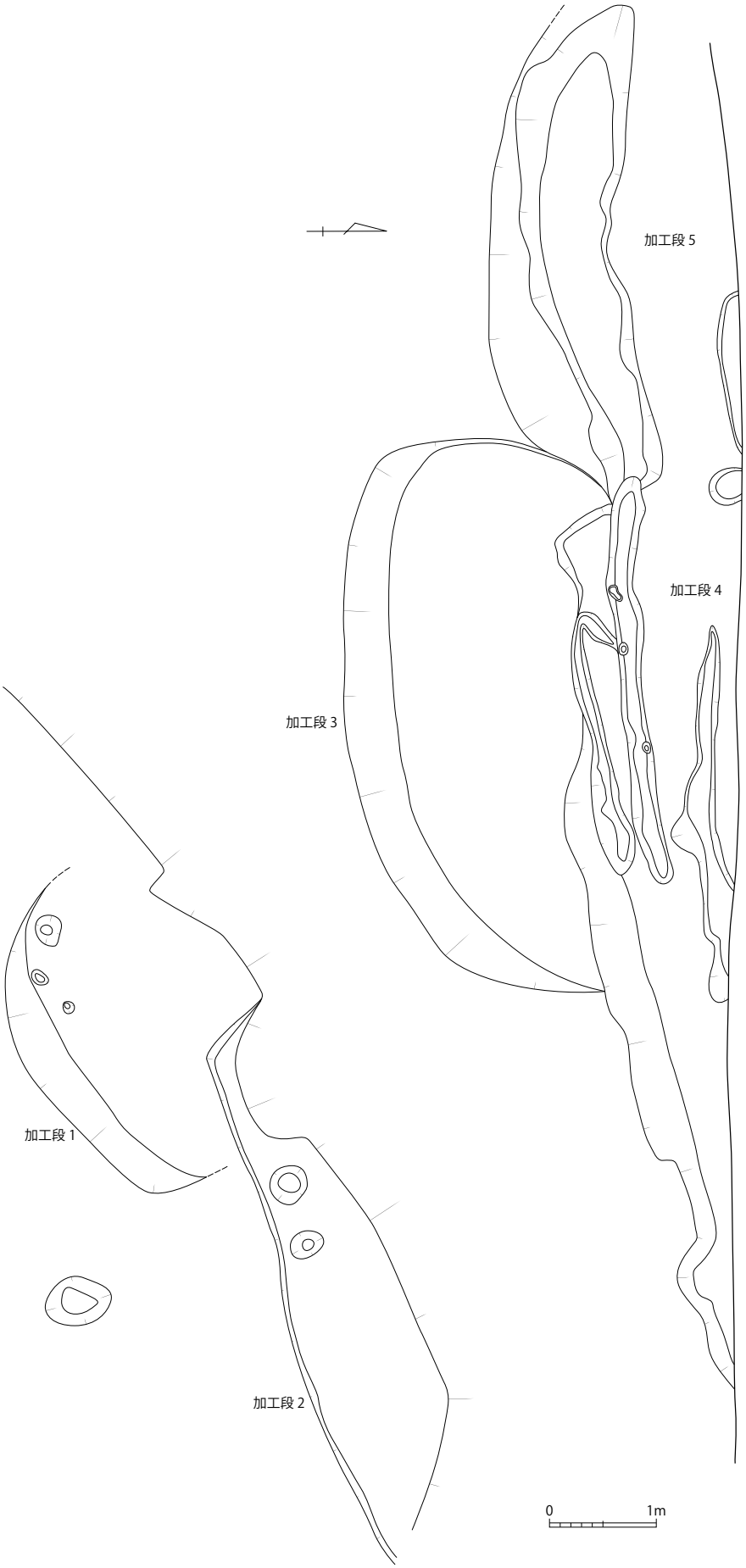
第８図　御崎谷遺跡　加工段位置図（S=1/200）

を欠損するが扁平な天井部から屈曲してのびる口縁部を有する。２は天井部に扁平な宝珠状のつまみが付くタイプである。３は高台付坏の高台部分で高台は低く開く。

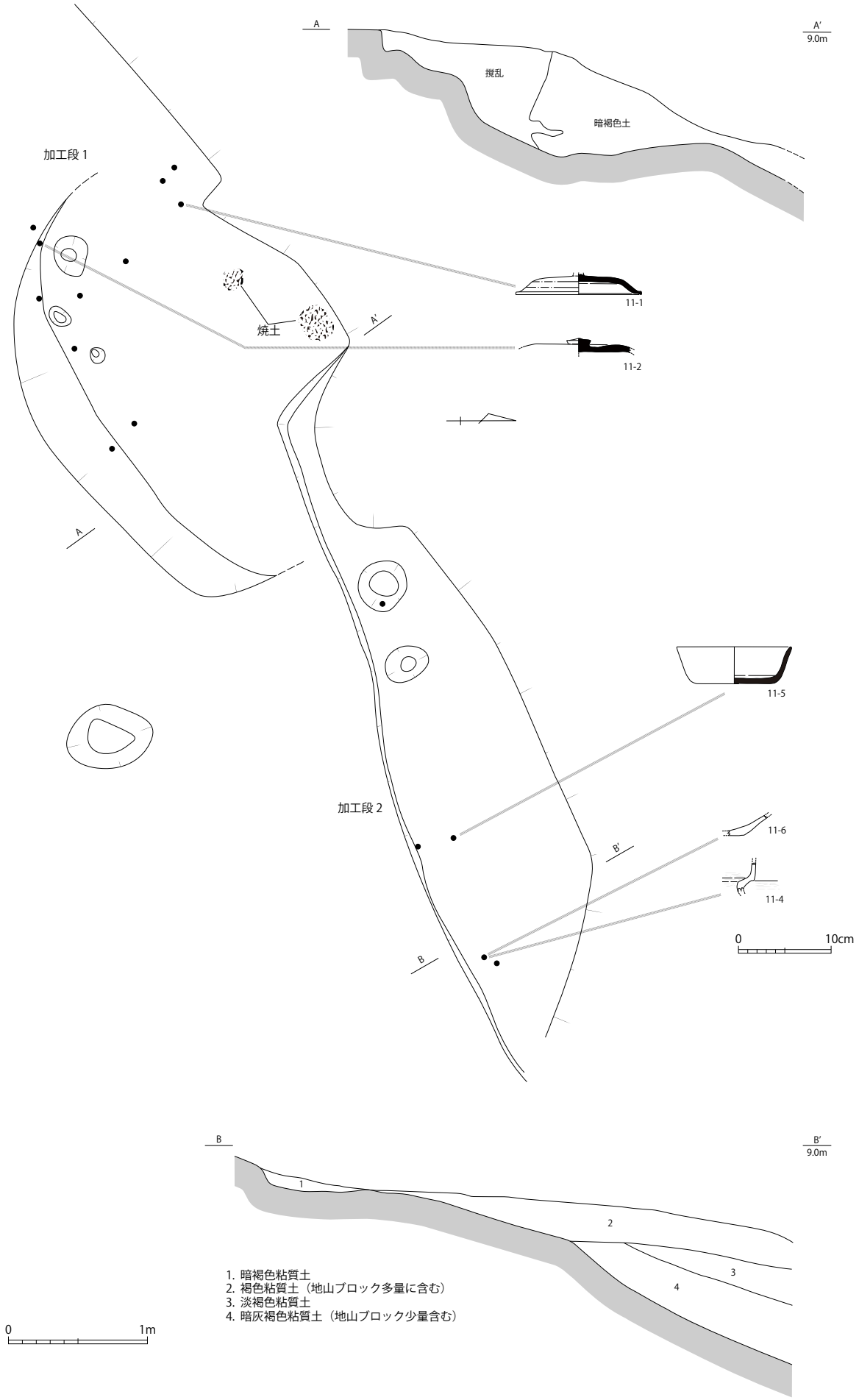
加工段２（第 10 図）

加工段２は加工段１の東側を切って造成された加工段である。平面形は方形もしくは長方形を呈していたと考えられるが、北側の流失が著しく、現状では長さ５ｍ、幅 1.2 ｍ、深さ 20cm の規模しか残存していない。床面に壁帯溝は認められず、床面西寄りで径 30cm 前後、深さ約 20cm のピット２穴を検出したのみである。

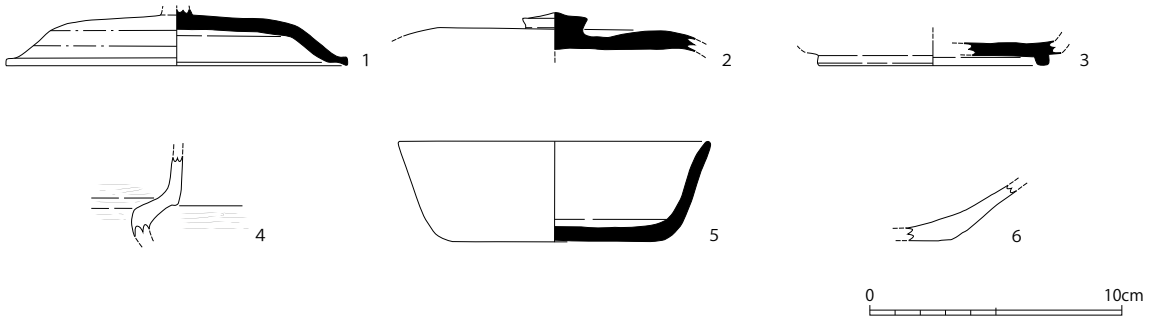
遺物は床面付近から磨滅した弥生土器、須恵器、土師質土器の小片が少量出土したが、図化できたものは３点である。これらの遺物には時期幅が認められるため、加工段２の明確な時期を把握することはできないが、加工段１を切って造成されていることからみれば、加工段１より後出



第９図　御崎谷遺跡　加工段１～５位置図（S=1/60）



第 10 図　御崎谷遺跡　加工段 1・2 実測図（S=1/40　遺物 S=1/6）



第 11 図　御崎谷遺跡　加工段１・２出土遺物実測図（S=1/3）
（加工段１：１～３、加工段２：４～６）

するものであることは明らかである。

加工段２出土遺物（第 11 図）

第 11 図４～６が加工段２の遺物である。４は弥生時代終末頃の複合口縁甕の口縁部片であるが、磨滅が著しい。５は須恵器の坏で広く平らな底部からやや直立気味に立ち上がる体部をもち、口縁部は外反してのびる。口縁端部は丸くおさめる。６は土師質土器の坏で口縁部と底部の大半を欠損している。

加工段３（第 12 図）

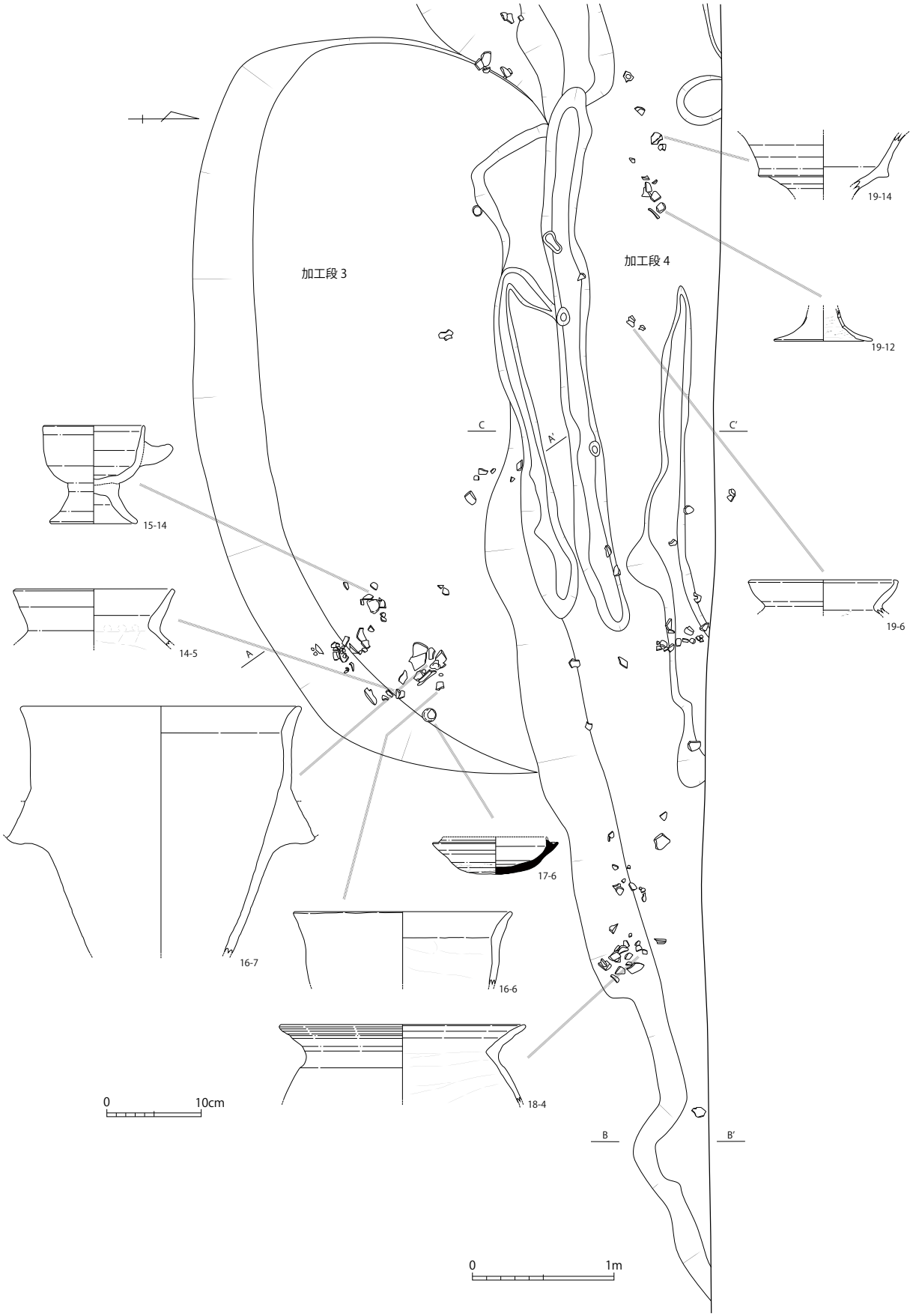
加工段３は加工段１・２の約２m北側下方の標高約 7.3 mの地点で検出した。検出時は褐色粘質土が広範囲に広がっていたため巨大な遺構かと思われたが、３棟の加工段が重複して存在していることが判明した。その切り合い関係から加工段５→加工段３→加工段４の順で営まれていたと推測される。

加工段３は西壁側が加工段５を少し切り、床面北側を加工段４によって切られている状況で検出された。平面形は円形に近いと考えられるが、現状では半円形を呈し、残存する規模は長さ 5.2 m、幅 2.2 m、深さ約 50cm を測る。床面からは壁帯溝、ピットや焼土などは一切検出されていない。

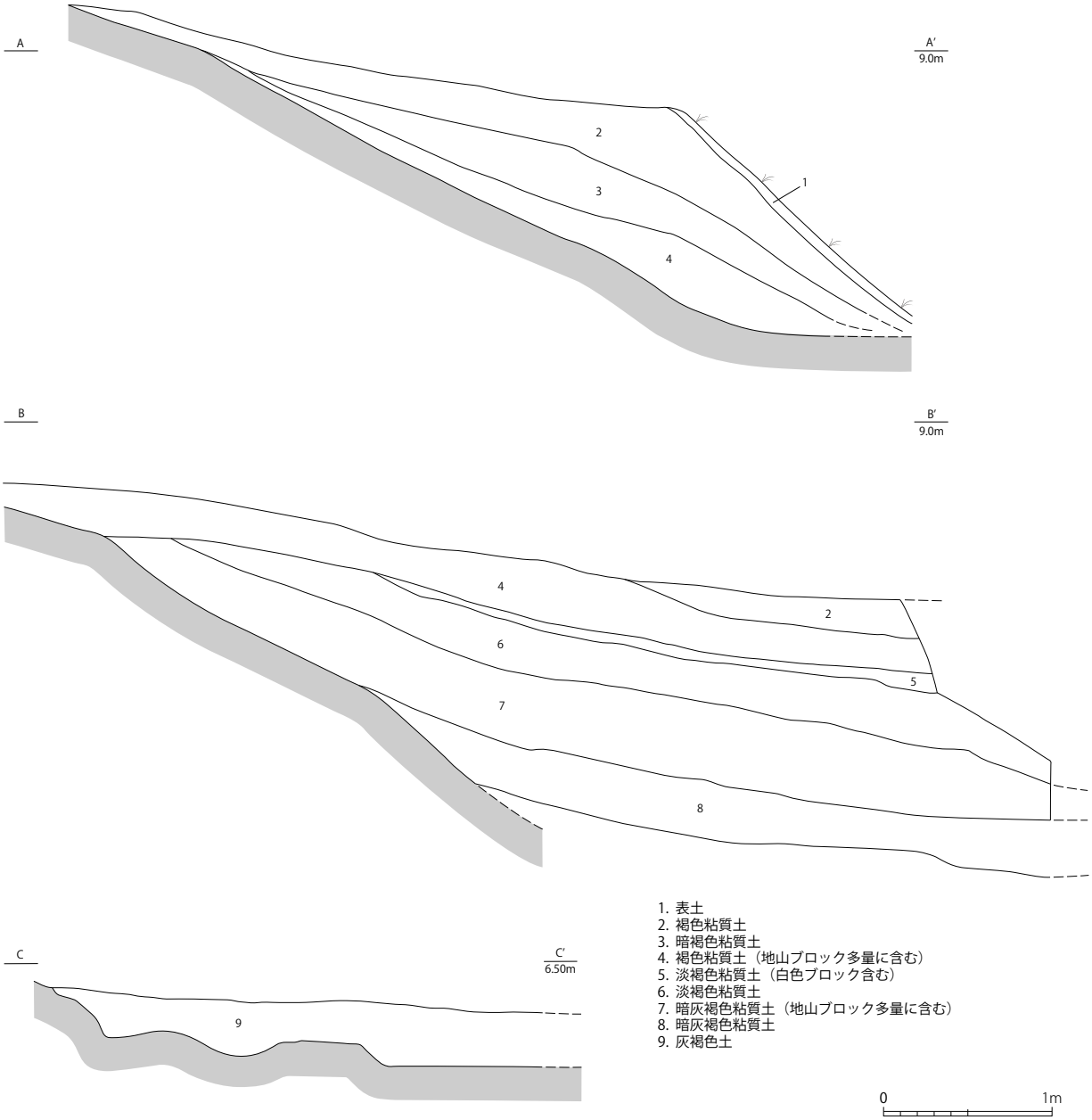
遺物は弥生時代後期から古墳時代後期の土器が多量に出土しているが、その多くは覆土中からのものである。遺物の多くは破片であったが、完形品に近いものも出土している。床面直上のものは少なく、床面東寄りで６世紀～７世紀頃の遺物が出土しており、この遺物が加工段３の時期を示しているものと考えられる。

加工段３出土遺物（第 14 ～ 17 図）

第 14 図～第 16 図は弥生土器と土師器である。第 14 図５、第 15 図 14、第 16 図６、７は床面直上から出土している。第 14 図１は弥生時代後期の複合口縁甕である。口縁部外面に擬凹線、肩部には櫛状工具による刺突文を施している。また、口縁外面に若干赤彩が残っている。第 14 図２～第 15 図２は単純口縁甕である。２～４は複合口縁の名残を残すものと考えられ、口縁下方が若干丸みをおび、口縁端部は外方へ緩く屈曲して内側に平坦面をもつ。５～７は外方に緩やかにのびる口縁部を有するものであるが、７の口縁外面には赤彩の痕跡が若干残っている。８～第 15 図２は外反ぎみにのびる口縁部を有するものである。３～６は壺である。３・４は小形の直口壺で口縁部はやや外方にのびる。３は肩部が良く張り、４は胴部中央が張る。５は短く屈曲する口縁部をもつ壺もしくは甕である。６はやや直線的に長くのびる口縁部を有し、口縁端部は外側に肥厚する。



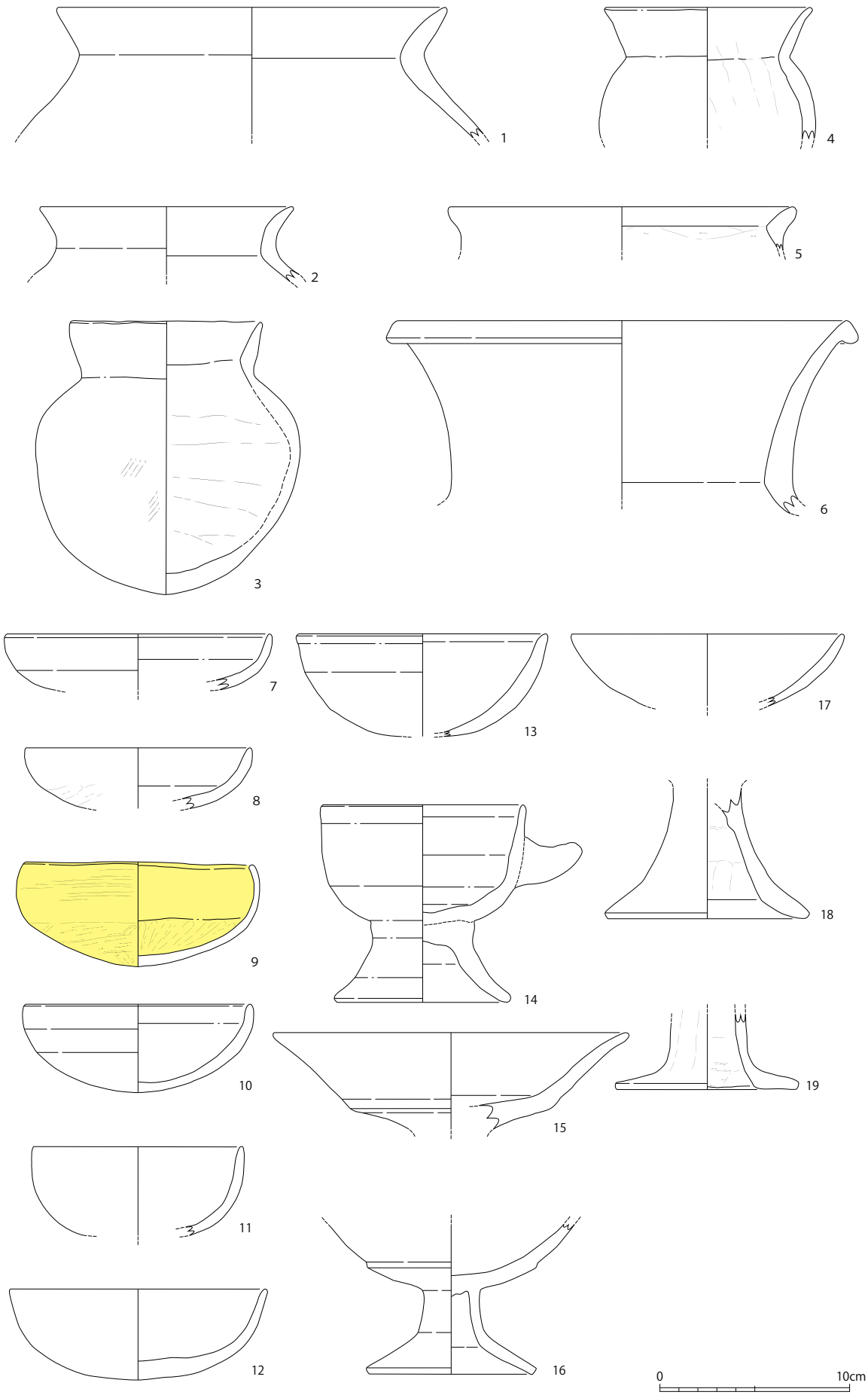
第 12 図　御崎谷遺跡　加工段 3・4 遺物出土状況（S=1/40　遺物 S=1/6）



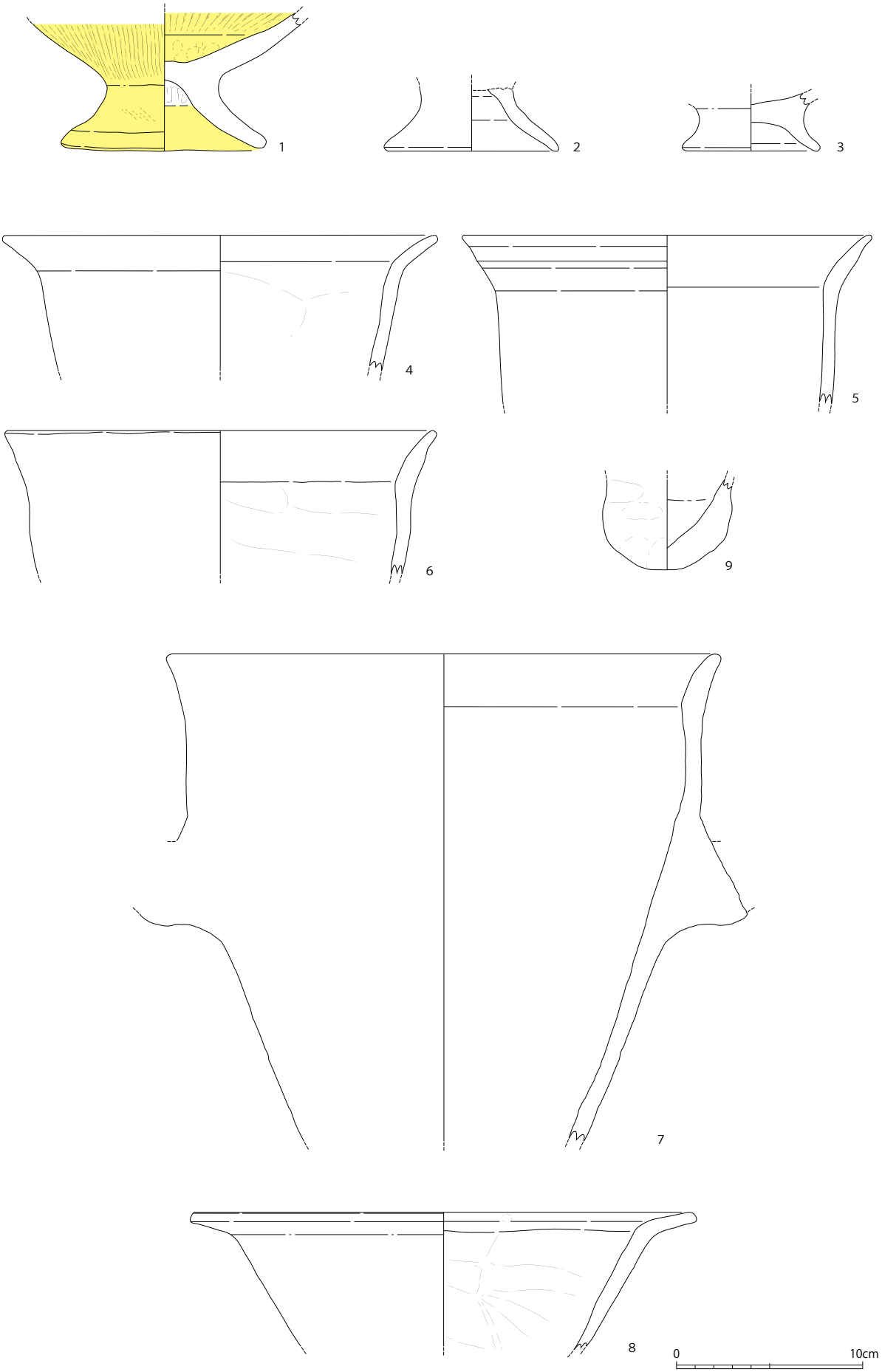
第 13 図　御崎谷遺跡　加工段３・４セクション図（S=1/40）

７～ 13 は坏もしくは碗である。７・８は浅めの体部のもので、９～ 13 はボウル状の体部で丸みをおびる。９は内外面に赤彩が施されているが、７と 10 にも一部赤彩が残っている。14 は床面直上で出土した把手付台付碗で、直線的に立ち上がる体部に一方向の把手が付き、「ハ」の字状に開く高台を有する。このような土師器の器種はあまり類例を見ないものであるが、大阪府陶邑古窯址群の高蔵寺 44 出土の須恵器（陶邑 1970）や島根県穴神３号横穴墓玄室内出土の須恵器（穴神横穴墓群 1995）に類似したものが認められ、このことから須恵器模倣土師器の可能性が高いと考えられる。また時期についてもいずれも６世紀～７世紀初頭のものであることから、この土師器も同時期もしくはそれ以降と考えておきたい。15 ～ 19 は高坏である。15・16 は体部との境に段を有するもので、15 の口縁部は大きく外方に開く。16 は口縁部を欠損するが外面に赤彩の痕跡が残る。17 は段を有さないもので、口縁部は内湾気味にのびる。18・19 は脚部で 18 の端部は緩やかに開くが、19 は横方向に屈曲して開く。第 16 図１～３は低脚坏で脚端部は緩やかに開くもので

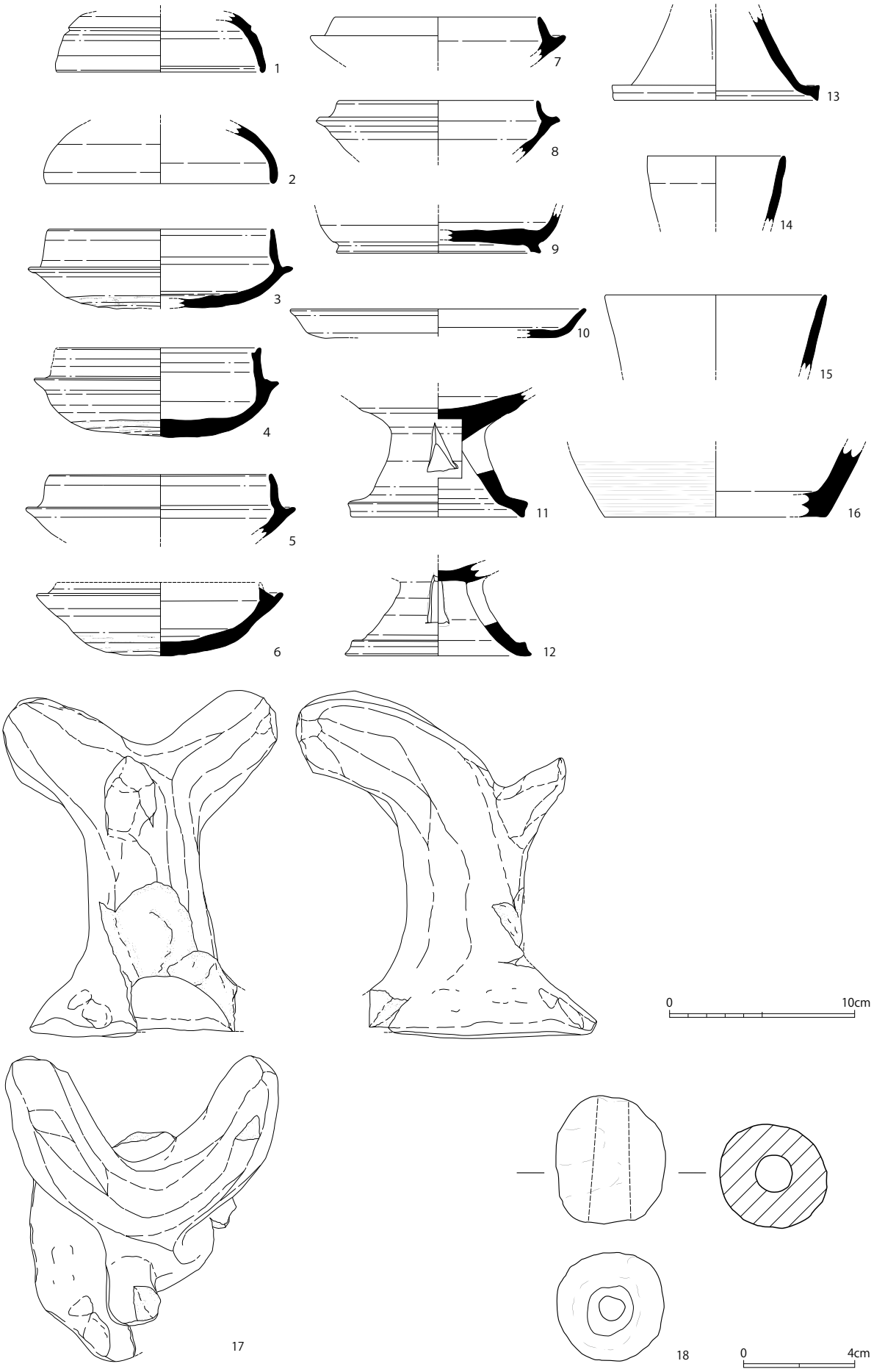
第 14 図　御崎谷遺跡　加工段 3 出土遺物実測図 1 （S=1/3）



第 15 図　御崎谷遺跡　加工段３出土遺物実測図２（S=1/3）



第 16 図　御崎谷遺跡　加工段３出土遺物実測図３（S=1/3）



第 17 図　御崎谷遺跡　加工段３出土遺物実測図４（１～ 17：S=1/3、18：S=1/2）

ある。１は口縁部を欠損しているが碗状の坏部であったと考えられる。内外面に赤彩が施されている。4～7は甑で口縁部は外方に屈曲してのびるものである。8は鉢と思われ体部は外傾してのび、口縁部は横方向に強く屈曲してのびている。９は手捏土器で口縁部を欠損しているが、内外面に指頭圧痕が残っている。

第17図1～16は須恵器である。６は床面直上から出土している。１・２は蓋で１は体部との境に段を有するタイプ、２は段及び沈線が消失しているタイプである。３～８は坏身で３～５は立ち上がりが長いタイプであるが、４の端部は段をなし、他は丸くおさめている。６～８の立ち上がりは内傾して短くのびるタイプのもので、端部は丸くおさめている。９は口縁部を欠損する高台付坏で、高台は低く斜めに開く。10は皿で底部を欠損しているが口縁端部は外方に屈曲する。11～13は高坏である。11は２方向の三角形透かし、12は２方向の長方形透かしを施したもので、13は透かしの痕跡が一部残っている。14～16は壺である。14・15は直口壺もしくは長頸壺の口縁部、16は底部片である。

17・18は土製品である。17は土製支脚で三方向の突起を有し、円孔は認められない。18は楕円形状の土錘である。

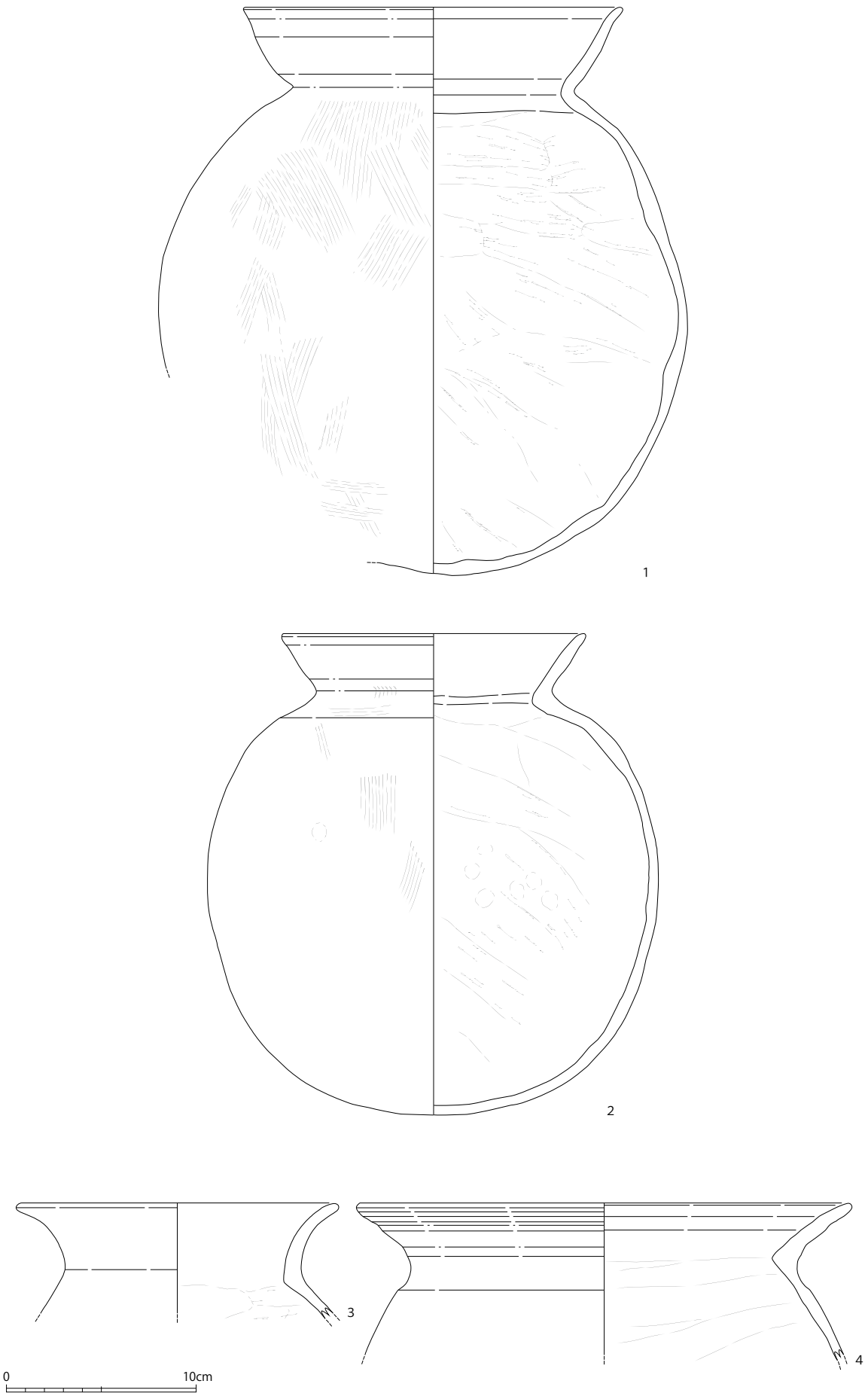
加工段４（第12図）

加工段４は加工段３・５を切って造成されているが、北側は小道及び水路等が存在していたため調査を行っていない。平面形は判然としないが方形状を呈するものと考えられ、残存する規模は長さ約10ｍ、幅1.5ｍ、深さ50cmを測るやや大きい加工段である。床面には東西方向に延びる長さ３ｍ～４ｍ、幅20cm～30cm、深さ約10cmの３条の溝を検出したが、その性格については壁帯溝等も考えられるものの明確には判断できなかった。この他には床面西側でピット１穴を検出したのみで、焼土等は認められなかった。

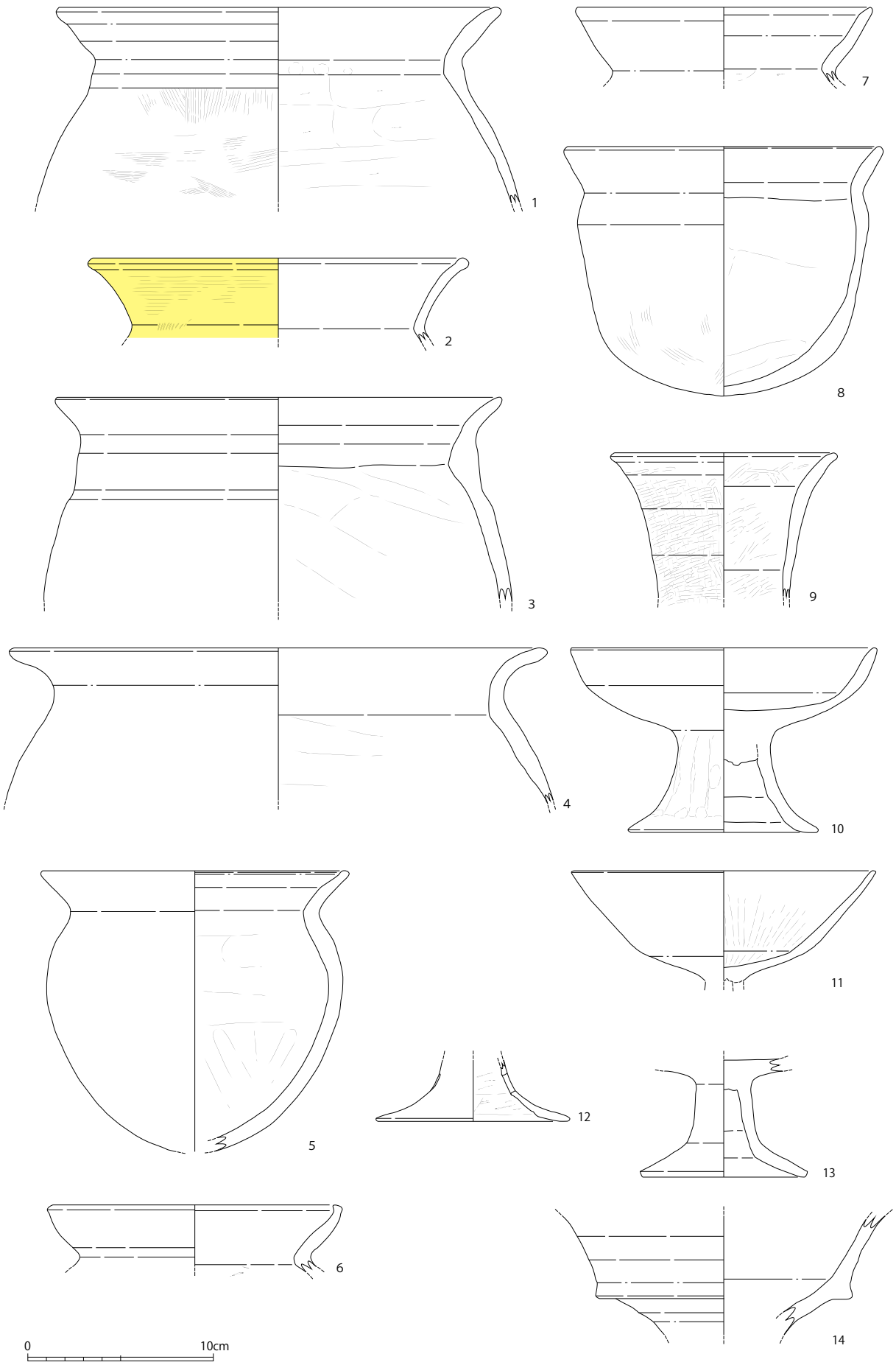
遺物は覆土中や床面直上から時期差のある多量の土師器、須恵器が出土している。特に床面上のものも古墳時代前期頃～後期頃と時期幅があることから、これらの遺物から加工段４の時期を特定することはできないが、切り合い関係から加工段３より後出なのは明らかであり、７世紀以降と考えておきたい。

加工段４出土遺物（第18～22図）

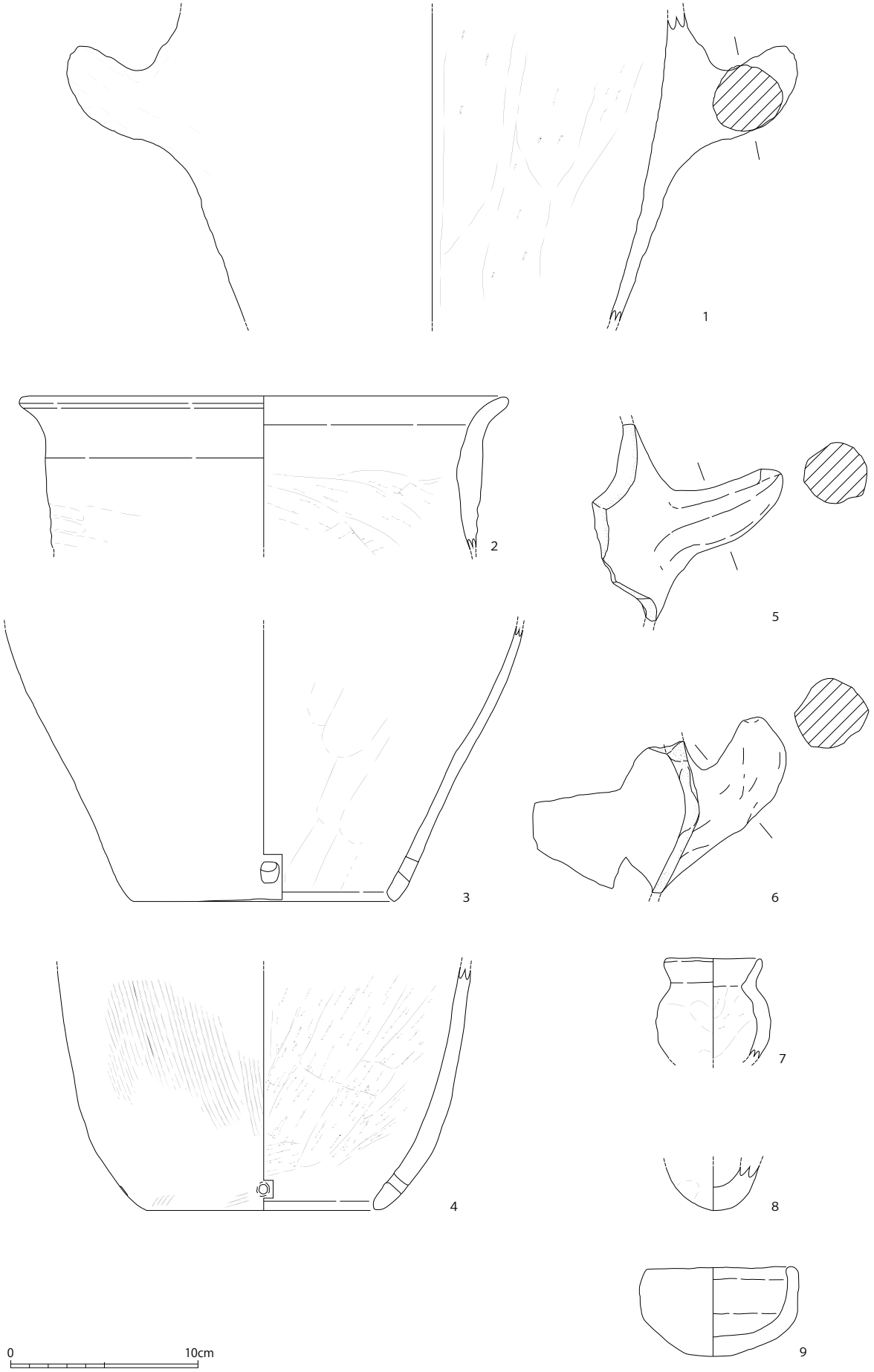
第18図～第20図までは土師器で、第18図４、第19図６、12、14は床面上から出土している。第18図１～第19図７は単純口縁の甕であり、1・2は完形近くまでに復元できたものである。１は口縁端部が外方に少し屈曲するもので、胴部中央がよく張り球形に近い。２は外傾してのびる口縁部をもち、１よりは胴部の張りが少ない。また、底部には赤彩らしき痕跡が残っている。３～第19図４は外反気味にのびる口縁部のもので、２の外面には赤彩が施されている。５は外傾してのびる口縁部に肩部の張る胴部をもつ。6は内湾気味にのびる口縁部で端部は内側に肥厚している。７は口縁端部の内側がやや平らに近い。８は鉢の可能性が高く、口縁部は外傾してのび、底部はやや平らに近い。９は直口もしくは長頸壺の口縁部で端部付近で緩やかに開く。10～13は高坏で、10は浅く開く坏部にやや太めの脚部が付くものである。11は体部との境が僅かに屈曲する坏部で、外面に赤彩の痕跡が一部残る。12・13は「ハ」の字状に開く脚部で、12は円形の透かしを施している。14は器台の受け部で、外面に擬凹線等の文様は認められない。第20図１～６は甑で口



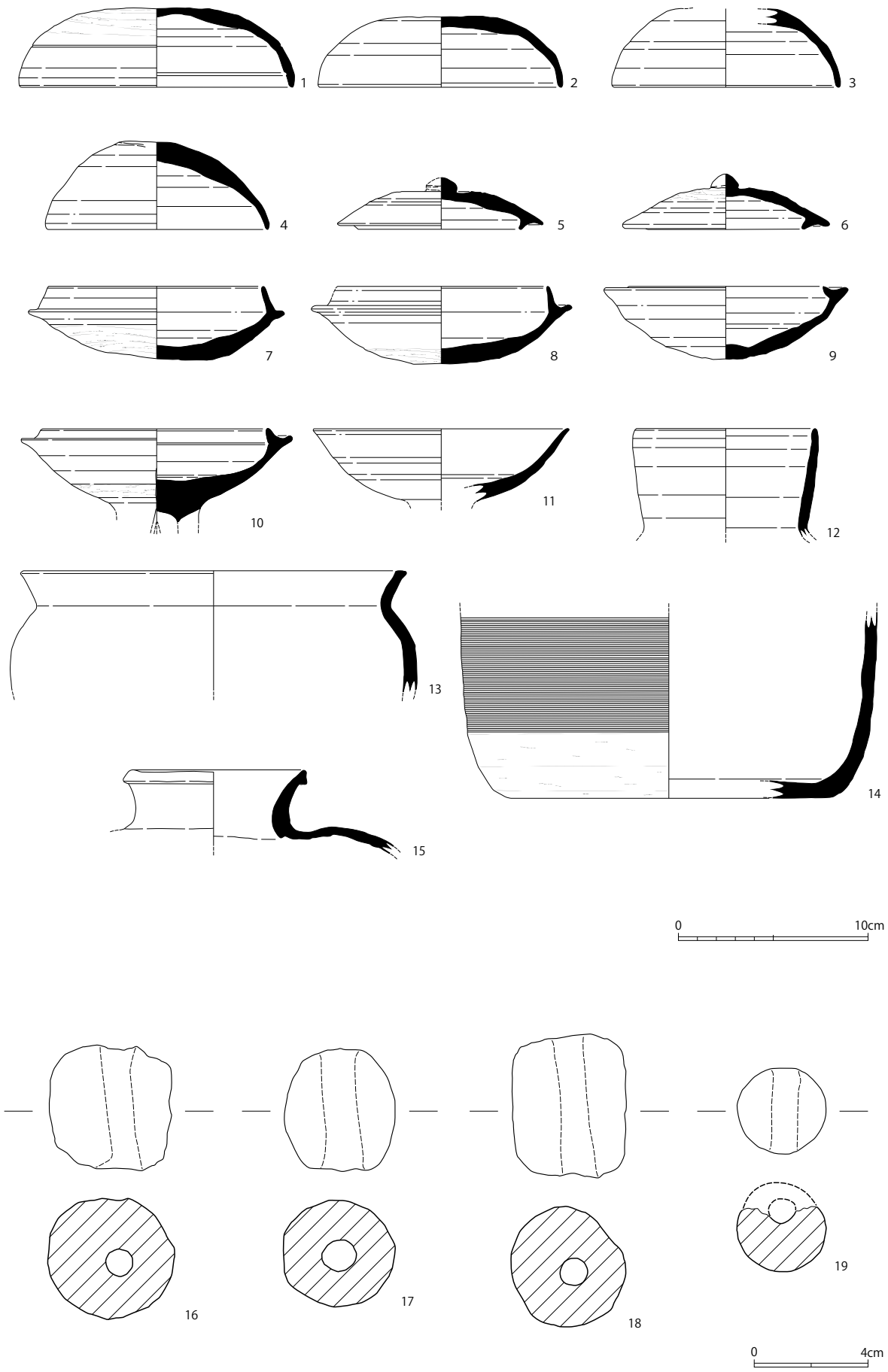
第 18 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図１（S=1/3）



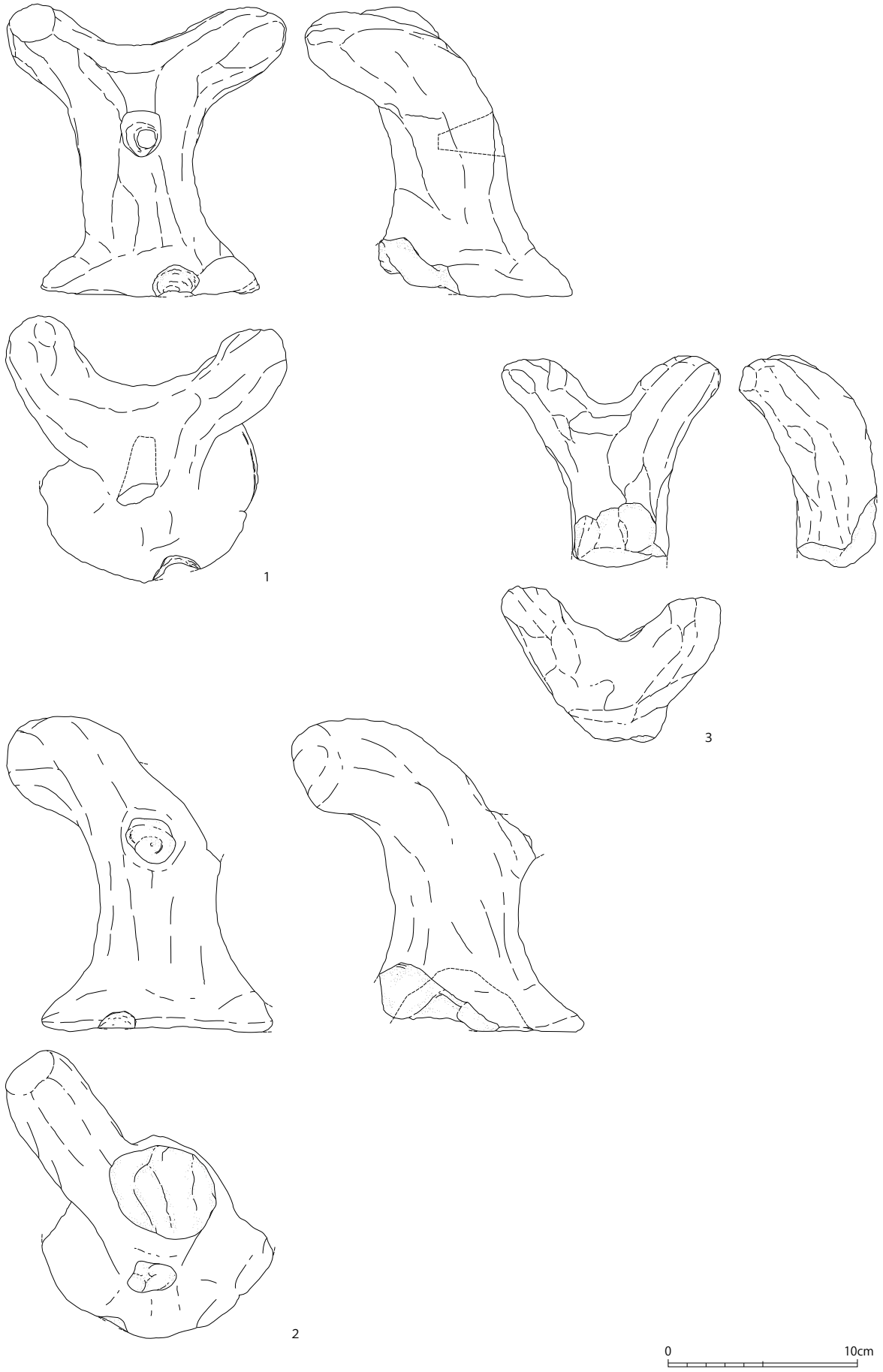
第 19 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図２（S=1/3）



第 20 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図３（S=1/3）



第 21 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図４（1 ～ 15：S=1/3、16 ～ 19：S=1/2）



第 22 図　御崎谷遺跡　加工段４出土遺物実測図５（S=1/3）

縁部や底部、把手のみのものであり、3・4は底面付近に穿孔が施されている。7は小形丸底壺、8・9は手捏土器で、外面には指頭圧痕が残っている。

第21図1～15は須恵器である。1～6は蓋で1は体部との境に沈線を有するが、2～4は沈線が消滅しているタイプのものである。また、1の口縁内面には1条の沈線が施されている。5・6は宝珠状のつまみが付いて、かえりを有するタイプで天井部はやや低い。7～9は坏身で、7・8の立ち上がりは上方へ長くのびるタイプであるが、9は立ち上がりが短く斜めにのびるものである。10は有蓋高坏の坏部で、立ち上がりは内傾してのびる。11は無蓋高坏の坏部で口縁端部が若干外反気味にのびる。12は長頸壺の口縁部で内湾気味に立ち上がる。13は短頸壺で口縁部は外傾してのび端部は平らに近く、肩部がよく張る。14は壺底部で平らに近い底部から直立気味にのびる体部をもち、体部外面にカキ目を施す。15は横瓶の口縁部で口縁端部は上下に肥厚する。

第21図16～第22図は土製品である。第21図16～19は土錘で19は円形を呈するが、それ以外は楕円形状のものである。第22図は土製支脚で1は2方向の突起をもち、背面に円孔を有する。2は欠損しているが3方向の突起をもつものと考えられ、1のような円孔は認められない。3は下方を欠損しているが2方向の突起をもつものである。

加工段5（第23図）

加工段5は加工段3・4によって東側が切られ、加工段4同様に北側は水路等が存在するので調査を行っていない。平面形は判然としないが楕円形状を呈していたものと考えられ、残存する規模は長さ約8m、幅約2.3m、深さ約40cmを測る。床面では2条の溝を検出しただけにとどまり、ピットや焼土等は認められなかった。南壁沿いに延びる長さ約4.5m、幅約1m、深さ約10cmの溝は、幅がやや大きいが壁帯溝であった可能性も考えられる。

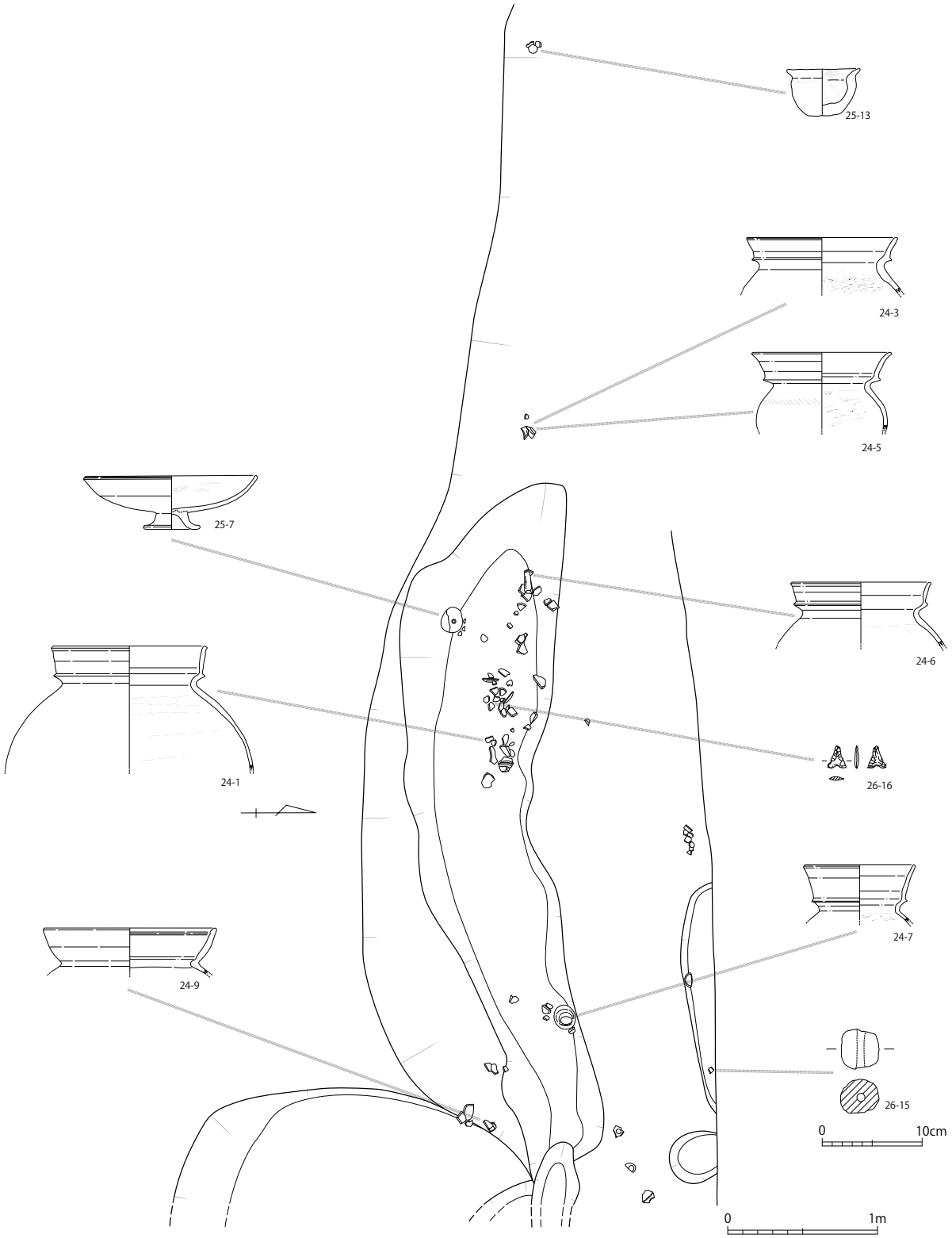
遺物は覆土中と床面直上から古墳時代前期頃～古代にかけての土器が多量に出土している。床面直上のものは壁帯溝と考えられる溝に集中しており、古墳時代前期頃の特徴を示すものが大半を占めている。このことから考えれば加工段5は古墳時代前期頃に営まれていたと推測される。

加工段5出土遺物（第24～26図）

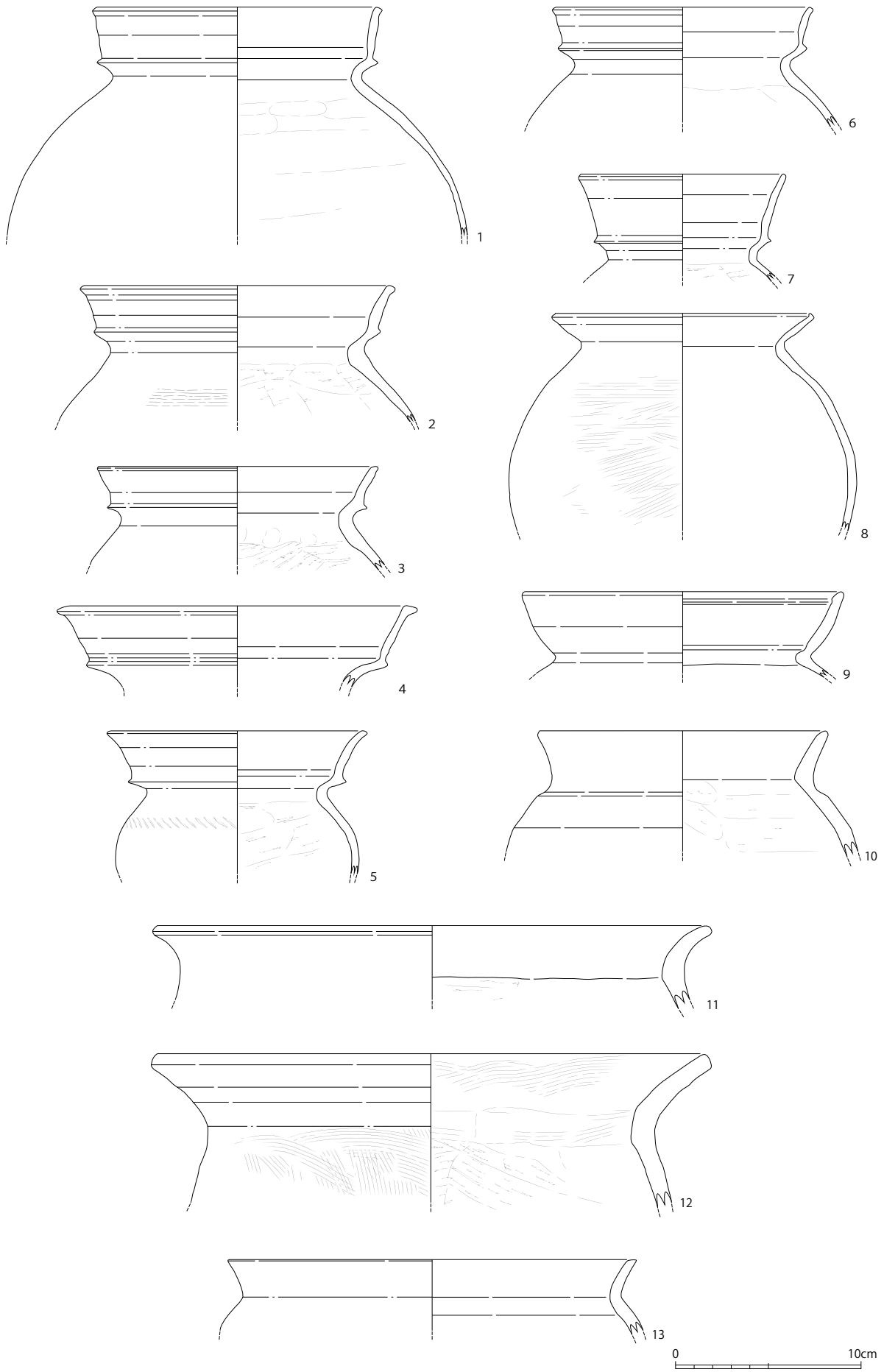
第24図と第25図は土師器で、第24図1、3、5～7、9、第25図7、13の8点は床面直上から出土している。第24図1～7は複合口縁甕、8～13は単純口縁甕である。複合口縁甕は口縁部が直立気味もしくは外傾してのび、端部は外方に肥厚するものが多く認められる。複合口縁部の稜は横方向に鋭く突出する。5の肩部には刺突文が施されている。8は「く」の字状に開く口縁部で、口縁端部が内側上方に肥厚している。9も口縁内面が肥厚するタイプで、これらは布留系の甕であろうか。10～13は口縁部が外反気味にのびるもので、13は肩部がよく張っている。第25図1～3は壺で、1は口縁部を欠損するが複合口縁で、胴部中央に最大径をもつ。2・3は直口壺で口縁端部付近でやや外反する。両方とも内外面に赤彩が施されている。4～6は高坏、7・8は低脚坏である。4は体部との境に段を有するが、5は段の無いタイプである。6は「ハ」の字に開く脚部である。7は坏部が大きく皿状に開くタイプで、8は口縁部を欠損するが碗状に開く坏部を有するものと考えられる。両方とも脚部内面以外に赤彩が施されている。9は口縁端部付近に小さな段を有する坏で、赤彩の痕跡が一部残っている。10は器台の脚部で、外面に擬凹線等の文様は認められない。11・12は甑で12の底面付近には円孔が施されている。13は手捏土器で口縁

部が外方に短く屈曲するもので、指頭圧痕が少し残っている。

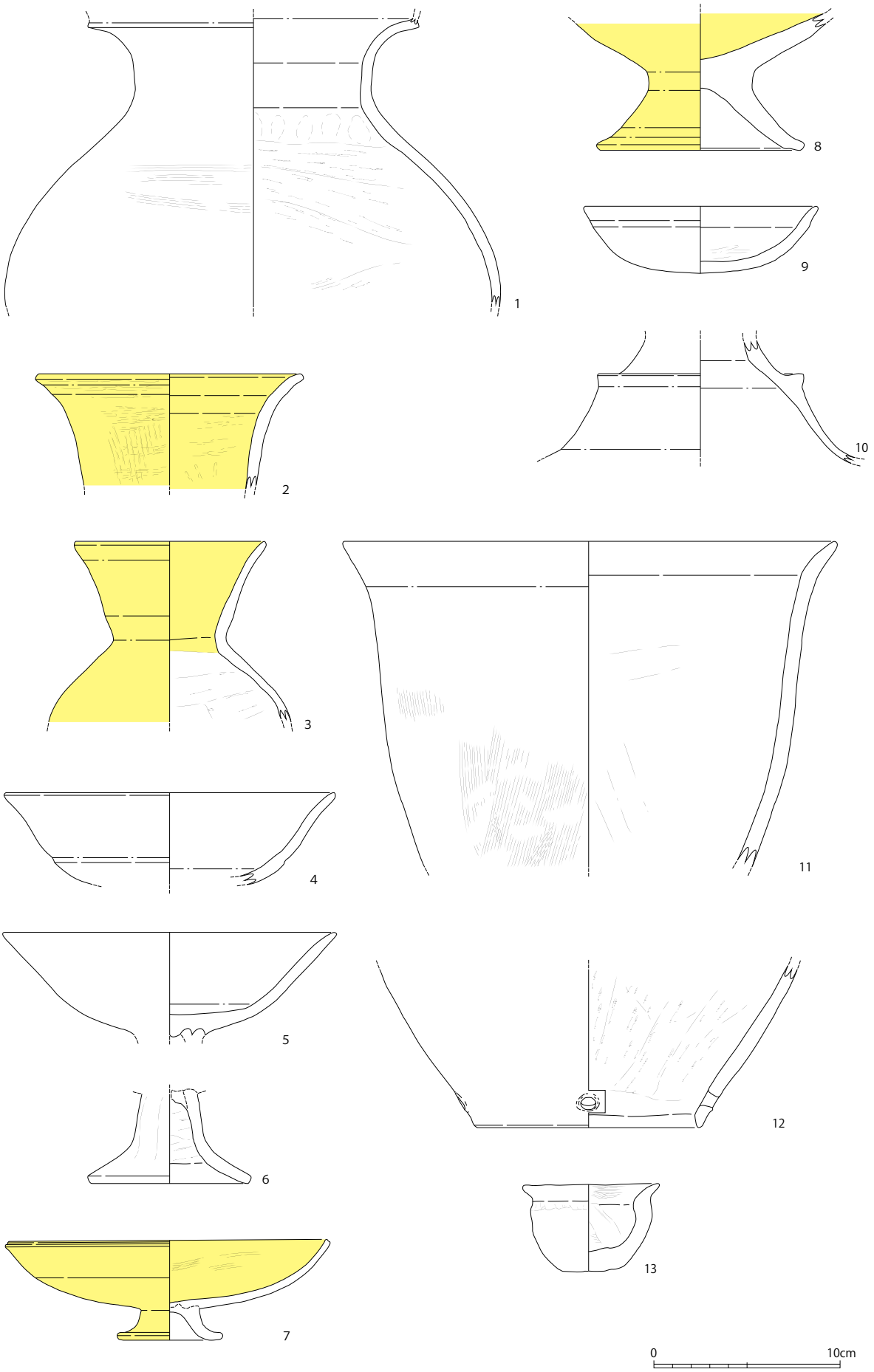
第 26 図 1 ～ 13 は須恵器である。 1 ～ 3 は蓋で、 1 ・ 2 は天井部が丸みを帯び、口縁部との境の沈線が消失している。 3 は天井部を欠損しているが、つまみの付くタイプである。口縁部にむけて屈曲して、口縁端部は下方に折り曲げている。 4 ～ 9 は坏で、 4 の体部は内湾してのびるが、口



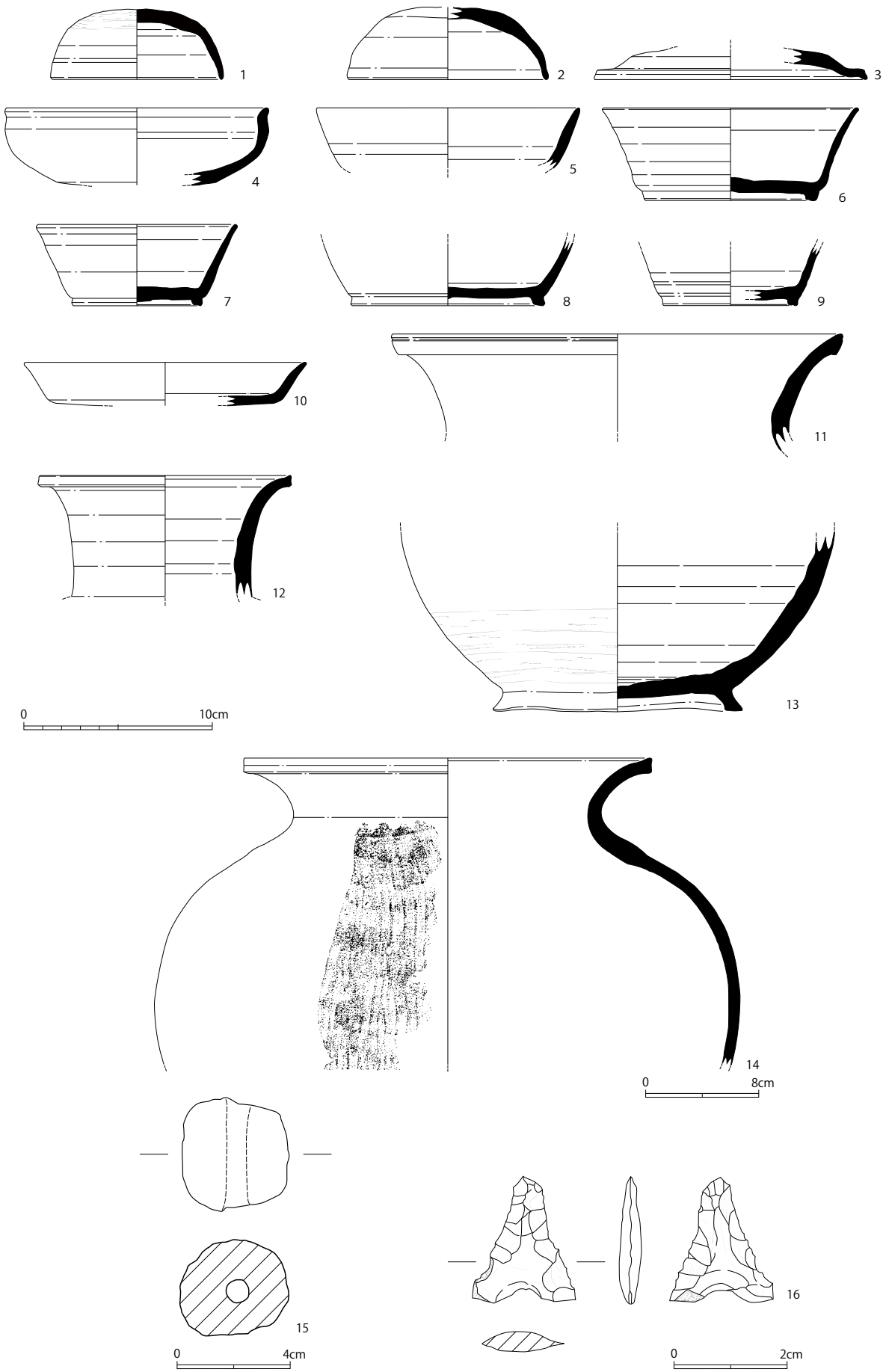
第 23 図　御崎谷遺跡　加工段 5 遺物出土状況（S=1/40　遺物 S=1/6）



第 24 図　御崎谷遺跡　加工段 5 出土遺物実測図 1 （S=1/3）

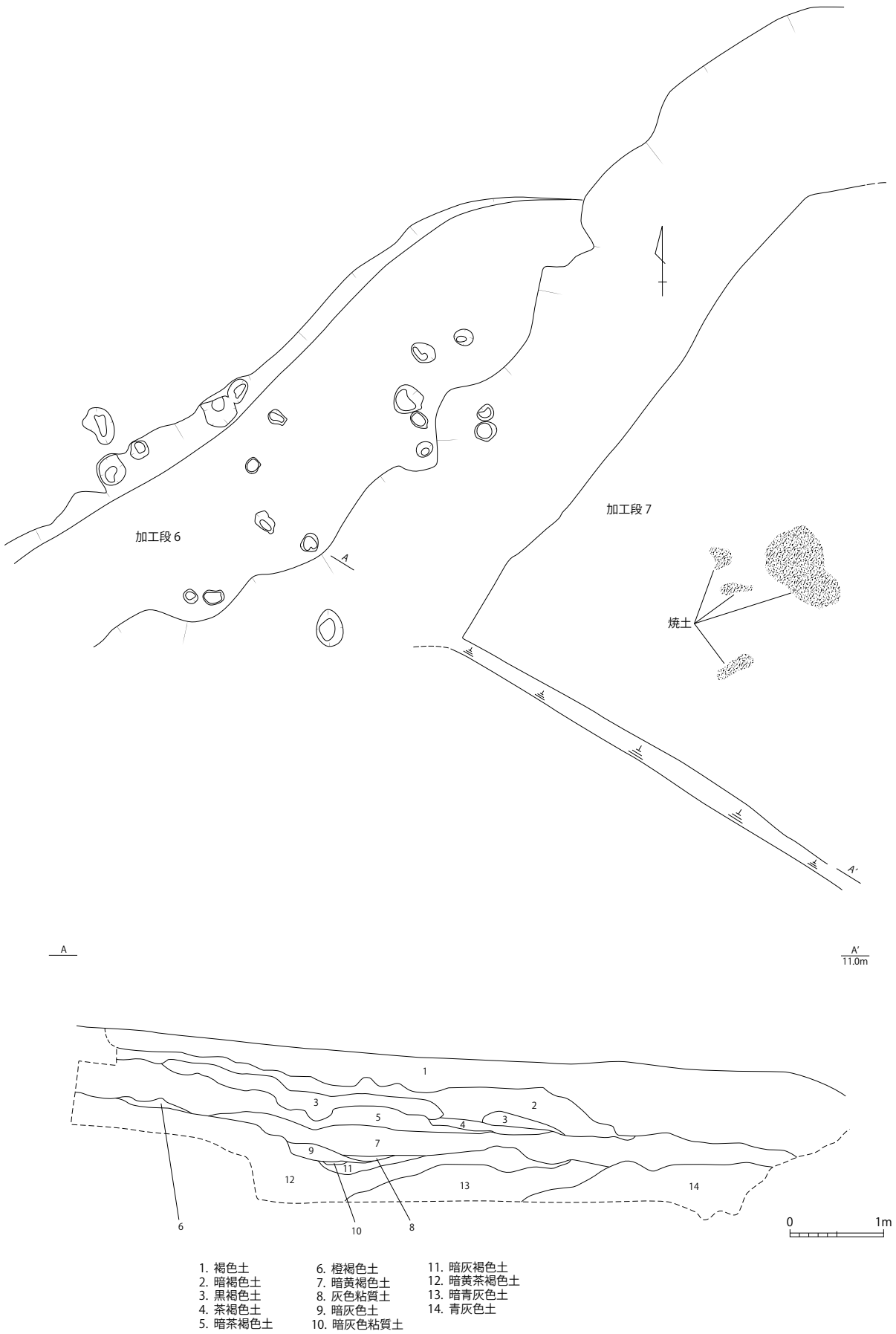


第 25 図　御崎谷遺跡　加工段 5 出土遺物実測図 2（S=1/3）



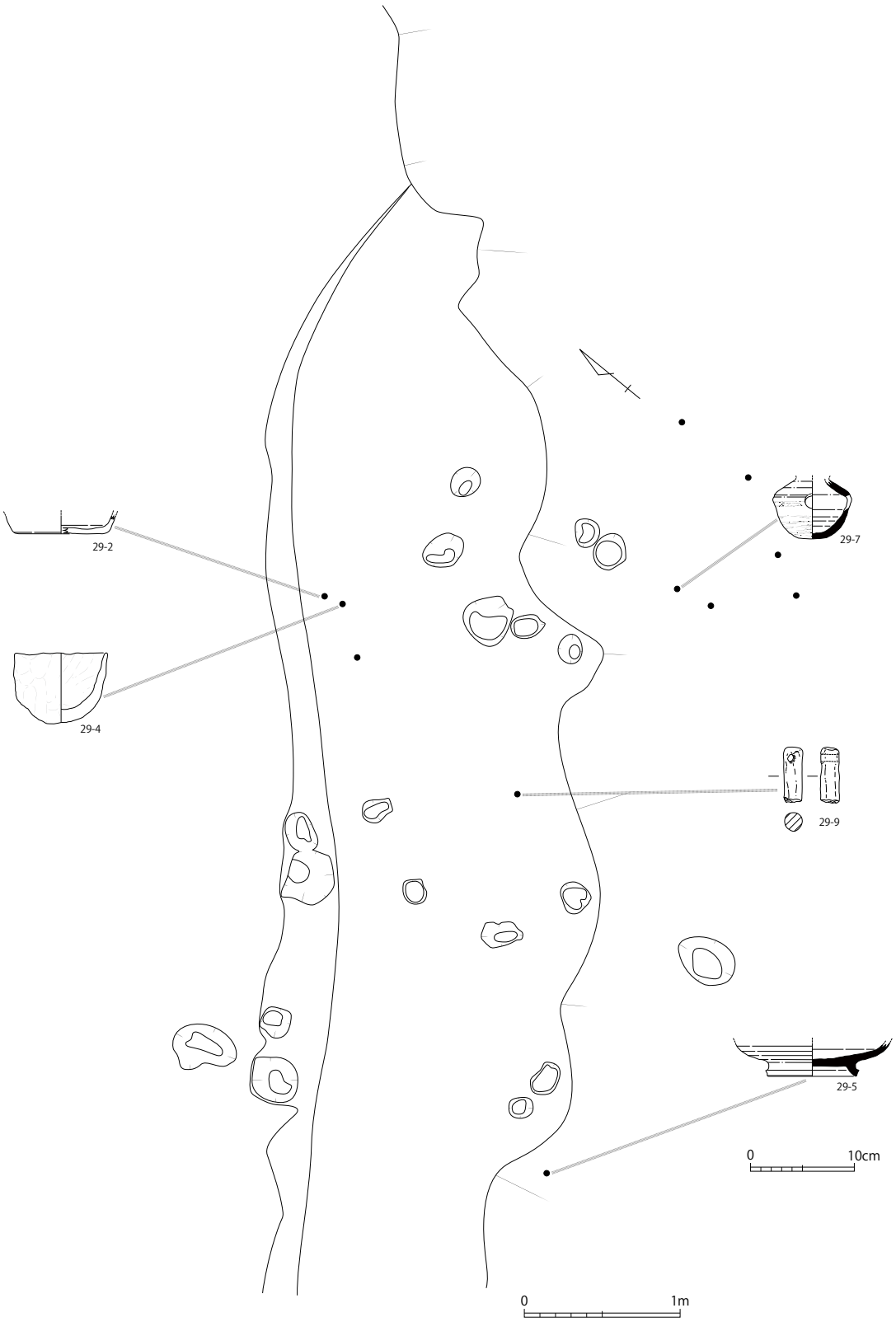
第 26 図　御崎谷遺跡　加工段 5 出土遺物実測図 3

（1 ～ 13：S=1/3、14：S=1/4、15：S=1/2、16：S=1/1）



第 27 図　御崎谷遺跡　加工段 6・7 位置図及びセクション図（S=1/60）

縁端部が外方に屈曲するタイプ、５は体部が外傾してのびるタイプである。６～９は高台付坏である。６・７は体部が外反してのびるタイプで、高台はやや下方に開くものである。８・９は口縁部を欠損するが８の体部は内湾するものである。高台は低く８は横方向に開く。10 は皿で口縁部は外反している。11 ～ 14 は壺甕類で、11 は外反してのびる口縁部、12 は直立気味にのびる口縁



第 28 図　御崎谷遺跡　加工段６平面及び遺物出土状況（S=1/40　遺物 S=1/6）

部であるが端部付近で外方に屈曲している。13 は胴部下半で内湾する体部に横方向にやや長く開く高台を有する。14 は外方に大きく開く口縁部で端部は平らに近い。肩部がよく張り、外面に平行叩き、内面は叩きをナデ消しており、外来系の可能性が考えられる。

15 は楕円形状を呈する土錘である。16 はサヌカイト製の石鏃である。いずれも床面直上から出土している。

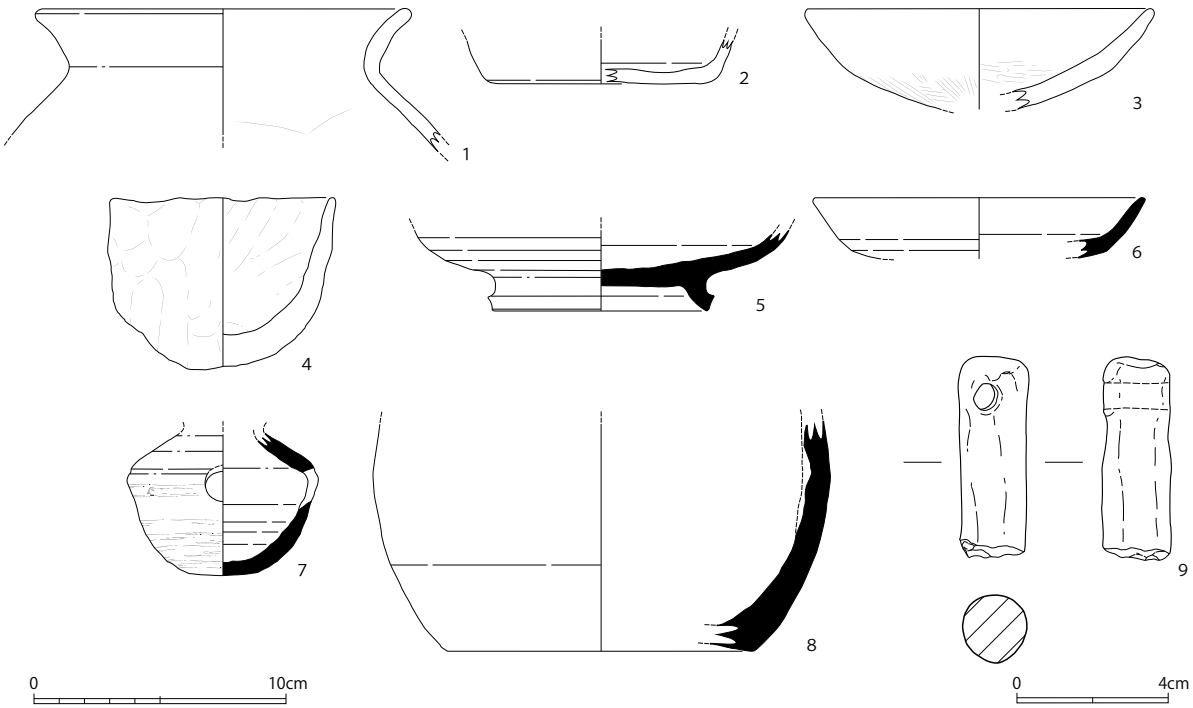
加工段６（第 28 図）

加工段６は東側斜面の標高約 10 mの位置で検出した。東側が流失しているため、平面形は明瞭ではないが楕円形を呈していたと考えられ、残存する規模は長さ 7.2 m、幅約２m、深さ約 40cm を測る。床面及び西壁、東側斜面に径 15cm ～ 30cm、深さ 20cm 前後のピット多数を検出したが、すべてがこの加工段に伴うものではない。また、壁帯溝や焼土等は確認できなかった。

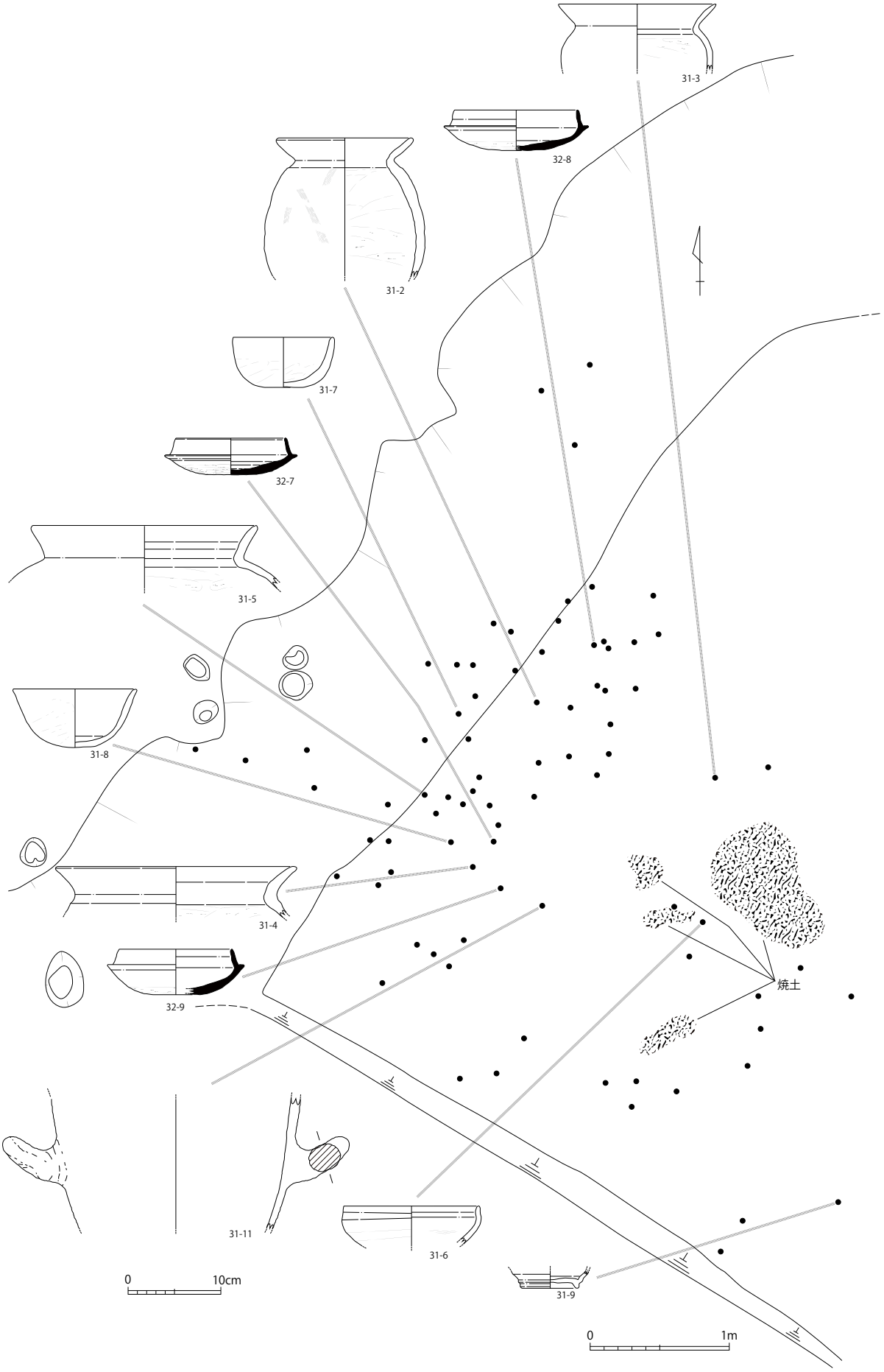
遺物は覆土中から土師器や須恵器等が出土しているが、これらの遺物には時期幅が認められ、加工段６の時期については判断できなかった。

加工段６出土遺物（第 29 図）

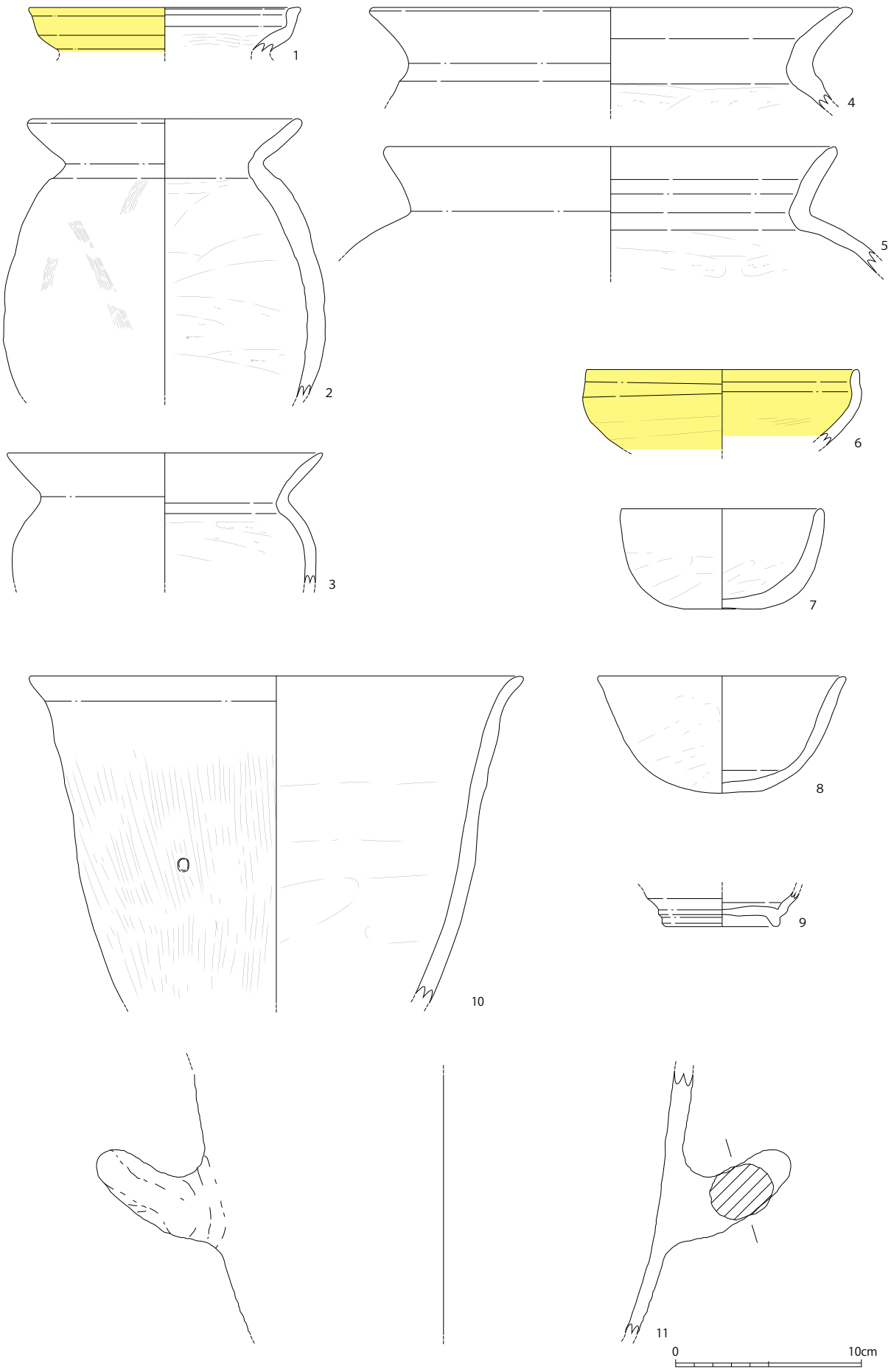
１～４は土師器、５～８は須恵器、９は土製品である。１は単純口縁の甕で口縁部は外反してのび、端部は丸くおさめる。２は口縁部を欠損する坏であるが、底部は平らに近い。体部には赤彩の痕跡が一部残り、底部内外面は黒色となっている。３は碗で口縁部は内湾気味にのびる。内外面の一部に赤彩の痕跡が残る。４は手捏土器で内外に指ナデの痕が残る。５は高台付坏で口縁部は欠損するが体部は内湾気味にのびる。高台は横方向に緩く開く。６は皿で口縁部は外傾してのびる。７は瓶で肩部がよく張っている。８は壺甕類の底部である。９は棒状土錘で一端を欠いている。断面は円形で端部近くに径５㎜の円孔を穿つ。



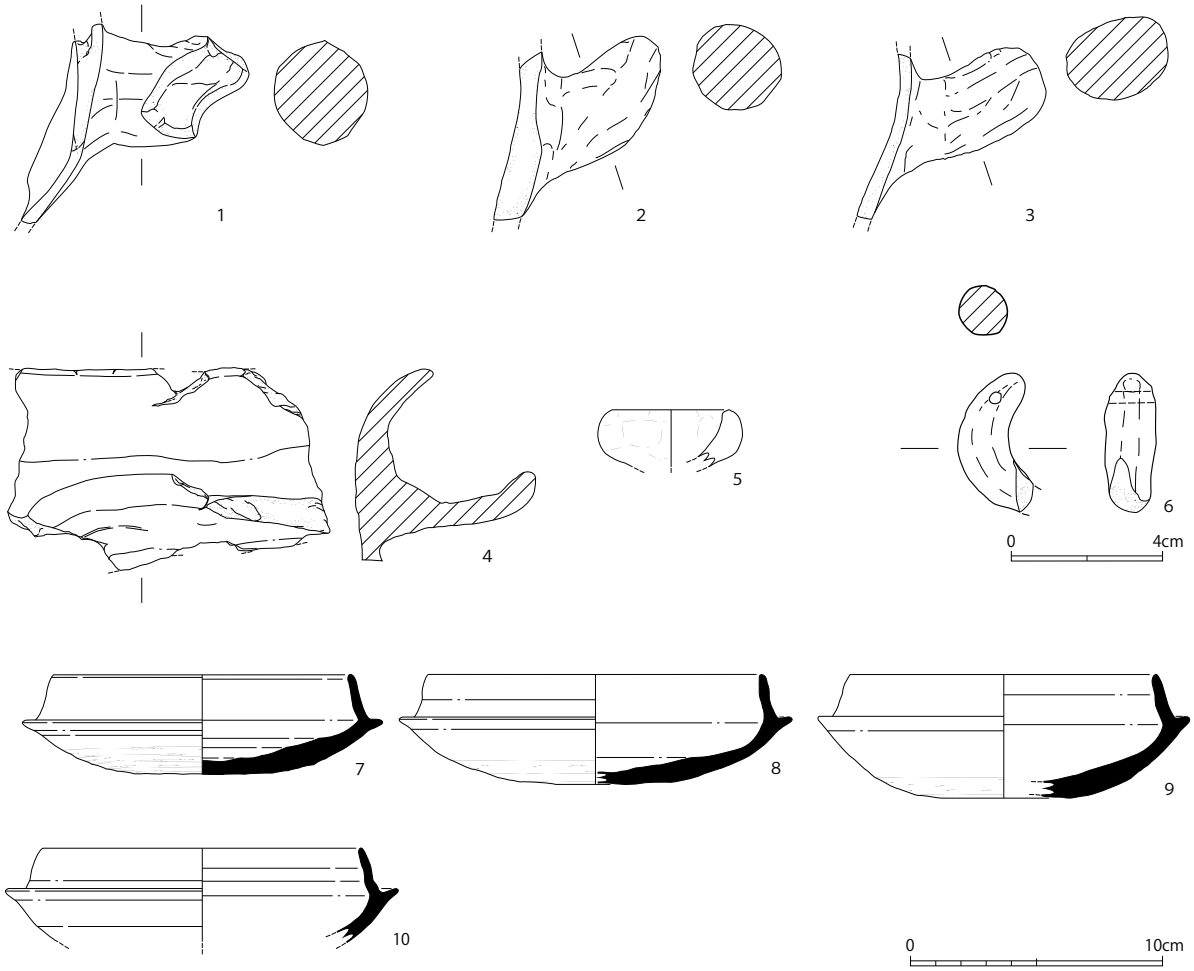
第 29 図　御崎谷遺跡　加工段６出土遺物実測図（１～８：S=1/3、９：S=1/2）



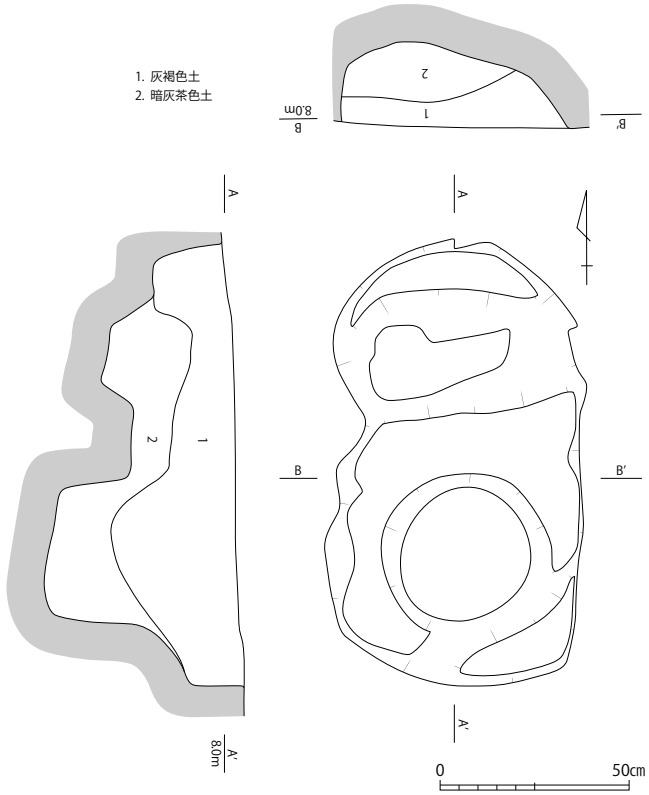
第 30 図　御崎谷遺跡　加工段 7 平面及び遺物出土状況（S=1/40　遺物 S=1/6）



第 31 図　御崎谷遺跡　加工段 7 出土遺物実測図 1（S=1/3）



第 32 図　御崎谷遺跡　加工段７出土遺物実測図２（１～５・７～10：S=1/3、６：S=1/2）



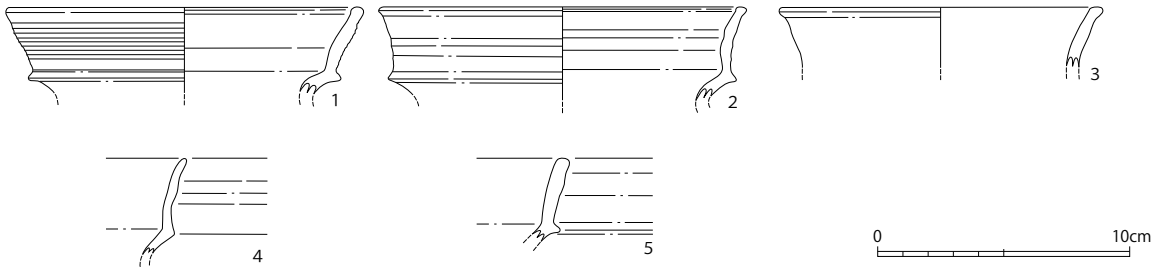
第 33 図　御崎谷遺跡　ＳＫ０１実測図（S=1/20）

加工段７（第 30 図）

加工段７は加工段６の東側下方の標高約 8.4 mの位置で検出した。南側は道路、東側は水路が存在していたため調査を行っていない。そのため平面形は判然としないが方形状を呈していたと考えられる。また、加工段６を切って高い壁面を作り出しているようにも見えるが、これは後世の攪乱等によるもので、本来の壁面については把握できず、現状では長さ 6.2 m、幅 4.2 mの平坦面となっている。

床面では小規模な焼土を４箇所検出しただけにとどまり、ピットや壁帯溝は確認できなかった。

遺物は覆土中と床面から出土しているが、その多くは床面東寄りに集中して出土している。弥生土器、土師器、須恵器、土



第 34 図　御崎谷遺跡　ＳＫ０１出土遺物実測図（S=1/3）

師質土器と時期差のある土器が混在しているため、これらの遺物から加工段７の時期については判断できなかった。また、加工段６との切り合い関係も明瞭でないため、これらの前後関係についても把握できていない。

加工段７出土遺物（第 31 ～ 32 図）

第 31 図１～第 32 図６は土師器、第 32 図７～ 10 は須恵器である。第 31 図１はやや退化した複合口縁の甕で口縁部は短く立ち上がり、端部は平らに近い。外面に赤彩が施されている。２～５は単純口縁の甕で口縁部は外傾してのび、端部は丸い。２の胴部は長胴タイプである。６は坏で体部との境で屈曲する口縁部を有する。内外面に赤彩を施している。７・８は碗でボウル状の形状を呈する。９は口縁部を欠損する土師質土器の高台付坏で、高台は低く開く。10 ～第 32 図３は甑で１～３は把手のみのものである。４は竈の庇部分である。５は手捏土器で内外面に指頭圧痕が残る。６は勾玉状土製品で一端に２㎜程度の円孔が施されている。７～ 10 は立ち上がりが長くのびる坏身で、いずれの端部も丸くおさめている。

ＳＫ０１（第 33 図）

ＳＫ０１は加工段１の西側約 10 m、標高約８ｍの地点で検出した土坑状遺構である。平面形は楕円形状を呈しているが、２つの土坑が接しているようにも見え、南北２箇所に円形及び楕円形状の掘り込みが認められる。規模は長さ 1.2 m、幅 70cm、深さ 35cm ～ 50cm を測り、南側が深くなっている。覆土は上層に灰褐色土、下層に暗灰茶色土が堆積しており、下層から小片ではあるが古墳時代初頭頃の土器が５点出土した。

覆土中の遺物から判断して古墳時代初頭頃の土坑と考えられるが、性格については把握できなかった。

ＳＫ０１出土遺物（第 34 図）

３については断定できないが、他は複合口縁の甕である。口縁部は外傾してのび、端部は平らに近いものと丸くおさめるものがある。複合口縁部の稜は横方向に鋭く突出している。１の口縁外面には擬凹線が施されている。

参考文献

大阪府教育委員会『陶邑』1970

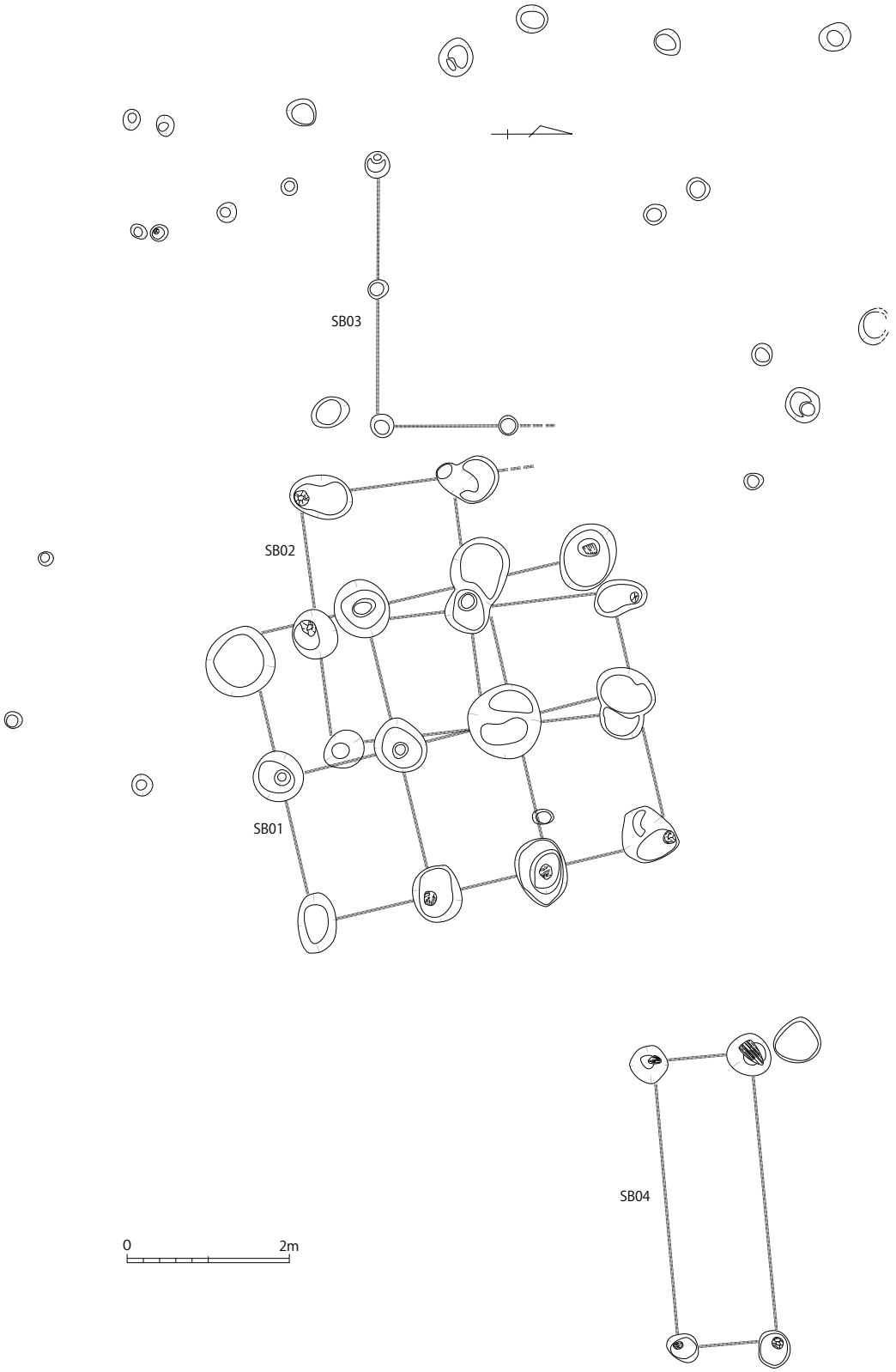
島根県教育委員会『平ラⅡ遺跡・吉佐山根１号墳・穴神横穴墓群』1995

第３節　平地部の調査

１．掘立柱建物跡

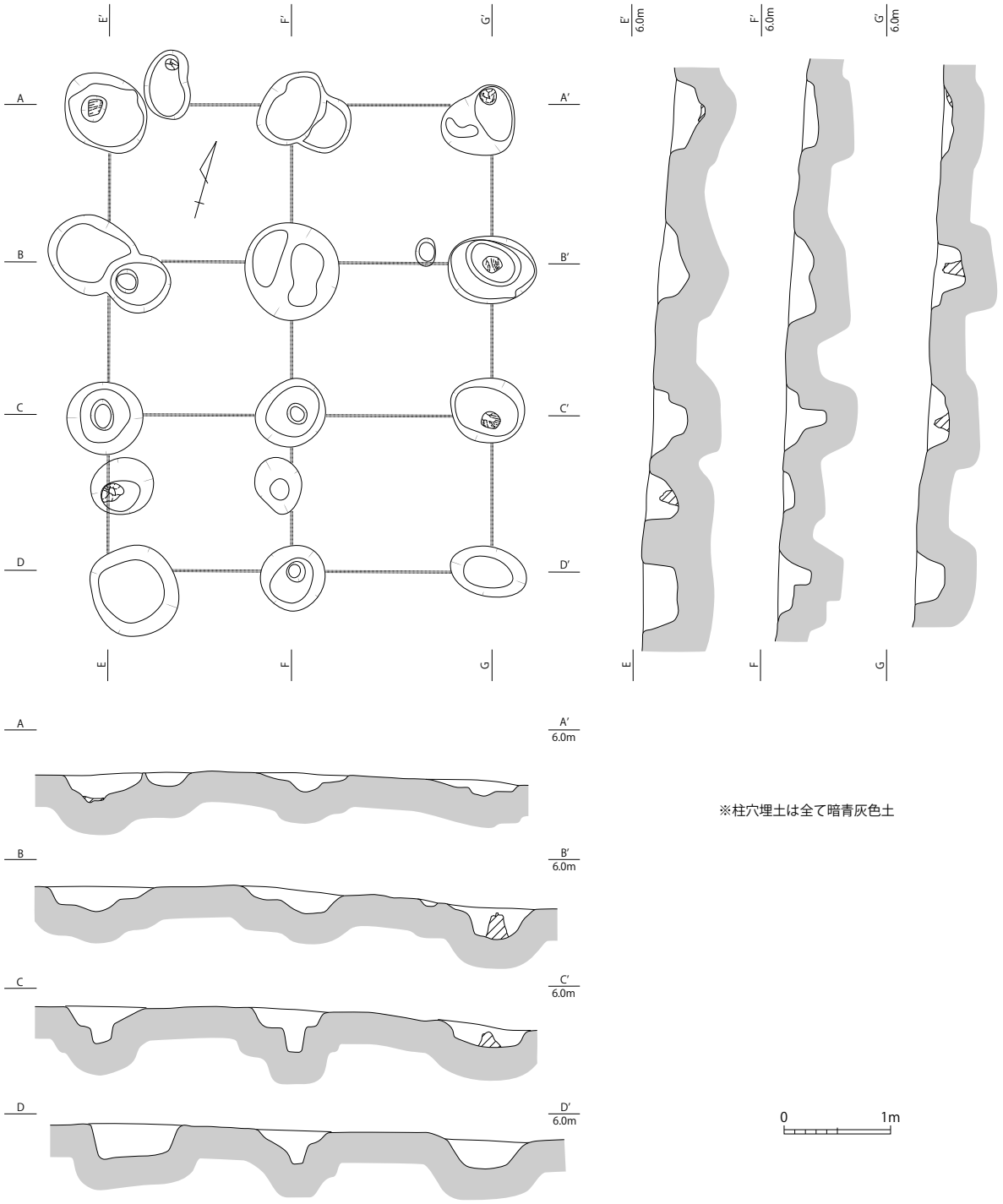
掘立柱建物跡は調査区南側中央付近の標高約 5.5 m～ 5.8 mの地点、多数のピット群の東寄りで

第 35 図　御崎谷遺跡　建物跡及びピット群位置図（S=1/300）



第 36 図　御崎谷遺跡　ＳＢ０１～０４位置図（S=1/80）

総柱建物３棟を含む計６棟が検出された（第 35 図）。これら建物跡を検出したグリッドの遺物含有率は西側グリッドに比べて極めて少なかった。また、すべての建物跡の柱穴内から遺物が出土していないため詳細な時期については特定することができていない。

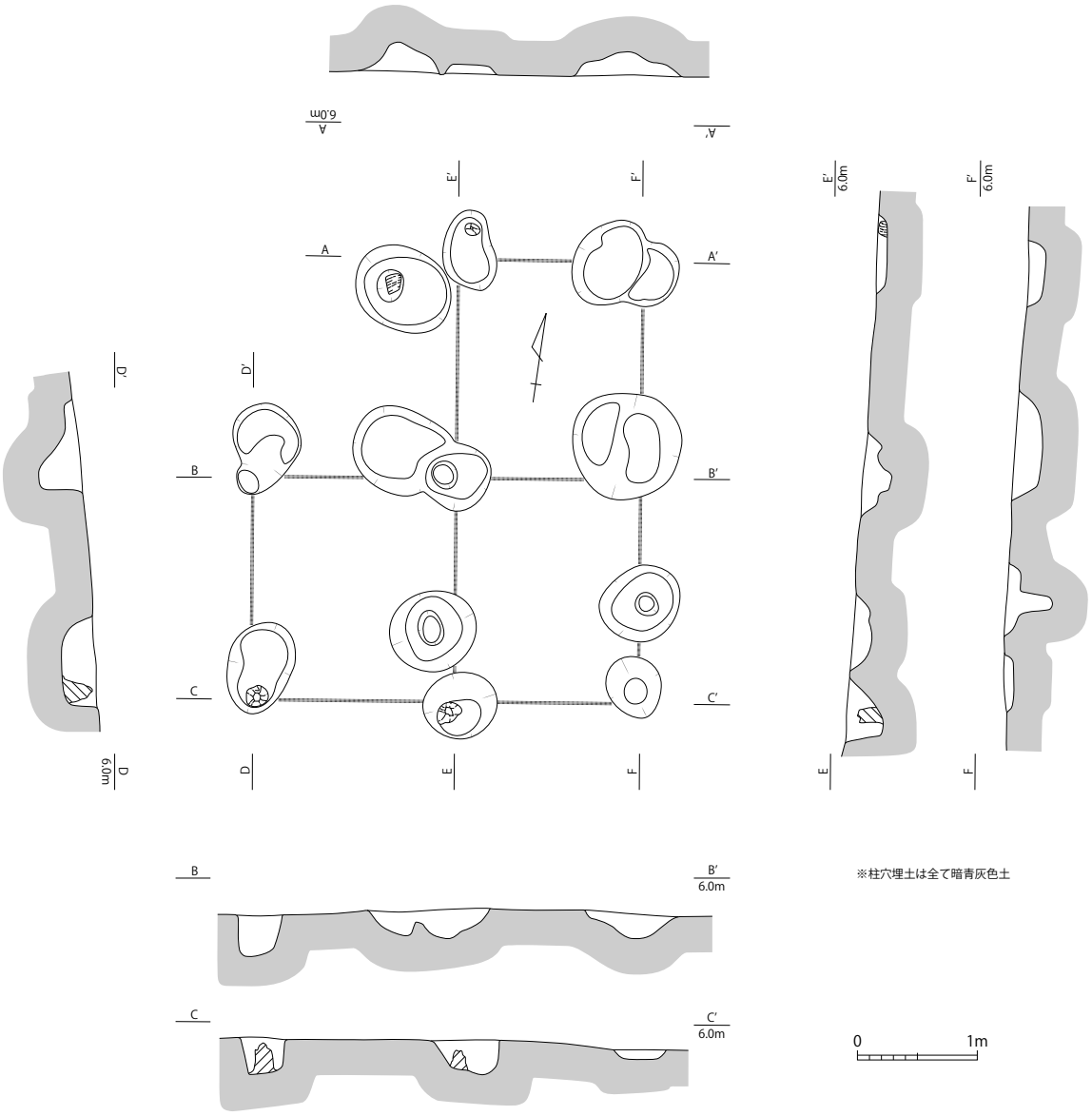


第 37 図　御崎谷遺跡　ＳＢ０１実測図（S=1/60）

ＳＢ０１（第 37 図）

ＳＢ０１は調査区南側中央で、ＳＢ０２と重複する状況で検出した３間×２間の総柱建物である。西隣にＳＢ０３、東隣にＳＢ０４が存在している。

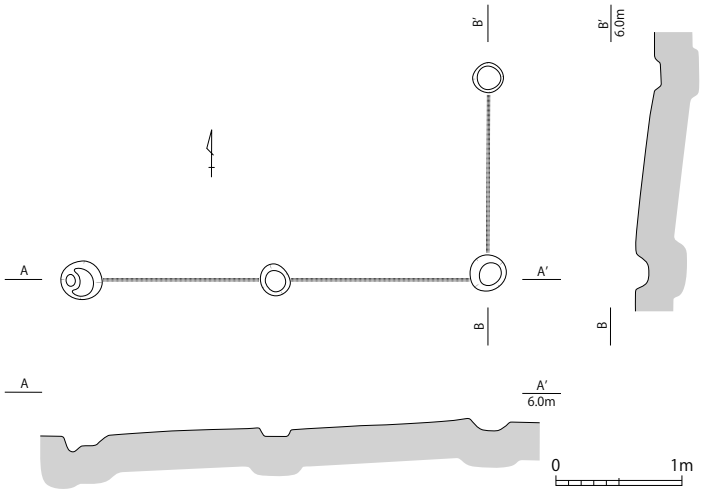
建物規模は南北 4.5 m、東西 3.5 mを測り、柱間距離は桁行 1.5 m、梁行 1.85 mとほぼ揃っている。長軸方向は北からやや西に振れた方向に位置している。柱穴の形態は円形及び楕円形を呈しており、規模は長軸径で 65cm ～ 90cm、短軸径で 45cm ～ 90cm と比較的大きく、深さは 12cm ～ 35cm を測る。覆土はすべて暗青灰色土で柱材が残存するものも認められた。柱材は遺存状態が悪く、本来の形状や大きさをとどめていないが、現状では径 20cm 前後、長さ 25cm までのものが確認さ



第 38 図　御崎谷遺跡　ＳＢ０２実測図（S=1/60）

れた。中央列の北から２番目の柱穴はＳＢ０２の東側柱列の中央に配置されている柱穴と重なっており、再利用された可能性もある。

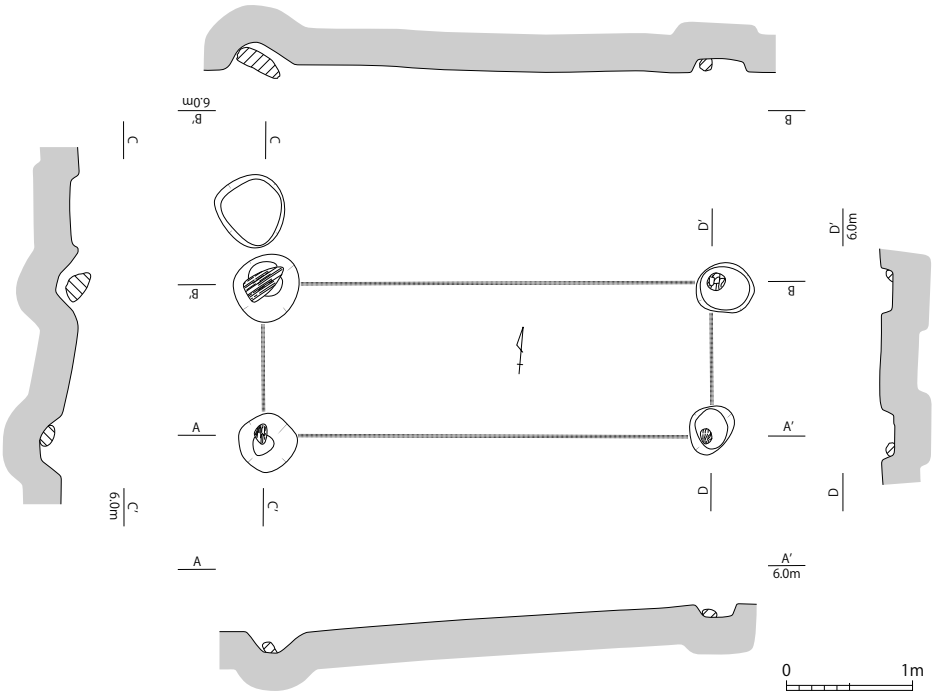
柱穴内から遺物が出土していないため時期については把握できないが、切り合い関係からＳＢ０２より後出するものと推測できる。



第 39 図　御崎谷遺跡　ＳＢ０３実測図（S=1/60）

ＳＢ０２（第 38 図）

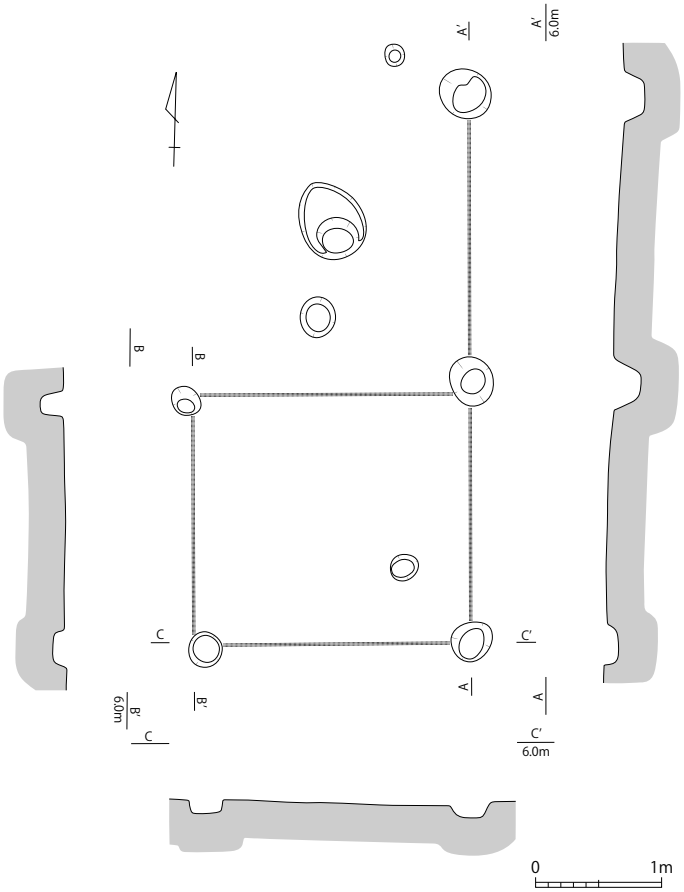
ＳＢ０２は前述したようにＳＢ０１と重複して検出された２間×２間の総柱建物である。



第 40 図　御崎谷遺跡　ＳＢ０４実測図（S=1/60）

建物規模は南北 3.8 m、東西 3.3 mを測り、北西隅の柱穴は検出できなかったが、柱間距離は桁行 1.9 m、梁行 1.65 mとほぼ揃っている。長軸方向は北から若干西に振れる程度で、ＳＢ０１より振り幅が少ない。柱穴の形態は円形及び楕円形を呈するものが多く、中には不整形なものも認められる。規模は長軸径 50cm ～ 80cm、短軸径 40cm ～ 55cm、深さ 10cm ～ 35cm を測る。覆土は暗青灰色土で柱材が残存するものも認められたが、ＳＢ０１同様に柱材の遺存状況は悪く、本来の形状や大きさをとどめていないと考えられ、現状では径 15cm ～ 20cm、長さ 10cm ～ 25cm のものである。

時期については不明であるが、切り合い関係からＳＢ０１より先行する建物と考えられる。



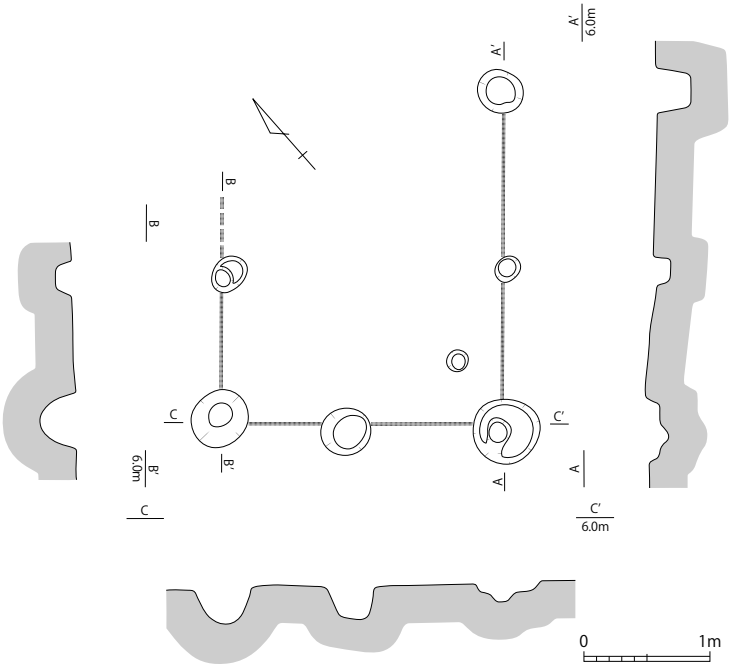
第 41 図　御崎谷遺跡　ＳＢ０５実測図（S=1/60）

ＳＢ０３（第 39 図）

ＳＢ０３はＳＢ０１・０２の約 70cm 西隣で検出した２間×１間以上の掘立柱建物跡であるが、北側の大半は削平を受けていたため柱穴を検出することはできなかった。

残存する建物規模は東西 3.3 m、南

北 1.5 mを測り、柱間距離は桁行 1.65 m、梁行 1.5 mを測る。長軸方向は東西方向を向いている。柱穴の形態はほぼ円形に近く、規模は径 25cm ～ 30cm、深さ 10cm 前後とＳＢ０１などと比べて小さい。また、柱材は残存していなかった。



第 42 図　御崎谷遺跡　ＳＢ０６実測図（S=1/60）

ＳＢ０４（第 40 図）

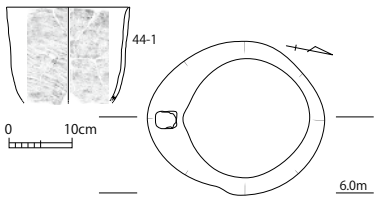
ＳＢ０１の東側約２mの位置で検出した現状では柱穴４穴で構成された１間×１間の東西方向に長い掘立柱建物跡である。中央部分は自然流路によって攪乱されていたため柱穴の有無については確認できなかったが、本来は柱穴が存在していたものと推測される。

建物規模は東西 3.5 m、南北 1.3 mを測り、長軸方向はほぼ東西方向を向いている。柱穴の形態は円形に近く、規模は径 30cm ～ 50cm、深さ 10cm ～ 20cm を測り、４穴とも柱材が遺存している。柱材はＳＢ０１・０２同様に遺存状況が悪く、現状では径 10cm ～ 20cm、長さ 10cm ～ 40cm のものである。

ＳＢ０５（第 41 図）

ＳＢ０５はＳＢ０３の南西約４mの位置で検出した２間×１間以上の総柱と考えられる建物であるが、北西側の柱穴は確認できなかった。

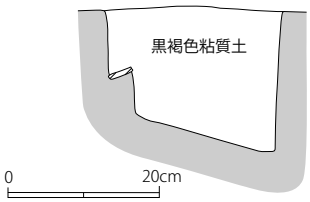
残存する建物規模は南北 4.4 m、東西 2.1 mを測り、桁行の柱間距離は 2.2 mと揃っている。長軸方向はほぼ南北方向を向いている。柱穴の形態はほぼ円形に近く、規模は径 24cm ～ 40cm、深さ 10cm ～ 25cm を測り、内部に柱材は残存していない。



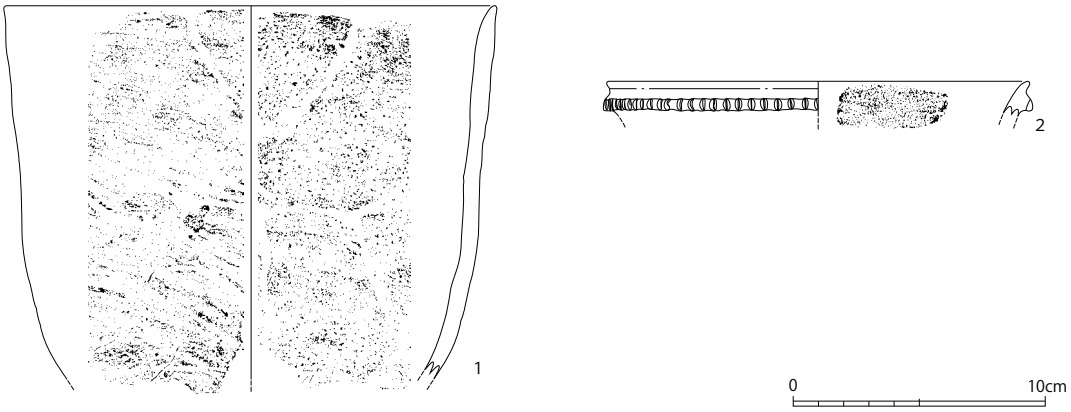
ＳＢ０６（第 42 図）

ＳＢ０６はＳＢ０５の西隣で重複する状況で検出した２間×１間以上の掘立柱建物跡であるが、北西隅の柱穴は確認できなかった。

建物規模は南北 2.7 m、東西 2.2 mを測り、柱間距離は桁行で北側から 1.4 m、1.3 mで北側が若干長く、梁行は東側から 1.2 m、１mと東側が長くなっている。長軸方向は南北方向から約 45°西に振れている。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、規模は径 20cm ～ 55cm、深さ 15cm ～ 25cm を測り、内部に柱材



第 43 図　御崎谷遺跡
P108 遺物出土状況
（S=1/10　遺物 S=1/12）



第 44 図　御崎谷遺跡　Ｐ108･280 出土遺物実測図（Ｐ108：１、Ｐ280：２）（S=1/3）

は残存していないが、径 15cm 前後の柱痕跡の認められるものも存在している。

２．ピット群

調査区南側中央から西寄りで多数のピットを検出した。本来ピット群も建物の柱穴であったと考えられるが、現状では建物と断定できるものはなかった。これらピット群の中には遺物が出土したものも認められ、ここでは縄文土器が出土したピットを掲載しておく。

Ｐ１０８（第 43 図）

Ｐ１０８はＳＢ０５の南約９ｍに位置するピットである。形態はほぼ円形に近いが、長軸 23cm、短軸 20cm、深さ 19cm を測る。覆土は黒褐色粘質土で、上面から約８cm 下方の地点で縄文土器片が数点出土した。この土器片は同一個体のもので接合可能であった。

第 44 図１がＰ１０８から出土した縄文土器で、胴部下半を欠損しているが粗製深鉢である。口縁端部はやや鋭いつくりで、内外面ともに条痕文が施されている。縄文時代晩期に属するものと考えられる。

Ｐ２８０

Ｐ２８０はＳＢ０５の東３ｍに位置するピットである。詳細な図示は行っていないが、形態は円形を呈し、径 20cm、深さ 12cm を測る。内部から縄文土器片１点が出土した。

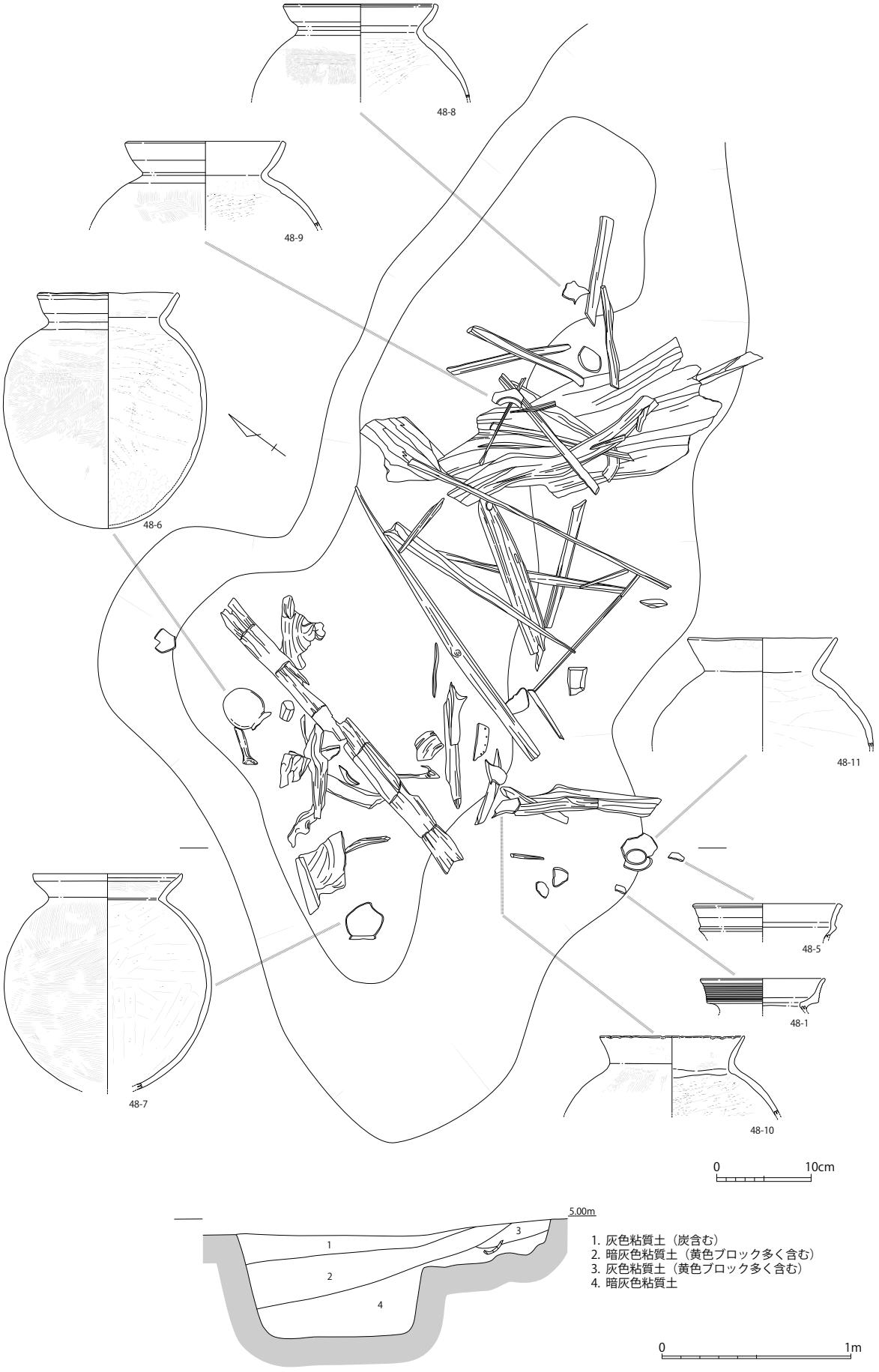
第 44 図２が出土した縄文土器である。刻み目突帯を有する鉢の口縁部で、縄文時代晩期に属するものと考えられる。

３．土坑状遺構（第 45 図）

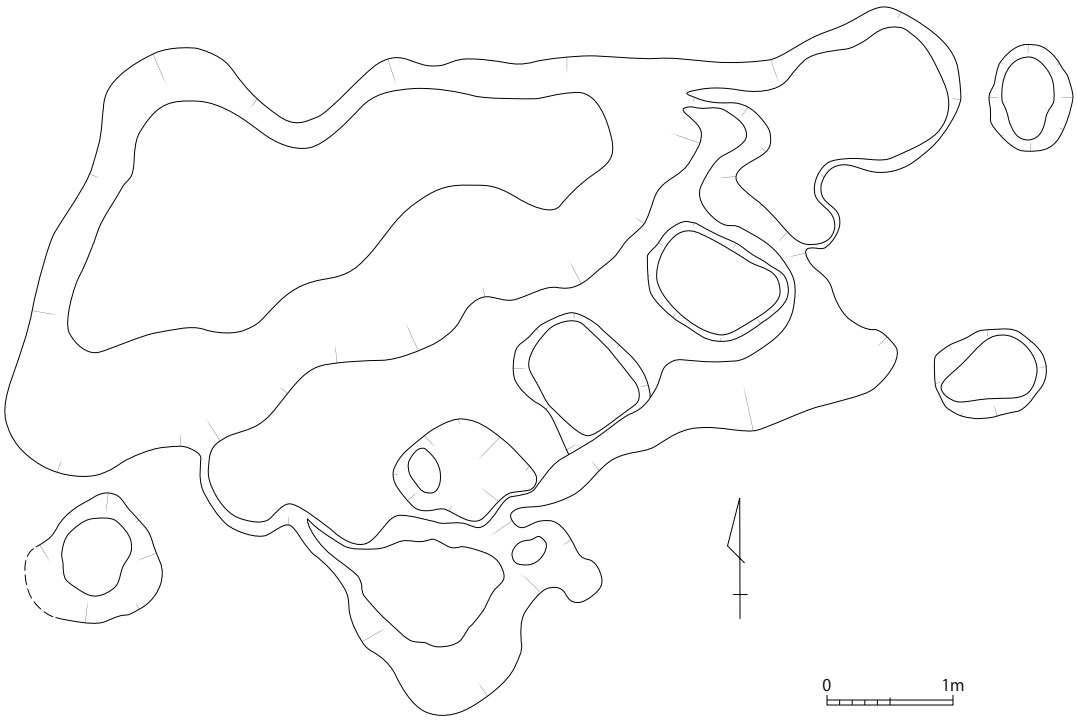
土坑状遺構は調査区の西寄りの標高約５ｍの地点で、包含層及び土器だまりの遺物取り上げ後の地山面で検出した。やや大規模な土坑状遺構であるＳＸ０１と中規模の土坑状遺構であるＳＫ０２～０７の６基を確認した。調査当初は平面観察の結果ではＳＫ０４～０６の３基がＳＸ０１の上面から掘り込まれた状況に見えたため、これらの土坑はＳＸ０１埋没後に営まれていた遺構と考えて調査を進めていた。ところが、ＳＸ０１とこれら土坑から出土した遺物が弥生時代後期末～古墳時代中期頃と同時期であったことから慎重に調査を進めていった結果、ＳＫ０４～０６は浅いテラス

第 45 図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１・ＳＫ群実測図（S=1/40）

状に加工された平坦面に作られ、このテラスの北側に深い落ち込みであるＳＸ０１が作られていることが判明した。この状況から判断するとＳＸ０１とＳＫ０４～０６は同時期に一体として機能していた可能性が高いと考えられる。また、周辺の３基の土坑にもＳＸ０１と同時期の遺物が出土しているものも認められるため、その配置は不規則で性格も不明であるが、ＳＸ０１とこれら土坑群



第 46 図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１ 実測図（S=1/30　遺物 S=1/6）



第 47 図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１及びＳＫ群完掘状況（S=1/60）

は同時期に機能していたものと考えておきたい。

ＳＸ０１（第 46 図、第 47 図）

調査区西壁側で検出したやや大規模な土坑状遺構であるが、ここではＳＫ０４～０６の存在するテラス状平坦面の範囲も含めて説明することとする。

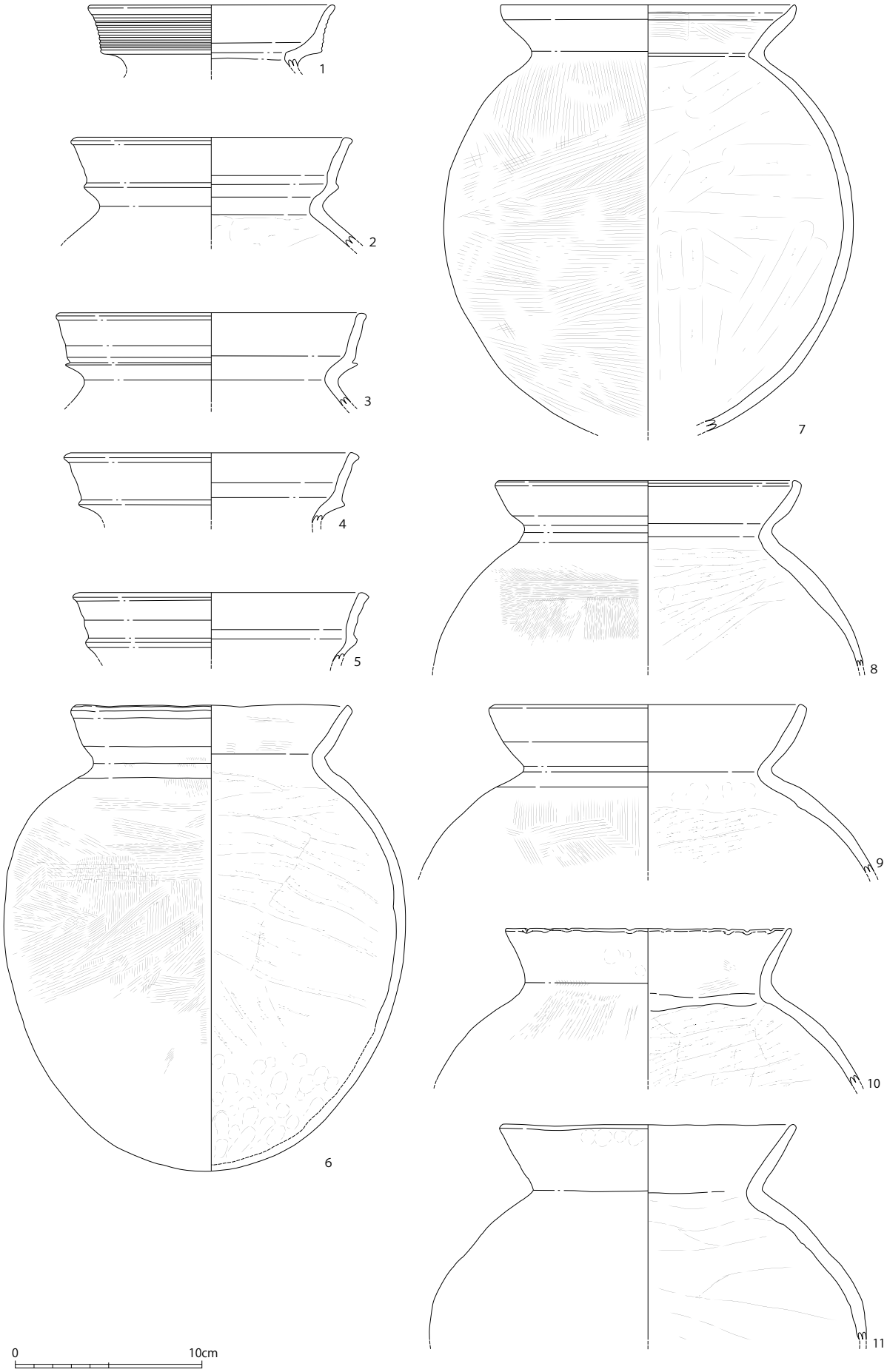
平面形は不整形な楕円形状を呈し、規模は長軸８m、短軸 5.8 mを測る。断面形は２段状を呈し、深さは南側が約 20cm、北側が 55cm と深くなっている。ＳＫ０４～０６の存在する南側が浅く幅広いテラス状になっており、長軸 6.6 m、短軸 1.4 mを測り、深い落ち込みになっている北側は底面規模で長軸 4.6 m、短軸 1.9 mを測る。

覆土は暗灰色粘質土、黄色ブロックを含む暗灰色粘質土、灰色粘質土の順に堆積しており、暗灰色粘質土を中心に多くの遺物が出土している。底面付近は湧水が多く、粘質土であることから調査は困難を極めたものの、遺物には弥生時代終末～古墳時代中期の土器の他に木製品と流木等が出土した。木製品は遺存状態の悪い資料が多く、土坑西側で梯子状木製品も出土したが、かなり脆くなっていたため実測不可能であり図示もできなかった。また、土坑東側では長さ 1.5 m、幅 60cm の薄い樹木の皮のようなものも認められたが、自然のものか加工されたものかの判断も付かず、取り上げることも不可能であった。

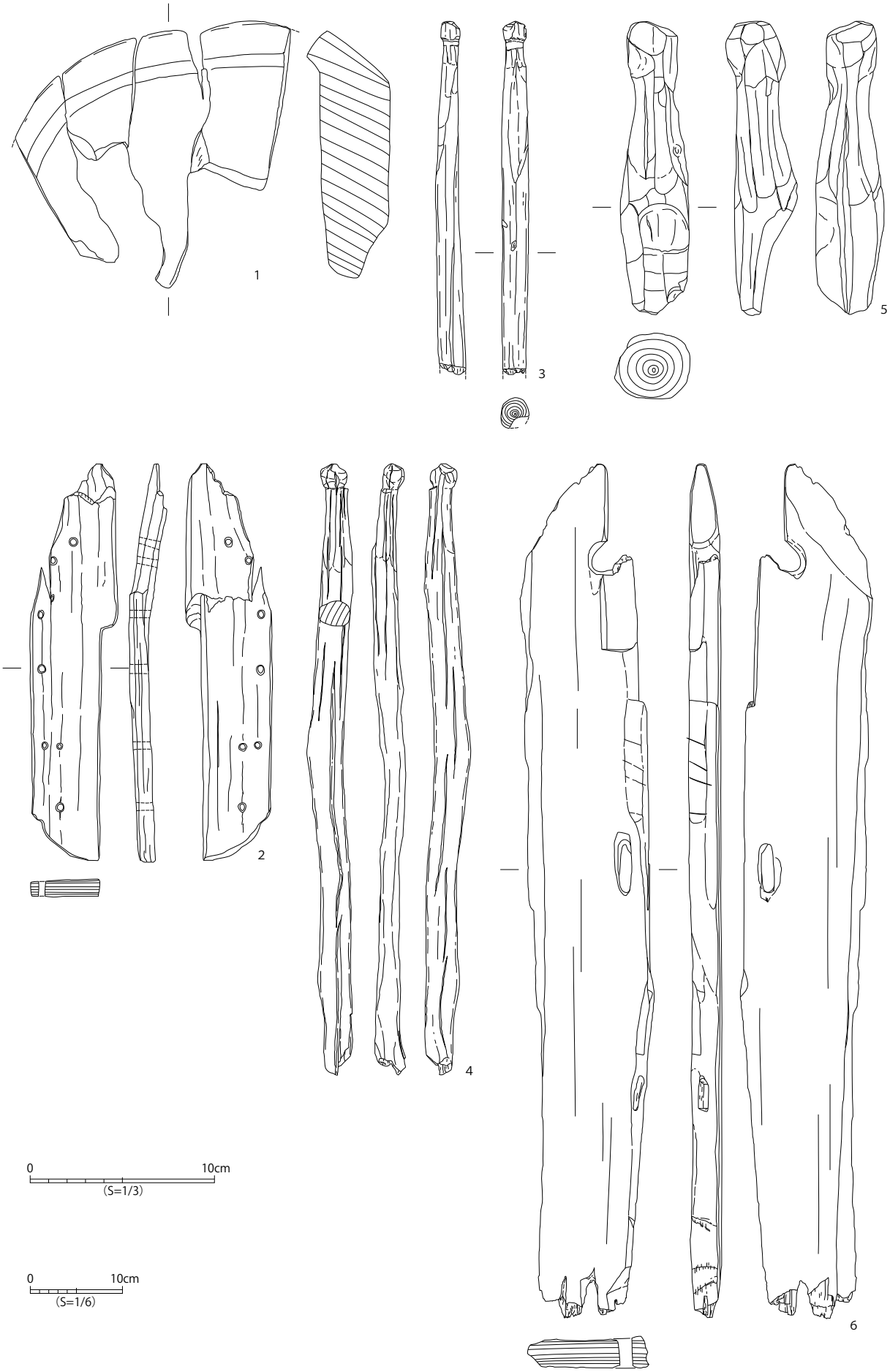
ＳＸ０１は弥生時代後期末頃に形成されたものと考えられるが、性格については明らかにすることができなかった。

ＳＸ０１出土遺物（第 48 ～ 49 図）

第 48 図は弥生土器と土師器である。１～５は複合口縁の甕口縁部で、１は外面に擬凹線を施す弥生時代終末頃のものである。２～５は古墳時代前期のもので口縁端部が肥厚し、複合口縁部の稜は横方向に鋭く突出するタイプと若干鈍いタイプも認められる。６～ 11 は単純口縁の甕である。



第 48 図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１出土遺物実測図（S=1/3）



第 49 図　御崎谷遺跡　ＳＸ０１出土木製品実測図（1・2・5：S=1/3、3・4・6：S=1/6）

６は外傾してのびる口縁部に倒卵形の体部を有する。７は口縁端部が内湾するもので体部は球形に近い。８・９は内湾気味にのびる口縁部で、８の端部は内側に肥厚している。10・11 は外傾してのびる口縁部で、10 の端部は所々に凹みが認められる。

第 49 図は木製品である。１は鉢で底面が厚い作りとなっている。２は曲物の底板で大半を欠損しているが楕円形を呈するものと考えられる。側面付近に５㎜程度の円孔が７箇所認められる。３～５は棒状木製品と考えられ端部は有頭状になっている。６は何かの部材と考えられる。これら木製品はＡＭＳ年代測定の結果、弥生時代後期から古墳時代前期頃の測定値を示していることから、ＳＸ０１が機能している時期に埋没したことが窺える。

ＳＫ０２（第 50 図）

ＳＸ０１の東寄りで検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 85cm、短軸 60cm、深さ 20cm を測る。覆土は灰色粘質土で内部からは木製品１点が出土したが、脆弱であったため実測不可能であった。

明確な時期や性格については把握することができなかった。

ＳＫ０３（第 50 図）

ＳＸ０１の東寄り、ＳＫ０２の２m南側で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 90cm、短軸 70cm、深さ 25cm を測る。覆土は灰色粘質土で内部から古墳時代前期～中期の土師器が出土していることから、ＳＸ０１と同時期頃と考えられる。

ＳＫ０３出土遺物（第 51 図）

１と２の２点がＳＫ０３から出土した。１は頸部に突帯が廻る複合口縁の大形壺で、口縁部は外反気味にのび、端部は外に向かって平坦面を作り出している。全体的に分厚い作りである。２は単純口縁甕で、口縁部は内湾気味にのび、端部は内側に肥厚している。

ＳＫ０４（第 50 図）

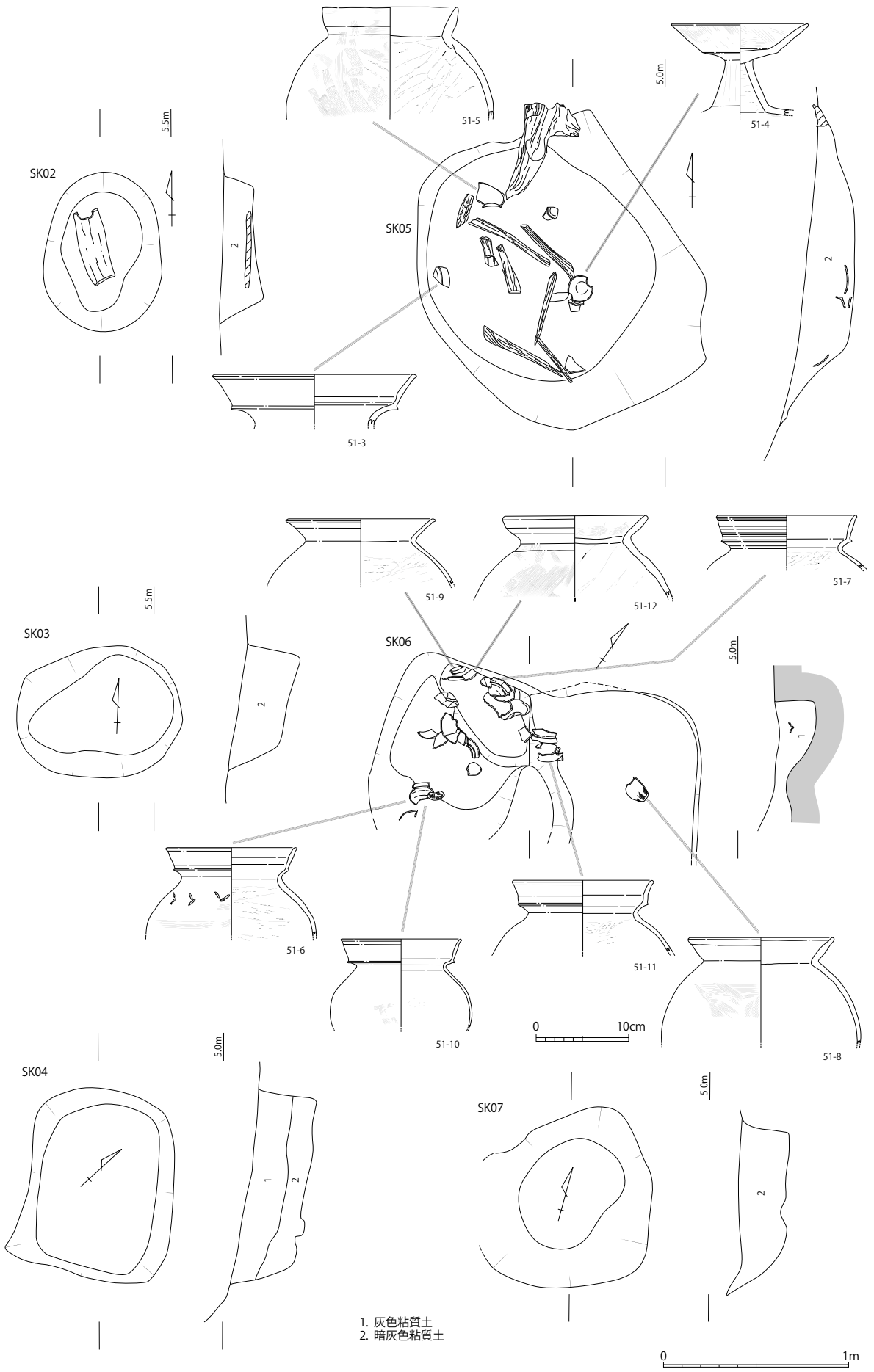
ＳＫ０４はＳＸ０１の南側テラス中央で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形状を呈し、規模は長軸１m、短軸 75cm、深さ 30cm を測る。覆土は２層あり、上層が灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土で内部から遺物は出土していない。

ＳＫ０５（第 50 図）

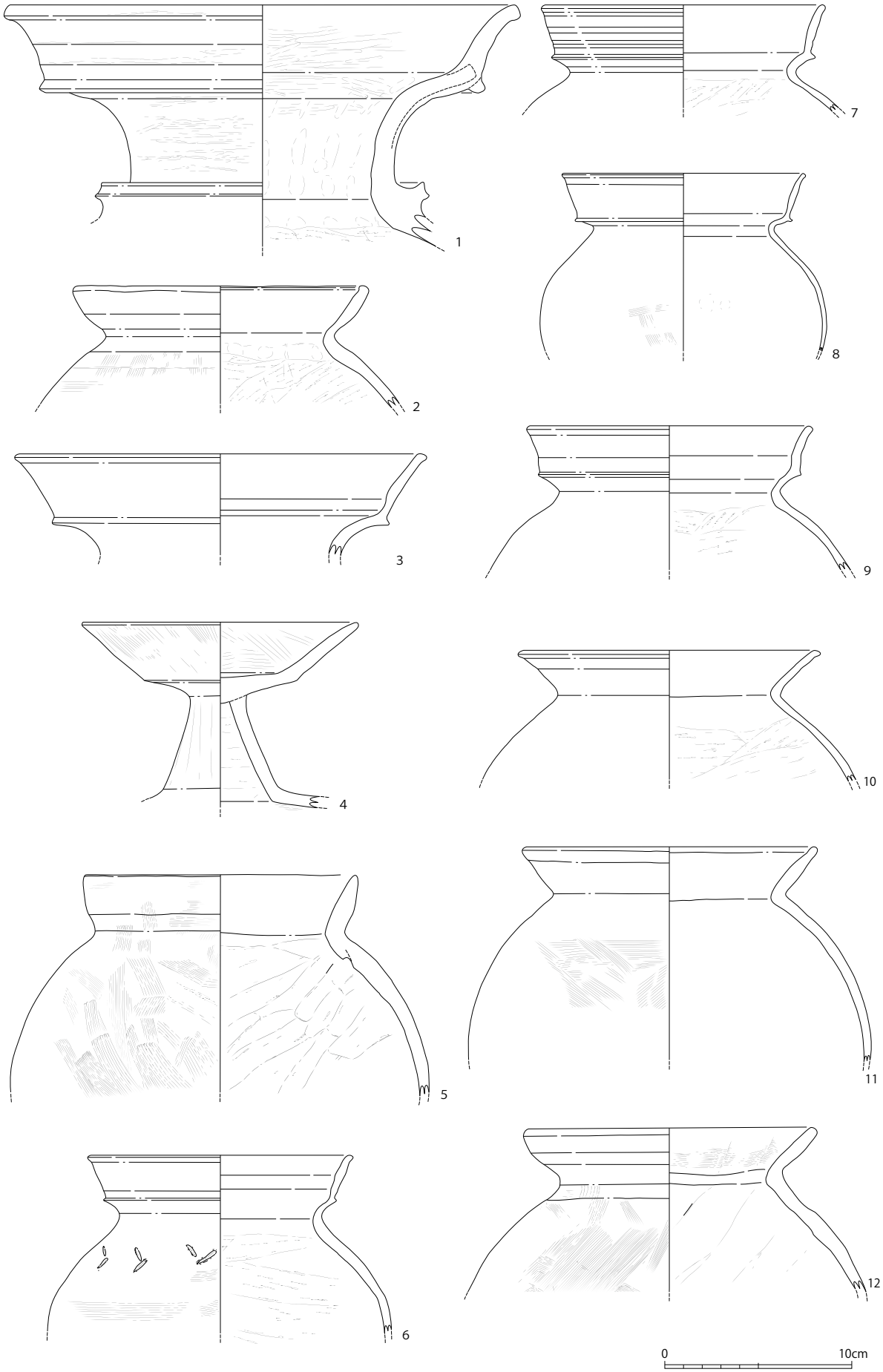
ＳＫ０５はＳＸ０１の南側テラスの東寄り、ＳＫ０４の東隣で検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸 1.7 m、短軸 1.4 m、深さ 30cm を測る。覆土は暗灰色粘質土で底面からは古墳時代前期～中期の土師器と流木が出土しているが、性格は不明である。

ＳＫ０５出土遺物（第 51 図）

３～５の３点がＳＫ０５出土のものである。３は複合口縁壺の口縁部で、外傾する口縁に外方向に肥厚する端部をもつ。４は底部との境に段を有する高坏で、口縁部は外傾してのびる。５は単純口縁甕であるが、複合口縁の名残を残すかのように口縁下方がやや厚くなっている。



第 50 図　御崎谷遺跡　ＳＫ０２～０７実測図（S=1/30　遺物 S=1/6)



第 51 図　御崎谷遺跡　ＳＫ０３・０５・０６出土遺物実測図（S=1/3）
（ＳＫ０３：１・２、ＳＫ０５：３～５、ＳＫ０６：６～12）

ＳＫ０６（第 50 図）

ＳＫ０６はＳＸ０１の南側テラスの西寄り、ＳＫ０４の西隣で検出した土坑である。平面形は判然としないが、方形状を呈していたと考えられ、底面は現状では３段状になっている。規模は長軸 1.8 m、短軸 90cm 以上、深さ 20cm を測る。覆土は灰色粘質土で底面西寄りから古墳時代前期～中期の土師器が比較的多く出土しているが、性格については把握できなかった。

ＳＫ０６出土遺物（第 51 図）

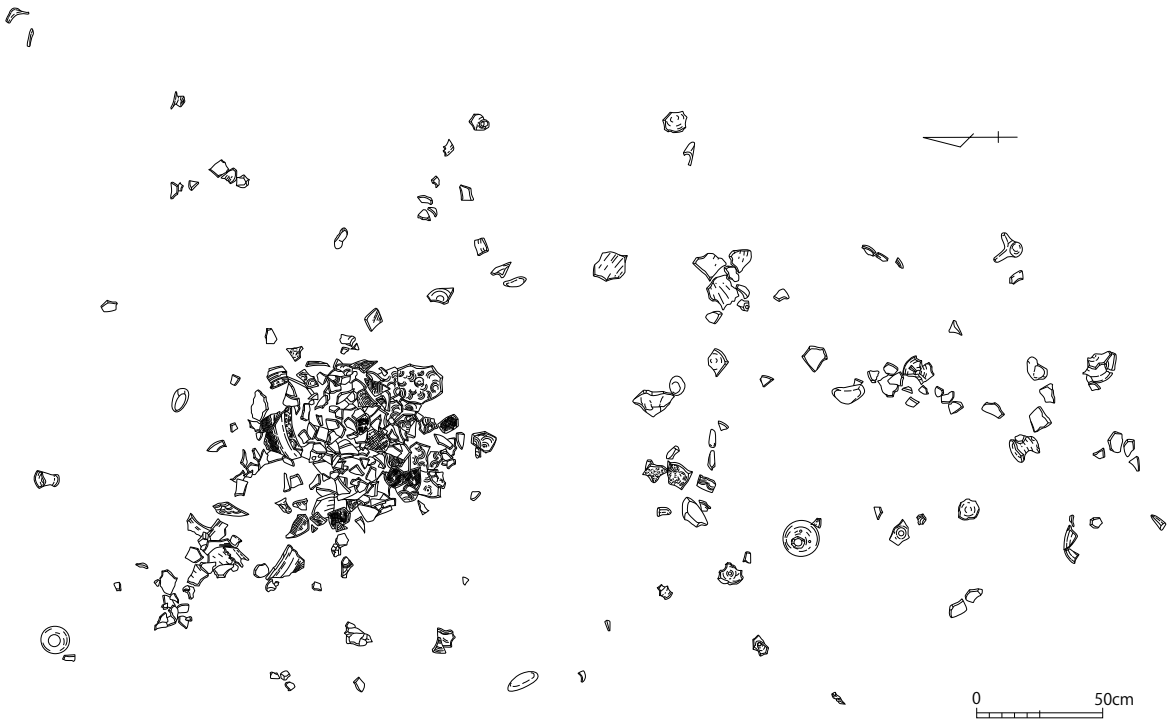
６～ 12 の７点がＳＫ０６出土のものである。６～９は複合口縁甕で、10 ～ 12 は単純口縁甕である。６は口縁端部が外方向に肥厚し、複合口縁部の稜は横方向に突出している。肩部に刺突文を施す。７の口縁端部はやや丸くおさめ、複合口縁部の稜は横方向に突出する。８は口縁端部がやや小さい平坦面を作り出し、複合口縁部の稜は横方向に突出する。９は口縁端部が平坦に近く、口縁内面に小さな段をもつ。複合口縁部の稜は小さく突出する。10 は「く」の字状に大きく外傾してのびる口縁部で端部は外方向に肥厚する。11・12 は外傾してのびる口縁部で、11 の口縁端部内面は若干くぼみをもつ。

ＳＫ０７（第 50 図）

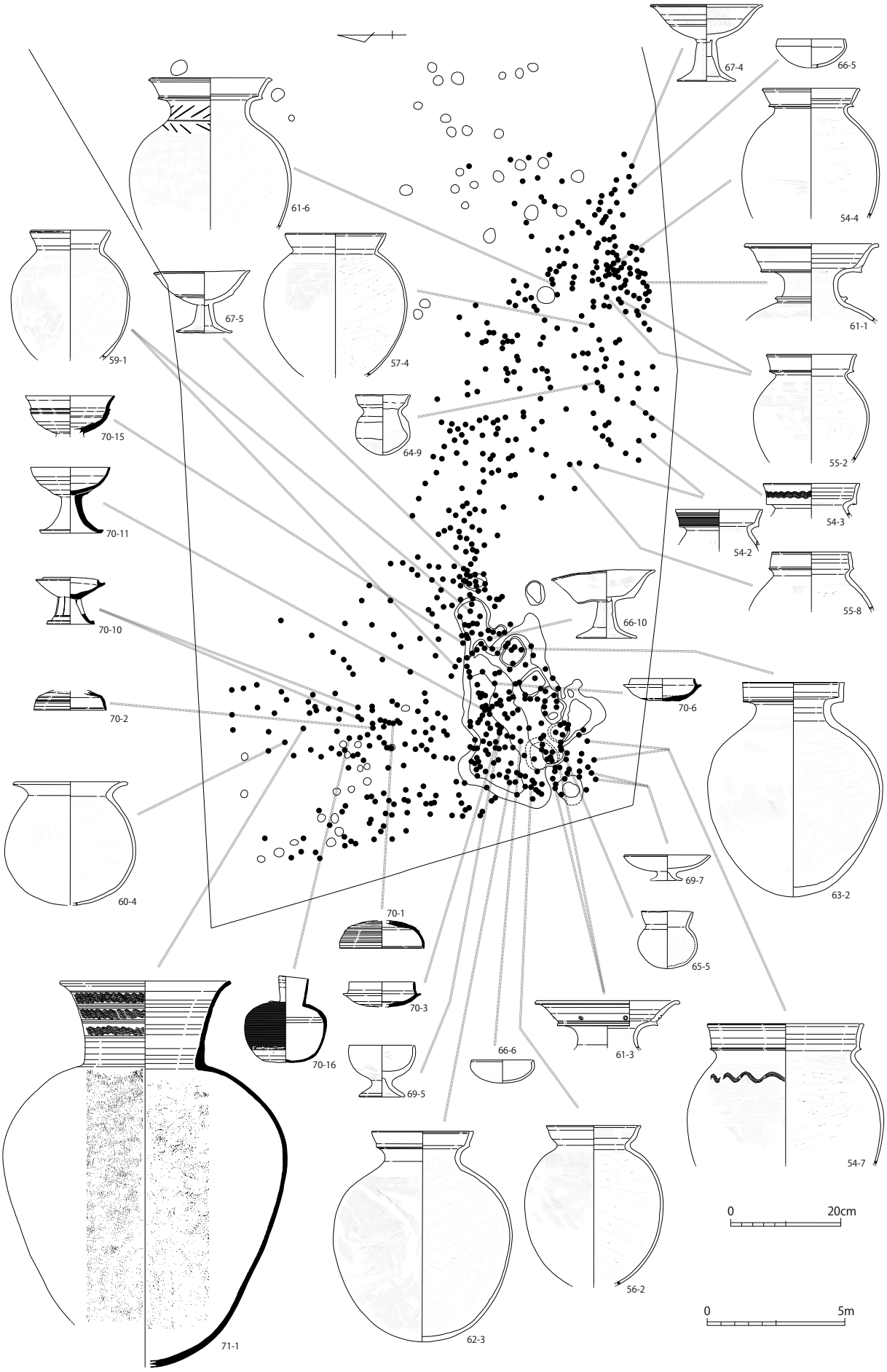
ＳＫ０７はＳＸ０１の西隣で検出した土坑である。平面形は円形状を呈し、規模は径約１m、深さ 30cm を測る。覆土は暗灰色粘質土で内部から遺物は出土していない。

４．土器だまり（第 52 図、第 53 図）

土器だまりはＤ１～Ｄ３、Ｅ１～Ｅ３グリッドで検出した土器群である。Ｄ３グリッドからＥ１グリッドに向かって流れるような状況で確認でき、その規模は 28 m× 13 mの範囲で長く広がっ



第 52 図　御崎谷遺跡　土器だまり甕出土状況（S=1/30）



第 53 図　御崎谷遺跡　土器だまり遺物出土状況（S=1/200　遺物 S=1/10）

ている。土器は弥生時代終末から古墳時代後期のものが混在して出土しているが、その大半は土師器が占めている。これらの土器の中にはその場で潰れたような状態で出土したものも多く認められたため、完形近くに復元できた資料もある。第 52 図は大形の須恵器甕の出土状況図でほぼ完形に復元できた資料であるが、加工段３の覆土から出土した甕片と接合できたことから、この須恵器甕は北側斜面から流れ込んだものと考えられる。しかし、土器だまりのすべてが北側斜面からの流れ込みによって形成されたとは考えがたい。圧倒的多数を占める土師器の器種構成を見ると、古墳時代前期～中期初頭頃の壺甕類、小形丸底壺、高坏の組成比率が非常に高い点が注目され、特に小形丸底壺と高坏は多数出土しており、本書に図示したものはほんの一部である。このような様相は通常の廃棄行為とは考えにくく、何らかの祭祀行為が行われた可能性を示しているようにも考えられるが、土器だまりの下層にはＳＸ０１等の土坑が存在するだけで河道や他の遺構は認められない。このように祭祀の対象が不明瞭な状況で断定はできないが、当該期において集中的もしくは数度にわたる投棄行為が行われた結果によって形成された土器だまりと考えられる。その後、北側斜面から須恵器等が流れ込みもしくは廃棄などによって混在したものと想定される。

土器だまり出土遺物（第 54 ～ 73 図）

土器だまり出土遺物は古墳時代前期から中期に属する土師器が大半を占め、この他に須恵器や土製品、石製品などが出土している。以下、各種別・器種ごとにその概要を述べる。

（1）弥生土器・土師器（第 54 ～ 60 図）

甕（第 54 ～ 60 図）

第 54 図１～６は弥生時代後期の複合口縁甕である。１～３はやや直立気味にのびる口縁部で端部は丸みをもち、口縁外面に１・２は擬凹線、３は波状文を施す。４～６は外傾してのびる口縁部で端部はやや平らに近い。４は胴部下半を欠損するが倒卵形を呈するものと思われる。６は肩部に３条の平行沈線を施す。

第 54 図７～第 56 図１は土師器の複合口縁甕である。第 54 図７は大形の甕で口縁部は外反気味に直立してのび、端部は平らに近い。肩部に波状文を施す。第 55 図１～７は外傾してのびる口縁部で端部は丸みをもつ。６・７の複合口縁部の稜はやや鈍くなっている。８～第 56 図１は退化傾向の複合口縁を有するタイプで、８は内傾してのびる口縁部で端部は少し外方に肥厚する。９は８より直立気味にのびる口縁部で端部は丸みをもつ。第 56 図１は外反気味に直立してのびる口縁部で端部は丸みをもつ。

第 56 図２～第 60 図４は単純口縁甕である。第 56 図２～５は退化した複合口縁もしくはその名残を残すタイプで、２・５は口縁下半が若干屈曲する。３・４は複合口縁の退化したものである。６～８は内湾してのびる口縁部で、６の端部は内側上方に少し肥厚する。９は内湾気味にのびる口縁部で端部に浅めの沈線を施す。第 57 図１～３は大きく外傾してのびる口縁部を有するタイプである。第 57 図４～第 59 図４は外傾してのびる口縁部を有するタイプで、第 57 図５は口縁端部が内側に肥厚する。第 58 図４～第 59 図１は胴部が長胴を呈している。第 59 図５は直立してのびた後外反する口縁部を有し、胴部は長胴を呈する。６は外反気味に直立してのびる口縁部を有する。７は口縁外面にヘラ状工具による縦方向のナデを施している。第 60 図１はやや大形の甕で口縁部は「く」の字状に外傾してのびる。胴部中央に最大径をもつ。２は肩部のよく張るタイプである。３は直立してのびた後外反する口縁部を有する。４は大きく外反して開く口縁部を有し、胴部

下半に最大径をもつ。

第 60 図５・６は注口土器の注口部分である。

壺（第 61 ～ 65 図）

第 61 図１～第 64 図１は複合口縁壺である。第 61 図１・２は頸部に突帯が廻るタイプのものである。１の口縁部は端部付近で大きく外方に屈曲するもので、２は口縁部を欠損している。３は１同様の口縁部を有するタイプのもので、外面に竹管文を施す。４・５は大きく外反してのびる口縁部を有する。６は外傾してのびる口縁部で端部に浅い１条の沈線が廻る。頸部外面に羽状文を施している。第 62 図１～第 64 図１は退化傾向の複合口縁を有するタイプで、第 62 図１の口縁端部は平らに近く、２は内面に厚く肥厚し、３は内側に肥厚する。３の胴部はやや球形に近い。第 63 図１は口縁端部は平らに近く、肩部がよく張る体部である。２は口縁部が直立してのびるもので端部は平らになっている。体部は楕円形に近い。第 64 図１は退化傾向がさらに進んだもので、口縁端部は内側に肥厚する。

第 64 図２～第 65 図 25 は直口壺及び小形丸底壺である。第 64 図２～４は直口壺で口縁部は外傾してのび、胴部は球形に近い。５は肩部がよく張る小形壺である。６からは小形丸底壺で退化した複合口縁を残すものも若干認められるが､ほとんどが単純口縁である。口縁部は外反気味に「ハ」の字状に開き、体部は胴部中央付近に最大径があるやや扁平な形状を呈するタイプが多い。第 64 図９～ 11 は退化した複合口縁を有するが、９の胴部上半は器壁が厚く作られている。11 は口縁部が内傾して短くのびるものである。12 は口縁部が短く直立気味にのび、肩部に最大径をもつ。全体的に雑な作りである。

第 65 図 26 は甑と考えられ胴部に円孔が認められる。27 は手捏土器で、内外面に指頭圧痕が認められる。

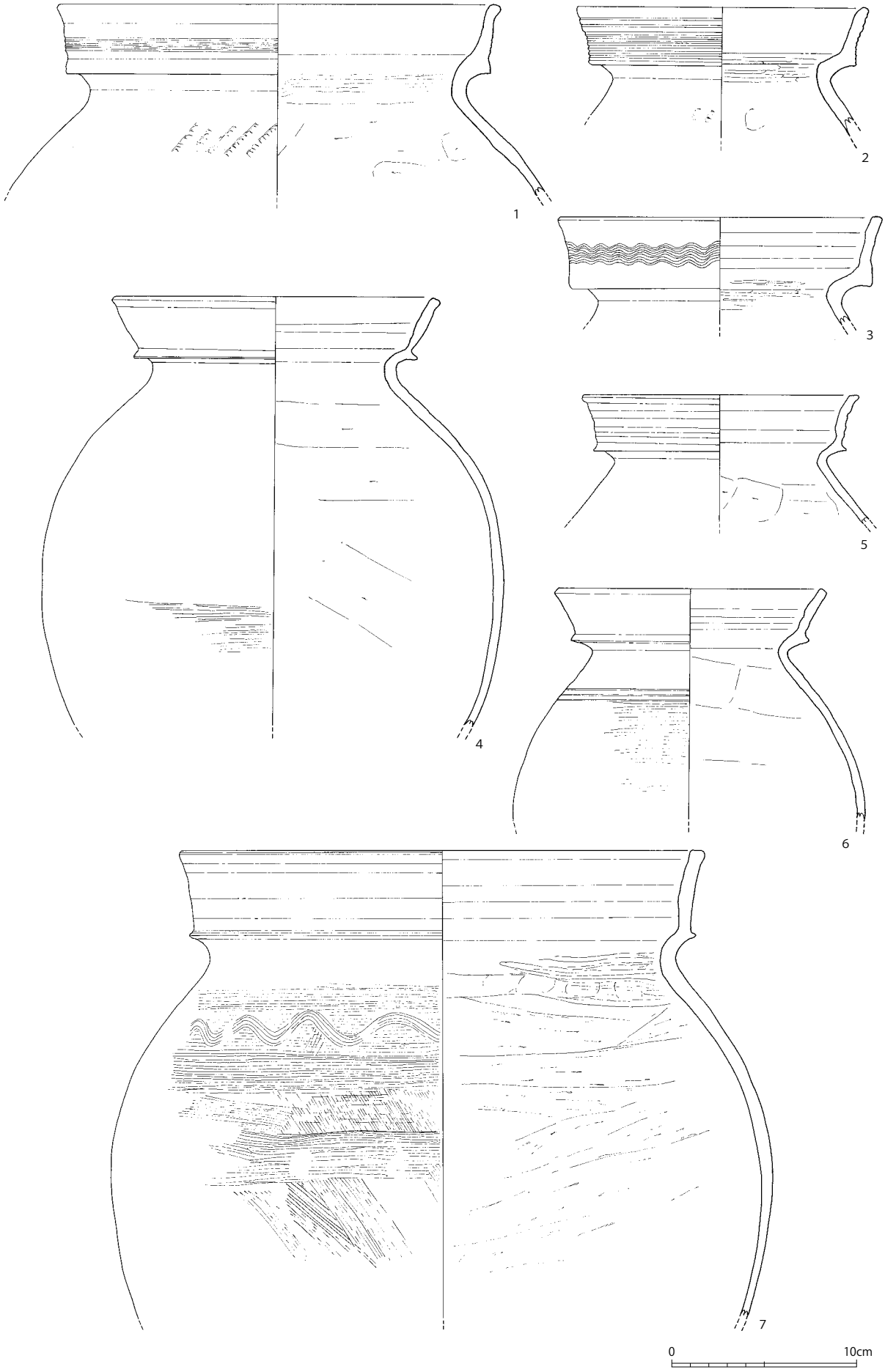
甑・碗・坏（第 66 図１～９）

第 66 図１は甑で、口縁部内面に段を有する。２は底部がやや深めな碗で、やや雑な作りである。３～９は坏もしくは碗で口縁部が外方にのびるタイプ（３、４、８、９）と内湾するタイプ（５～７）がある。底部は丸みをおびるものが多いが、８は平らに近い。また、８以外は内外共に赤彩が施されている。

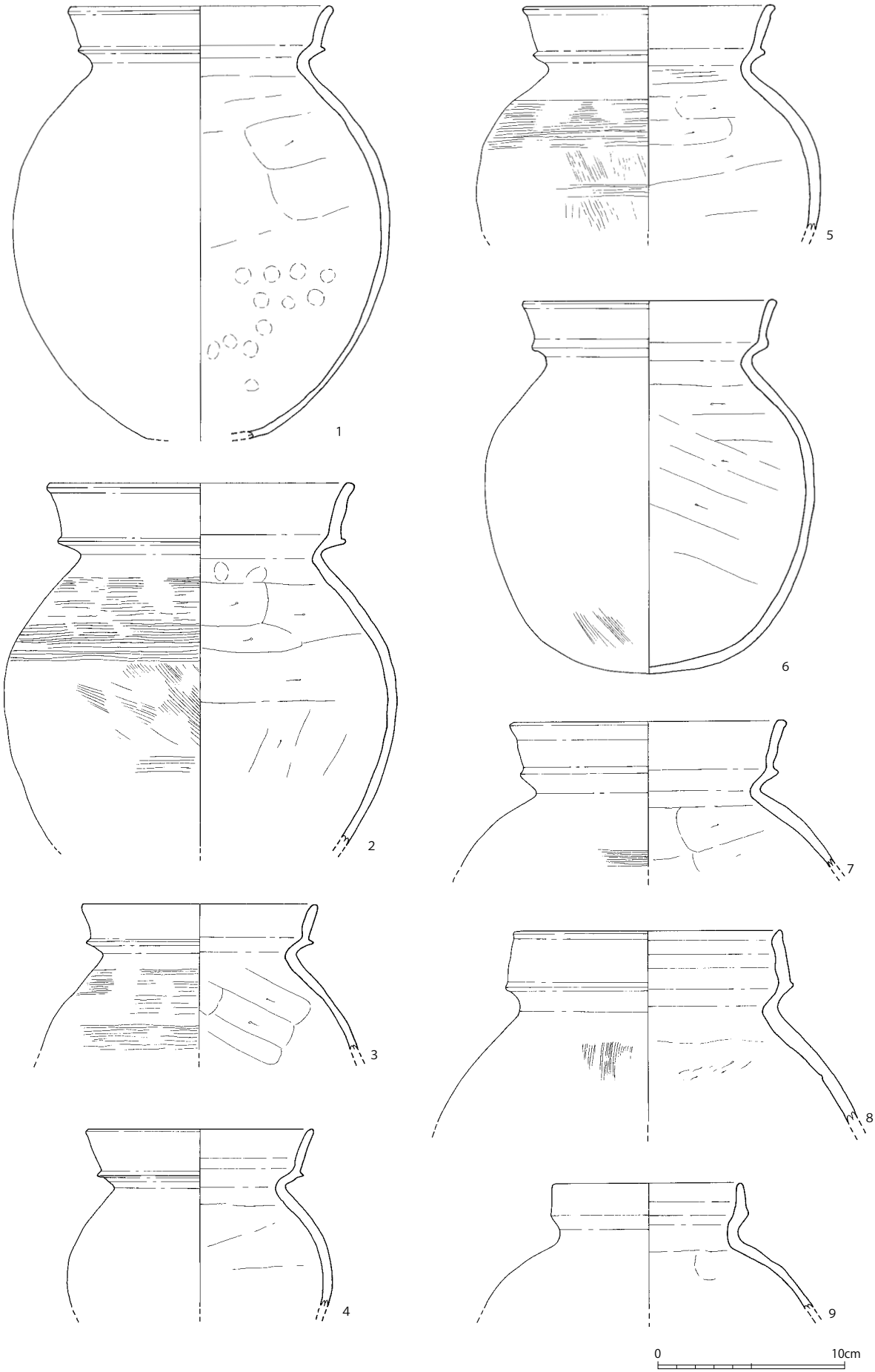
高坏（第 66 図 10 ～ 69 図３）

高坏は大きく分けて坏部に段をもつタイプと段をもたないタイプがある。第 66 図 10 ～第 67 図 11 は有段およびその痕跡を残すものである。第 66 図 10・12 はやや変形しているが、平らに近い坏底部から外反気味に開く口縁部をもち、脚部は大きく横方向に開く。12 は内外面に赤彩を施している。11・13 ～第 67 図２は坏底部が平らでなく、やや上方に立ち上がるタイプである。口縁部は外反気味に開き、脚部は大きく横方向に開く。１は内外面に赤彩を施している。３は坏底部が平らに近く、口縁部はやや内湾気味に開く。４・８～ 10 は底部との境に若干段を残すもので、口縁部は外反して開く。５・６は底部との境の段がやや小さく、外反して開く口縁部をもつ。６は内外に赤彩が施される。７・10 は小さな段を有し、外方にのびる口縁部をもつ。７は内外面に赤彩が施されている。

第 68 図は無段タイプと脚部のみのものである。１～５は口縁部が外反してのびるものであるが、５の坏部はやや深い作りとなっている。６は外方にのびる口縁部をもち、脚端部が大きく開かない

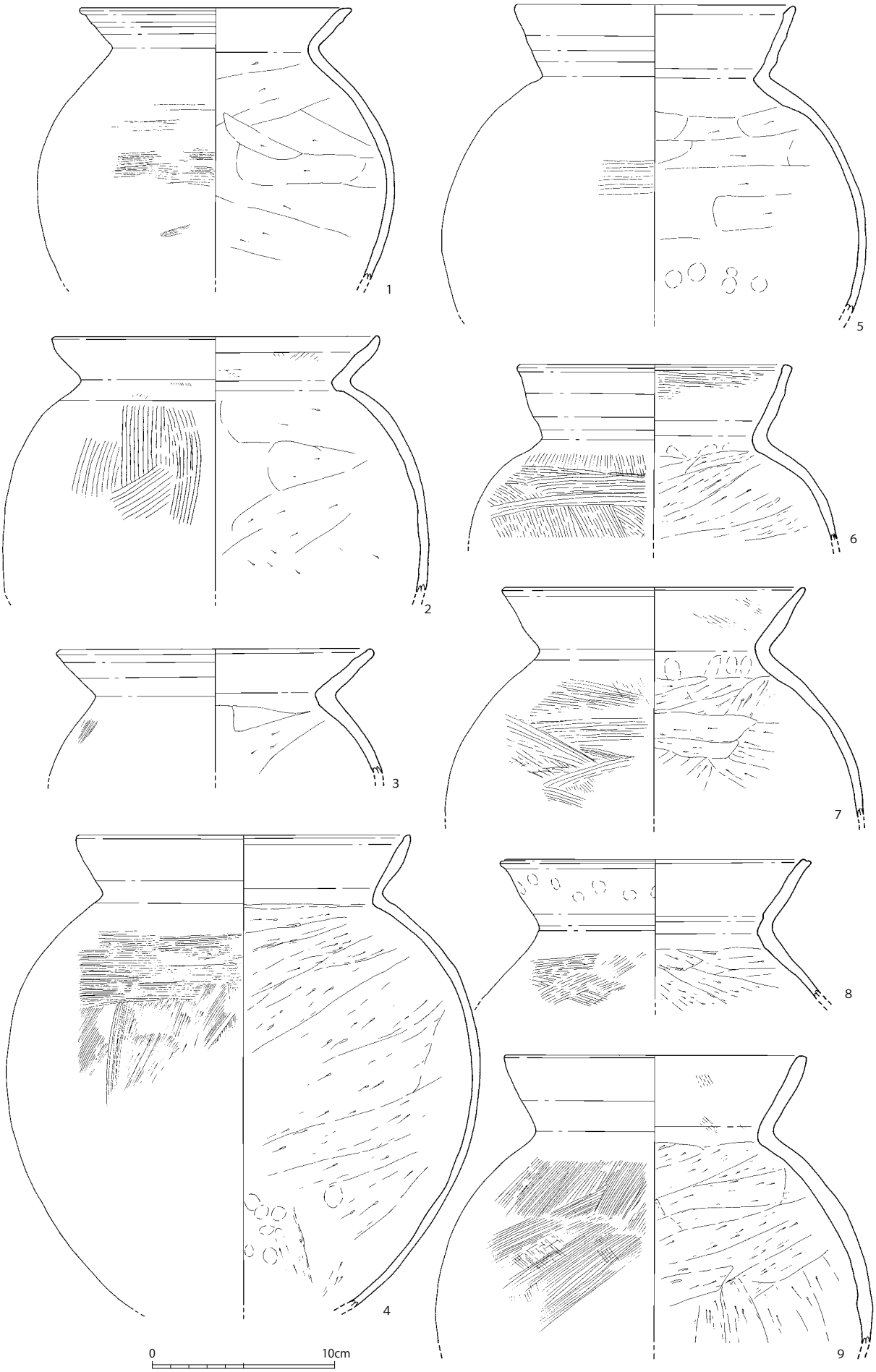


第 54 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 1 （S=1/3）



第 55 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図２（S=1/3）

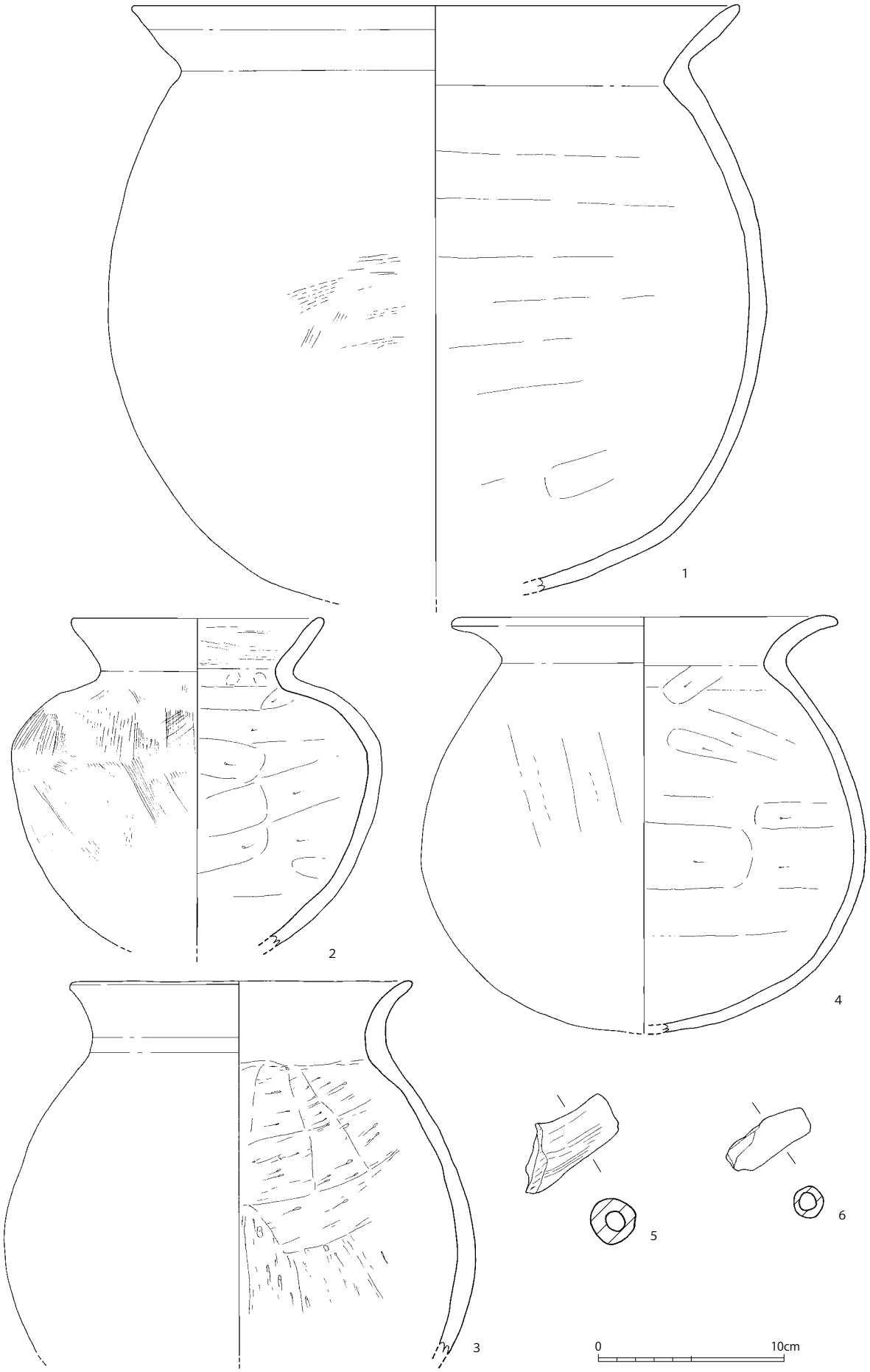
第 56 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図３（S=1/3）



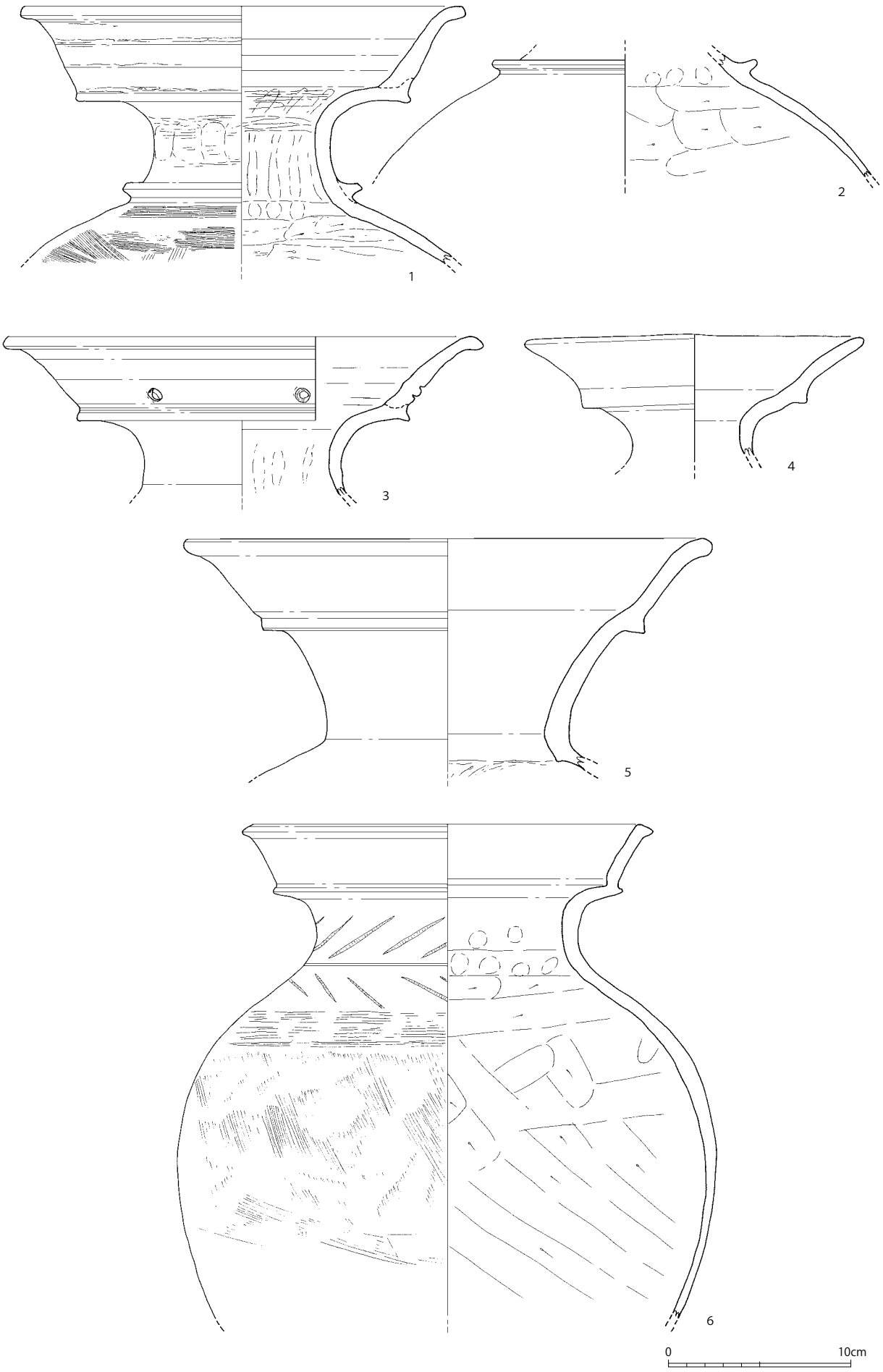
第 57 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図４（S=1/3）

第 58 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 5（S=1/3）

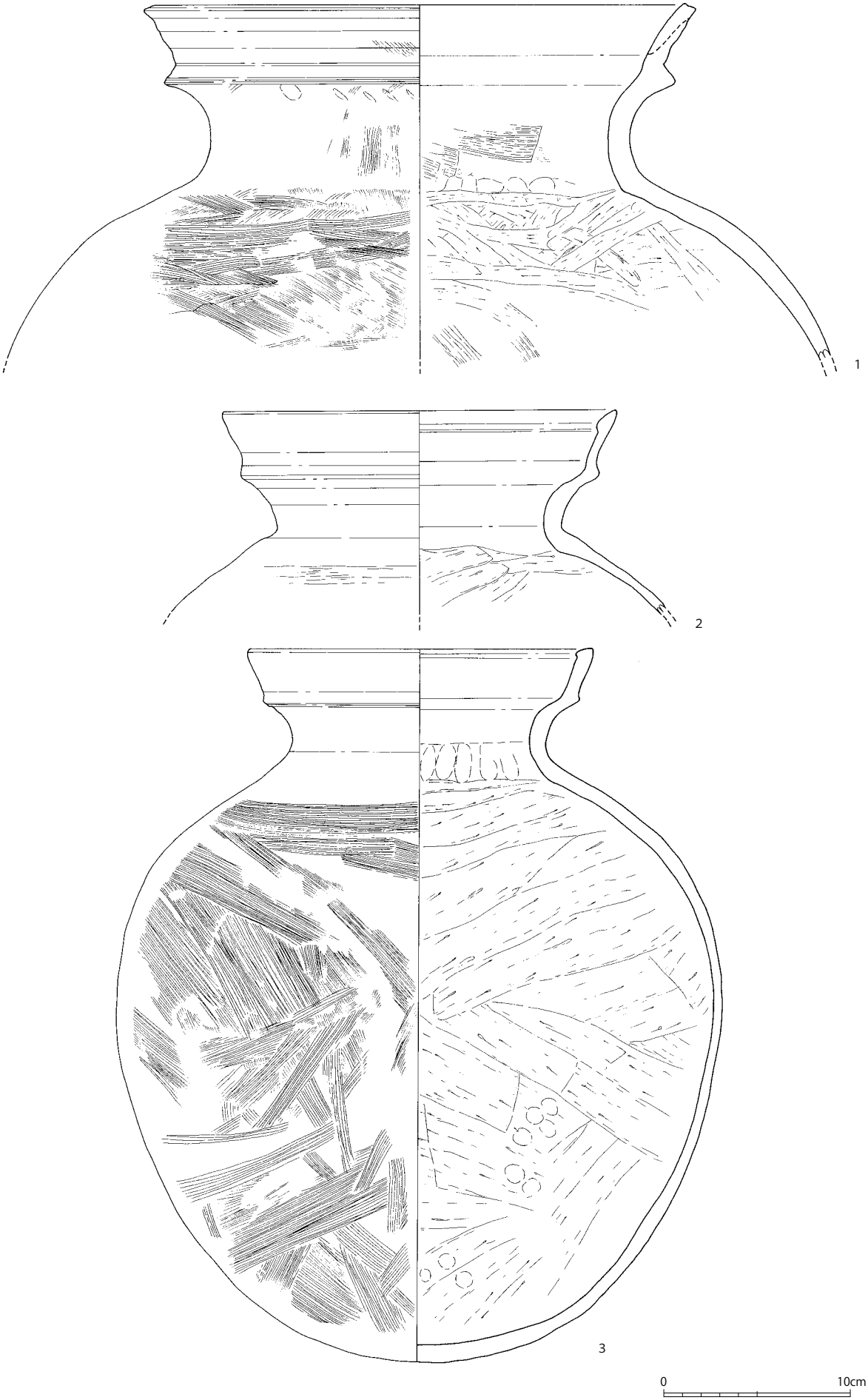
第 59 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図６（S=1/3）



第 60 図　御崎谷遺跡　土器だまり遺物実測図７（S=1/3）

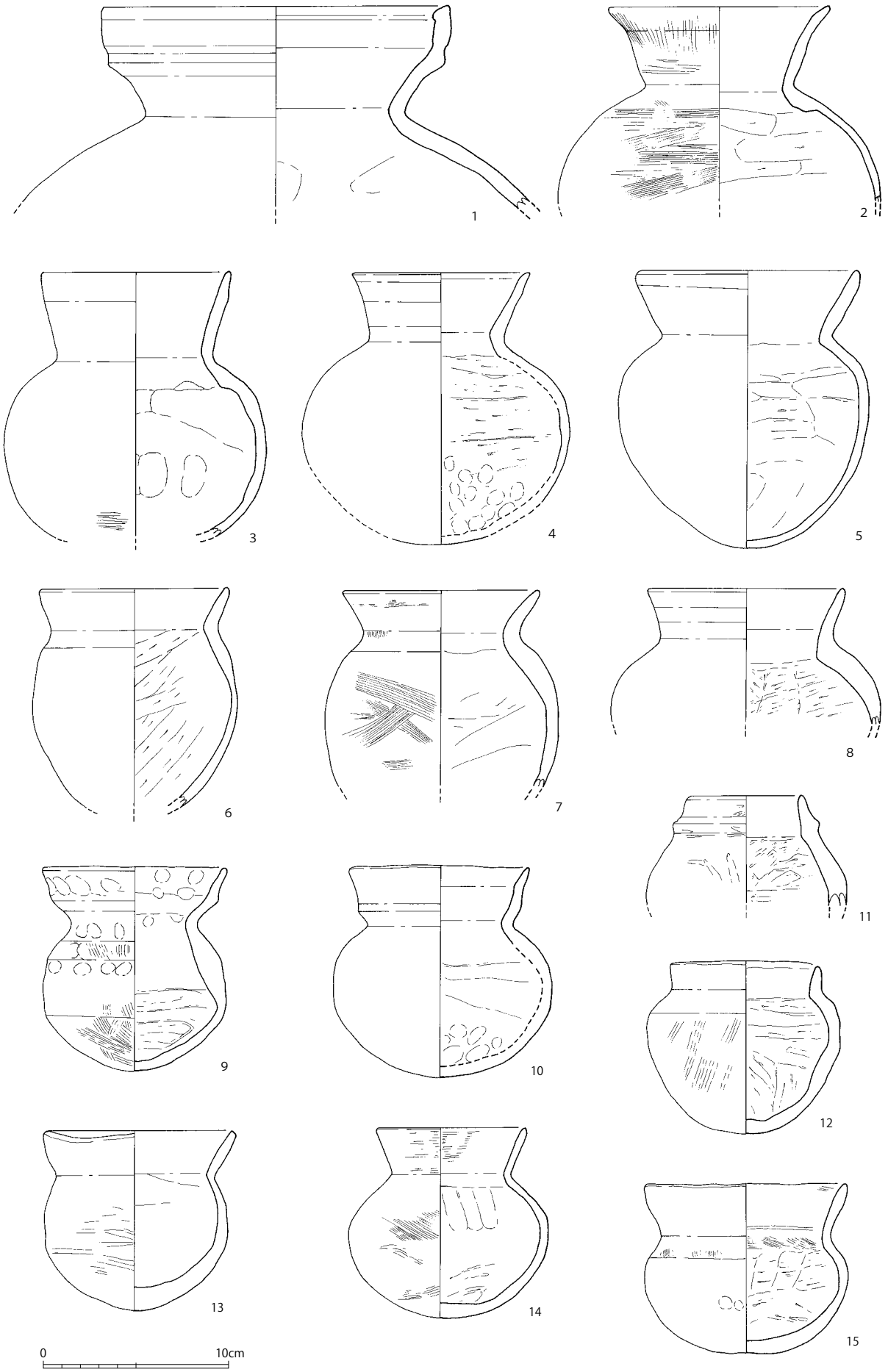


第 61 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図８（S=1/3)

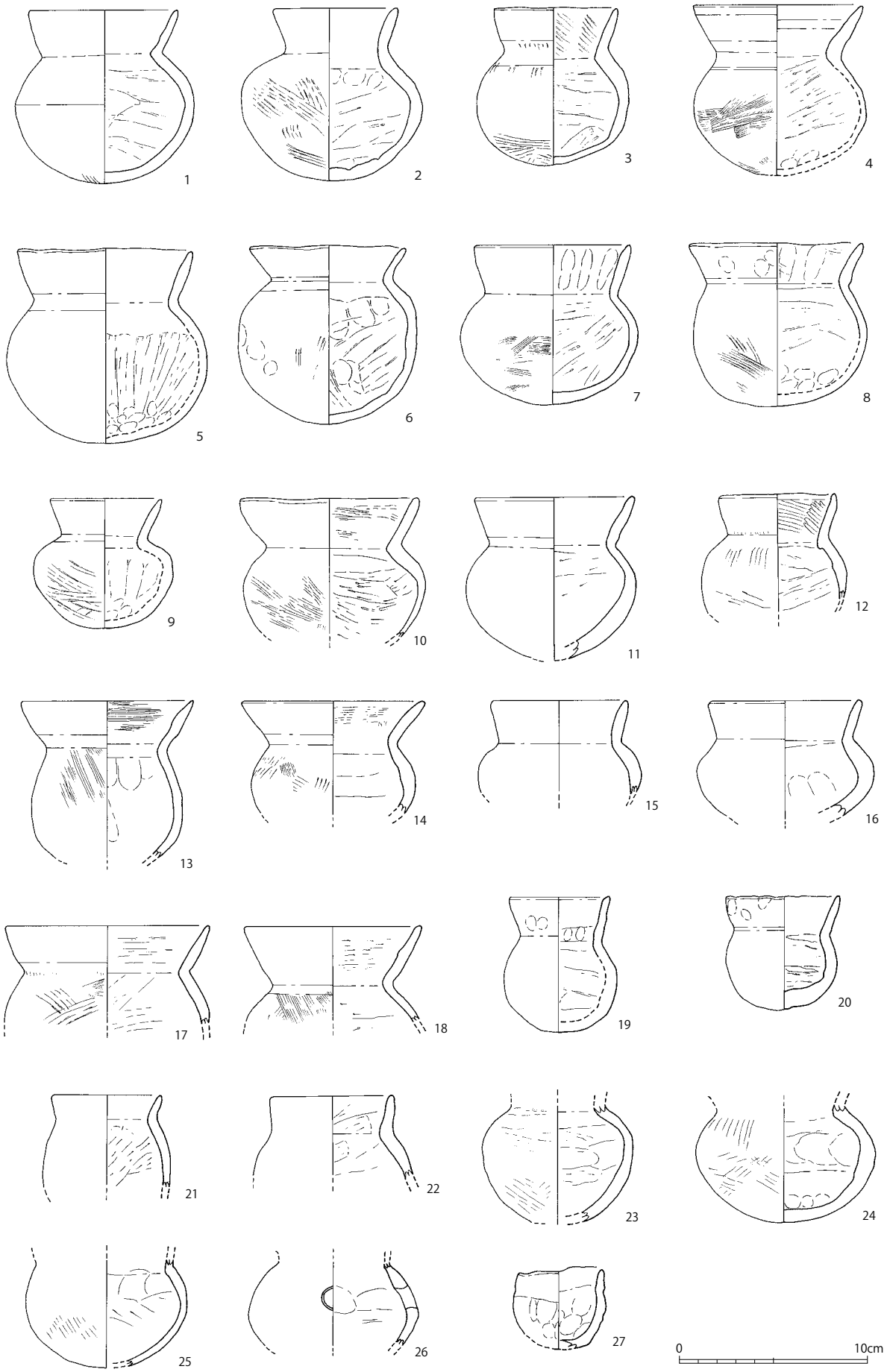


第 62 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図９（S=1/3）

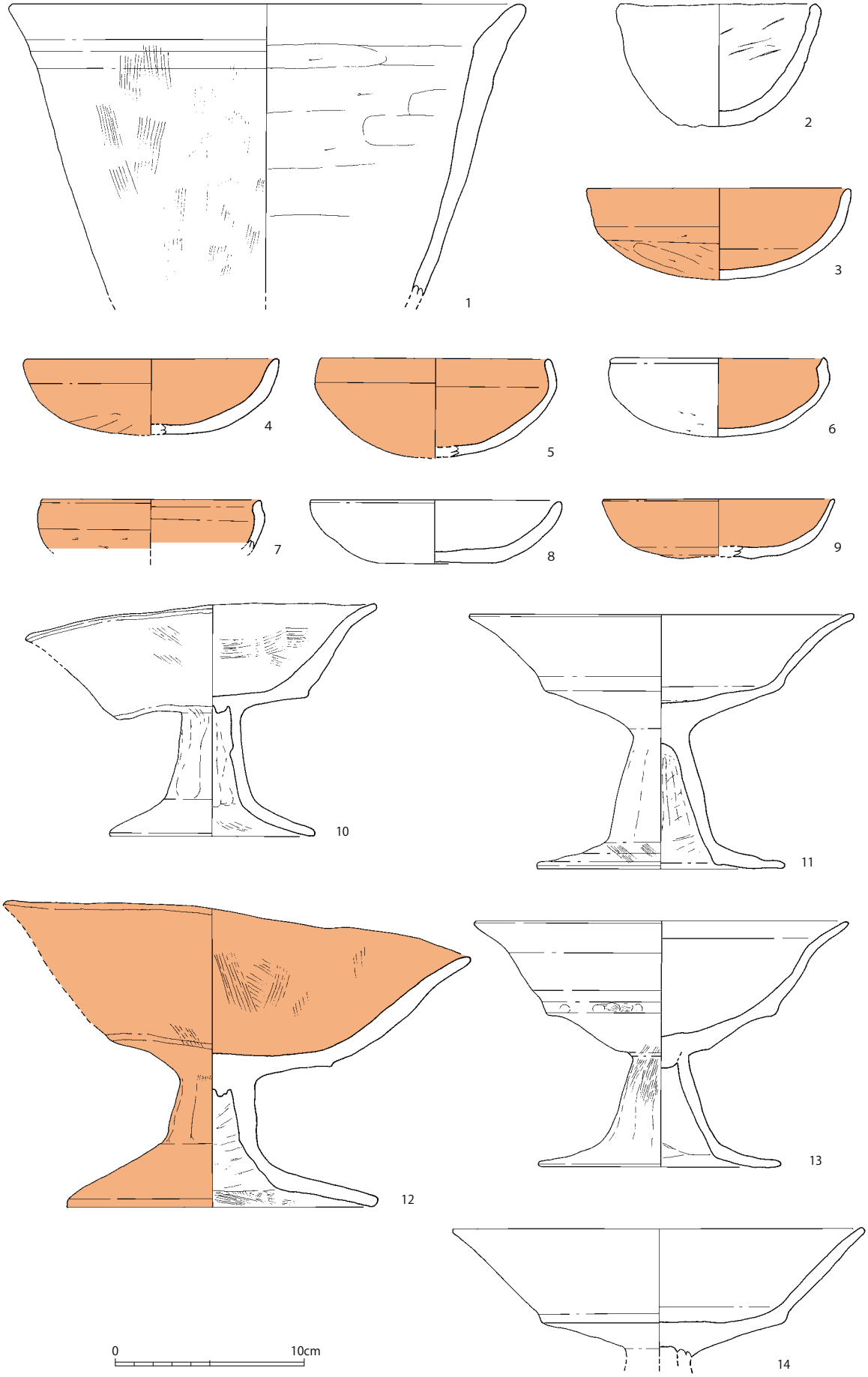
第 63 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 10（S=1/3）



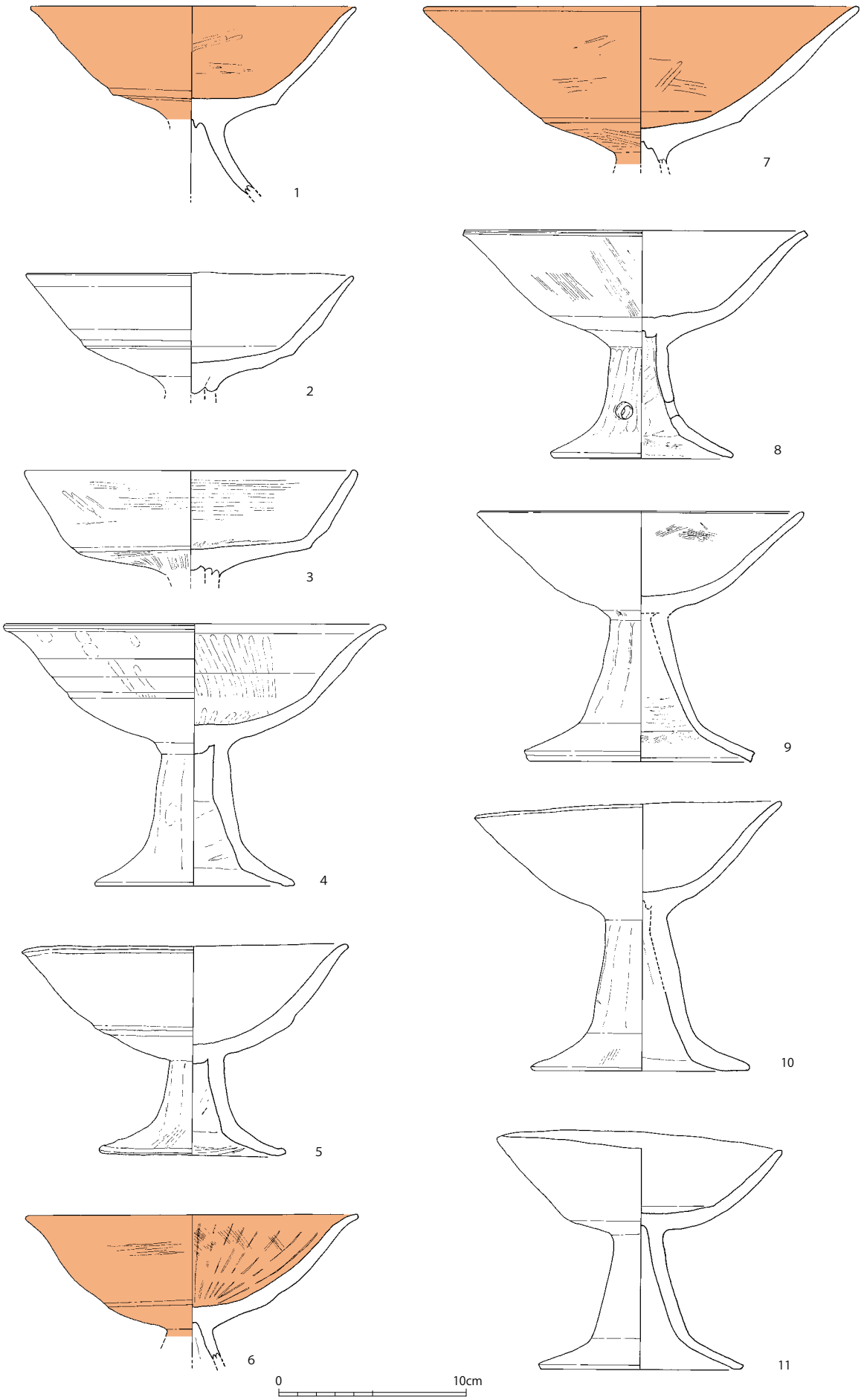
第 64 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 11（S=1/3）



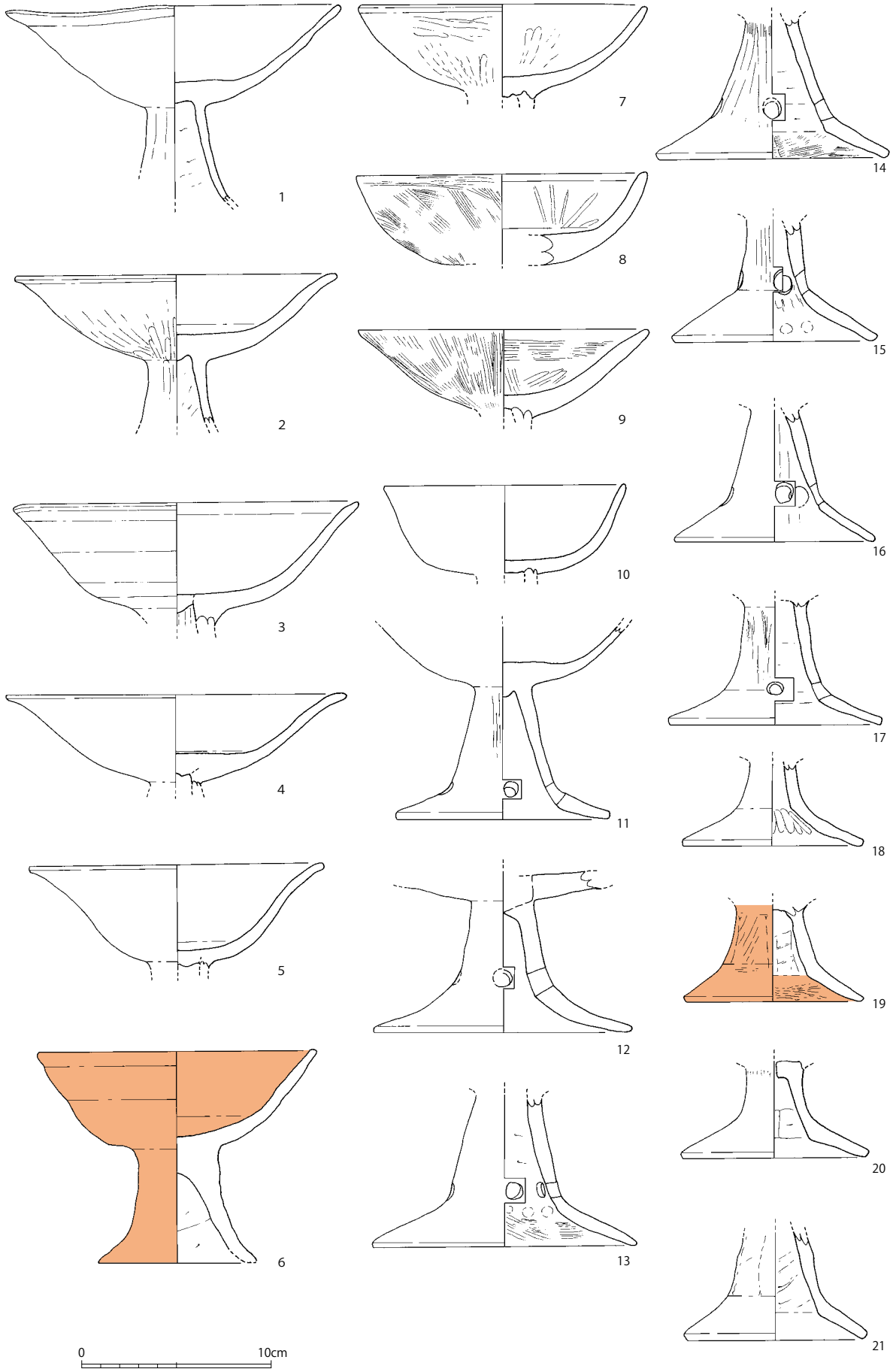
第 65 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 12（S=1/3）



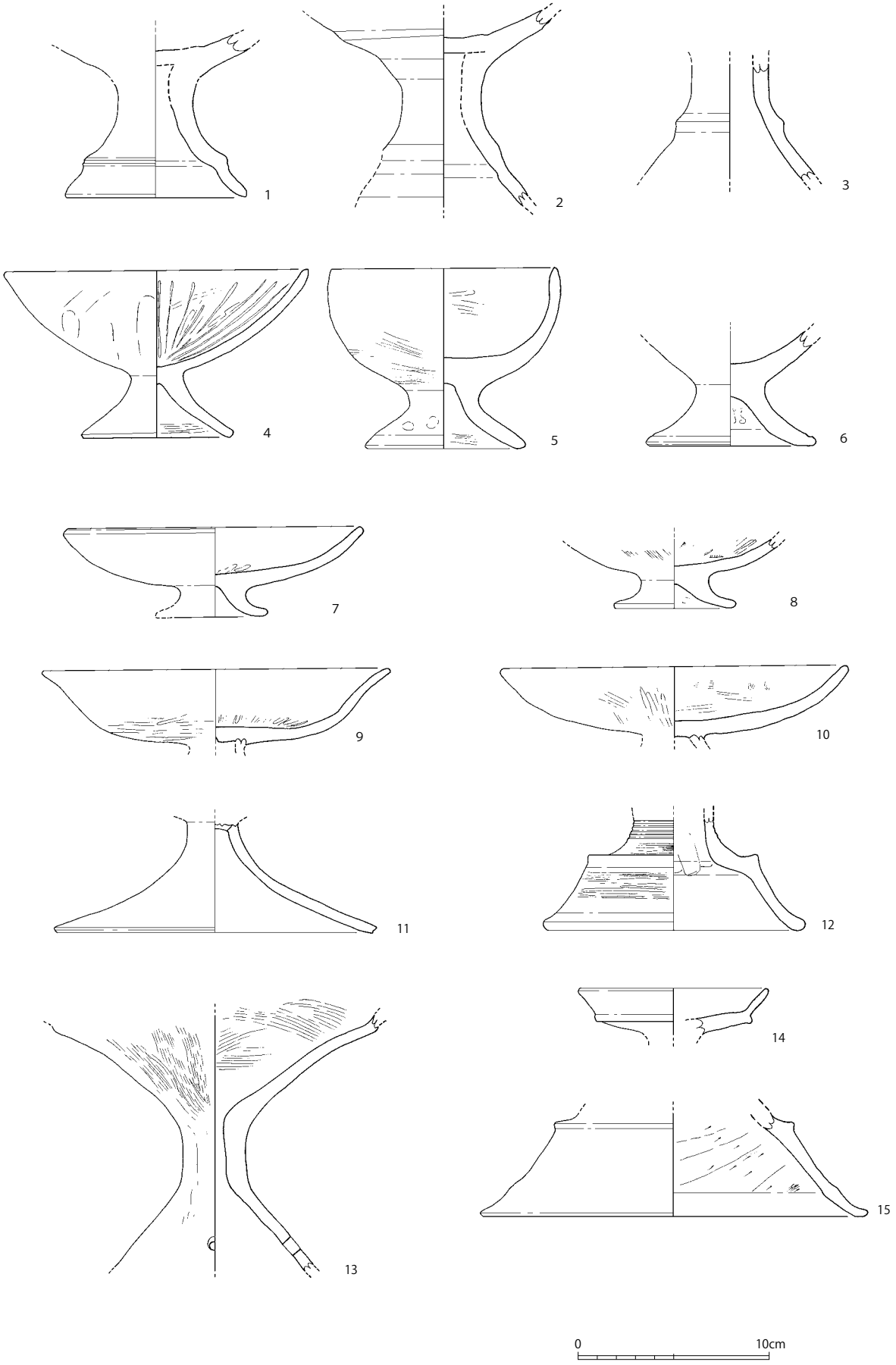
第 66 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 13（S=1/3）



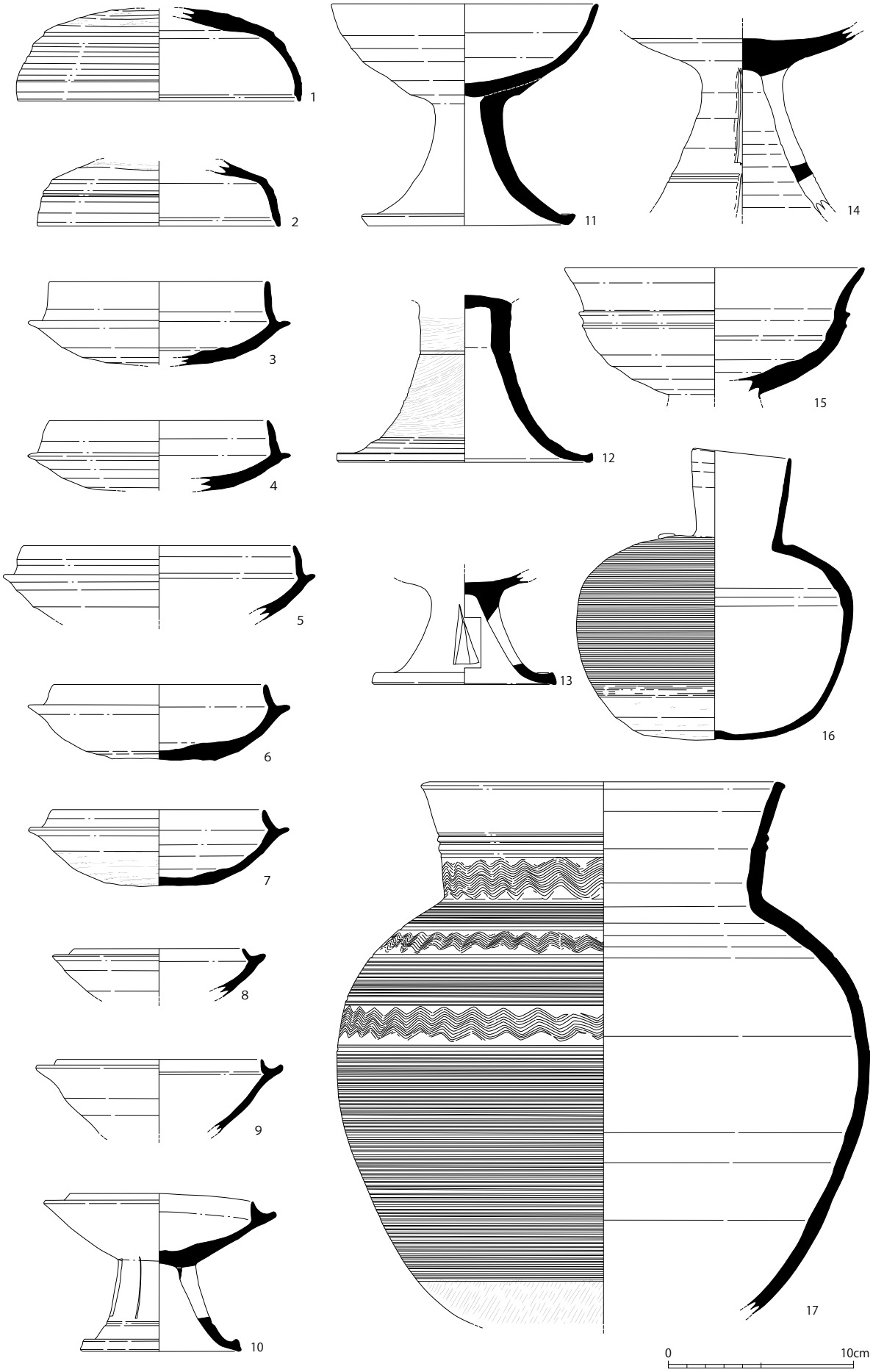
第 67 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 14（S=1/3）



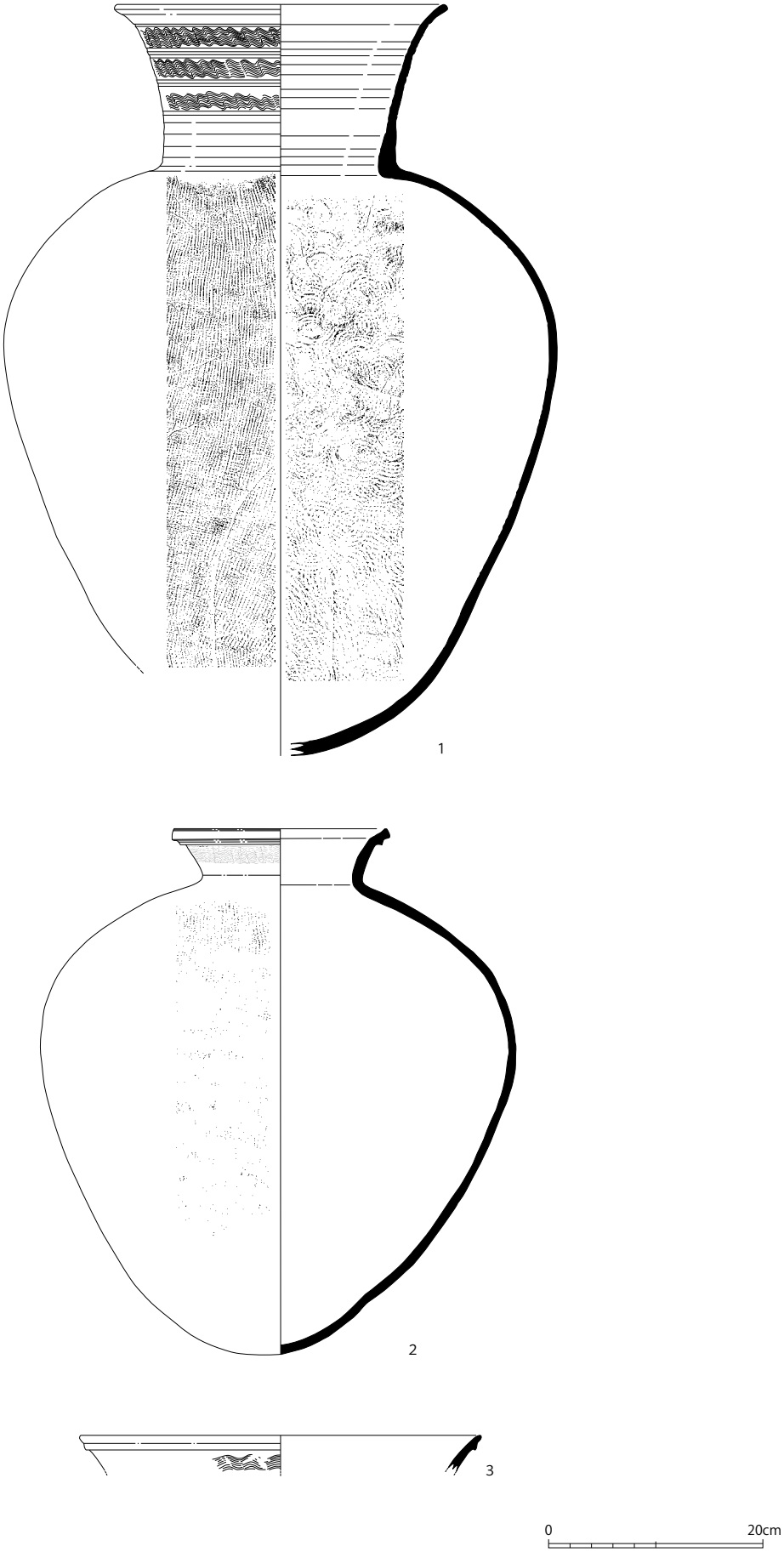
第 68 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 15（S=1/3）



第 69 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 16（S=1/3）

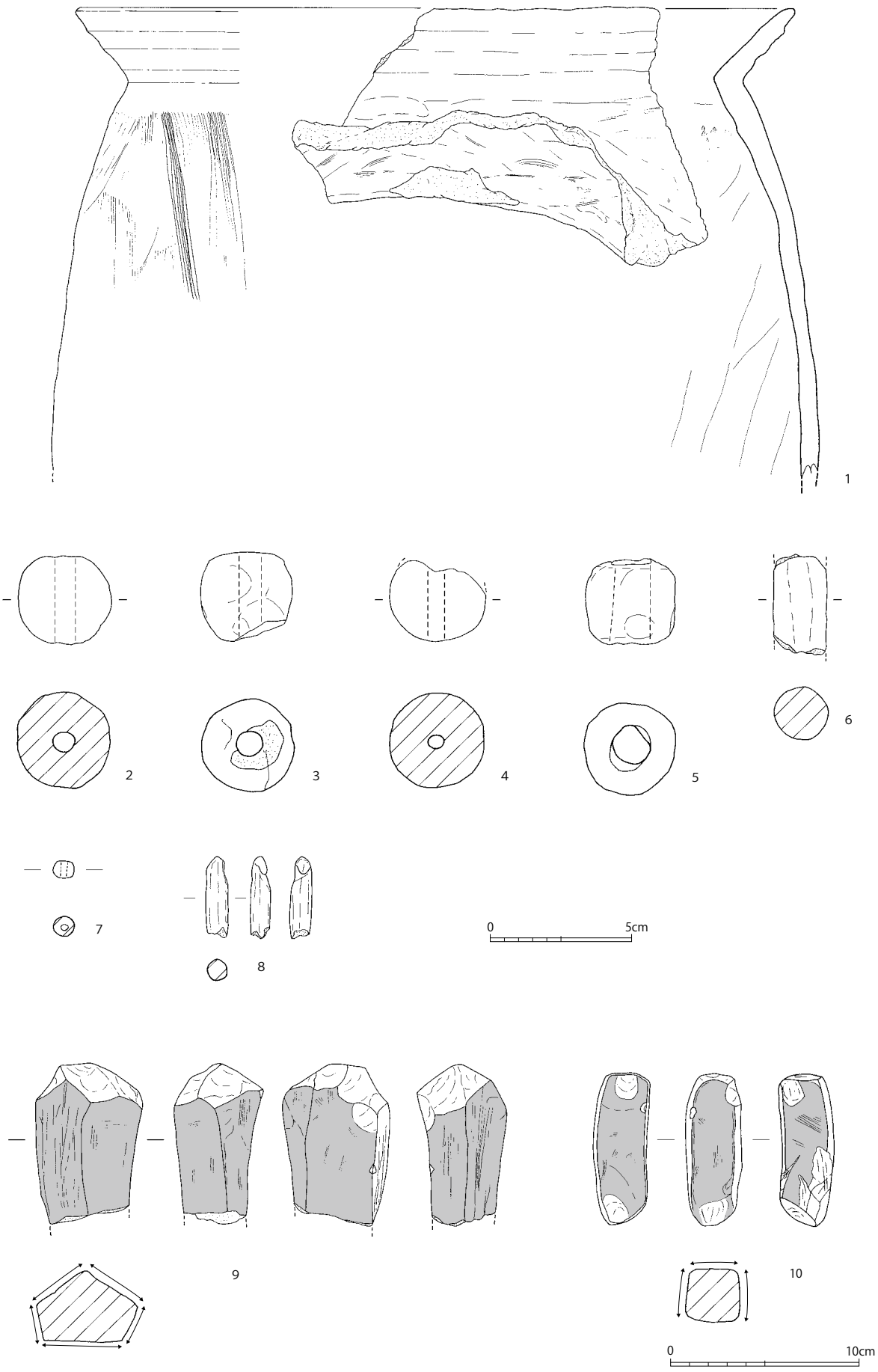


第 70 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 17（S=1/3）

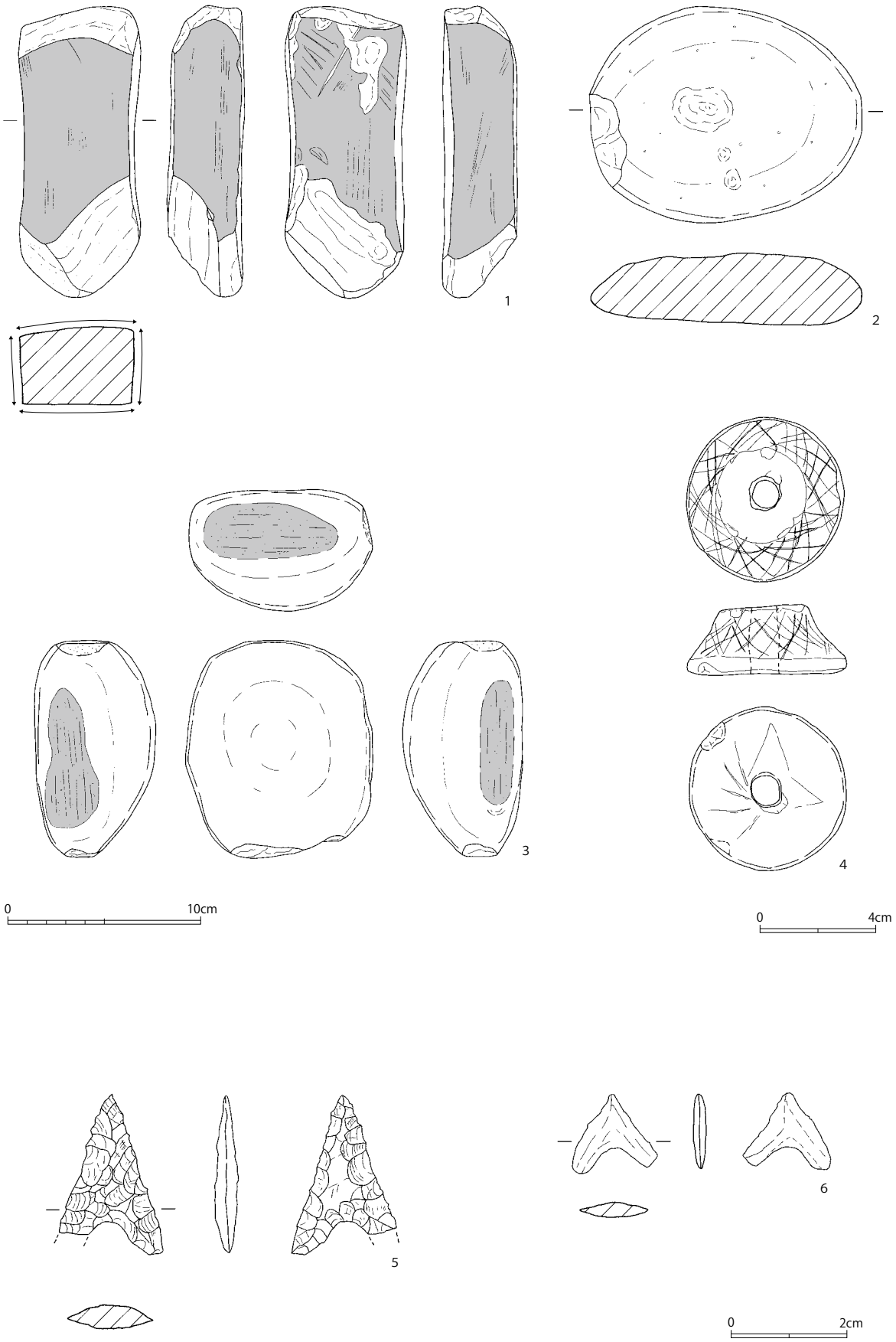


第 71 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 18（S=1/6）

第 72 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 19（S=1/3）



第 73 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 20（1・9・10：S=1/3、2～8：S=1/2)



第 74 図　御崎谷遺跡　土器だまり出土遺物実測図 21（1～3：S=1/3、4：S=1/2、5・6：S=1/1）

タイプで、内外面に赤彩が施される。７～10は口縁部が外方に開くものであるが、８・10は体部が碗状を呈する。11～17は脚部に円形の透かしをもち、18～21は透かしをもたないタイプである。第69図１～３は脚部が複合口縁状を呈するタイプである。２は坏部も複合口縁状を呈している。

低脚坏（第69図４～11）

高坏に比べて出土量は少なく､図化できたものは８点であった。４～６はやや高めの脚部をもち、坏部は４のように外傾して開くものや、５のように碗状のものがある。７・８は低い脚部で坏部は浅く大きく開く。９・10は浅く大きく開く坏部をもつが、脚部を欠損している。11は脚部で裾部が大きく開くタイプである。

器台（第69図12～15）

低脚坏同様に出土量が少なく、図化できたものは４点である。12は弥生時代後期頃の鼓形器台の脚部で、脚部は外反して開き、筒部に擬凹線を施す。13は受け部と脚部の端部を欠損しているが、当地域ではあまり見慣れないタイプである。受け部は「ハ」の字状に開いてのび、口縁部との境に段を有するもので、脚部は筒部から「ハ」の字状に大きく開き、円形の透かしを施している。14は小形の器台である。15は無文の鼓形器台の脚部である。

（２）須恵器（第70～71図）

須恵器は土師器に比べて出土量が少なかった。第70図１・２は蓋で天井部との境に段及び沈線を施すタイプである。１の口縁部は内湾して端部に段をもち、２の口縁部はやや外反気味で端部は丸みをもつ。３～９は坏身で３～５は立ち上がりの長いタイプ、６～９は短いタイプで、いずれも端部は丸くおさめている。10～15は高坏である。10は有蓋のもので立ち上がりは短い。脚部に刻目状の透かしを施している。11は碗状を呈する坏部をもつ。12～14は脚部で12の外面にはカキ目が施される。13は三角形透かし、14は刻目状の透かしが２段に施されている。15は特異なタイプで体部との境に２条の小さな突帯をもち、口縁部は大きく外反する。16は平瓶で口縁部は直立気味にのびる。体部は肩部に最大径をもつやや扁平な形状で、外面にカキ目を施す。17～第71図３は甕である。17は直立気味にのびる口縁部で外面に２条の突帯と波状文を施す。肩部に最大径をもつ体部で外面には２条の波状文とカキ目を施す。第71図１は大形の甕で口縁部は外反気味に長く立ち上がり､外面に６条の凹線とその間に３条の波状文を施す。体部は倒卵形に近い。２は中形の甕で口縁部は外反して短くのび、外面に波状文を施す。肩部がよく張る体部である。３は口縁部で波状文を施している。

（３）土製品（第72～73図８）

第72図は土製支脚である。２～３方向の突起をもち、１・３のように背面に円孔を有するものもある。第73図１は竈である。２～５は土錘で平面形は２～４は円形状、５は楕円形状を呈する。６は棒状土錘で両端を欠損している。７は小玉である。８は不明の土製品で端部が小さな有頭状に作られている。

（４）石製品（第73図９～74図）

第73図９～第74図１は砥石である。９は平面形が長方形状を呈し一部を欠損するが使用面は５面ある。10は平面形が長方形状を呈し使用面は３面である。第74図１は平面形は長方形状を呈し使用面が４面で、鉄器刃先痕と想定される傷が認められる。２・３は敲石で扁平な楕円形状を

呈して、上面中央付近に敲打痕が認められる。３は楕円形に近い形状で、側面の３箇所に使用痕が認められる。４は紡錘車で側面に多条の刻み目が施されている。５・６は石鏃である。５は黒曜石製、６はサヌカイト製である。

５．包含層出土遺物（第 75 ～ 85 図）

包含層出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などの土器と共に土製品や石製品などが出土している。以下、各種別・器種ごとにその概要を述べる。

（1）縄文土器（第 75 図）

縄文土器は 12 点図示したが、大半はＥ４・５、Ｆ４・５グリッド周辺で出土している。１～６は刻み目突帯の深鉢で磨滅しているものもあるが条痕文で調整されている。１は口縁端部外面に突帯を貼り付け、端部上面に１条の沈線と刻み目を施している。２は口縁端部下方に突帯を貼り付け、３は端部からやや下方に突帯を貼り付けている。4 は突帯及び口縁端部外面に刻み目を施している。７は突帯を貼り付けているが刻み目は認められない。外面は条痕で調整されている。８～ 10 は体部の一部で調整は条痕文である。11・12 は浅鉢と思われ、11 の口縁部は段状を呈し、12 は外面に沈線が施されている。調整は条痕である。縄文時代晩期に属するものと思われる。

（2）弥生土器（第 76 図）

１・２は広口壺で口縁端部が上下に肥厚するものである。１は端部外面に３条の凹線を施した後、櫛状工具による刺突文を施し、口縁部内側に６条の平行沈線を施している。２は内傾してのびる頸部から外反する口縁部をもち、口縁端部外面に２条の凹線、口縁内面に４条の平行沈線を施す。頸部外面にも４条の凹線を施している。これらはⅣ－１～２様式の様相を示している。３は短く直立する口縁部で外面に３条の凹線を施している。Ⅴ－２様式の様相を示している。４は複合口縁で外面に擬凹線を施している。Ⅴ－３様式の様相を示している。５～ 11 は底部である。平底と高台の付くものが見られる。12 は鉢で口縁端部は横方向に大きく肥厚する。13 は高坏で口縁部は直立気味にのび端部は内外に肥厚させ、３条の凹線を施す。また、外面にも５条の凹線を施している。これはⅣ－２様式であろうか。14 は複合口縁の小形の甕で口縁部は外反してのび、複合口縁部の稜はやや厚い作りとなっている。体部は肩部がよく張る。

（3）土師器（第 77 ～ 80 図）

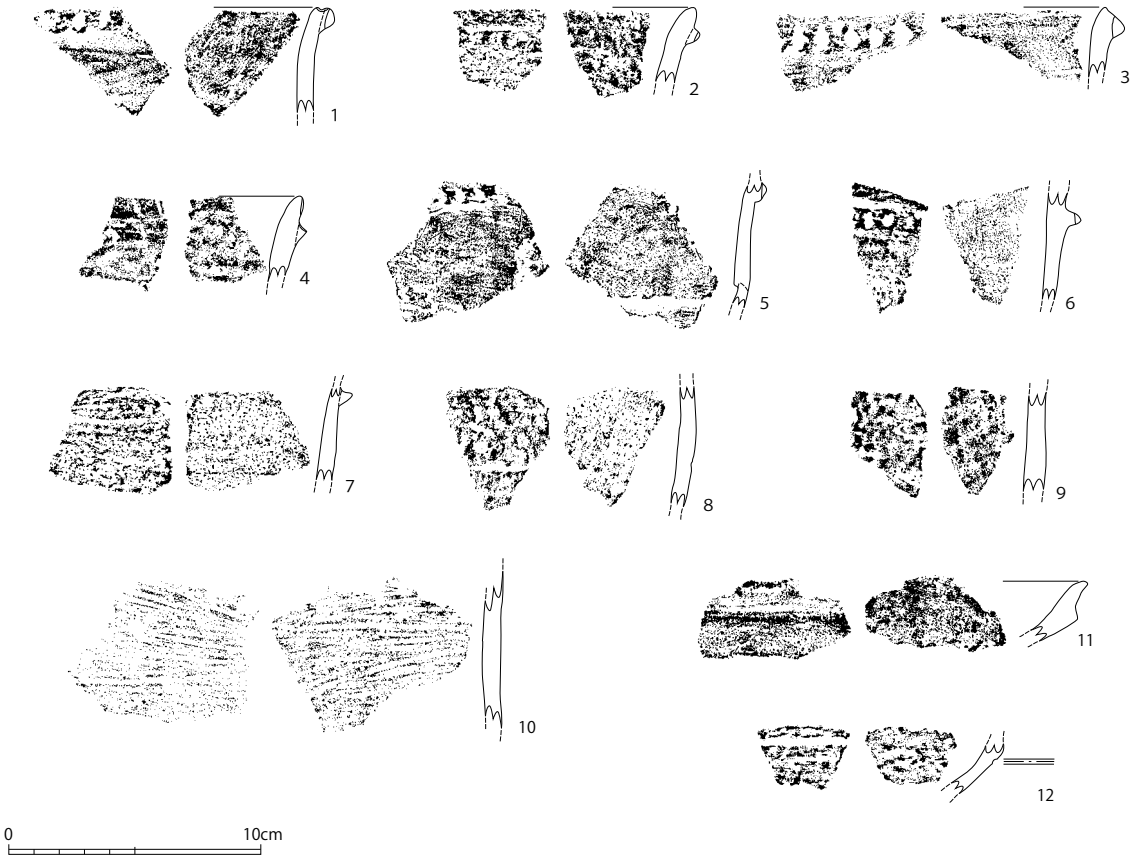
甕（第 77 ～ 78 図４）

第 77 図１～９は複合口縁が退化もしくは退化傾向のある甕である。１は口縁部が内湾気味に立ち上がり、複合口縁部の稜は鈍くなっている。２・３は口縁部が短く直立気味に立ち上がり、４～６は短く外反する口縁部をもつ。７は内傾する口縁部をもつ。８・９は直立ないしは外反してのびる口縁部をもつが複合口縁部の稜が若干膨らむものである。

10 ～第 78 図４は単純口縁の甕である。10・11 は内湾する口縁部で端部は丸みをもつ。12 ～ 14 は内湾及び外傾する口縁部で端部が内側に肥厚する。第 78 図１～３は口縁部が内湾気味にのびている。４は口縁部が短く外反し、体部は胴部中央に最大径をもつやや扁平な形状をなす。

壺（第 78 図５～ 79 図５）

第 78 図５～８は複合口縁の壺で、５の口縁部は外反気味にのびる。６と８は退化傾向のある口縁部で直立気味に短くのび、全体的に厚い作りになっている。７は外傾してのびる口縁部で端部に



第 75 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図１（S=1/3）

沈線を施している。９～ 12 は単純口縁の壺である。９は外反して大きくのびる口縁部で端部内面側が少し凹む。10・11 は直口壺で口縁部は外傾してのびる。11 は内外面に赤彩が施される。12 は口縁端部付近で外反する口縁部をもつ。13 ～第 79 図４は小形丸底壺で口縁部は外反気味にのびる。２・４は赤彩が施されている。５は注口土器の注口である。

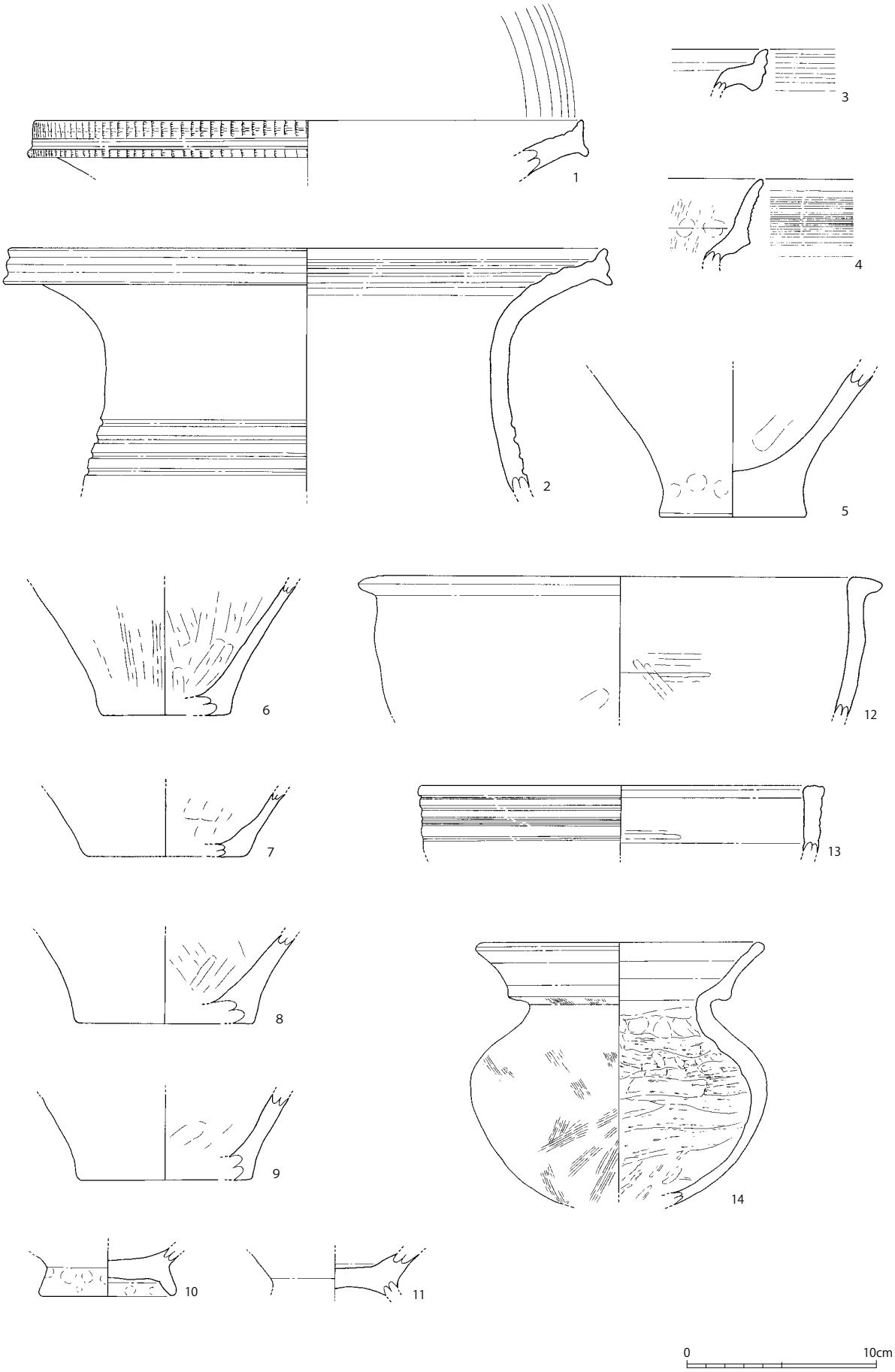
坏・碗（第 79 図６～ 10）

６は体部との境に沈線を施す碗で、内外面に赤彩が施される。７・８は口縁部が内湾するもので７の外面には２条の沈線が認められる。両者とも赤彩されている。９は底部を欠損しているがボウル状の碗で内外面に赤彩が施されている。10 は土師質土器の坏で底部から外傾して直線的にのびる口縁部をもつ。内外面に赤彩が施されている。

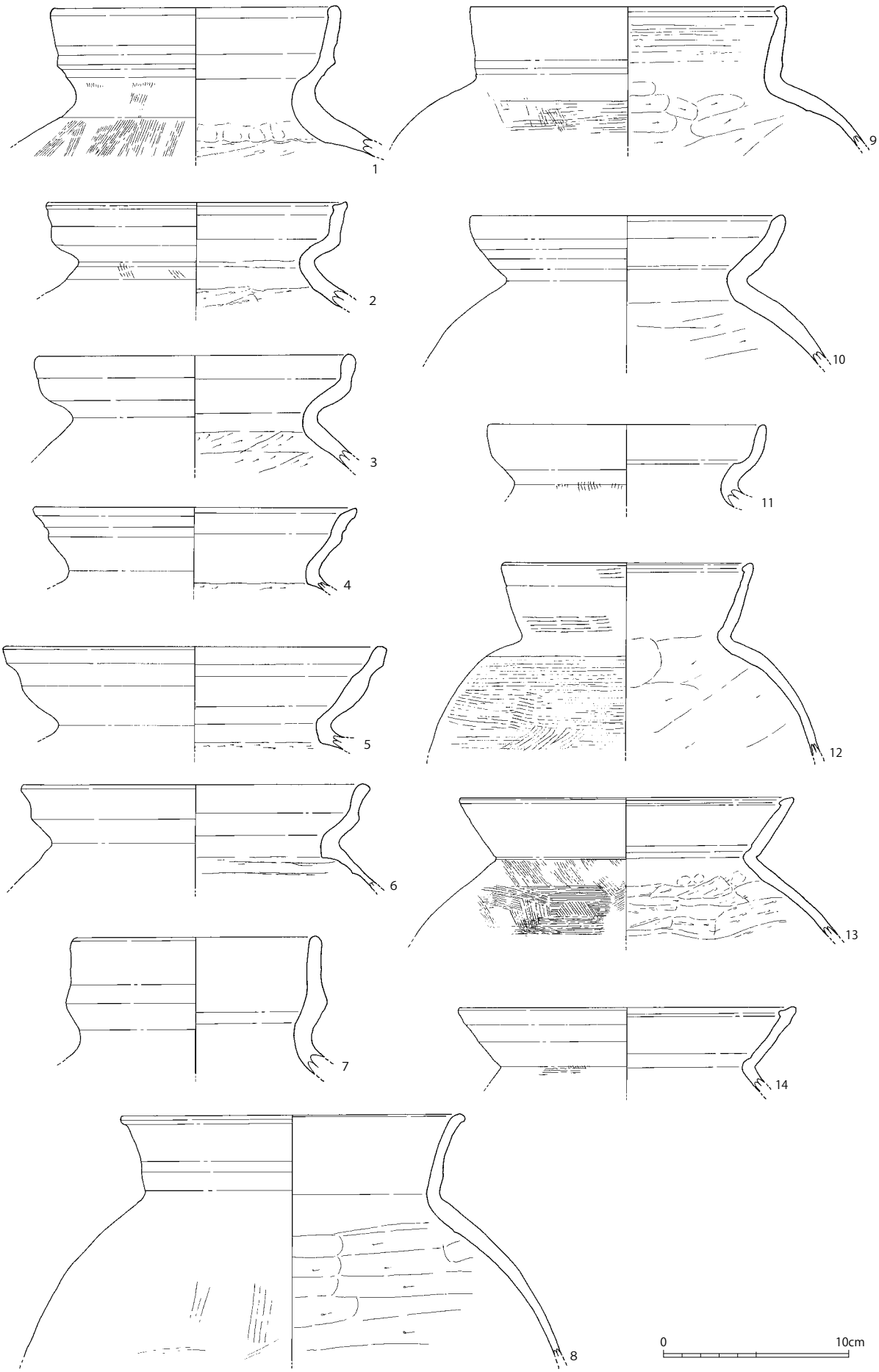
高坏・その他（第 79 図 11 ～ 80 図）

第 79 図 11 ～ 16 は坏部が有段で、口縁部が外反してのびる高坏である。内面に放射状の暗文が施されたものもある。16 は内外面に赤彩が施されている。第 80 図１～６は坏部が無段で、1・2・４・６のように口縁部が外反するタイプと、３・５のようにやや内湾するタイプがある。脚部は裾部が大きく開くタイプである。７～ 12 は脚部である。７は分厚い作りで端部は短く開く。８は７より薄い作りである。９は中実を呈するもので裾部が開く。10 は柱状を呈する脚部で裾部が短く開く珍しいタイプのものである。11 は坏部が碗状を呈すると思われる低脚坏の脚部である。12 は分厚い作りの低脚坏の脚部と思われる。13 は器台の脚部で複合口縁状を呈している。14 ～ 16 は手捏土器で指頭圧痕が認められる。

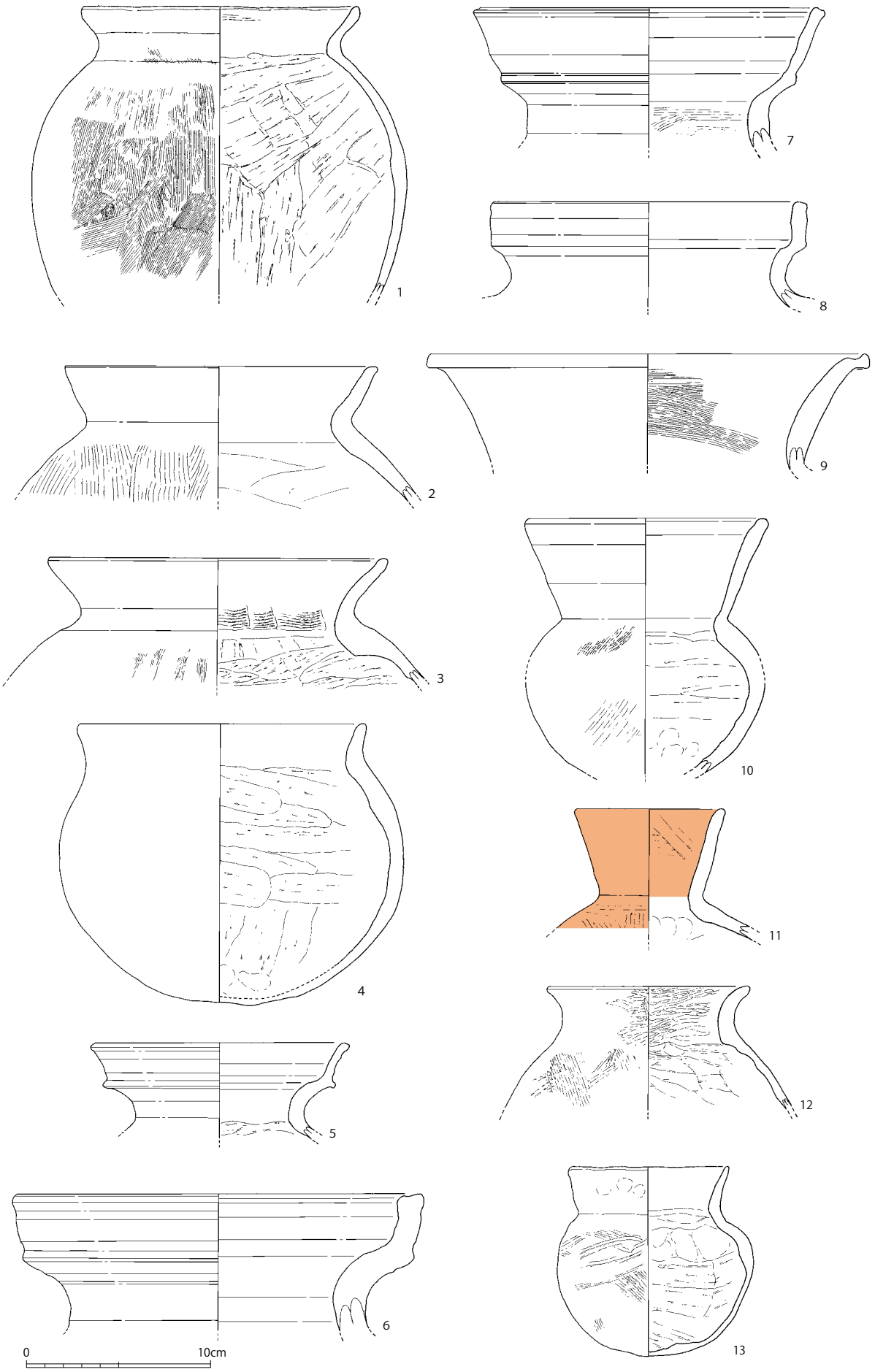
（４）須恵器（第 81 ～ 82 図）



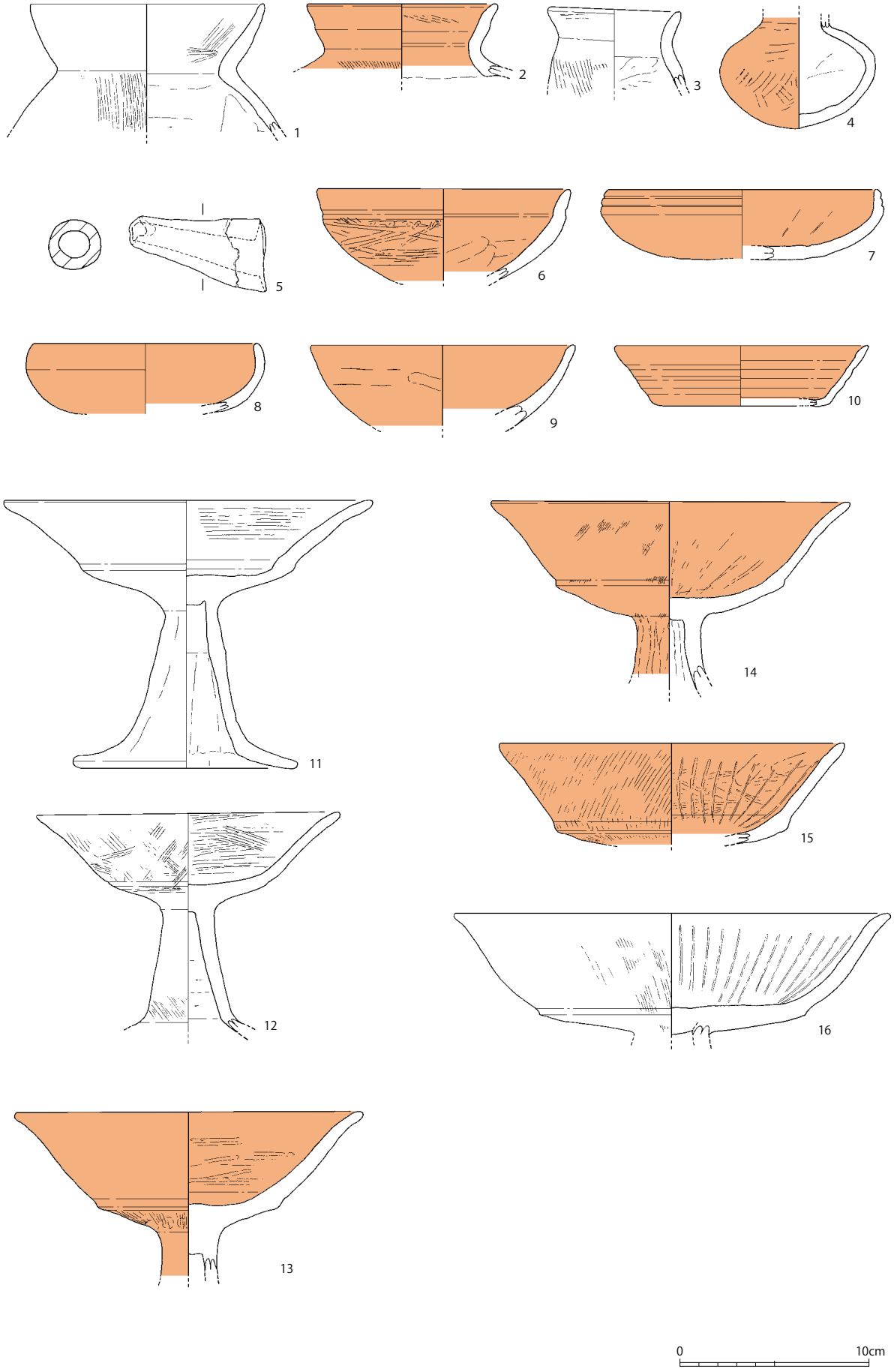
第 76 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 2（S=1/3）



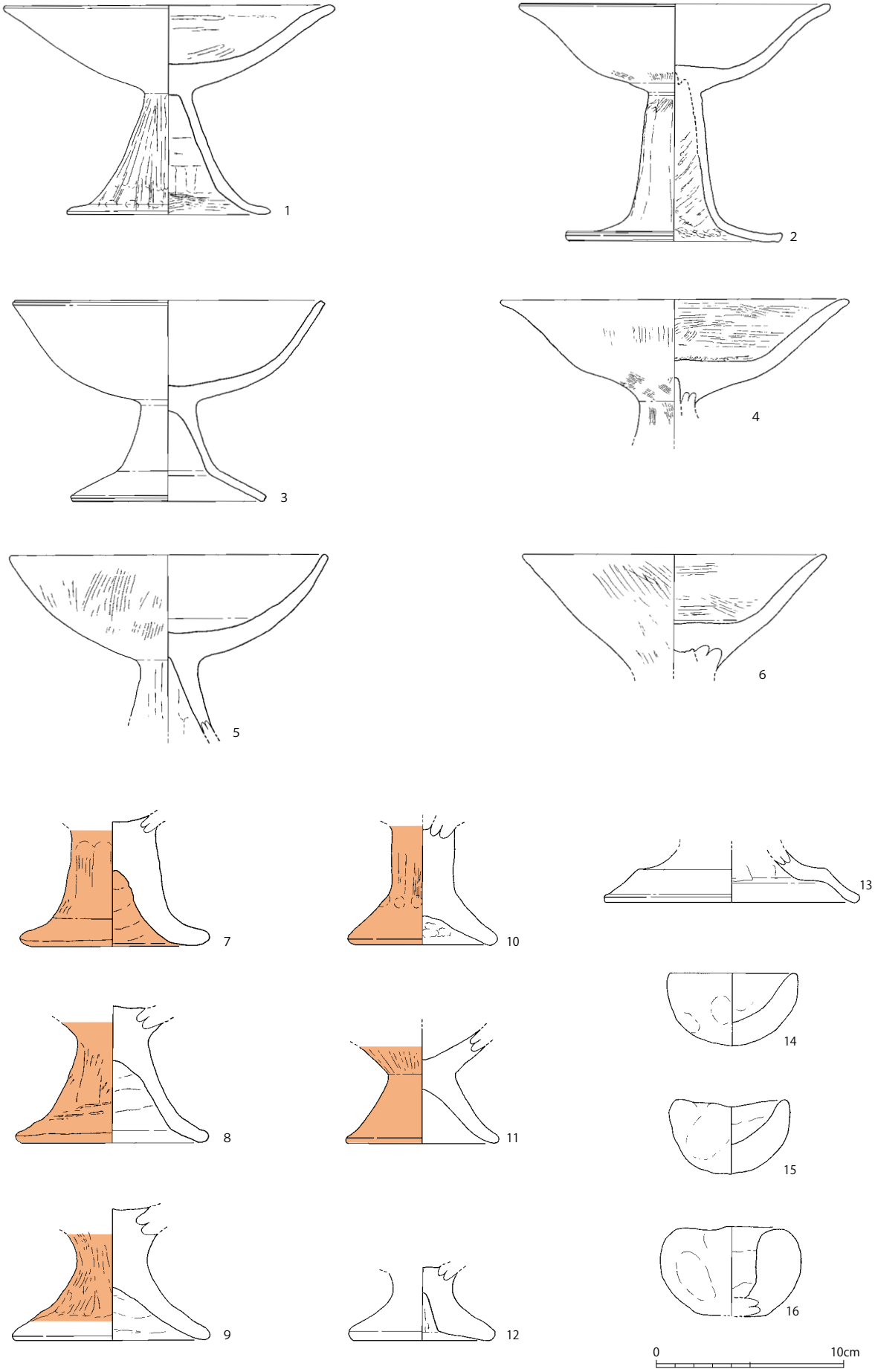
第 77 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図３（S=1/3）



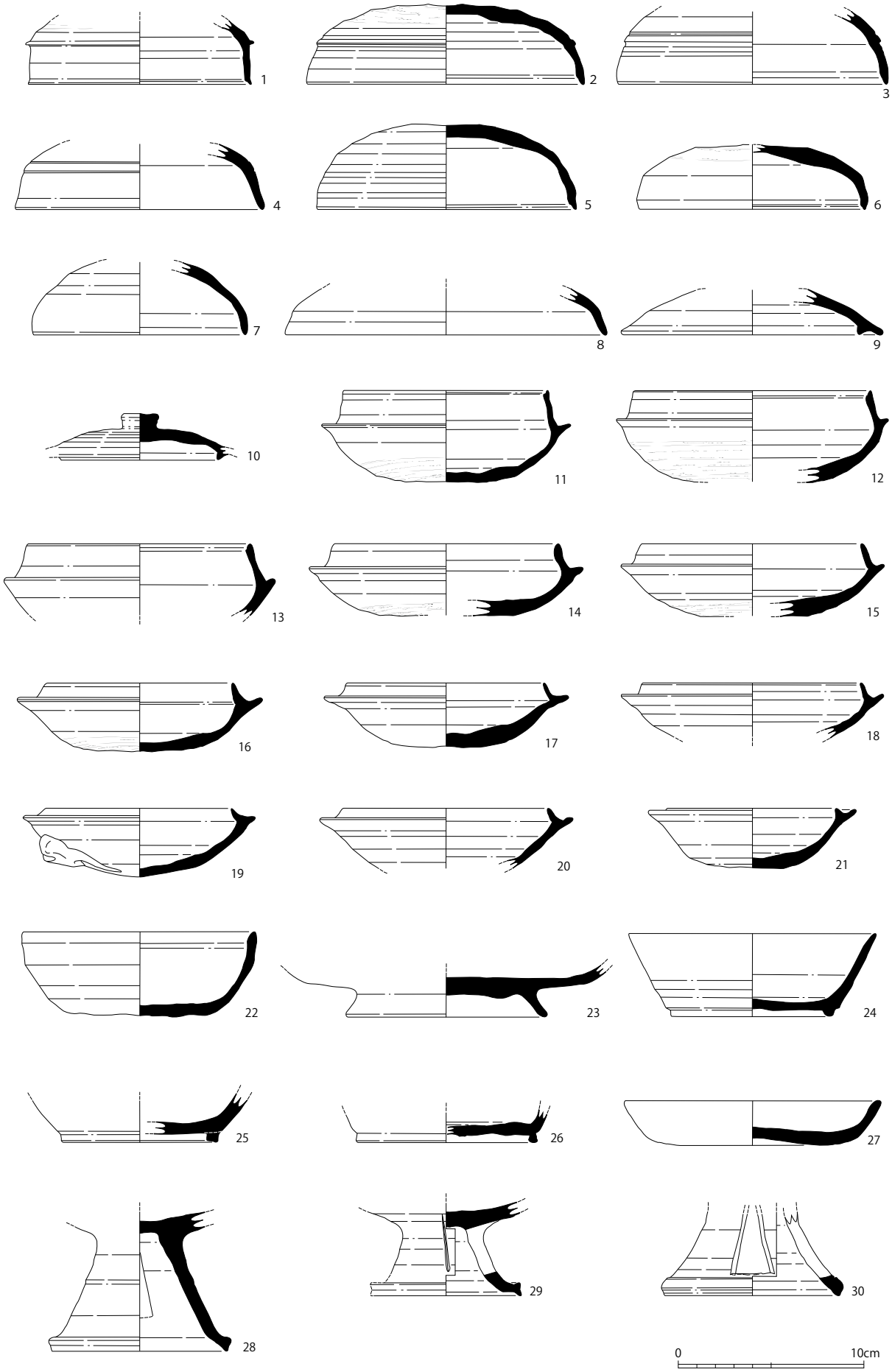
第 78 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図４（S=1/3）



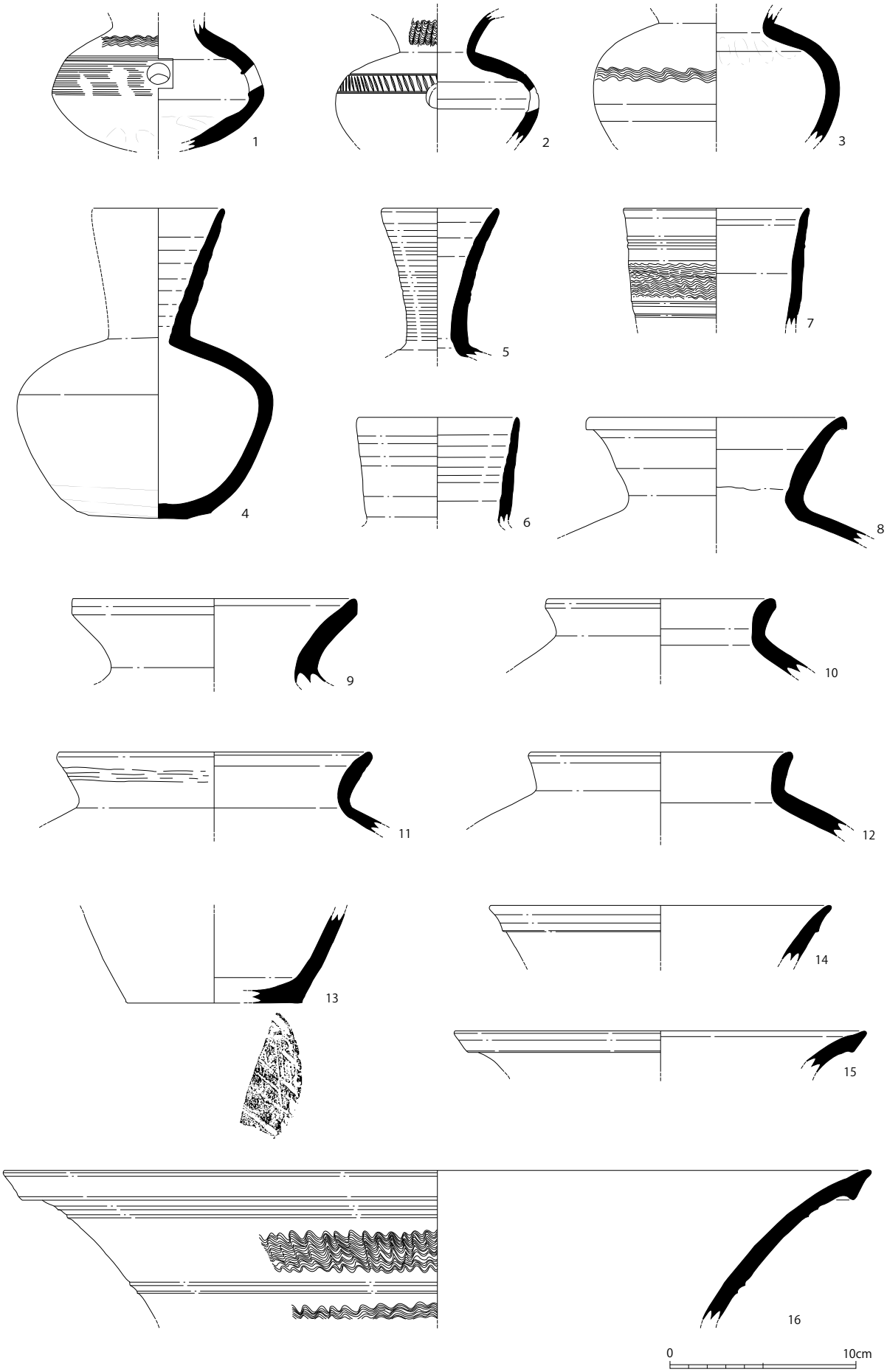
第 79 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 5（S=1/3）



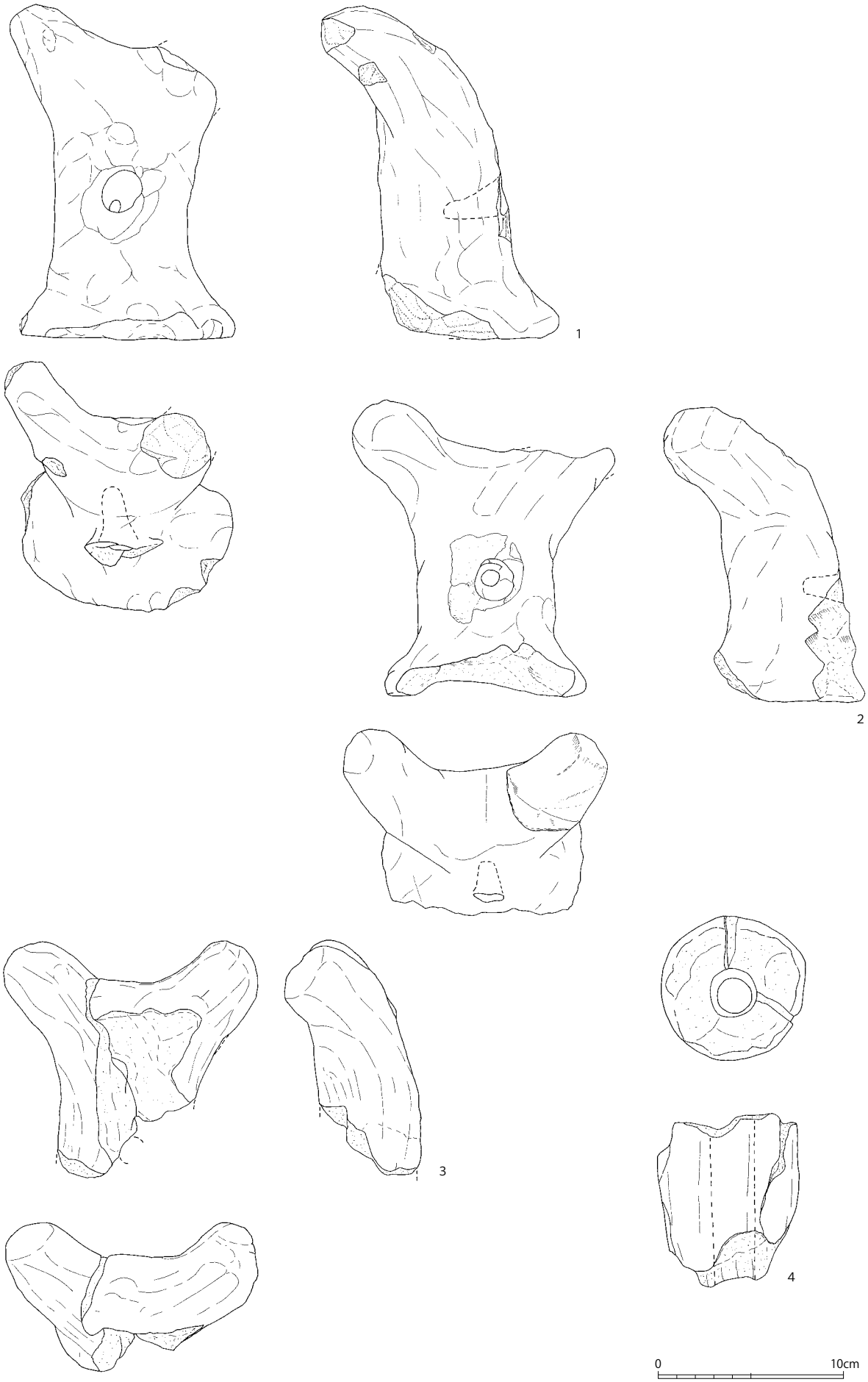
第 80 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図６（S=1/3）



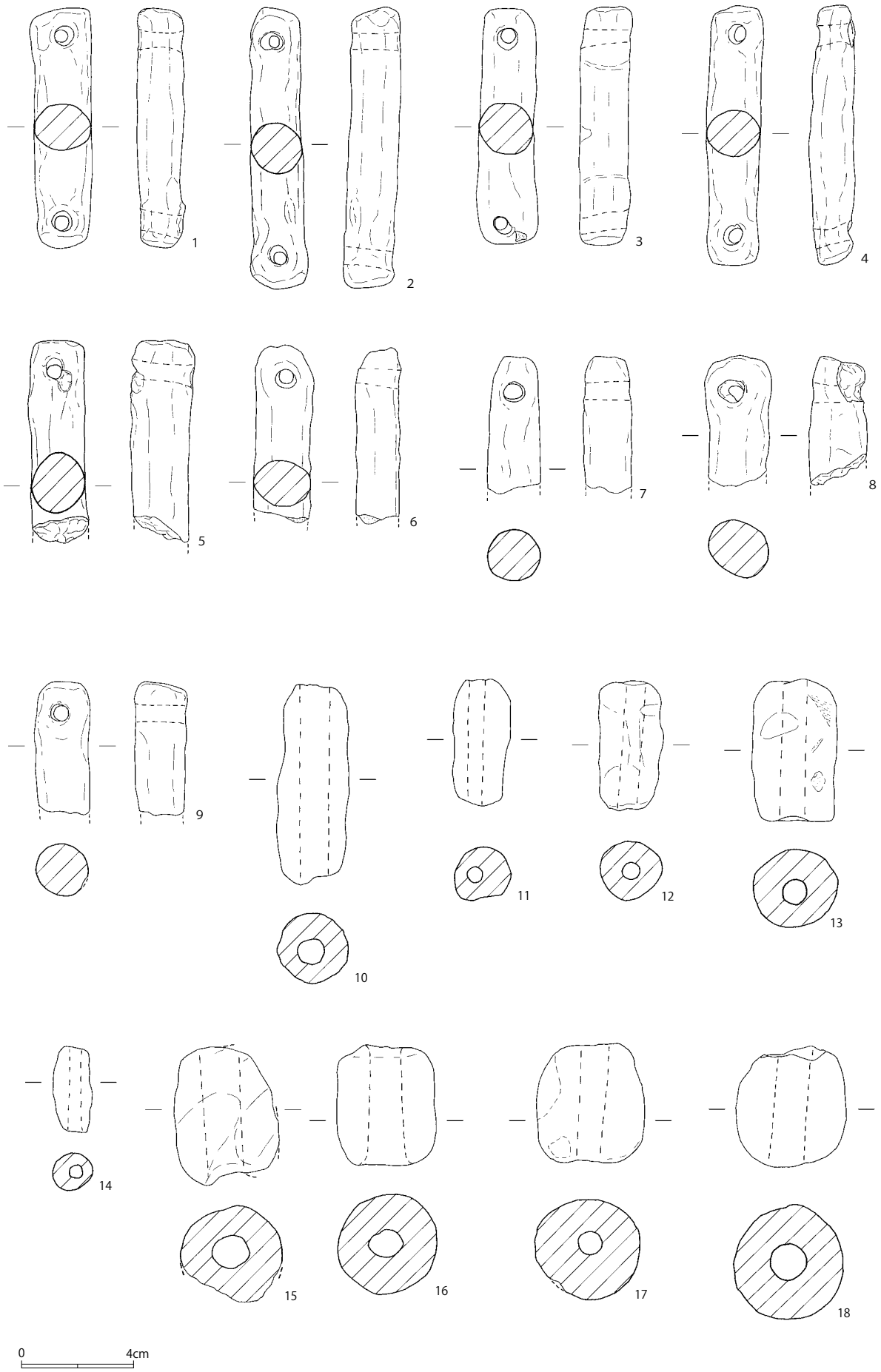
第 81 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図７（S=1/3）



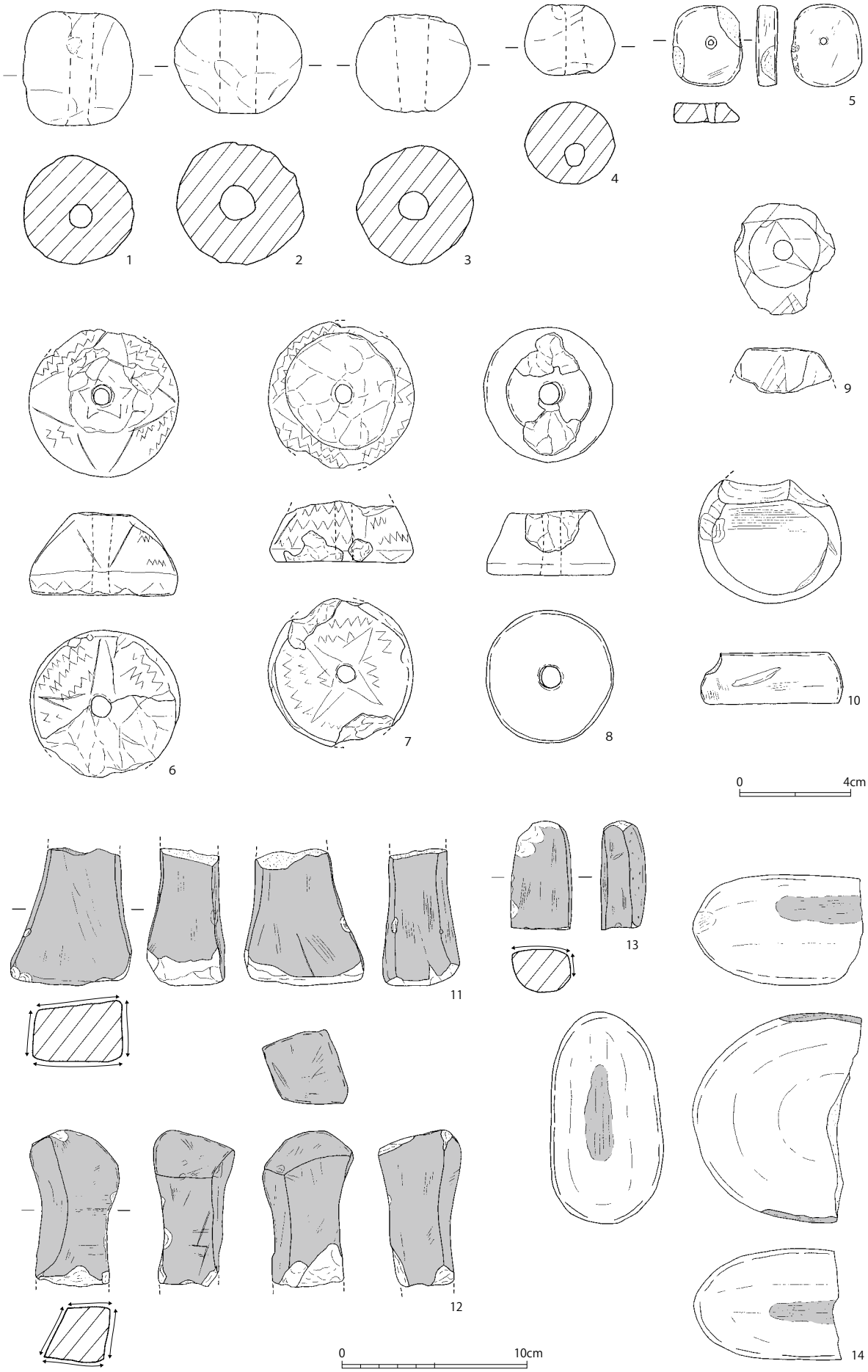
第 82 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図８（S=1/3）



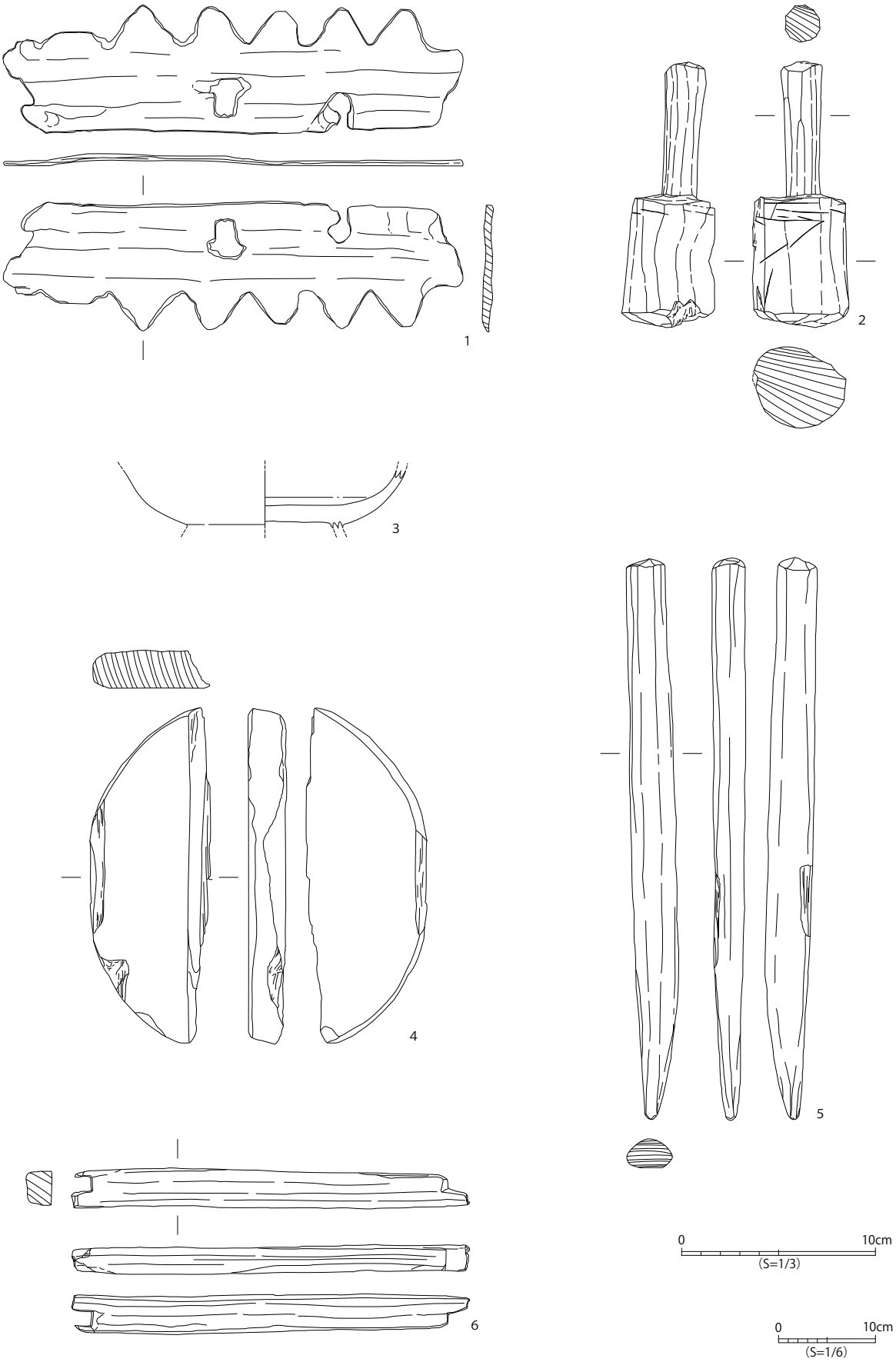
第 83 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図９（S=1/3）



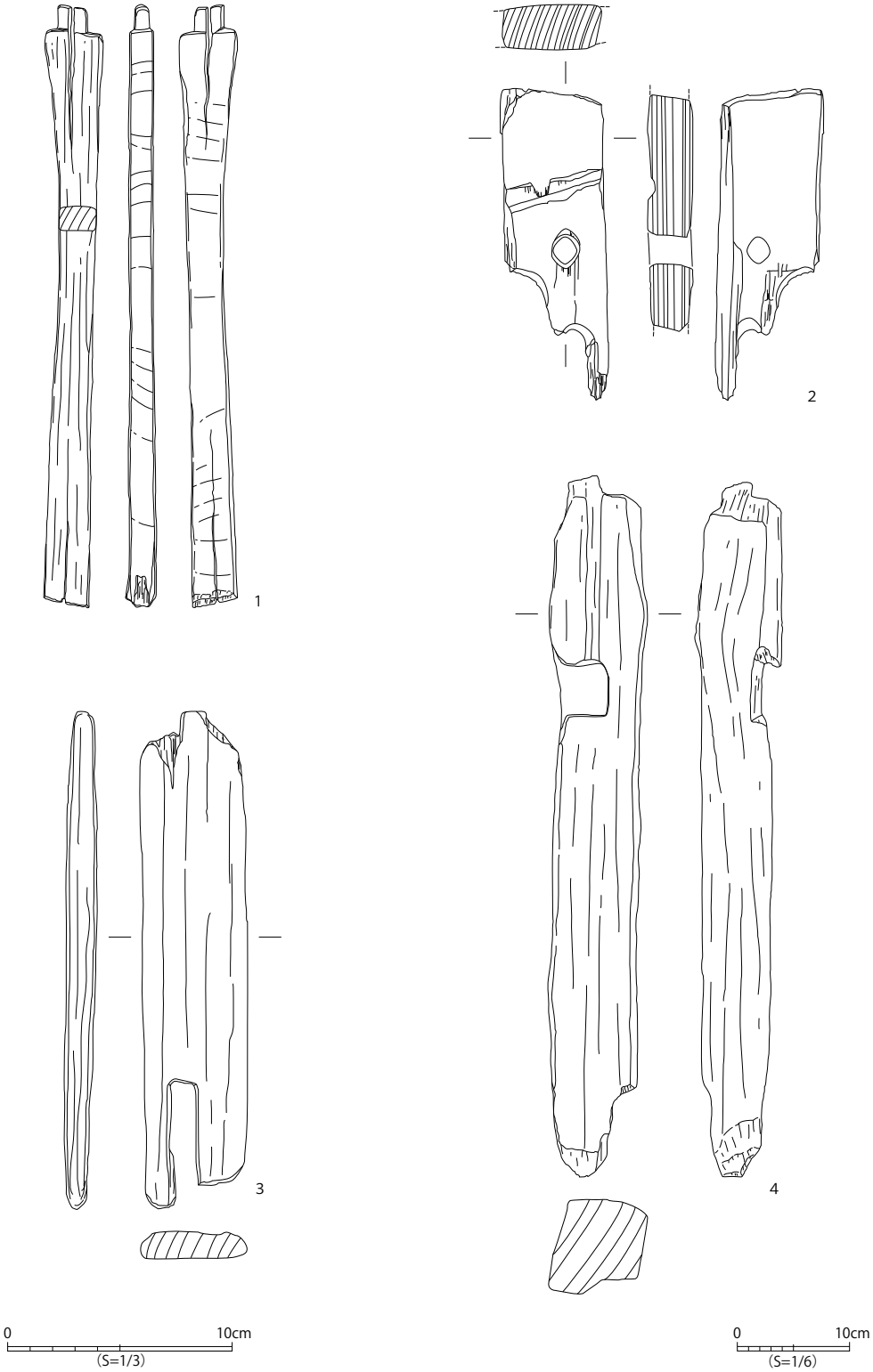
第 84 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 10（S=1/2）



第 85 図　御崎谷遺跡　包含層出土遺物実測図 11（1 ～ 10：S=1/2、11 ～ 14：S=1/3）



第 86 図　御崎谷遺跡　包含層出土木製品実測図１（１・２・６：S=1/6、３～５：S=1/3）



第 87 図　御崎谷遺跡　包含層出土木製品実測図２（1・4：S=1/6、2・3：S=1/3）

第 81 図 1 ～ 10 は蓋である。1 ～ 3 は天井部との境に稜を有するもので、口縁端部は内側に段をもつ。4 は天井部との境に 2 条の沈線を施して鈍い稜を作り出している。5 ～ 7 は稜及び沈線の無いタイプである。8 は天井部を欠損しているが低い天井部であったと思われる。9・10 はかえりを有するタイプで 10 は天井部に扁平な宝珠状のつまみが付く。11 ～ 26 は坏である。21 までは立ち上がりを有するタイプで、11 ～ 13 は長めの立ち上がりをもち、端部は段をなす。14 ～

18はやや短く内傾する立ち上がりで、端部は丸みをもつ。19～21は短い立ち上がりのものである。22は平らな底部から内湾気味にのびる口縁部をもつ。23～26は高台付き坏で23は高台が高く大きく開くが、その他は下方向に低く開くタイプである。24の口縁部は高台から直線的にのびている。27は皿で広い底部から短くのびる口縁部をもつ。28～30は三角形もしくは刻み目状の透かしを有する高坏の脚部である。第82図1～3は壺である。1は体部のみで扁平な形状を呈し、肩部から胴部中央にかけて波状文とカキ目を施している。2は口縁端部と底部を欠損しているが、1と同様に扁平な体部である。口縁部外面に波状文、肩部外面に2条の沈線とその間に刺突文を施す。3は体部のみで扁平な形状を呈し、肩部外面に波状文を施している。4～7は長頸壺である。4・5は外傾して長くのびる口縁部で、4は肩部のよく張る体部をもつ。6・7はやや直立気味にのびる口縁部で、7の外面には波状文を施す。8は横瓶の口縁部で外反気味に長くのびる。9～12は短くのびる壺口縁部である。13は壺底部である。14～16は甕の口縁部で大きく外反してのびるタイプである。16の外面には波状文を施している。

（5）土製品（第83～85図4）

第83図1～3は2方向の突起をもつ土製支脚で、1・2の背面には円孔が施されている。3は下方を欠損している。4は鞴の羽口である。第84図1～9は双孔棒状土錘である。1～4の4点は完形品で、両端に5㎜程度の円孔を穿っている。5～9は一端を欠損しているが、端部に円孔が穿たれている。第84図10～第85図4は管状土錘である。10～14は柱状を呈するものであるが、14は若干小さめである。15～18はやや短い楕円形状を呈し、第85図1～4は円形状を呈するものである。

（6）石製品（第85図5～14）

5は平面形が楕円形もしくは隅丸長方形状を呈し、中央に3㎜の円孔を穿つもので、有孔円盤であろうか。6～10は紡錘車で10は未製品と考えられる。6・7は外面に三角文と鋸歯文を施している。8は上面の一部が欠損しているが無文のものである。9は欠損が著しいが上面に三角文が残っている。11～13は半分程度欠損している砥石である。11・12は使用面が4面、13は2面でいずれも鉄器刃先による傷と思われる痕跡が残っている。14は敲石で半分を欠損するが、側面に敲打痕が残る。

（7）木製品（第86～87図）

第86図1は農具の横鍬で、身の中央やや上方に柄を受けるための長方形状の柄孔が穿たれている。刃部は欠損部分もあるが鋸歯のように六つの歯をもつ。2は農具の横槌状木製品で、敲打部の断面形状は円形を呈し、上面、側面に面取りが認められる。3は容器の椀で口縁部と高台を欠損する。内外面に漆が塗られている。4は容器の曲物底板で半分を欠損するが、やや厚い作りである。5は雑具の棒状木製品で先端を尖らせている。6～第87図は部材でほぞ孔などが認められ、他の部材と組み合わせて用いられたものと考えられる。

第4節　小　結

今回の調査では加工段や掘立柱建物跡と土坑状遺構、縄文時代～古代にかけての土器が多量に出土した。検出された遺構は極めて少なく、明確な時期を押さえられたものも稀少であったが、遺構

に比べ遺物量は膨大であり、特に古墳時代前期～中期の土器が圧倒的多数を占めていることが注目される。このことは当該期に大規模な集落がこの地に営まれていたことを物語っており、従来不明瞭であった出雲平野における古墳時代中期前後の集落の様相を知る上で貴重な成果と言える。この成果を踏まえ当遺跡における集落の様相を検討してみたいが、遺構が少ない現状では明確に知ることはできない。よって出土遺物を中心にしながら当遺跡の集落の様相について簡単に整理してまとめとしたい。

遺物の出土総量はコンテナ約 200 箱以上と膨大な量であり、縄文時代晩期から平安時代にかけての遺物が出土している。縄文時代晩期の土器は僅かであるがＥ４・５、Ｆ４・５グリッドに集中して出土しており、ピット内から出土したものも若干認められるものの、当該期の明確な遺構は確認できていない。しかしこのことは、この時期に集落が形成され始めたことが窺える貴重な資料と言える。

弥生時代前期に属する土器は今のところ認められず、縄文時代に形成され始めた集落は一時途絶えるか、調査区外の丘陵縁辺部に集落が営まれていた可能性も考えられる。弥生時代中期以降になると遺物は徐々に出土するようになり、集落が存在していたことが窺えるが、それは極めて小規模なものであったと推察される。後期になると遺物は増加する傾向にある。建物跡等は検出できなかったが、集落は安定しつつあったと考えられ、ＳＸ０１などの土坑状遺構がこの時期に形成されている。

古墳時代に入ると遺物の量は飛躍的に増大する。これらの土器の多くは土器だまり出土のものが中心となり、ほぼ完形品に復元できるものも多く認められた。この土器だまりはその器種構成から通常の廃棄行為ではなく、何らかの祭祀行為によって形成されたものと考えられるが、この土器だまり下層には河道などは認められず、前述したＳＸ０１が存在していただけである。その状況からこのＳＸ０１が祭祀の対象であったことも想定可能であるかもしれない。今後他の事例を踏まえ検討課題としておきたい。この他にこの時期の遺構としては古墳時代前期の加工段５と古墳時代後期の加工段３・４が検出されているだけである。しかしながら土器だまりを中心とする多量の土器から推測すれば、当該期に大規模な集落が展開されていたものと考えられる。また、出土遺物の中には須恵器模倣土師器や外来系須恵器なども僅かであるが認められ、当集落の特色を示しているかもしれない。

奈良時代～平安時代の遺物も一定量認められ、遺構としては加工段１・２が確認されている。集落としてはやや縮小傾向にあるが継続して営まれていたと考えられる。

中世になると遺構、遺物はほとんど認められず、集落は衰退もしくは移動したものと推測される。

以上のように御崎谷遺跡の集落の変遷について簡単ではあるが検討してみた。隣接する九景川遺跡でも同じ傾向がみられることから、九景川遺跡から御崎谷遺跡の範囲を同一の集団、集落として捉えて再度検討していく必要があると思われる。

参考文献

島根県教育委員会『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』2008

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
19-6	加工段4	土師器	甕	16.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	2mm以下の雲母、石英を若干含む	
19-7	加工段4	土師器	甕	16.0	4.0		ナデ	ナデ		茶褐色	2mm以下の砂粒を微量に含む	
19-8	加工段4	土師器	鉢	16.7			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		にぶい橙色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	
19-9	加工段4	土師器	直口壺	12.0			ナデ、ハケ目、ヘラミガキ	ヘラミガキ		にぶい黄橙色	1mm大の雲母、石英を若干含む	
19-10	加工段4	土師器	高坏	16.4	9.9	10.0	面取り、磨滅	磨滅		浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
19-11	加工段4	土師器	高坏	16.0			磨滅	磨滅		浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	内外面共に赤彩
19-12	加工段4	土師器	高坏			10.2	磨滅	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm大の雲母、石英を若干含む	
19-13	加工段4	土師器	高坏		6.4	9.0	磨滅	磨滅		淡黄褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
19-14	加工段4	弥生土器	器台				ナデ	ナデ		白色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
20-1	加工段4	土師器	甑					ヘラケズリ		淡橙褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	
20-2	加工段4	土師器	甑	25.8			ナデ、指頭圧痕	ナデ、ヘラケズリ		橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
20-3	加工段4	土師器	甑			13.8	磨滅	ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以上の雲母、石英を若干含む	
20-4	加工段4	土師器	甑			12.4	ハケ目	ヘラケズリ		淡黄色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
20-5	加工段4	土師器	甑				ナデ、ヘラケズリ			橙色	1mm以上の石英を多く含む	
20-6	加工段4	土師器	甑				ナデ、ヘラケズリ	磨滅		浅黄橙色	1mm大の石英を含む	
20-7	加工段4	土師器	小形丸底壺	5.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		にぶい橙色	1mm以下の石英を若干含む	
20-8	加工段4	土製品	手捏ね土器							灰黄色	1mm大の雲母、石英を若干含む	
20-9	加工段4	土製品	手捏ね土器	7.7	4.8		磨滅	磨滅		浅黄色	2mm以下の石英を多く含む	
21-1	加工段4	須恵器	蓋	14.4	4.1		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	内外面共に沈線	灰白色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
21-2	加工段4	須恵器	蓋	12.8	3.7		回転ナデ、ヘラキリ後ヘラナデ	回転ナデ		灰白色	1mm大の砂粒を若干含む	
21-3	加工段4	須恵器	蓋	11.8			回転ナデ	回転ナデ		青灰色	1mm大の砂粒を若干含む	ヘラ記号あり
21-4	加工段4	須恵器	蓋	11.5	4.6		回転ナデ	回転ナデ		明青灰色	1mm大の砂粒を若干含む	擬宝珠
21-5	加工段4	須恵器	蓋	8.5	2.7		回転ナデ	回転ナデ		赤灰色	1mm大の砂粒を若干含む	擬宝珠
21-6	加工段4	須恵器	蓋		2.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	1mm大の石英を若干含む	
21-7	加工段4	須恵器	坏	11.3	3.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm大の石英を若干含む	
21-8	加工段4	須恵器	坏	11.0	4.1		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm大の砂粒を若干含む	
21-9	加工段4	須恵器	坏	10.2	3.8		回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm大の砂粒を若干含む	2ヶ所に三角形の透かしあり
21-10	加工段4	須恵器	高坏(有蓋)	11.8			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	1mm大の石英を若干含む	
21-11	加工段4	須恵器	高坏	13.4			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm大の石英を含む	釉付着
21-12	加工段4	須恵器	長頸壺	9.4			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm大の石英を若干含む	
21-13	加工段4	須恵器	短頸壺	20.4			ナデ	ナデ		灰白色	1mm大の石英を多く含む	
21-14	加工段4	須恵器	壺			16.6	回転カキ目、ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm大の石英を多く含む	
21-15	加工段4	須恵器	横瓶	9.7			回転ナデ、タタキ	ナデ、タタキ		灰色	2mm以下の砂粒を微量に含む	
21-16	加工段4	土製品	土錘(球形)	4.3	4.3					にぶい黄橙色	1mm大の石英を含む	
21-17	加工段4	土製品	土錘	4.3	3.9		ナデ			橙色	2mm以下の石英を多く含む	
21-18	加工段4	土製品	土錘	5.1	4.1		ナデ			灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
21-19	加工段4	土製品	土錘	3.0	3.1		ナデ			灰白色	2mm 大の砂粒を若干含む	
22-1	加工段4	土製品	支脚	15.6	14.7	11.5				浅黄色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
22-2	加工段4	土製品	支脚	16.5	11.3	6.6				にぶい黄褐色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
22-3	加工段4	土製品	支脚	11.2	11.6	5.9	ナデ			黄褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
24-1	加工段5	土師器	甕	15.6	12.3		磨滅	ヘラケズリ、磨滅		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	
24-2	加工段5	土師器	甕	16.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰黄褐色	1mm 大の雲母、石英を多く含む	
24-3	加工段5	土師器	甕	15.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		灰白色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	
24-4	加工段5	土師器	甕	18.0			ナデ	ナデ		黄褐色	1mm 大の石英を若干含む	
24-5	加工段5	土師器	甕	13.6			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	刺突文	浅黄橙色	1mm 大の雲母、石英を若干含む	内外面共に赤彩
24-6	加工段5	土師器	甕	13.6			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm 大の石英を若干含む	
24-7	加工段5	土師器	甕	11.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm 以下の石英を多く含む	
24-8	加工段5	土師器	甕	14.2	11.7		ハケ目、磨滅	磨滅		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を多く含む	布留系
24-9	加工段5	土師器	甕	17.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm 大の石英を若干含む	布留系
24-10	加工段5	土師器	甕	15.6	6.8		磨滅	ナデ、ヘラケズリ		茶褐色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	
24-11	加工段5	土師器	甕	29.6			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		明褐色	1mm 以下の石英を若干含む	
24-12	加工段5	土師器	甕	30.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目		灰黄褐色	1mm 以上の石英を若干含む	
24-13	加工段5	土師器	甕	21.2			ナデ	ナデ		灰白色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	
25-1	加工段5	土師器	壺				ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		灰白色	1mm 大の雲母、石英を若干含む	
25-2	加工段5	土師器	直口壺	14.0			ナデ、ハケ目、ミガキ	ナデ、ヘラミガキ		黄褐色	1mm 大の石英を含む	内外面共に赤彩
25-3	加工段5	土師器	直口壺	10.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		明黄褐色	1mm 大の石英を若干含む	内外面共に赤彩
25-4	加工段5	土師器	高坏	17.6			ナデ	ナデ		明橙褐色	1mm 大の石英を若干含む	
25-5	加工段5	土師器	高坏	18.0	5.6		磨滅	磨滅		暗黄褐色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	
25-6	加工段5	土師器	高坏			8.4	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm 大の石英を多く含む	
25-7	加工段5	土師器	低脚坏	16.9	5.3	5.0	ナデ	ナデ、ハケ目		浅黄橙色	1mm 大の雲母、石英を若干含む	
25-8	加工段5	土師器	低脚坏			10.8	ナデ	ナデ		浅黄橙色	2mm 以下の雲母、石英を多く含む	内外面共に赤彩
25-9	加工段5	土師器	坏	12.6	3.1		磨滅	ヘラミガキ、磨滅		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
25-10	加工段5	土師器	器台				磨滅	磨滅		黄褐色	4mm 以下の砂粒を多く含む	
25-11	加工段5	土師器	甑	26.6	17.5		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		黄褐色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	
25-12	加工段5	土師器	甑			12.0	ナデ	ヘラケズリ		外面:淡褐色 内面:淡橙褐色	1mm 大の雲母、石英を若干含む	
25-13	加工段5	土師器	手捏ね土器	7.3	4.8	3.0	ナデ	ハケ目、指頭圧痕		オリーブ黄色	1mm 以下の石英を微量に含む	
26-1	加工段5	須恵器	蓋	9.0	3.7		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	砂粒を若干含む	
26-2	加工段5	須恵器	蓋	10.6	4.8		回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の砂粒を若干含む	底部内面に竹管
26-3	加工段5	須恵器	蓋	14.4	1.6		回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
26-4	加工段5	須恵器	坏	14.0	4.1		回転ナデ、静止糸切り	ナデ		暗赤茶色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	
26-5	加工段5	須恵器	坏	14.0	3.2		回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
26-6	加工段5	須恵器	高台付坏	13.4	4.9	9.0	回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
26-7	加工段5	須恵器	高台付坏	10.4	4.3	6.8	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ		灰白色	1mm 大の砂粒を若干含む	
26-8	加工段5	須恵器	高台付坏			10.2	回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm大の雲母、石英を若干含む	
26-9	加工段5	須恵器	高台付坏			7.0	回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
26-10	加工段5	須恵器	皿	15.0	3.3	11.4	磨滅	磨滅		淡灰白色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
26-11	加工段5	須恵器	甕	24.0	6.2		回転ナデ	回転ナデ		黒灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
26-12	加工段5	須恵器	甕	13.2			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の石英を若干含む	釉付き
26-13	加工段5	須恵器	高台付壺				回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 大の石英を若干含む	
26-14	加工段5	須恵器	甕	28.8	21.7		回転ナデ、平行タタキ	回転ナデ、タタキをナデ消している		暗灰色	密	外来系
26-15	加工段5	土製品	土錘	4.0	3.8					にぶい黄橙色	雲母、石英を含む	
26-16	加工段5	石器	石鏃	2.2	1.8	0.3				黒灰色		サヌカイト
29-1	加工段6	土師器	甕	14.4			磨滅	磨滅		橙褐色	1mm 以上の砂粒を若干含む	
29-2	加工段6	土師器	坏			9.0	ナデ、ヘラ状工具によるナデ	ナデ		黒色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩、内面に黒斑あり
29-3	加工段6	土師器	碗	13.6	4.0		ナデ、ハケ目	ヘラミガキ、磨滅		橙褐色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	内外面共に赤彩
29-4	加工段6	土師器	手捏ね土器	9.0	6.8		指頭圧痕	指頭圧痕		暗褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
29-5	加工段6	須恵器	高台付坏			8.4	回転ナデ	回転ナデ		青灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	
29-6	加工段6	須恵器	皿	13.2	2.4		ナデ、回転ナデ	回転ナデ		灰色	3mm 以下の砂粒を微量に含む	
29-7	加工段6	須恵器	甕				回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	透かしあり
29-8	加工段6	須恵器	甕		9.1	12.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
29-9	加工段6	土製品	棒状土錘	5.3	1.9					橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
31-1	加工段7	土師器	甕	14.6	2.4		ナデ	ナデ、ヘラミガキ		外面:橙褐色 内面:淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	外面に赤彩
31-2	加工段7	土師器	甕	14.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡橙褐色	1mm 以下の石英を若干含む	
31-3	加工段7	土師器	甕	17.0	7.0		磨滅	ヘラケズリ、磨滅		外面:淡赤橙色 内面:淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
31-4	加工段7	土師器	甕	25.6			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		橙白色	1mm 大の石英を若干含む	
31-5	加工段7	土師器	甕	14.0	6.8		ナデ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		橙白色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
31-6	加工段7	土師器	坏	14.6	4.3		ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラミガキ		橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
31-7	加工段7	土師器	碗	10.8	5.4		ヘラケズリ、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		黄褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
31-8	加工段7	土師器	碗	13.4	6.3		ヘラケズリ、磨滅	磨滅		淡黄褐色	1.5mm 以下の砂粒を微量に含む	
31-9	加工段7	土師質土器	高台付坏			6.3	ナデ	ナデ、回転糸切り		浅黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
31-10	加工段7	土師器	甑	26.6	17.6		ナデ、ハケ目	ヘラケズリ後ナデ、磨滅	竹管文	黄褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
31-11	加工段7	土師器	甑				磨滅	磨滅		橙白色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
32-1	加工段7	土師器	甑				磨滅	ヘラケズリ		橙白色	1mm 大の砂粒を含む	
32-2	加工段7	土師器	甑				磨滅	磨滅		明橙褐色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	
32-3	加工段7	土師器	甑				磨滅	磨滅		橙白色	1mm 以下の石英を多く含む	
32-4	加工段7	土師器	移動式竈				ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、ハケ目		橙白色	1mm以上の雲母、石英を若干含む	
32-5	加工段7	土師器	手捏ね土器	4.6	2.3		ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
32-6	加工段7	土製品	勾玉型				磨滅	磨滅		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
32-7	加工段7	須恵器	坏	11.8	3.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の砂粒を若干含む	受部径：14.2
32-8	加工段7	須恵器	坏	13.2	4.4		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	2mm 以下の石英を微量に含む	受部径：15.6
32-9	加工段7	須恵器	坏	12.2	4.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	2mm 以下の砂粒を多く含む	受部径：14.9
32-10	加工段7	須恵器	坏	12.6			回転ナデ	回転ナデ		青灰色	1mm 大の石英を若干含む	
34-1	SK01	弥生土器	甕	14.2	3.4		磨滅		擬凹線	外面:暗茶色 内面:橙褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
34-2	SK01	弥生土器	甕	14.6	3.9		磨滅			淡褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
34-3	SK01	弥生土器	甕	12.8	2.4		ヨコナデ	ヨコナデ		茶褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
34-4	SK01	弥生土器	甕				磨滅	磨滅		淡褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
34-5	SK01	弥生土器	甕				ヨコナデ	ヨコナデ		橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
44-1	P108	縄文土器	深鉢	19.4	14.8		条痕文	条痕文		暗白黄茶色	4mm 以下の砂粒を多く含む	
44-2	P280	縄文土器	鉢	16.8					刻目突帯文	淡黄白色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
48-1	SX01	弥生土器	甕	13.0			ナデ	ナデ	擬凹線	灰白色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
48-2	SX01	土師器	甕	15.1			ナデ、磨滅	ヘラケズリ		にぶい褐色	2mm 以下の石英を多く含む	
48-3	SX01	土師器	甕	16.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm 大の石英を多く含む	
48-4	SX01	土師器	甕	15.8			ナデ	ナデ		にぶい黄橙色	1mm 大の石英を多く含む	
48-5	SX01	土師器	甕	15.8			ナデ	ナデ		にぶい黄橙色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
48-6	SX01	土師器	甕	14.5	24.9		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	煤痕
48-7	SX01	土師器	甕	15.8	22.8		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、ハケ目		暗黄灰色	3mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕
48-8	SX01	土師器	甕	16.0			ナデ、ハケ目	指頭圧痕、ヘラケズリ、ナデ		灰白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	外面に煤痕
48-9	SX01	土師器	甕	16.4	8.9		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡黄灰色	1mm以上の雲母、石英を多く含む	
48-10	SX01	土師器	甕	15.2			ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
48-11	SX01	土師器	甕	15.6			磨滅、指頭圧痕	ナデ、ヘラケズリ		橙色	1mm大の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕
49-1	SX01	木製品	鉢			4.5						
49-2	SX01	木製品	曲物の底板	21.4	4.6	0.9						
49-3	SX01	木製品	棒状木製品	38.2	2.9	3.4						
49-4	SX01	木製品	棒状木製品	66.1	4.0	3.3						
49-5	SX01	木製品	棒状木製品	15.8	3.7	3.5						
49-6	SX01	木製品	部材	92.1	8.3	3.5						
51-1	SK03	土師器	壺	27.0	12.9		ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ		淡灰褐色	1mm 以下の雲母、石英多く含む	頭部に突帯がめぐる
51-2	SK03	土師器	甕	15.5			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
51-3	SK05	土師器	壺	22.0			ナデ	ナデ		暗灰黄色	雲母、石英を微量に含む	内面に煤痕
51-4	SK05	土師器	高坏	14.8	9.9		ナデ、ハケ目、面取り	ハケ目、ヘラケズリ		暗灰茶色	2mm以下の雲母、石英を多く含む	
51-5	SK05	土師器	甕	14.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	外面に煤痕
51-6	SK06	土師器	甕	13.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	刺突文	浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	外面に煤痕
51-7	SK06	土師器	甕	15.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
51-8	SK06	土師器	甕	12.8	9.5		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		外面:明褐色 内面:暗灰色	1mm 以下の雲母、石英を多く含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
51-9	SK06	土師器	甕	15.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		橙白色	2mm以下の雲母、石英を多く含む	
51-10	SK06	土師器	甕	16.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
51-11	SK06	土師器	甕	15.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以上の石英を多く含む	外面に煤痕
51-12	SK06	土師器	甕	15.7			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の雲母を微量に含む	外面に煤痕
54-1	土器だまり	弥生土器	甕	24.0	10.3		磨滅	ハケ目、ヘラケズリ	擬凹線、刺突文	橙褐色	4mm以下の砂粒を多く含む	
54-2	土器だまり	弥生土器	甕	15.8	7.1		ナデ	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	擬凹線	黄褐色	2.5mm以下の砂粒を若干含む	
54-3	土器だまり	弥生土器	甕	17.6	5.8		ナデ	ナデ、ヘラミガキ	波状文	橙褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	
54-4	土器だまり	弥生土器	甕	17.8	23.2		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		淡橙褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
54-5	土器だまり	弥生土器	甕	15.0	7.0		ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡黄褐色	1mm以下の砂粒を若干含む	
54-6	土器だまり	弥生土器	甕	14.0	12.6		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅	3条の平行沈線	淡黄褐色	3mm以下の砂粒を微量に含む	
54-7	土器だまり	土師器	甕	28.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	波状文	灰白色	雲母、石英を多く含む	口縁外面に黒斑
55-1	土器だまり	土師器	甕	14.2	23.0		磨滅	ヘラケズリ、指頭圧痕、磨滅		淡黄褐色	1mm以下の砂粒を若干含む	
55-2	土器だまり	土師器	甕	16.4	19.3		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		暗黄灰色	1mm以下の砂粒を若干含む	
55-3	土器だまり	土師器	甕	12.6	7.7		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡灰褐色	1mm以下の砂粒を若干含む	
55-4	土器だまり	土師器	甕	12.2	9.5		磨滅	ヘラケズリ、磨滅		外面:橙褐色 内面:淡灰色	2.5mm以下の石英を多く含む	
55-5	土器だまり	土師器	甕	13.6	12.0		ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		淡黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
55-6	土器だまり	土師器	甕	13.6	19.9		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		淡黄褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
55-7	土器だまり	土師器	甕	14.8	7.8		ハケ目、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		淡灰褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
55-8	土器だまり	土師器	甕	14.2	10.1		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		橙白色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	
55-9	土器だまり	土師器	甕	10.2	6.8		磨滅	ヘラケズリ、磨滅		橙褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
56-1	土器だまり	土師器	甕	15.6	15.7		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡橙褐色	1mm前後の雲母、石英を若干含む	
56-2	土器だまり	土師器	甕	17.2	29.0		ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		暗褐色	1mm以下の砂粒を若干含む	
56-3	土器だまり	土師器	甕	16.4	4.6		ナデ	ナデ、ヘラケズリ		黄灰色	1mm以下の砂粒を多く含む	
56-4	土器だまり	土師器	甕	14.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡灰褐色	1mm以下の砂粒を若干含む	
56-5	土器だまり	土師器	甕	12.8	13.3		ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		暗黄茶色	3mm以下の雲母、石英を多く含む	
56-6	土器だまり	土師器	甕	14.6	10.0		ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡黄白色	1mm以下の石英、長石を多く含む	
56-7	土器だまり	土師器	甕	14.0	8.2		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡黄橙色	5mm以下の石英、長石を多く含む	
56-8	土器だまり	土師器	甕	17.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		灰白色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
56-9	土器だまり	土師器	甕	15.0	10.8		ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		明黄褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
57-1	土器だまり	土師器	甕	15.0	14.8		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡黄灰色	3mm以下の砂粒を多く含む	
57-2	土器だまり	土師器	甕	17.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	
57-3	土器だまり	土師器	甕	19.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	石英を含む	
57-4	土器だまり	土師器	甕	19.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を若干含む	
57-5	土器だまり	土師器	甕	15.4	16.9		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、指頭圧痕、磨滅		明黄褐色	2mm以下の砂粒を微量に含む	
57-6	土器だまり	土師器	甕	14.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		灰白色	1mm大の雲母、石英を多く含む	
57-7	土器だまり	土師器	甕	16.2	12.6		ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡黄白色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
57-8	土器だまり	土師器	甕	16.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
57-9	土器だまり	土師器	甕	16.5			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	外面に煤痕、黒斑
58-1	土器だまり	土師器	甕	19.4	18.0		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		淡黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
58-2	土器だまり	土師器	甕	18.0	29.8		ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ		淡黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	
58-3	土器だまり	土師器	甕	16.6	20.9		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		黄褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
58-4	土器だまり	土師器	甕	14.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕
58-5	土器だまり	土師器	甕	13.0	20.5		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		黄灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	外面に煤痕
58-6	土器だまり	土師器	甕	13.6	17.2		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
59-1	土器だまり	土師器	甕	14.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡黄褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	
59-2	土器だまり	土師器	甕	16.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡黄色	1mm大の雲母、石英を多く含む	外面に黒斑
59-3	土器だまり	土師器	甕	17.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕?		浅黄橙色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	外面に黒斑、赤彩
59-4	土器だまり	土師器	甕	14.2			ナデ、ハケ目	ヘラケズリ、ハケ目? 指頭圧痕?		にぶい黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕、黒斑
59-5	土器だまり	土師器	甕	18.0	9.0		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		暗黄褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
59-6	土器だまり	土師器	甕	13.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕
59-7	土器だまり	土師器	甕	15.0	8.4		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		黄褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
60-1	土器だまり	土師器	甕	32.6	32.0		ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		橙褐色	2mm以下の砂粒を含む	
60-2	土器だまり	土師器	甕	13.6	17.6		ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		暗灰褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
60-3	土器だまり	土師器	甕	18.1			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		橙色	2mm以上の雲母、石英を多く含む	
60-4	土器だまり	土師器	甕	20.8	22.4		ナデ、ヘラケズリ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		暗黄褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
60-5	土器だまり	土師器	注口				ナデ、ハケ目			灰褐色	1mm大の石英を多く含む	外面に黒斑
60-6	土器だまり	土師器	注口				磨滅			淡黄白色	1mm以下の石英を若干含む	
61-1	土器だまり	土師器	壺	24.0	13.9		ナデ、ハケ目、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	平行沈線	橙白色	1mm以下の雲母、石英を含む	頸部に突帯あり
61-2	土器だまり	土師器	壺				磨滅	ヘラケズリ、指頭圧痕		橙白色	1mm以下の砂粒を多く含む	
61-3	土器だまり	土師器	壺	25.6			ナデ	ナデ、指頭圧痕	竹管文	橙白色	1mm大の雲母、石英を若干含む	黒斑あり
61-4	土器だまり	土師器	壺	18.2			磨滅	磨滅		橙白色	1mm大の砂粒を多く含む	
61-5	土器だまり	土師器	壺	28.6	13.5		ナデ	ナデ、ヘラケズリ		明黄褐色	1mm前後の雲母、石英を含む	外面に黒斑
61-6	土器だまり	土師器	壺	22.4	27.1		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕	沈線、羽状文	淡黄白色	2mm以下の砂粒を若干含む	
62-1	土器だまり	土師器	壺	28.2			ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に黒斑、内面に煤痕あり
62-2	土器だまり	土師器	壺	21.0	10.6		ナデ、ハケ目? 磨滅	ナデ、ヘラケズリ	平行沈線	淡橙褐色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	
62-3	土器だまり	土師器	壺	18.2	38.2		ナデ、ハケ目	ナデ、指頭圧痕		浅黄橙色	雲母、石英を含む	底部に黒斑
63-1	土器だまり	土師器	壺	18.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰黄色	1mm大の雲母、石英を含む	外面に黒斑
63-2	土器だまり	土師器	壺	18.4	39.0		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡橙褐色	1mm大の雲母、石英を若干含む	外面に黒斑
64-1	土器だまり	土師器	壺	18.8	10.9		磨滅	ヘラケズリ、磨滅		橙褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
64-2	土器だまり	土師器	小形直口壺	14.0	10.5		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡黄褐色	2mm以下の砂粒を若干含む	
64-3	土器だまり	土師器	小形直口壺	10.0			ナデ? ハケ目? 磨滅	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡橙褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	
64-4	土器だまり	土師器	小形直口壺	9.6	14.6		ナデ	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕、赤彩、黒斑あり

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
64-5	土器だまり	土師器	小形壺	11.8	14.9		ナデ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm 以上の砂粒を多く含む	
64-6	土器だまり	土師器	小形丸底壺	8.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡黄～淡灰褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	外面に煤痕
64-7	土器だまり	土師器	小形丸底壺	10.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡灰白色	1mm 大の砂粒を含む	
64-8	土器だまり	土師器	小形丸底壺	10.6			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に黒斑
64-9	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.8	10.9		ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		灰白色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に黒斑
64-10	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.7	11.4		ナデ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		橙色	2mm以下の雲母、石英を多く含む	外面に黒斑
64-11	土器だまり	土師器	小形丸底壺	6.0			ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラケズリ		暗褐色	1mm 以下の石英を多く含む	
64-12	土器だまり	土師器	小形丸底壺	7.8	9.3		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		浅黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
64-13	土器だまり	土師器	小形丸底壺	10.0	9.6		ナデ、ハケ目、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		淡橙褐色～橙褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	外面に煤痕
64-14	土器だまり	土師器	小形丸底壺	8.0	10.2		ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	1ヶ所穿孔あり
64-15	土器だまり	土師器	小形丸底壺	10.8	9.2		ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		灰白色	2mm 以下の雲母、石英を多く含む	
65-1	土器だまり	土師器	小形丸底壺	7.6	9.3		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm 以下の砂粒を多く含む	外面に黒斑
65-2	土器だまり	土師器	小形丸底壺	7.2	9.2		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		橙色	1mm 以上の石英を若干含む	
65-3	土器だまり	土師器	小形丸底壺	6.4	8.4		ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		淡黄色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に黒斑
65-4	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.0	9.1		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		灰白色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に赤彩、黒斑あり
65-5	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.2	10.4		ナデ	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		にぶい橙色	1mm 大の石英を含む	外面に黒斑
65-6	土器だまり	土師器	小形丸底壺	8.3	9.5		ナデ、ハケ目、指頭圧痕?	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		浅黄橙色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	外面に煤痕、黒斑内面に煤痕あり
65-7	土器だまり	土師器	小形丸底壺	4.3	8.5		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		灰白色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
65-8	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.2	8.7		ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		浅黄色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	外面に黒斑
65-9	土器だまり	土師器	小形丸底壺	5.8	7.0		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰黄色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	外面に黒斑
65-10	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	外面に黒斑
65-11	土器だまり	土師器	小形丸底壺	8.3			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		橙褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
65-12	土器だまり	土師器	小形丸底壺	6.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		黒色	1mm 大の砂粒を微量に含む	
65-13	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.1			ナデ、ハケ目	ハケ目、指頭圧痕		明橙褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
65-14	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.5			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		赤褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
65-15	土器だまり	土師器	小形丸底壺	7.0			磨滅	磨滅		淡褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
65-16	土器だまり	土師器	小形丸底壺	7.8			磨滅	磨滅、指頭圧痕		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
65-17	土器だまり	土師器	小形丸底壺	10.8			ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ		暗灰色	1mm 以下の石英を多く含む	
65-18	土器だまり	土師器	小形丸底壺	9.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡褐色	1mm 以上の石英を若干含む	
65-19	土器だまり	土師器	小形丸底壺	5.3			ナデ、指頭圧痕	ヘラケズリ、指頭圧痕		オリーブ黒色	2mm 以下の石英を多く含む	
65-20	土器だまり	土師器	小形丸底壺	5.8	6.0		ナデ、指頭圧痕	ナデ、ヘラケズリ		灰色	1mm大の雲母、石英を多く含む	外面に黒斑
65-21	土器だまり	土師器	小形丸底壺	5.6			ナデ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		淡黄灰色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
65-22	土器だまり	土師器	小形丸底壺	6.4			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
65-23	土器だまり	土師器	小形丸底壺				ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡黄灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
65-24	土器だまり	土師器	小形丸底壺				ナデ、ハケ目	ナデ、指頭圧痕		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	外面に黒斑
65-25	土器だまり	土師器	小形丸底壺				ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		明橙褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
65-26	土器だまり	土師器	甕				磨滅	ヘラケズリ		明橙褐色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
65-27	土器だまり	土師器	手捏ね土器	4.5	4.3		ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕		オリーブ黒色	1mm 大の石英を多く含む	
66-1	土器だまり	土師器	甑	27.4	15.4		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		黄褐色	3mm 以下の砂粒を多く含む	
66-2	土器だまり	土師器	碗	10.2	6.5		磨滅	磨滅		暗灰色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
66-3	土器だまり	土師器	碗	14.0	4.8		ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目		暗橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
66-4	土器だまり	土師器	坏	15.4	4.0		ヘラケズリ、磨滅	磨滅		赤褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
66-5	土器だまり	土師器	碗	12.2	5.2		磨滅	磨滅		橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に一部赤彩
66-6	土器だまり	土師器	坏	11.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ		淡黄褐色	1mm 大の石英を若干含む	内外面共に赤彩
66-7	土器だまり	土師器	坏	11.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ		淡褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	外面に一部赤彩内面に赤彩
66-8	土器だまり	土師器	坏	13.4	3.3	6.0	回転ナデ、ヘラキリ	回転ナデ		橙色	2mm 以下の石英を若干含む	
66-9	土器だまり	土師器	坏	12.2	3.1	4.0	ナデ、回転ヘラキリ	ナデ		淡黄褐色	1mm 大の砂粒を含む	内外面共に赤彩
66-10	土器だまり	土師器	高坏		12.4	11.0	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
66-11	土器だまり	土師器	高坏	20.4	13.6	13.2	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	脚部内面に一部赤彩
66-12	土器だまり	土師器	高坏	25.3	16.4	16.6	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm 以下の砂粒を含む	内外面共に赤彩、外面に黒斑あり
66-13	土器だまり	土師器	高坏	19.8	13.1	12.8	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ヘラケズリ		にぶい橙色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	
66-14	土器だまり	土師器	高坏	22.2	6.8		磨滅	磨滅		橙色	3mm 以下の砂粒を若干含む	
67-1	土器だまり	土師器	高坏	17.4	10.0		磨滅	ヘラミガキ、磨滅		赤橙色	1mm 以下の砂粒を若干含む	内外面共に赤彩
67-2	土器だまり	土師器	高坏	17.2			ナデ、磨滅	ナデ、磨滅		にぶい黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	外面に黒斑
67-3	土器だまり	土師器	高坏	17.4	5.6		ヘラミガキ、ハケ目	ヘラミガキ、ハケ目		黒褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	外面に煤痕
67-4	土器だまり	土師器	高坏	20.0	13.9	10.4	ナデ、ヘラミガキ、指頭圧痕	ナデ、ヘラミガキ		浅黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
67-5	土器だまり	土師器	高坏	17.1	11.1	9.9	ナデ、ハケ目、脚部面取り	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
67-6	土器だまり	土師器	高坏	17.8	7.7		ヘラミガキ、磨滅	ハケ目	内面に暗文	赤橙色	1mm 以下の砂粒を若干含む	内外面共に赤彩
67-7	土器だまり	土師器	高坏	23.0	8.5		ヘラミガキ	ヘラミガキ		赤橙色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	内外面共に赤彩
67-8	土器だまり	土師器	高坏	18.1	12.1	9.3	ナデ、ハケ目、ヘラミガキ	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	脚部に３ヶ所の透かしあり
67-9	土器だまり	土師器	高坏	17.2	13.3	12.0	ナデ、脚部面取り	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡灰褐色	1mm以下の雲母、石英を若干含む	
67-10	土器だまり	土師器	高坏	16.2	14.3	11.7	ナデ、ハケ目、脚部面取り	ナデ、ハケ目		淡橙褐色	1mm大の雲母、石英を若干含む	
67-11	土器だまり	土師器	高坏	15.3	12.7	10.9	磨滅	磨滅		橙褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
68-1	土器だまり	土師器	高坏	17.7			ナデ、脚部面取り	ナデ		にぶい橙色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
68-2	土器だまり	土師器	高坏	17.0	7.8		ヘラミガキ	ヘラケズリ、磨滅		淡黄白色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
68-3	土器だまり	土師器	高坏	18.0			ナデ	ナデ		灰白色	1mm以下の雲母、石英を多く含む	
68-4	土器だまり	土師器	高坏	18.0	4.9		磨滅	磨滅		橙褐色	4mm 以下の砂粒を若干含む	
68-5	土器だまり	土師器	高坏	15.6	5.5		磨滅	磨滅		黄白色	4mm 以下の砂粒を多く含む	
68-6	土器だまり	土師器	高坏	14.4	11.2	8.2	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		明黄褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	外面に赤彩
68-7	土器だまり	土師器	高坏	14.7			ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ		灰白色	1mm大の雲母、石英を若干含む	
68-8	土器だまり	土師器	高坏	15.4	4.8		ハケ目	ナデ	内面に暗文	暗橙褐色	1.5mm 以下の砂粒を微量に含む	
68-9	土器だまり	土師器	高坏	15.4	4.7		ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラミガキ		明黄白色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
68-10	土器だまり	土師器	高坏	12.8	4.7		磨滅	磨滅		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
68-11	土器だまり	土師器	高坏		10.2	11.2	ヘラミガキ、磨滅	磨滅		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
68-12	土器だまり	土師器	高坏		8.4	13.6	磨滅	磨滅		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
68-13	土器だまり	土師器	高坏		8.0	14.0	磨滅	ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		橙褐色	3mm 以下の砂粒を若干含む	
68-14	土器だまり	土師器	高坏		7.3	12.0	磨滅、面取り	ハケ目、ヘラケズリ		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
68-15	土器だまり	土師器	高坏		6.3	10.8	ヘラミガキ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕、しぼり		黄橙色	2.5mm 以下の砂粒若干含む	内外面共に一部赤彩
68-16	土器だまり	土師器	高坏		7.0	10.6	磨滅	磨滅、しぼり		橙褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	脚部に３ヶ所の穿孔あり
68-17	土器だまり	土師器	高坏		6.6	11.0	ハケ目、ヘラミガキ、磨滅	ヘラケズリ		淡橙白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	外面に一部赤彩
68-18	土器だまり	土師器	高坏		4.2	9.6	磨滅	指頭圧痕、磨滅		橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
68-19	土器だまり	土師器	高坏			9.0	ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ		明黄褐色	2mm 以上の砂粒を若干含む	内外面共に赤彩
68-20	土器だまり	土師器	高坏		5.1	10.0	ハケ目、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		明褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	外面に部分的に赤彩痕あり
68-21	土器だまり	土師器	高坏			9.3	面取り、磨滅	ヘラケズリ		明橙褐色	1mm 以上の砂粒を含む	外面に一部赤彩
69-1	土器だまり	土師器	高坏			9.4	磨滅	磨滅	凹線	明橙色	1mm 大の砂粒を含む	脚部が複合口縁状
69-2	土器だまり	土師器	高坏			8.6	ナデ、磨滅	ナデ、磨滅		浅黄橙色	1mm 大の雲母、石英を多く含む	脚部が複合口縁状
69-3	土器だまり	土師器	高坏				磨滅	磨滅		橙褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	脚部が複合口縁状
69-4	土器だまり	土師器	低脚坏	16.0	8.7	8.0	ナデ、ヘラケズリ、磨滅	ハケ目、ヘラミガキ	外面に暗文	橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内面に赤彩、外面に部分的赤彩
69-5	土器だまり	土師器	低脚坏	11.8	9.4	8.4	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ハケ目、ヘラミガキ		暗赤橙色	1mm 以下の砂粒を若干含む	内外面共に赤彩
69-6	土器だまり	土師器	低脚坏		5.9	8.8	ナデ	ナデ、指頭圧痕		淡褐色	1mm 以下の雲母、石英を多く含む	内外面共に赤彩、内面に黒斑あり
69-7	土器だまり	土師器	低脚坏	15.4	4.7		ナデ	ナデ、ヘラミガキ		浅黄橙色	1mm 以下の雲母、石英を多く含む	
69-8	土器だまり	土師器	低脚坏		3.6	6.4	ハケ目、磨滅	ハケ目、ヘラミガキ、くし状工具の痕跡あり		黄灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
69-9	土器だまり	土師器	低脚坏	18.2	3.9		ヘラミガキ、磨滅	ヘラミガキ、磨滅		淡黄白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
69-10	土器だまり	土師器	低脚坏	18.2	3.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ、ハケ目		淡黄白色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
69-11	土器だまり	土師器	低脚坏		5.9	16.4	磨滅	磨滅		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
69-12	土器だまり	弥生土器	器台		5.9	13.8	ヘラミガキ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線	暗黄褐色	3mm 以下の砂粒を若干含む	
69-13	土器だまり	土師器	器台				ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ		橙白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	穿孔あり
69-14	土器だまり	土師器	器台	9.8			ナデ	ナデ		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
69-15	土器だまり	土師器	器台			19.6	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡灰褐色	1mm 以上の石英を多く含む	
70-1	土器だまり	須恵器	蓋	15.2	5.0		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の石英を若干含む	
70-2	土器だまり	須恵器	蓋	13.0			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	凹線	暗青灰色	1mm 大の石英を若干含む	
70-3	土器だまり	須恵器	坏	11.8	4.5		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		暗灰色	1mm 以下の石英を微量に含む	受部径：14.2
70-4	土器だまり	須恵器	坏	11.8	3.8		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	受部径：14.2
70-5	土器だまり	須恵器	坏	14.6			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を含む	受部径：16.8
70-6	土器だまり	須恵器	坏	11.6	4.2		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		暗灰色	やや密	受部径：14.2
70-7	土器だまり	須恵器	坏	11.4	4.2		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	
70-8	土器だまり	須恵器	坏	9.0			回転ナデ	回転ナデ		青灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	受部径：11.6
70-9	土器だまり	須恵器	坏	11.2			回転ナデ	回転ナデ		灰色	密	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
70-10	土器だまり	須恵器	高坏	9.9	8.5	8.4	回転ナデ	回転ナデ		青灰色	やや密	3方向に透かしあり
70-11	土器だまり	須恵器	高坏	14.2	11.9	10.7	回転ナデ	回転ナデ		暗灰色	やや粗	
70-12	土器だまり	須恵器	高坏			13.8	ハケ目	ナデ		暗灰色	やや粗	
70-13	土器だまり	須恵器	高坏			9.8	回転ナデ	ナデ、回転ナデ		淡青灰色	1mm以下の砂粒を若干含む	2方向に透かしあり
70-14	土器だまり	須恵器	高坏				回転ナデ	回転ナデ	2条の凹線	灰色	1mm大の雲母、石英を若干含む	2段の透かしあり
70-15	土器だまり	須恵器	高坏	16.2	7.0		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		暗灰色	2mm以下の砂粒を多く含む	底面に透かし痕あり
70-16	土器だまり	須恵器	平瓶	5.3	15.5		ナデ、カキ目、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ	円形浮文	灰白色	密	
70-17	土器だまり	須恵器	甕	18.8	29.3		回転ナデ、カキ目	回転ナデ	突帯文、波状文、凹線文	青灰色	石英を含む	
71-1	土器だまり	須恵器	甕	30.4			回転ナデ	回転ナデ、タタキ	凹線、波状文	青灰色	2mm以下の砂粒を含む	
71-2	土器だまり	須恵器	甕	20.0	49.2		回転ナデ、タタキ	同心円状タタキ		灰色	密	
71-3	土器だまり	須恵器	甕	37.2	3.3		回転ナデ	回転ナデ	波状文	暗灰色	1mm以下の砂粒を少量含む	外面に釉付着
72-1	土器だまり	土製品	支脚	15.0	14.7	12.8				淡褐色	1mm以上の砂粒を含む	
72-2	土器だまり	土製品	支脚	18.6	10.5	10.1	ナデ、ハケ目	ナデ		明褐色	1mm以下の砂粒を若干含む	
72-3	土器だまり	土製品	支脚	12.7	10.5	4.9				淡黄褐色	1mm以上の砂粒を多く含む	
72-4	土器だまり	土製品	支脚	12.9	10.5	7.0				淡褐色	1mm大の砂粒を多く含む	
73-1	土器だまり	土師器	移動式竈	38.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		外面:明黄褐色 内面:暗褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	
73-2	土器だまり	土製品	土錘	3.1	3.3		ナデ、指頭圧痕			淡灰褐色	1mm大の雲母、石英を若干含む	黒斑あり
73-3	土器だまり	土製品	土錘	3.1	3.3		ナデ			灰白色	1mm以下の砂粒を若干含む	
73-4	土器だまり	土製品	土錘	2.7	3.4					灰色	1mm以下の砂粒を多く含む	
73-5	土器だまり	土製品	土錘	3.0	3.2		ナデ			淡灰褐色	1mm以下の砂粒を含む	
73-6	土器だまり	土製品	棒状土錘	3.5	1.9					淡橙褐色	1mm以上の砂粒を多く含む	
73-7	土器だまり	土製品	小玉	0.6	0.7		磨滅			淡褐色	ごく小さい砂粒を微量に含む	
73-8	土器だまり	土製品	不明	2.9	0.7	0.7	ナデ			淡黄褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
73-9	土器だまり	石器	砥石	8.4	5.6	4.5						
73-10	土器だまり	石器	砥石	7.9	3.0	2.8						
74-1	土器だまり	石器	砥石	14.9	6.2	3.7						
74-2	土器だまり	石器	敲石	14.1	11.0	3.6						
74-3	土器だまり	石器	敲石	11.1	9.6	6.2						
74-4	土器だまり	石製品	紡錘車	2.7	2.4	5.2						
74-5	土器だまり	石器	石鏃	2.8	1.7	0.4				黒色		黒曜石
74-6	土器だまり	石器	石鏃	1.3	1.5	0.2						サヌカイト
75-1	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文	条痕文	刻目突帯文	灰色	3mm以下の砂粒を多く含む	
75-2	包含層	縄文土器	深鉢				磨滅	磨滅	刻目突帯文	淡灰褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
75-3	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文		刻目突帯文	暗茶色	3mm以下の砂粒を多く含む	
75-4	包含層	縄文土器	深鉢						突帯文、刺突文	淡灰褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
75-5	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文	条痕文	刻目突帯文	暗褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	外面に煤痕

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
75-6	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文	磨滅	刻目突帯文	淡灰褐色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
75-7	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文	磨滅	突帯文	淡橙白色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
75-8	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文		沈線	淡灰褐色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
75-9	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文	条痕文		淡黄白色	4mm 以下の砂粒を多く含む	
75-10	包含層	縄文土器	深鉢				条痕文	条痕文		淡黄茶色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
75-11	包含層	縄文土器	浅鉢				条痕文			灰褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
75-12	包含層	縄文土器	浅鉢				条痕文	条痕文	沈線	暗褐色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
76-1	包含層	弥生土器	広口壺	29.0			ナデ	ナデ	平行沈線、凹線、刺突文	暗黄褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
76-2	包含層	弥生土器	広口壺	31.0	12.9		磨滅		平行沈線、凹線	淡黄白色	2mm 以下の砂粒を含む	
76-3	包含層	弥生土器	壺(口縁)					ナデ、ヘラケズリ	凹線	淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
76-4	包含層	弥生土器	甕(口縁)				ナデ	ヘラミガキ、指頭圧痕	擬凹線	淡黄白色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
76-5	包含層	弥生土器	甕(底部)		7.7	7.8	ナデ、指頭圧痕	ヘラケズリ		暗黄灰色	3mm 以下の砂粒を多く含む	
76-6	包含層	弥生土器	甕(底部)		6.7	6.8	ヘラミガキ	ヘラケズリ		外面:茶褐色 内面:暗褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
76-7	包含層	弥生土器	甕(底部)			8.6	磨滅	ヘラケズリ、ナデ		暗褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
76-8	包含層	弥生土器	甕(底部)		4.6	9.4	ナデ	ヘラケズリ		外面:暗黄色 内面:暗褐色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	
76-9	包含層	弥生土器	甕(底部)		10.2		磨滅	ヘラケズリ		暗黄褐色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
76-10	包含層	弥生土器	壺(底部)		2.5	7.2	ナデ、指頭圧痕	ヘラケズリ		黒色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	
76-11	包含層	弥生土器	甕(底部)				磨滅	ナデ、指頭圧痕		黄灰色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	
76-12	包含層	弥生土器	鉢	27.6			ヘラミガキ、磨滅	ヘラケズリ、磨滅		外面:暗黄褐色 内面:黄褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
76-13	包含層	弥生土器	高坏	21.4	3.5		ナデ	ヘラミガキ	凹線	淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
76-14	包含層	弥生土器	甕	14.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡黄灰色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
77-1	包含層	土師器	甕	15.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰黄色	2mm 以下の雲母、石英を若干含む	外面に黒斑
77-2	包含層	土師器	甕	16.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		黄灰色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕
77-3	包含層	土師器	甕	16.6			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
77-4	包含層	土師器	甕	17.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		明褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
77-5	包含層	土師器	甕	20.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		黄灰色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
77-6	包含層	土師器	甕	18.2			磨滅	ヘラケズリ、磨滅		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
77-7	包含層	土師器	甕	12.8			ナデ	ナデ		淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
77-8	包含層	土師器	甕	18.6	12.8		ハケ目、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
77-9	包含層	土師器	甕	17.0	7.5		ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ		淡黄褐色	3mm 以下の砂粒を若干含む	
77-10	包含層	土師器	甕	17.0	7.9		ナデ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		黄褐色	3mm 以下の砂粒を若干含む	
77-11	包含層	土師器	甕	14.8			ナデ、ハケ目	ナデ		灰褐色	密	
77-12	包含層	土師器	甕	13.3			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい橙色	1mm 以下の石英を若干含む	外面に一部煤痕
77-13	包含層	土師器	甕	18.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰黄色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	布留系
77-14	包含層	土師器	甕	18.0			ナデ、ハケ目	ナデ		灰褐色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	
78-1	包含層	土師器	甕	14.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm 以上の雲母、石英を多く含む	内外面共に煤痕、外面に黒斑あり

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
78-2	包含層	土師器	甕	16.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		外面:淡黄褐色 内面:灰褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	外面に一部煤痕
78-3	包含層	土師器	甕	18.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、指頭圧痕		明褐色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	
78-4	包含層	土師器	甕	15.5	15.0		ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰オリーブ、オリーブ黒色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	外面に一部煤痕
78-5	包含層	土師器	壺	13.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
78-6	包含層	土師器	壺	21.8			ナデ	ナデ		淡褐色	1mm 大の雲母、石英を若干含む	
78-7	包含層	土師器	壺	18.0			ナデ	ナデ、ハケ目		淡黄褐色	ごく小さい砂粒を微量に含む	
78-8	包含層	土師器	壺	16.2			ナデ	ナデ		淡黄灰色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
78-9	包含層	土師器	壺	23.4			ナデ	ナデ、ハケ目		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
78-10	包含層	土師器	直口壺	12.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		明橙褐色	2mm 以下の雲母、石英を若干含む	外面に煤痕
78-11	包含層	土師器	直口壺	7.3			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		橙白色	1mm 大の砂粒を含む	外面に赤彩
78-12	包含層	土師器	壺	10.6			ナデ、ハケ目、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ		明黄褐色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	
78-13	包含層	土師器	小形丸底壺	8.5	10.0		ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ヘラケズリ		灰黄色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	
79-1	包含層	土師器	小形甕	12.2	6.7		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ		淡黄灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
79-2	包含層	土師器	小形丸底壺	10.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		淡黄褐色	1mm 以下の雲母、石英を若干含む	内外面共に赤彩
79-3	包含層	土師器	小形丸底壺	7.0			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡黄灰色	1mm 大の石英を微量に含む	
79-4	包含層	土師器	小形丸底壺				ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡橙褐色	1mm 大の砂粒を含む	外面に赤彩
79-5	包含層	土師器	注口				ナデ	ナデ		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
79-6	包含層	土師器	碗	13.2	4.7		ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	刺突文	暗赤褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
79-7	包含層	土師器	坏	14.1	3.6	6.8	ナデ	ナデ、回転ヘラキリ	内面に暗文	灰褐色	1mm 以下の砂粒を含む	内外面共に赤彩痕
79-8	包含層	土師器	坏	10.8			ナデ、磨滅	ナデ		明橙褐色	1mm 以下の石英を微量に含む	内外面共に赤彩
79-9	包含層	土師器	碗	14.0	4.2		ナデ、ヘラケズリ	ナデ		暗赤褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
79-10	包含層	土師質土器	坏	13.4	3.1	9.3	ナデ、ヘラケズリ	ナデ		橙褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
79-11	包含層	土師器	高坏	19.3	13.9	11.2	ナデ、磨滅	ヘラケズリ		淡橙褐色	1mm 以下の石英を微量に含む	
79-12	包含層	土師器	高坏	16.0	11.4		ハケ目、磨滅	ハケ目、ヘラケズリ		淡黄褐色	1.5mm 以下の砂粒を微量に含む	
79-13	包含層	土師器	高坏	18.4	8.5		ハケ目、指頭圧痕、磨滅	ヘラミガキ、ヘラケズリ		橙褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	内外面共に赤彩
79-14	包含層	土師器	高坏	18.6			ナデ、ハケ目	ナデ、磨滅	内面に暗文	淡橙褐色	1mm 以下の雲母を若干含む	内外面共に赤彩
79-15	包含層	土師器	高坏	18.0	5.3		ハケ目	ヘラケズリ、ヘラミガキ	内面に暗文	赤橙色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
79-16	包含層	土師器	高坏	23.0	6.4		ハケ目、磨滅	磨滅	内面に暗文	淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に一部赤彩
80-1	包含層	土師器	高坏	17.6	10.9	10.8	ハケ目、ヘラミガキ、指頭圧痕	ハケ目、ヘラケズリ		淡黄褐色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	
80-2	包含層	土師器	高坏	16.2	12.4	11.2	ナデ、ハケ目、脚部面取り	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		橙色	2mm 以下の雲母、石英を多く含む	
80-3	包含層	土師器	高坏	16.4	10.4	10.0	ナデ、磨滅	ナデ、磨滅	沈線	灰白色	1mm 以下の雲母、石英を多く含む	
80-4	包含層	土師器	高坏	18.6	7.2		ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ、ヘラミガキ		黄褐色	3mm 以下の砂粒を若干含む	
80-5	包含層	土師器	高坏	17.0	9.4	10.1	ハケ目、脚部面取り	ナデ、ヘラケズリ		黄褐色	2mm 以下の砂粒を若干含む	
80-6	包含層	土師器	高坏	16.2	6.1		ハケ目	ナデ、ハケ目		橙褐色	1.5mm 以下の砂粒を微量に含む	
80-7	包含層	土師器	高坏			10.1	ナデ、ハケ目	ヘラケズリ		灰褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	内外面共に赤彩
80-8	包含層	土師器	高坏			9.4	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		明褐色	2mm 以上の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
80-9	包含層	土師器	高坏			10.0	ハケメ	ヘラケズリ		橙白色	1mm 以上の雲母を若干含む	外面に赤彩
80-10	包含層	土師器	高坏		6.2	8.0	ハケ目、指頭圧痕、磨滅	指頭圧痕		明黄橙色	2mm 以下の砂粒を若干含む	外面に赤彩痕
80-11	包含層	土師器	低脚坏		5.9	8.2	ハケ目、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		橙褐色	1.5mm 以下の砂粒を若干含む	外面に赤彩
80-12	包含層	土師器	低脚坏		3.8	7.8	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
80-13	包含層	弥生土器	器台(脚部)		2.7	13.6	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡橙色	3mm 以下の砂粒を微量に含む	
80-14	包含層	土製品	手捏ね土器	4.4	2.6		ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕		暗黄灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
80-15	包含層	土製品	手捏ね土器	3.9	2.6		指頭圧痕	指頭圧痕		淡橙褐色	1mm 以下の石英を若干含む	
80-16	包含層	土製品	手捏ね土器	5.0	3.2		指頭圧痕	指頭圧痕		褐色	1mm 以上の砂粒を多く含む	
81-1	包含層	須恵器	蓋	12.0			回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の砂粒を若干含む	
81-2	包含層	須恵器	蓋	14.8	4.3		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	1mm 以下の石英を若干含む	
81-3	包含層	須恵器	蓋	14.4			回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
81-4	包含層	須恵器	蓋	13.2			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の雲母、石英を若干含む	
81-5	包含層	須恵器	蓋	10.4	4.6		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	やや密	
81-6	包含層	須恵器	蓋	12.0	3.4		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	
81-7	包含層	須恵器	蓋	11.4	3.9		回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
81-8	包含層	須恵器	蓋	17.2	2.5		回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
81-9	包含層	須恵器	蓋	11.4			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	
81-10	包含層	須恵器	蓋		2.5		回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の石英を若干含む	かえり径：8.4
81-11	包含層	須恵器	坏	11.0	4.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を多く含む	
81-12	包含層	須恵器	坏	12.8	5.0		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
81-13	包含層	須恵器	坏	12.0			回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の砂粒を若干含む	受部径：14.6
81-14	包含層	須恵器	坏	12.2	3.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	2mm 大の石英を若干含む	
81-15	包含層	須恵器	坏	11.8	3.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm 大の石英を若干含む	
81-16	包含層	須恵器	坏	10.0	3.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		青灰色	1mm 以下の石英を若干含む	受部径：11.2
81-17	包含層	須恵器	坏	10.6	3.5		回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の砂粒を若干含む	受部径：13.2
81-18	包含層	須恵器	坏	11.8			回転ナデ	回転ナデ		灰色	密	
81-19	包含層	須恵器	坏	10.0	3.7		回転ナデ	回転ナデ		明青灰色	1mm 大の石英を若干含む	
81-20	包含層	須恵器	坏	11.0			回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の砂粒を若干含む	受部径：13.6
81-21	包含層	須恵器	坏	9.0	3.3		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	やや密	受部径：11.2 内面中央にヘラ記号あり
81-22	包含層	須恵器	坏	12.6	4.5	7.2	回転ナデ、回転糸切り	ミガキ		青灰色	やや粗	
81-23	包含層	須恵器	高台付坏			10.6	ナデ	ナデ		灰色	1mm 大の雲母、石英を多く含む	
81-24	包含層	須恵器	高台付坏	13.4	4.5	8.6	回転ナデ、ヘラ切り	ナデ、回転ナデ		灰色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	
81-25	包含層	須恵器	高台付坏			8.2	回転ナデ、ヘラケズリ	ナデ		淡青灰色	2mm 以下の砂粒を若干含む	自然釉付着
81-26	包含層	須恵器	高台付坏			9.6	回転ナデ、ヘラキリ	回転ナデ		灰色	やや密	
81-27	包含層	須恵器	皿	13.8	2.4	8.0	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ		暗灰色	密	
81-28	包含層	須恵器	高坏			9.8	ナデ	ナデ		青灰色	やや密	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
81-29	包含層	須恵器	高坏			8.0	回転ナデ	回転ナデ		青灰色	1mm 大の石英を若干含む	透かしあり
81-30	包含層	須恵器	高坏			9.4	回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 大の石英を若干含む	透かしあり
82-1	包含層	須恵器	瓏				回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転カキ目	回転ナデ、回転ヘラケズリ		灰色	1mm 以下の砂粒を含む	胴部径：11.4
82-2	包含層	須恵器	瓏				ナデ	回転ナデ	波状文	灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	胴部径：11.0
82-3	包含層	須恵器	壺か瓏		7.0		回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、指頭圧痕		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	胴部径：13.2
82-4	包含層	須恵器	長頸壺	7.0	16.6		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	砂粒を微量に含む	
82-5	包含層	須恵器	長頸壺	6.1			回転ナデ	回転ナデ	カキ目	暗灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	内面に付着物あり
82-6	包含層	須恵器	長頸壺	8.6			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	
82-7	包含層	須恵器	長頸壺	10.0	6.2		回転ナデ	回転ナデ	波状文	灰色	1mm 大の砂粒を微量に含む	
82-8	包含層	須恵器	横瓶	13.6	6.8		回転ナデ、タタキ	回転ナデ、タタキ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
82-9	包含層	須恵器	壺	15.2	4.5		回転ナデ	回転ナデ		黒灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
82-10	包含層	須恵器	壺	12.4	4.1		回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
82-11	包含層	須恵器	壺	17.0	4.3		回転ナデ、タタキ	回転ナデ、タタキ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
82-12	包含層	須恵器	壺	14.0	4.5		回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
82-13	包含層	須恵器	壺			9.6	回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
82-14	包含層	須恵器	甕	18.4	3.0		回転ナデ	回転ナデ		暗灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
82-15	包含層	須恵器	甕	22.0			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を若干含む	
82-16	包含層	須恵器	甕	46.6			ナデ	ナデ	波状文	青灰色	やや密	
83-1	包含層	土製品	支脚	18.0	11.3	6.8				淡灰褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
83-2	包含層	土製品	支脚	15.6	10.3	6.2				明褐色	1mm 以上の砂粒を含む	
83-3	包含層	土製品	支脚		13.6	5.2				淡灰褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
83-4	包含層	土製品	ふいごの羽口	9.2	7.4	7.6	ナデ			暗黄褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
84-1	包含層	土製品	棒状土錘	8.5	2.2					にぶい黄橙色	1mm 大の雲母、石英を多く含む	
84-2	包含層	土製品	棒状土錘	10.1	2.1					にぶい黄橙色	雲母、石英を多く含む	
84-3	包含層	土製品	棒状土錘	8.5	2.0					橙色	雲母、石英を若干含む	
84-4	包含層	土製品	棒状土錘	9.2	2.0					にぶい黄橙色	雲母、石英を多く含む	
84-5	包含層	土製品	棒状土錘	7.2	2.1	2.3				橙色	1mm 大の石英を多く含む	
84-6	包含層	土製品	棒状土錘		2.1					にぶい黄橙色	1mm 大の石英を多く含む	
84-7	包含層	土製品	棒状土錘		1.8					にぶい黄橙色	1mm 大の石英を多く含む	
84-8	包含層	土製品	棒状土錘	4.6	2.4	2.0				橙色	1mm 大の石英を多く含む	
84-9	包含層	土製品	棒状土錘	4.8	2.0	1.9				灰白色	1mm 大の石英を多く含む	
84-10	包含層	土製品	土錘	7.1	2.6					オリーブ黒色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
84-11	包含層	土製品	土錘	4.5	2.1					灰黄色	1mm 以下の石英を多く含む	
84-12	包含層	土製品	土錘	4.6	2.3					淡黄褐色	1mm 以上の砂粒を微量に含む	
84-13	包含層	土製品	土錘	5.1	3.0					灰白色	1mm 大の石英を多く含む	
84-14	包含層	土製品	土錘	3.0	1.4					淡黄色	1mm 以上の砂粒を微量に含む	

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
84-15	包含層	土製品	土錘	4.9	3.7					淡橙褐色	1mm 以上の砂粒を多く含む	
84-16	包含層	土製品	土錘	4.3	3.5					淡黄灰色	1mm 以上の砂粒を多く含む	
84-17	包含層	土製品	土錘	4.2	3.9					淡灰色	1mm 以上の砂粒を若干含む	
84-18	包含層	土製品	土錘	4.3	4.0		ナデ、指頭圧痕			にぶい黄橙色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
85-1	包含層	土製品	土錘	4.1	3.9					淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
85-2	包含層	土製品	土錘	3.7	4.6					淡橙褐色	1mm 以上の砂粒を若干含む	
85-3	包含層	土製品	土錘	3.6	4.2					淡橙褐色	1mm 以下の砂粒を多く含む	
85-4	包含層	土製品	土錘	2.5	3.3					淡褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
85-5	包含層	石製品	有孔円盤	2.9	2.5	0.7				緑色		
85-6	包含層	石製品	紡錘車	2.6	3.0	4.4						
85-7	包含層	石製品	紡錘車	3.9	2.2	5.3						
85-8	包含層	石製品	紡錘車	3.0	2.3	4.7						
85-9	包含層	石製品	紡錘車	2.5	1.6	2.6						
85-10	包含層	石製品	紡錘車未製品	5.1	4.5	1.8						
85-11	包含層	石器	砥石	7.2	6.3	4.1						
85-12	包含層	石器	砥石	8.2	4.6	4.4						
85-13	包含層	石器	砥石	5.8	3.3	2.4						
85-14	包含層	石器	敲石	9.0	11.3	6.0						
86-1	包含層	農具	直柄横鍬	47.3	13.0	0.7						
86-2	包含層	工具	横槌状木製品	27.4	9.1	8.2						
86-3	包含層	容器	椀				漆塗り	漆塗り				
86-4	包含層	容器	曲物の底板	17.2	6.2	1.9						
86-5	包含層	雑具	棒状木製品	28.8	2.3	1.5						
86-6	包含層	部材		40.9	3.9	2.6						
87-1	包含層	部材		53.6	5.2	2.2						
87-2	包含層	部材		13.5	4.5	2.0						
87-3	包含層	部材		22.1	4.7	1.4						
87-4	包含層	建築部材		61.7	8.6	7.5						

第４章　間谷東遺跡

第１節　調査の概要

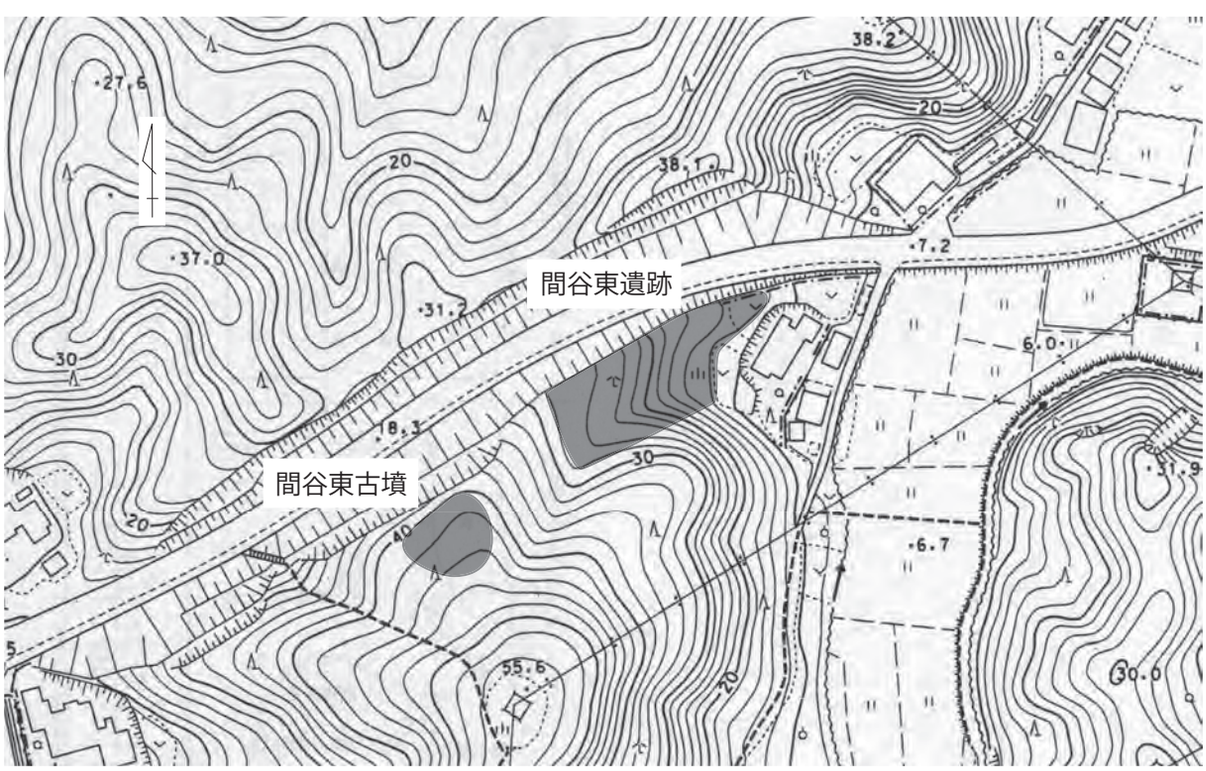
間谷東遺跡は出雲市知井宮町 1685 他に所在し、出雲市文化財課が調査を担当した間谷東古墳（間谷東古墳 2008）の存在する丘陵の東側斜面に位置している遺跡である。調査対象面積は 700㎡で、調査区は細長く標高 24 m～ 13 mと高低差のある斜面であった。調査の結果、遺物包含層と用途不明の溝状遺構を検出した。

１．ＳＤ０１（第 90 図）

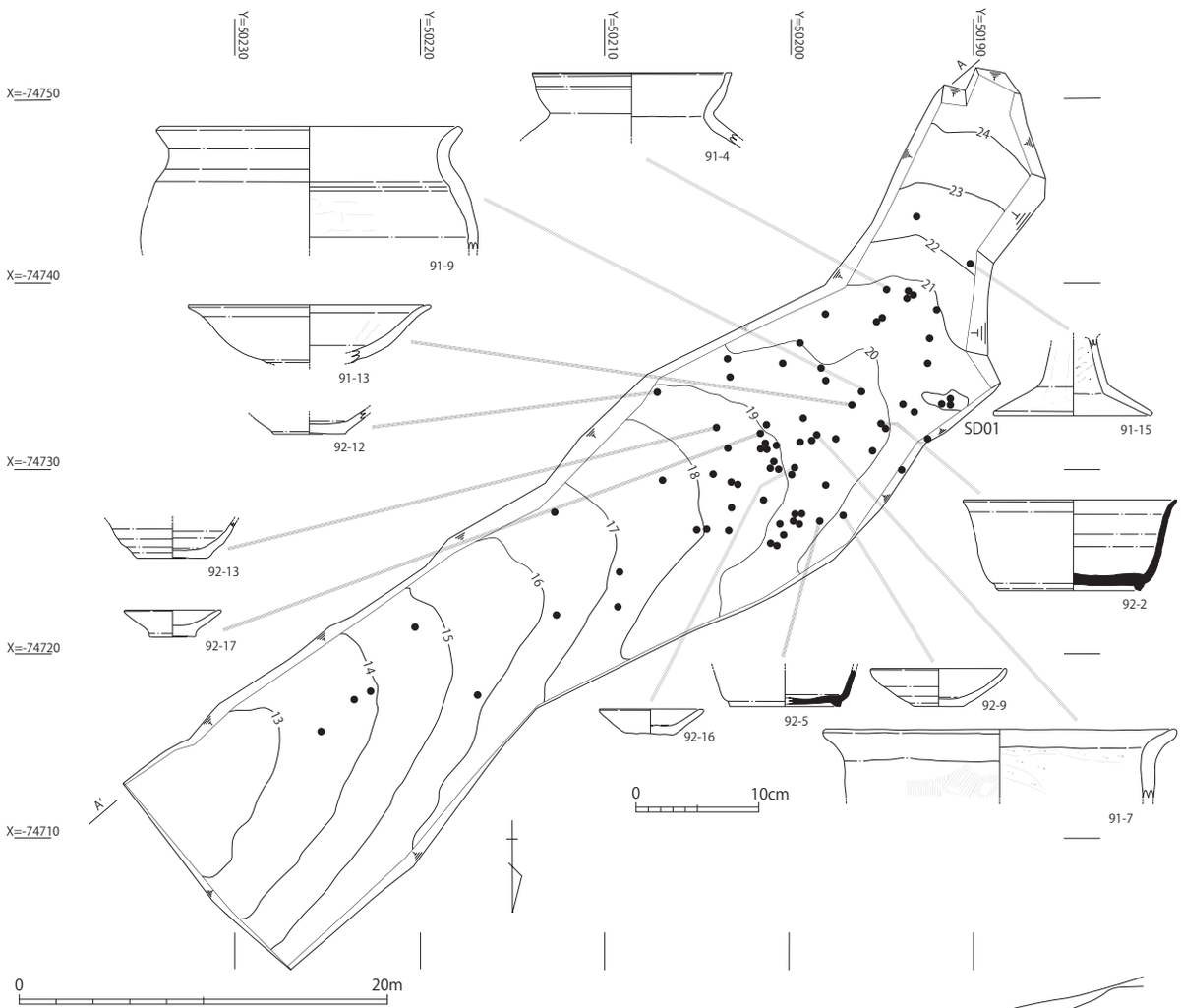
ＳＤ０１は調査区上方の標高約 20.5 mの地点で検出した調査区北壁側から南に短くのびる溝状遺構である。重複するようにピット２穴も検出したが、ＳＤ０１に伴うものではなく、１穴はこの溝によって切られ、もう１穴は溝上面から掘り込まれている。

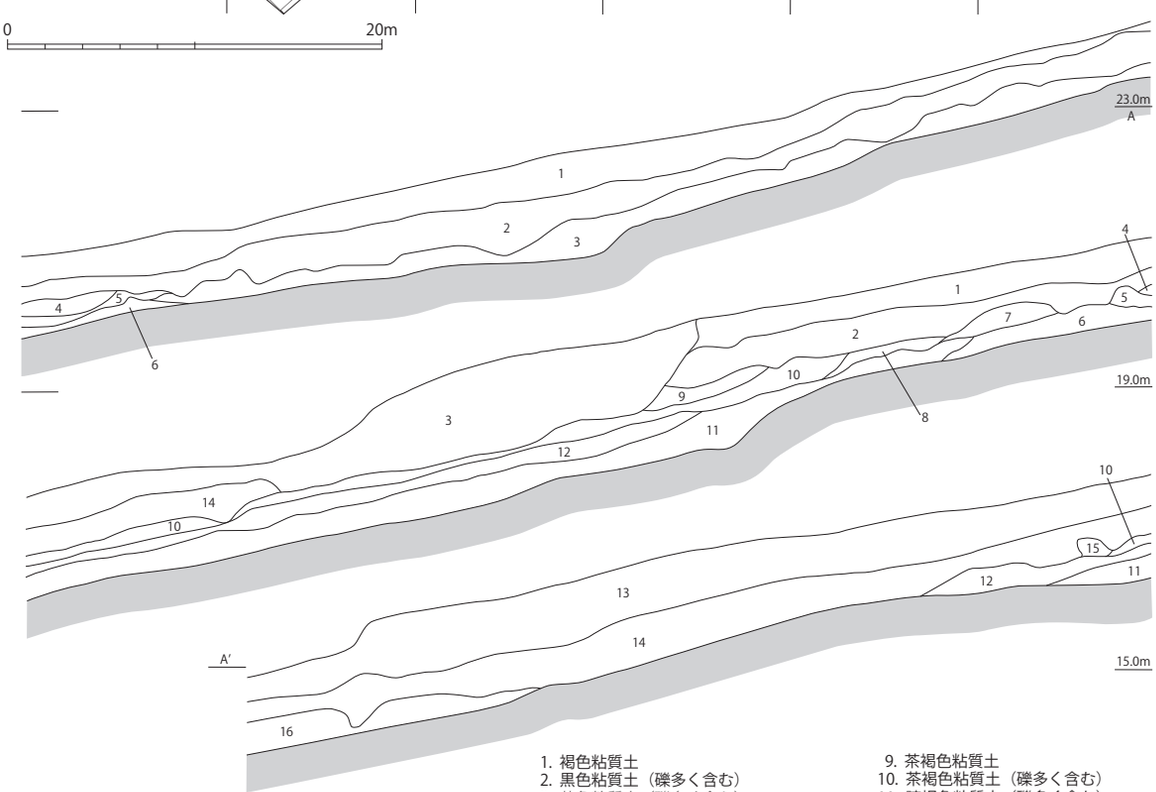
溝の規模は長さ 2.8 m、幅 75cm、深さ約 20cm を測り、中央付近では溝状遺構と交差するように長さ 65cm、幅 10cm の板材を検出したが、その手前約 20cm 東の位置に杭が２本打ち込まれていることから本来はこの位置に板材が設置されていたと考えられる。板材は溝内部には認められず、現状では溝上面に設置されていた状況を示しており、水流調整もしくは水溜用等に使用されたものであろうか。覆土は灰褐色砂質土で須恵器、土師質土器の小片が数点出土している。

この溝状遺構の時期については出土遺物から判断して 12 世紀以降と考えられるが、用途や性格については他の遺構を伴わないため判然としないものの、斜面から流れ落ちる水の排水もしくは水溜等に作られたものと推測される。



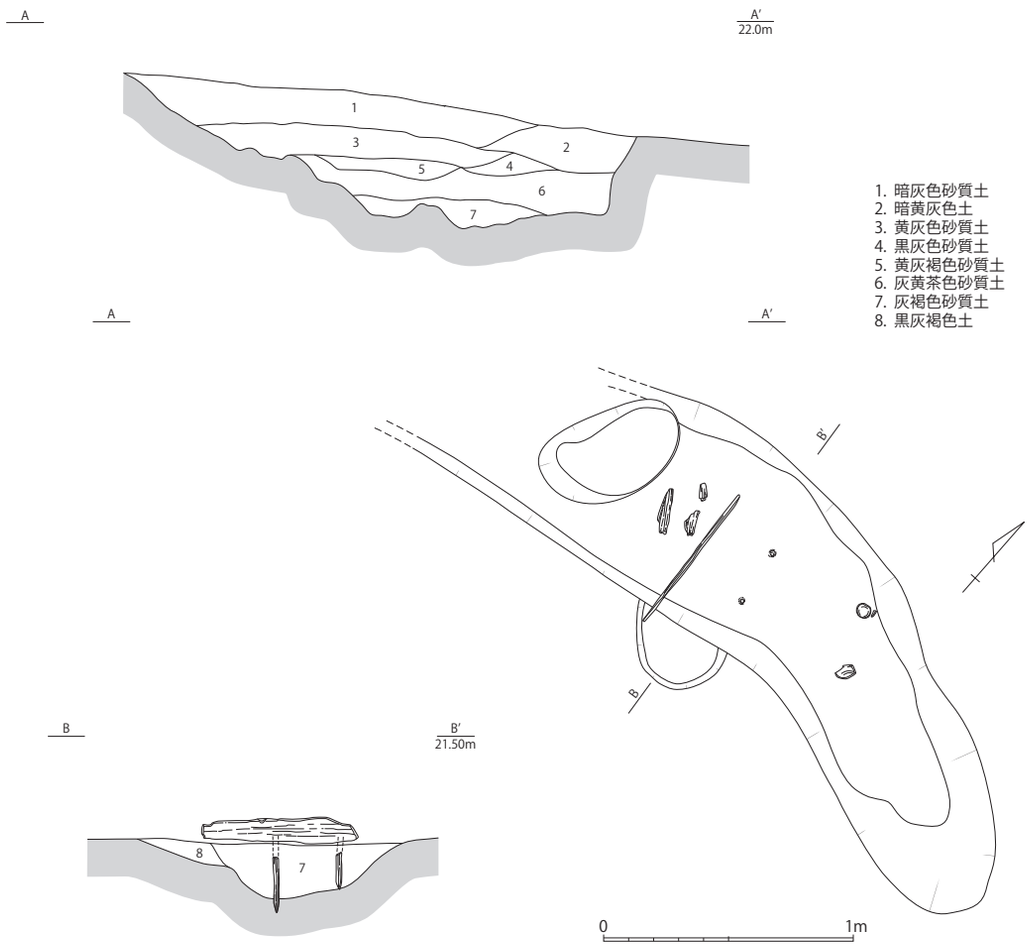
第 88 図　間谷東遺跡位置図（S=1/2500）





1. 褐色粘質土
2. 黒色粘質土（礫多く含む）
3. 茶色粘質土（礫多く含む）
4. 褐色粘質土（礫多く含む）
5. 茶褐色土（ブロック多く含む）
6. 黄茶色礫層
7. 黄茶色粘質土（ブロック多く含む）
8. 明茶色粘質土（ブロック少量含む）
9. 茶褐色粘質土
10. 茶褐色粘質土（礫多く含む）
11. 暗褐色粘質土（礫多く含む）
12. 暗茶褐色粘質土（礫多く含む）
13. 明褐色粘質土
14. 黒灰色粘質土（礫多く含む）
15. 橙茶色粘質土（礫含む）
16. 暗茶色粘質土（礫含む）

第 89 図　間谷東遺跡全体図･セクション図及び遺物出土状況（全体図 S=1/400　セクション S=1/100　遺物 S=1/6）



第 90 図　間谷東遺跡　SD01 実測図（S=1/30）

出土遺物（第 92 図）

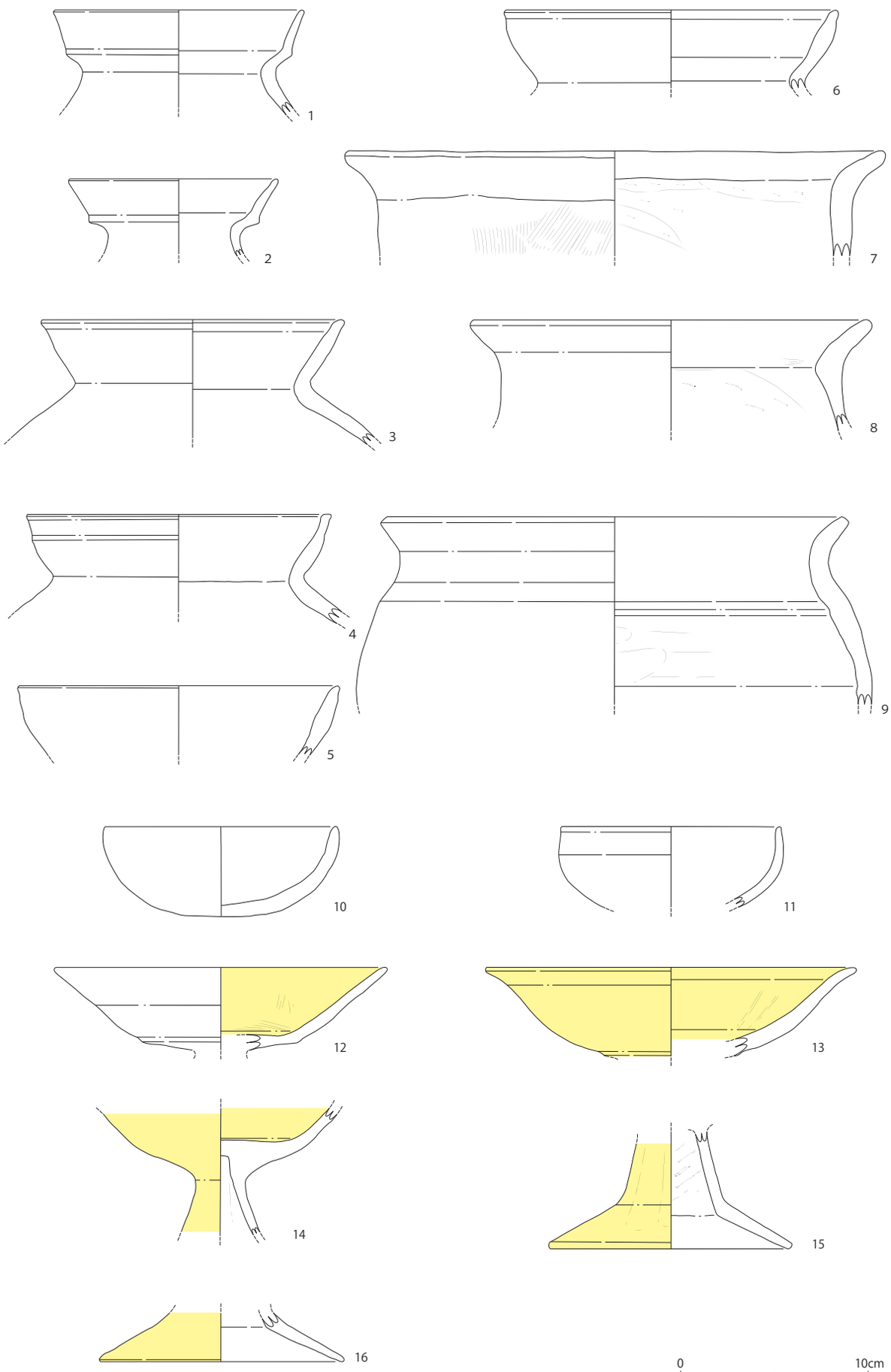
図化できたのは２点であった。１は須恵器の坏で体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外方にくびれるタイプである。18 は土師質土器の皿であるが、口縁部を欠損している。

２．包含層遺物出土状況（第 89 図）

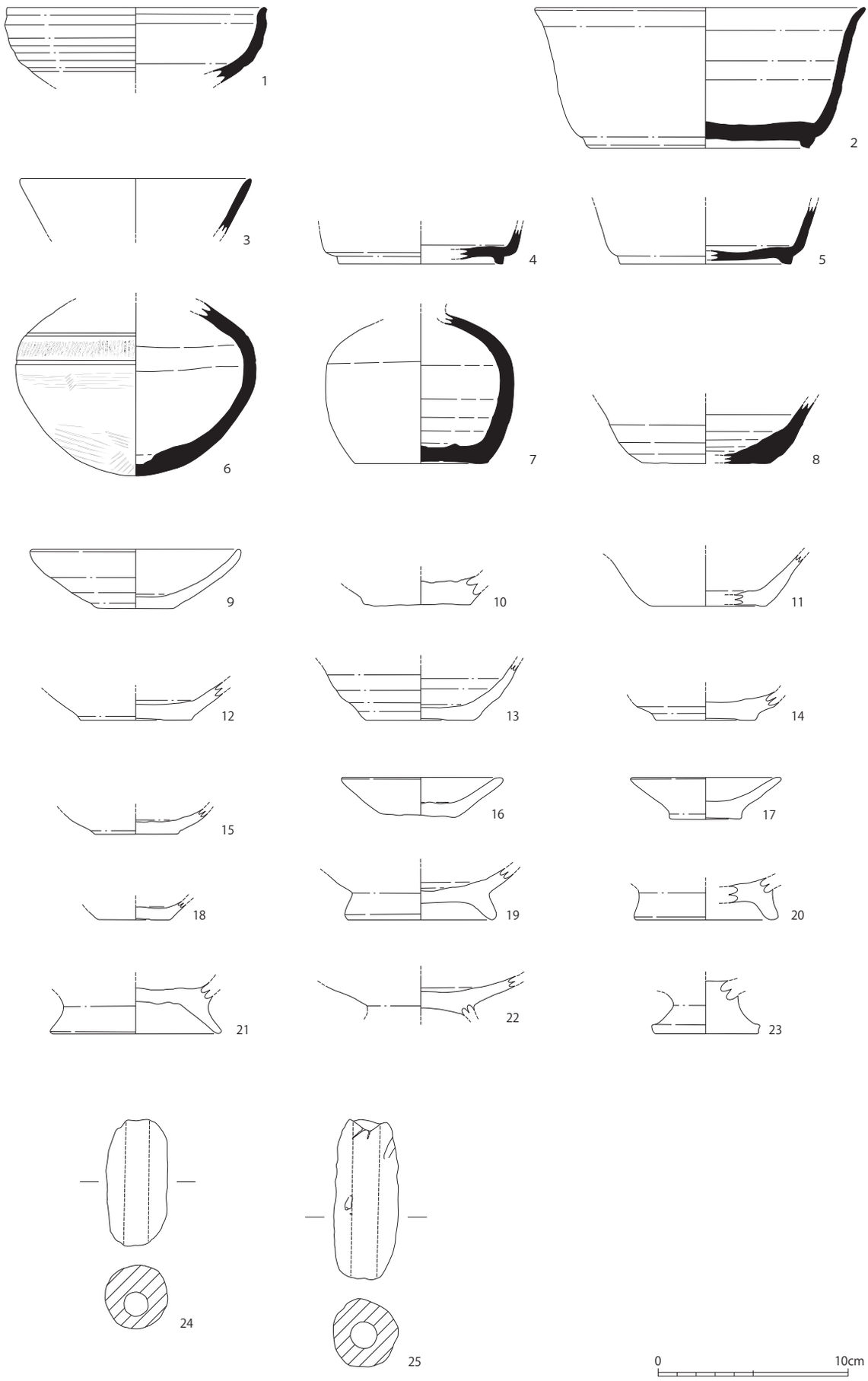
第 89 図に遺物の分布状況を示している。遺物は少なかったが標高 21 m～ 18 mの地点に集中して出土している。これらの遺物は土師器、須恵器、土師質土器が混在して出土しており、大半が磨滅した小片であった。この地点にはＳＤ０１が存在するがこれに伴うものとは考えられず、調査区外の南側斜面から流れ込んだものと考えられる。

包含層出土遺物（第 91 ～ 92 図）

第 91 図は土師器である。１・２は複合口縁の甕で口縁部は外反気味にのび、端部は丸みをもつ。３～９は単純口縁の甕で３～６は外傾してのびる口縁部であるが、4 は複合口縁の名残を残す。７・８は直立する頸部から大きく屈曲する口縁部のもので、９は緩やかに外反する口縁部をもつ。10・11 は碗でボウル状の体部を呈し、11 の口縁部は外方に少し屈曲する。12 ～ 16 は高坏ですべて赤彩が施されている。12・13 は有段タイプで、14 は無段タイプである。15・16 は裾部が大きく開く脚部である。第 92 図２～８は須恵器である。２～５は坏である。２はやや大形の高台付坏で体部に比べて高台は低く、口縁部は外反してのびる。３は外傾してのびる口縁部である。４・５は



第 91 図　間谷東遺跡　出土遺物実測図 1（S=1/3）



第 92 図　間谷東遺跡　出土遺物実測図２（S=1/3）

２より小さいタイプの高台付坏で高台は低い。６は口縁部を欠損する瓹で肩部下半がよく張り、底部は丸い。肩部外面に刺突文を施している。７は瓹か小壺の体部で底部は平らで胴部が張る。８は壺底部である。９～23は土師質土器である。９～15は坏で磨滅が著しく、口縁部を欠損するものが大半である。底部に回転糸切り痕を残すものも認められる。16・17は皿で底径は小さく口縁部は外傾してのびる。19～22は高台付坏の高台部分で、19・20のように低いタイプと21のように高いタイプがある。23は柱状高台である。24・25はやや長めの土錘である。

第２節　小　結

間谷東遺跡の丘陵尾根上には古墳時代中期前後の古墳である間谷東古墳が立地していることから、調査当初はそれに付随する遺構や集落跡等が存在するものと予想されたが、調査の結果、溝状遺構１条と少量の遺物を検出しただけであった。遺物の大半は磨滅し、古墳時代前期～中世までと時期幅が認められるがそれに伴う明確な遺構は今回の調査では確認することができなかった。また、調査区上方に位置する間谷東古墳周辺の調査においても遺物や遺構は皆無であったことから、調査区外の南側斜面から流れ込んだものと考えられ、この斜面に古墳時代～中世の小規模な集落等の遺構が存在していたことが窺える。

参考文献

島根県教育委員会『一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』2008

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
91-1	包含層	土師器	壺	13.4			ナデ、磨滅	ナデ		にぶい黄橙色	1mm大の雲母、石英を多く含む	外面に一部黒斑
91-2	包含層	土師器	壺	10.6			ナデ、磨滅	ナデ、磨滅		にぶい黄橙色	1mm以上の石英を多く含む	
91-3	包含層	土師器	甕	16.2	6.7		磨滅	磨滅		暗茶褐色	2mm以下の砂粒を微量に含む	
91-4	包含層	土師器	甕	16.2			ナデ、磨滅	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	2mm以下の石英を多く含む	
91-5	包含層	土師器	甕	17.2			磨滅	磨滅		にぶい黄色	1mm以下の砂粒を若干含む	
91-6	包含層	土師器	甕	17.8			ナデ、磨滅	ナデ、磨滅		明黄褐色	1mm大の石英を多く含む	外面に赤彩
91-7	包含層	土師器	甕	28.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		オリーブ黒色	1mm以上の石英を多く含む	
91-8	包含層	土師器	甕	21.4			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰色	1mm以下の砂粒を多く含む	
91-9	包含層	土師器	甕	25.0	10.0		ナデ	ナデ、ヘラケズリ		黒褐色	2mm以下の砂粒を微量に含む	
91-10	包含層	土師器	碗	12.4	4.8		磨滅	磨滅		淡黄褐色	2mm以下の砂粒を微量に含む	
91-11	包含層	土師器	碗	11.8	4.3		磨滅	磨滅		橙褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
91-12	包含層	土師器	高坏	17.8	4.4		ナデ	ハケ目		赤橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	内面に赤彩
91-13	包含層	土師器	高坏	19.8	4.7		磨滅	磨滅	暗文	橙褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	内外面共に赤彩
91-14	包含層	土師器	高坏				ナデ	ナデ、ヘラケズリ		淡橙褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に赤彩
91-15	包含層	土師器	高坏			12.9	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		橙色	1mm大の石英を多く含む	外面全体に赤彩
91-16	包含層	土師器	高坏			13.1	磨滅	磨滅		明黄褐色	石英を含む	外面に赤彩

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
92-1	SD01	須恵器	坏	13.6			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 大の砂粒を含む	
92-2	包含層	須恵器	高台付坏	17.2	7.4	11.4	ナデ、ヘラケズリ、回転ナデ	ナデ		灰色	1mm 以上の石英を微量に含む	
92-3	包含層	須恵器	坏	14.2	2.9		回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
92-4	包含層	須恵器	高台付坏			8.6	ナデ	ナデ		青灰色	1mm 大の石英を含む	
92-5	包含層	須恵器	高台付坏				ナデ、回転糸切り	ナデ		青灰色	1mm 大の砂粒を含む	
92-6	包含層	須恵器	瓶				タタキ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	平行沈線、刺突文	灰色	1mm 以下の砂粒を含む	
92-7	包含層	須恵器	瓶			7.0	ナデ、回転ナデ、回転糸切り	ナデ、回転ナデ		青灰色	1mm 大の石英を多く含む	
92-8	包含層	須恵器	壺				ヘラケズリ	ナデ		灰色	1mm 大の石英を含む	
92-9	包含層	土師質土器	坏	11.1	3.1	4.0	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ		浅黄橙色	1mm 以下の石英を若干含む	
92-10	包含層	土師質土器	坏			5.6	磨滅	磨滅		外面:明褐色 内面:灰黄褐色	2mm 以下の石英を多く含む	
92-11	包含層	土師質土器	坏			5.3	ナデ、回転糸切り	ナデ		浅黄色	2mm 以下の砂粒を含む	
92-12	包含層	土師質土器	坏			5.8	ナデ、回転糸切り	ナデ		にぶい橙色	2mm 以下の砂粒を多く含む	
92-13	包含層	土師質土器	坏		2.9	5.8	磨滅	磨滅		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
92-14	包含層	土師質土器	坏			5.4	磨滅	磨滅		灰白色	1mm 以下の砂粒を若干含む	
92-15	包含層	土師質土器	坏			4.6	ナデ、回転糸切り	ナデ		にぶい黄橙色	1mm 大の石英を含む	
92-16	包含層	土師質土器	皿	8.5	2.6	3.8	磨滅	磨滅		橙色	2mm 以上の石英を多く含む	
92-17	包含層	土師質土器	皿	7.9	2.2	3.3	磨滅	磨滅		橙色	1mm 以下の砂粒を含む	
92-18	SD01	土師質土器	皿			3.7	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ		灰白色	2mm 以下の石英を含む	
92-19	包含層	土師質土器	高台付坏		2.7	8.0	ナデ、回転糸切り	ナデ		淡黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
92-20	包含層	土師質土器	高台付坏			7.6	磨滅	磨滅		灰黄褐色	1mm 以上の石英を若干含む	
92-21	包含層	土師質土器	高台付坏			9.0	ナデ、糸切り	ナデ		橙色	1mm 以下の石英を多く含む	
92-22	包含層	土師質土器	高台付坏				ナデ、磨滅	ナデ		浅黄橙色	1mm 以上の石英を若干含む	
92-23	包含層	土師質土器	柱状高台			5.6	ナデ、磨滅	磨滅		にぶい黄橙色	1mm 大の雲母、石英を微量に含む	
92-24	包含層	土製品	土錘	6.7	3.25					にぶい黄橙色	2mm 以下の石英を多く含む	
92-25	包含層	土製品	土錘	8.4	3.4					にぶい黄橙色	2mm 以下の石英を多く含む	

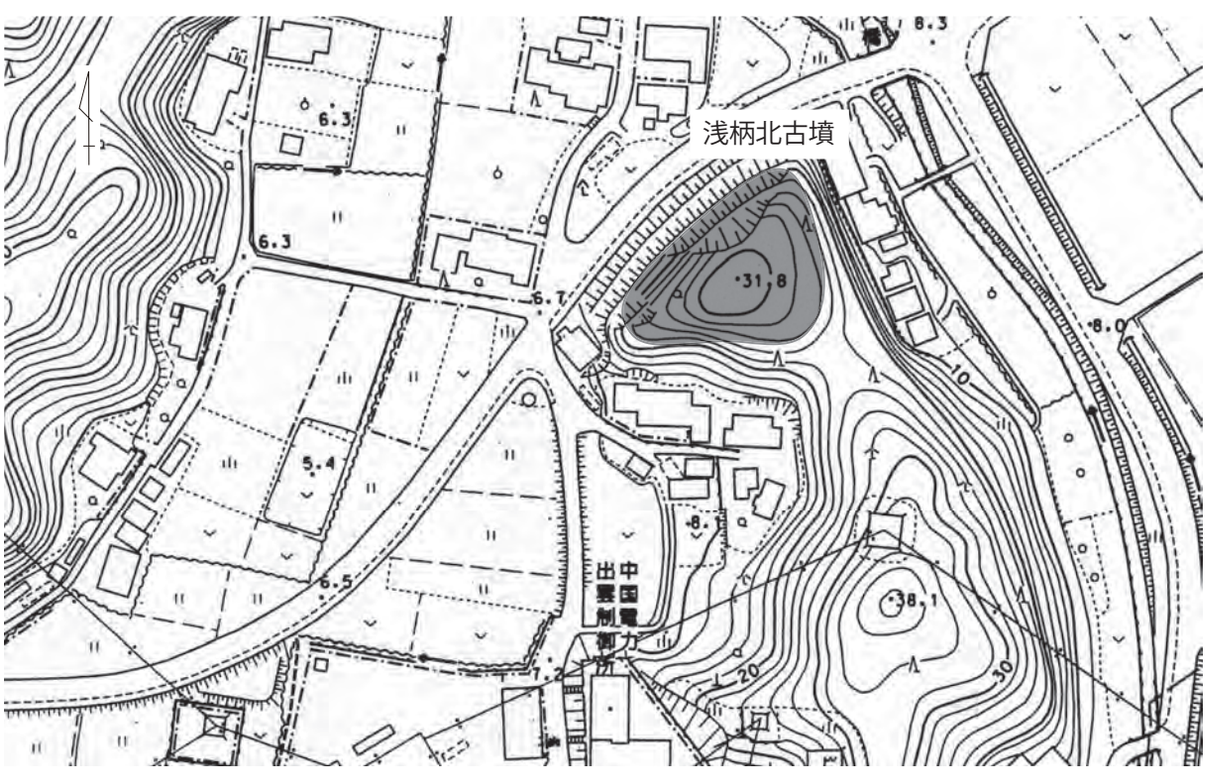
第５章　浅柄北古墳

第１節　調査の概要

浅柄北古墳は出雲市知井宮町 2412-2 他に所在し、出雲平野南麓の標高約 33 mの低丘陵上に立地する遺跡である。古墳のある尾根上からは北東に広がる出雲平野が一望できる眺望に優れた場所でもあるが、調査区域の地形は狭小な尾根と急斜面であった。特に南側斜面西寄りと東側斜面は著しい急傾斜で斜面下はすぐに民有地となり民家も存在しているため、調査は極めて困難な状況と考えられた。よってこの斜面を除く約 800㎡を調査対象とした。

調査はまず古墳の有無を確認するために尾根上から開始した。尾根上は自然崩壊などにより明確に古墳と呼べる墳丘等の高まりは確認できなかったが、自然地形もしくは墳丘が残存している可能性が高いと考えられる低い高まりが３箇所存在していた。尾根上の一番高所の標高約 33 mの地点と丘陵西端の標高約 27 mの地点及びそれらの間で標高約 30 mの地点３箇所で、一番高所にトレンチ２本、他は１本の計４本のトレンチを設定して調査を開始したところ、すべてのトレンチから須恵器甕片や堤瓶などが出土した。このことから尾根上の一番高所の高まりを墳丘１とし、そこから西に向かって順に墳丘２、墳丘３と呼称して調査を進めることにした。その結果、墳丘１では須恵器出土面の下層から土器棺２基が検出されたことにより古墳であることが判明した。その後１号墳と改めて調査を行ったが、墳形は不明で周溝や土器棺以外の埋葬施設も確認できなかった。この１号墳は土器棺に使用した壺形土器の様相から判断して古墳時代前期中葉頃に築造されたと考えられる。また、墳丘２・３では須恵器以外の遺物や埋葬施設等の古墳に伴う遺構は確認できなかった。

１号墳及び墳丘２・３は後背墳丘の可能性が高いと考えられたため、横穴墓の有無を確認するた

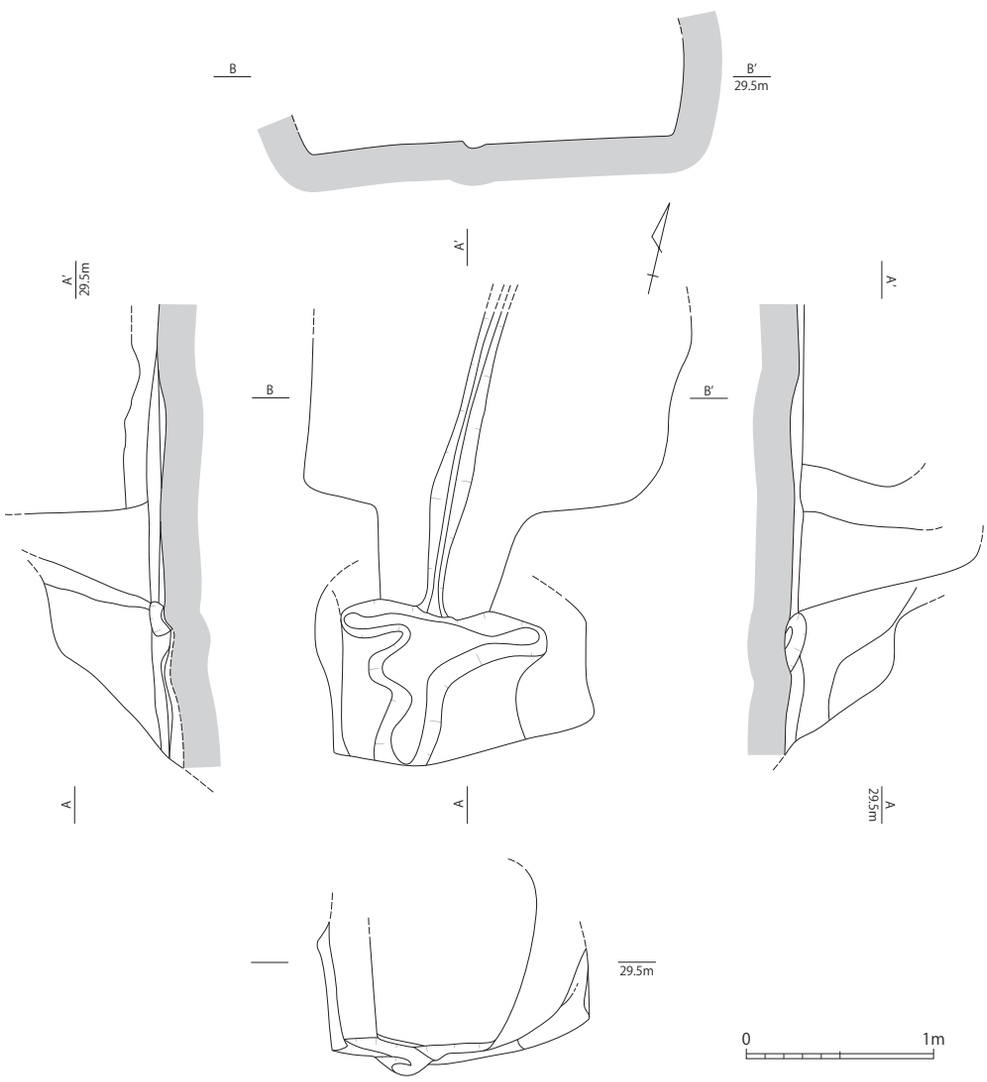


第 93 図　浅柄北古墳　位置図（S=1/2500）

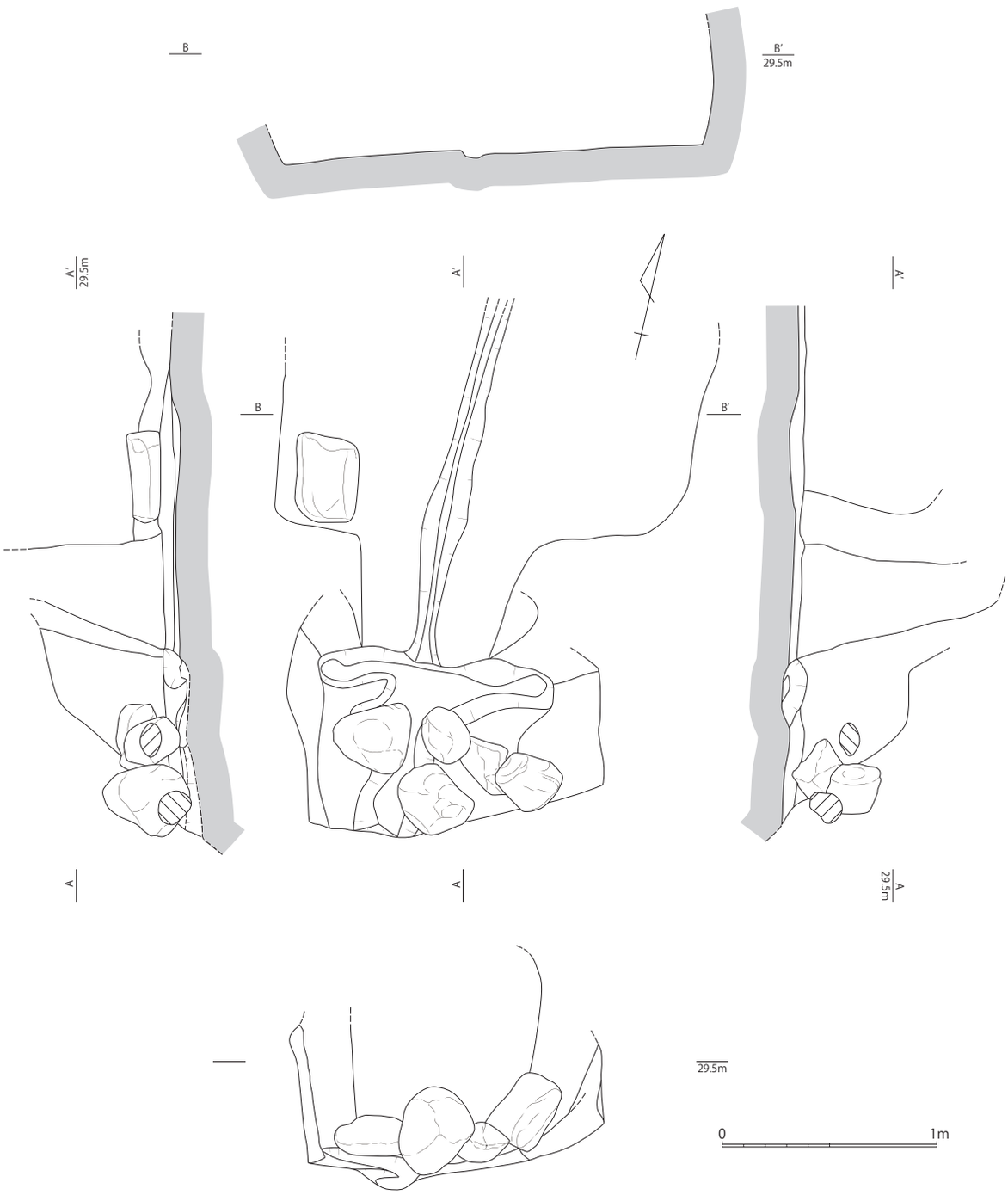
第 94 図　浅柄北古墳　全体図（S=1/200）

めに北側斜面と南側斜面の若干緩やかになった斜面東寄りにトレンチ計８本を設定して調査を行った。北側斜面では遺構、遺物は確認できなかったが、南側斜面のトレンチで横穴墓１穴を確認した。南側斜面は急傾斜であることから安全性に配慮して最低限調査が可能な範囲まで拡張して調査を行った結果、横穴墓６穴を検出した。急斜面であることから前庭部の大半が失われているものがほとんどであり、６穴のうち５穴は天井部等も崩落して危険な状態であった。この内、３穴の横穴墓（１～３号横穴墓）は調査中にも崩落を繰り返していたため、危険と判断して玄室全面を完掘するまでには至らなかった。このような状況で調査を進めて行った結果、１穴（１号横穴墓）以外は須恵器等の遺物が出土していることから、横穴墓の時期を推測する資料を得ることができた。また、崩落を免れた１穴（５号横穴墓）は残存状況も良好で須恵器等の遺物の他に石床及び人骨も遺存していた。

ここまでは平成 19 年度の調査であるが、第１章で述べたとおり平成 20 年度の工事中に未調査箇所の東側斜面から７号横穴墓が、南側斜面から８号横穴墓の２穴が確認されたため追加調査を行った。このうち８号横穴墓は 19 年度調査地と同じ斜面で検出したことから、２号もしくは３号横穴墓の玄室部分の可能性も考えられた。調査の結果、３号横穴墓の約 2.4 m下方に位置している新



第 95 図　浅柄北古墳　１号横穴墓実測図１（S=1/40）



第 96 図　浅柄北古墳　１号横穴墓実測図２（S=1/30）

たな横穴墓であることが判明した。また、８号横穴墓の西側約４ｍの地点で須恵器提瓶１点、東側斜面の７号横穴墓の北側約５ｍの地点で須恵器蓋１点が出土しており、この地は工事により既に掘削された場所であったが、横穴墓が存在していたことが窺える。

以上のように横穴墓は計８穴確認し、床面のレベルは標高 26.5 ｍ～ 29 ｍの位置で検出した。４号横穴墓を除く横穴墓群の上方には１号墳が、４号横穴墓の上方には墳丘２が存在しており、この古墳及び墳丘を後背墳丘として造墓されたものと考えられる。墳丘３の斜面については調査が行えなかったが､以上のような状況から推察すれば横穴墓が存在している可能性は高いと推測される。

第２節　横穴墓の調査

横穴墓は南側斜面東寄りから７穴、東側斜面の南寄りで１穴の計８穴検出した。床面のレベルは１～３号横穴墓が最も高く標高 29 m前後、６・７号横穴墓は 28 m、４・５号横穴墓は 27 m前後、８号横穴墓が 26.5 mの位置にあり、横穴墓間の距離は１m前後と密集して存在しているが、４号横穴墓のみやや離れた位置にある。横穴墓群の上部には１号墳と墳丘２が存在しており、４号横穴墓は墳丘２を、その他の横穴墓は１号墳を後背墳丘として造墓されているものと考えられる。

また、急斜面に造墓されていることから天井部の崩壊や前庭部の大半が流失しているものがほとんどであった。

１号横穴墓（第 95・96 図）

南側斜面の高所で検出した横穴墓で、床面のレベルは標高約 29 mを測り、１号墳のおよそ４m下方に位置する。前庭部は若干残存しているが、羨道部と玄室の天井部は崩壊しており、前庭部から玄室まで崩落土が詰まっている状況であった。調査は床面及び壁面を手がかりに崩落土を除去しながら行った。しかし、調査中にも幾度か崩落を繰り返していたことから、これ以上の調査は危険と判断したため玄室奥部まで調査を行えていない。

前庭部・羨門・羨道部

前庭部は急斜面のため大半が失われていた。残存する規模は長さ 85cm、幅 1.1 m、壁高 70cm を測る。床面中央には玄室から続く幅 30cm 前後、深さ８cm の溝があり、それに交差するように羨門側に閉塞施設用の溝が設けられている。閉塞施設の溝は長さ 1.1 m、幅約 20cm、深さ約５cm を測り、閉塞板を上からはめ込む構造となっている。閉塞板は確認できなかったが、それを押さえるために置かれたと考えられる 20cm ～ 35cm 大の円礫５個を閉塞施設溝の手前で検出した。これらは前庭部床面にほぼ密着する状態で残存していた。

羨門は天井部が崩壊して詳細は不明なものの、幅 60cm を測り、高さは 55cm まで確認できた。

羨道部も天井部が崩壊のため高さは不明で、長さ 60cm、幅 60 ～ 80cm で玄室側が広い構造となっている。床面には前庭部同様に玄室から続く溝が確認できたが、前庭部より狭く造られ幅 10cm ～ 15cm を測る。

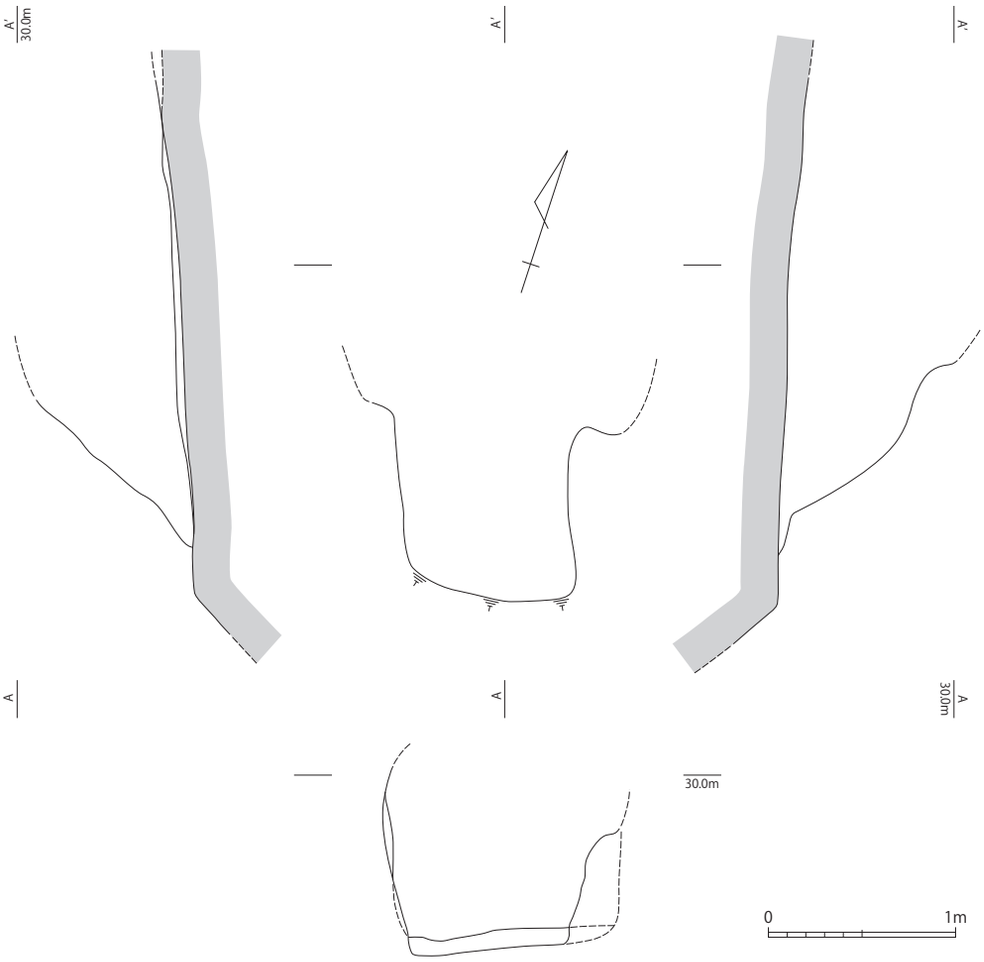
玄門・玄室

玄門は幅 80cm で高さは崩壊のため不明である。

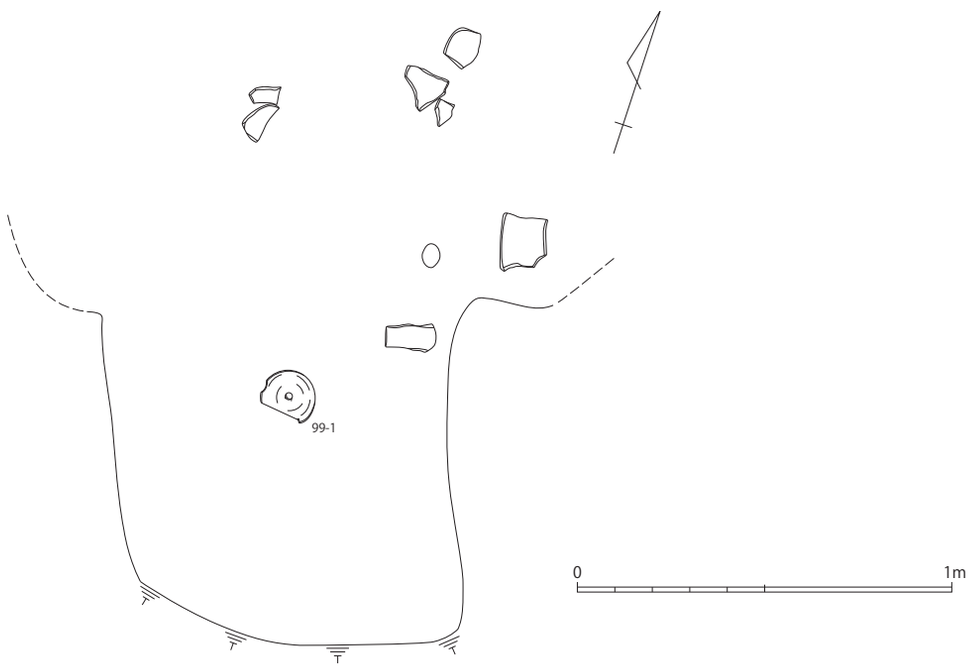
玄室は天井部が崩落しているため中央付近までしか調査を行えなかった。前庭部からやや東に振るように造られており、現存する規模で長さ約１m、幅約２m、壁高は約 50cm まで確認できた。完掘していないので明確には判断できないが、平面形態は方形状を呈していたと推測される。前壁側の両袖部分は明瞭に造られており、右袖 50cm、左袖 40cm と右袖が若干広い造りとなっている。また、左袖隅はやや角張っているが右袖隅は丸みをおびている。天井形態は判然としないものの、右壁が内湾気味に立ち上がることから判断してアーチ形と考えられる。

床面中央部分には前庭部まで続く幅 10cm ～ 20cm、深さ５cm の溝があり、床面を２分割して左右に屍床を造り出したものと考えられる。

左袖側には長さ 40cm、幅 30cm、厚さ約 15cm の長方形状の切石が一枚置かれているのを確認



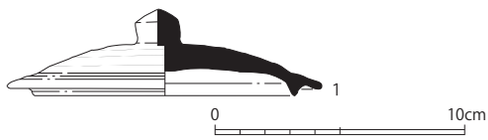
第 97 図　浅柄北古墳　２号横穴墓実測図（S=1/40）



第 98 図　浅柄北古墳　２号横穴墓遺物出土状況（S=1/20）

した。全面調査ができていないので明確には判断できないが、石枕として使用した可能性が高いと考えられる。

遺物を検出することができなかったため、横穴造墓の時期については不明である。



第 99 図　浅柄北古墳　２号横穴墓出土遺物実測図（S=1/3）

２号横穴墓（第 97・98 図）

１号横穴墓の約 70cm 西隣で検出した横穴墓で、床面のレベルは標高約 29.1 mを測り、１号墳のおよそ４m下方に位置する。前庭部は流失し、玄室の天井部及び壁面の大半も崩壊して崩落土が詰まっていることから、床面を追いかけるように調査を行ったが、１号横穴墓より崩落の危険性が高く、羨道部と玄室のほんの一部しか調査は行えなかった。

羨道部・玄門・玄室

羨道部の残存する規模は長さ 90cm、幅約 85cm、高さは 60cm まで確認できた。床面は水平に造られ、平面形態は方形状に近いと考えられる。

玄門は幅１mを測り、高さは不明である。

玄室は天井及び壁面の崩落が著しく、長さ約 1.8 mまで確認できたが、幅は不明である。前壁側で袖部分を確認したものの、右袖 20cm、左袖 10cm 程度しか残存していなかった。

平面形態及び天井形態についても崩壊が著しく把握することができなかった。

遺物出土状況

羨道部奥から玄室入り口付近で須恵器蓋１点と甕片数点が床面から約 15cm 程度浮いた状態で出土している。崩落が著しかったため甕片は上方の１号墳から流れ込んだ可能性も考えられ、横穴造墓の時期を必ずしも示しているとは限らないであろう。

出土遺物（第 99 図）

図化できたのは蓋のみであった。かえりが付くタイプの蓋で、天井部は低く宝珠状のつまみが付き、天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。

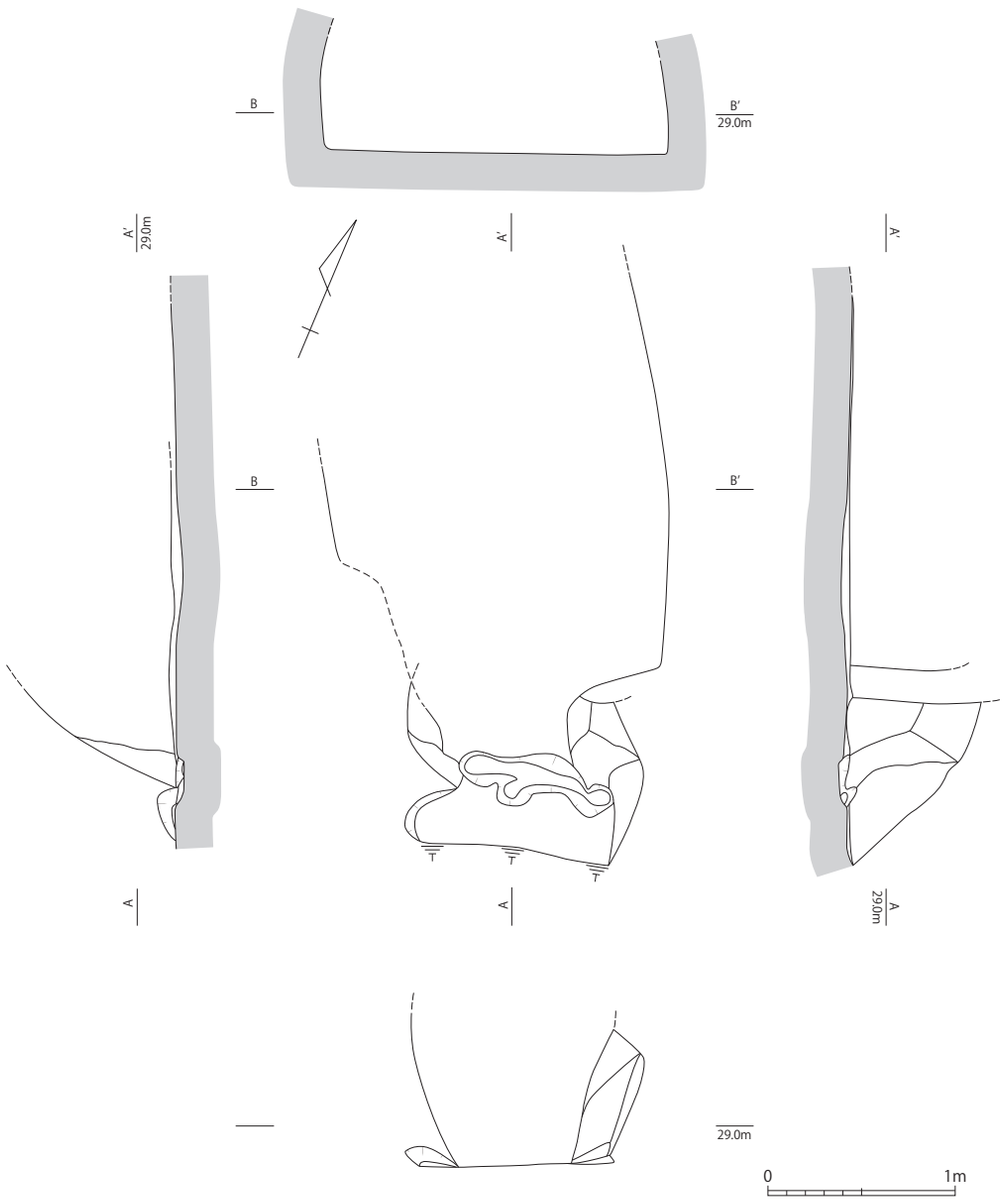
出雲６期に属するものと考えられる。

３号横穴墓（第 100・101 図）

２号横穴墓の約 1.5 m西隣で検出した横穴墓で、床面のレベルは標高約 28.8 mを測り、１号墳の約４m下方に位置する。前庭部は大半が流失し、玄室は天井部と壁面の一部が崩壊して崩落土が詰まっていた。１号横穴墓同様に床面及び壁面を手がかりに調査を進めていたが、調査中にも崩落を繰り返していたため玄室奥壁までは確認できなかった。

前庭部・羨門・羨道部

前庭部は斜面の自然崩壊により大半が失われており、残存する規模は長さ 30cm、幅 1.15 mを測る。羨門側に長さ 85cm、幅 25cm 前後、深さ５cm の閉塞施設用の溝が設けられ、閉塞用の板石４枚も残存していた。これらの板石は一番大きなものが前庭部に向かって傾いた状態で検出され、その他の石は１枚がやや宙に浮いた状態であったが、残り２枚は前庭部床面から若干浮くものの横



第 100 図　浅柄北古墳　3 号横穴墓実測図（S=1/40）

倒しの状態で検出されている。検出状況から判断して閉塞石は一番大きな板石を用いたものと考えられ、この板石を閉塞用の溝にはめ込んだ後に残りの板石を押さえとして使用したものと推測される。閉塞石の規模は長さ 60cm、幅 50cm、厚さ 10cm で、押さえに使用した板石は長さ 25cm ～ 35cm、幅 20 ～ 40cm、厚さ 10 ～ 15cm を測る。

羨門は幅 70cm を測り、高さは 50cm まで確認できた。

羨道部はやや短めで長さ 30cm、幅 50cm を測り、高さは 70cm まで確認できた。床面は水平に造られ、平面形態は横長の長方形状を呈している。

玄門・玄室

天井部と西壁手前が崩壊しているため玄門の幅や高さは不明である。

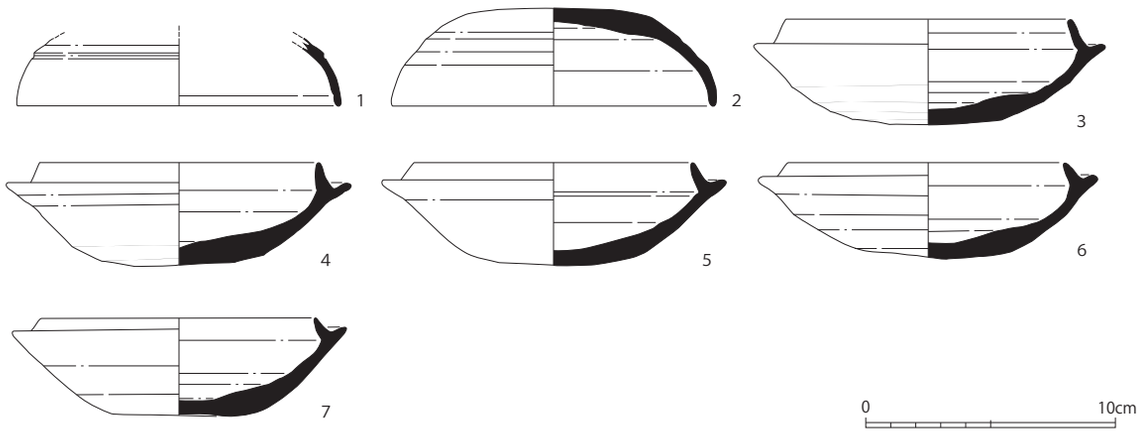
玄室は前庭部からやや西側に振るように造られており、奥行き 2.2 mまで調査は可能であったが、奥壁を確認することはできなかった。幅は中央付近で 1.8 mを測り、壁高は西壁側で 60cm、東壁

第 101 図　浅柄北古墳　3 号横穴墓閉塞石・遺物出土状況（S=1/30）

側で 50cm まで確認できた。平面形態は奥壁側が不明であるが縦長長方形を呈していたと考えられる。袖部分の左袖は崩壊のため不明で、右袖は 50cm の規模を測り、隅は角張っている。床面は手前側が若干窪むものの水平に近い造りとなっている。天井部が崩壊して判然としないが、横断面は半円形状を呈していたと考えられ、天井形態はアーチ形であったと推測される。

遺物出土状況

遺物は玄室内から須恵器蓋坏類 7 点が出土している。床面中央付近には認められず、やや側壁寄



第 102 図　浅柄北古墳　３号横穴墓出土遺物実測図（S=1/3）

りで床面直上のものと床面から数㎝浮いているものが認められた。

出土遺物（第 102 図）

１・２は蓋で３～７は坏身である。１は口縁部の破片で肩部に沈線と稜をもつタイプであり、口縁端部内面上方に沈線を施している。２は天井部がやや平らに近く、肩部に稜をもたないタイプである。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整が施される。３は立ち上がりが内傾してやや長くのびるタイプである。底部外面は回転ヘラ削りが施される。４は３より若干短い立ち上がりをもつが、底部外面に回転ヘラ削りが施されている。５～７は立ち上がりの短いタイプで、底部外面の調整は５がヘラ切り後ナデ、それ以外はヘラ切り未調整である。

これらは出雲４期～５期に属するものと考えられる。

４号横穴墓（第 103・104 図）

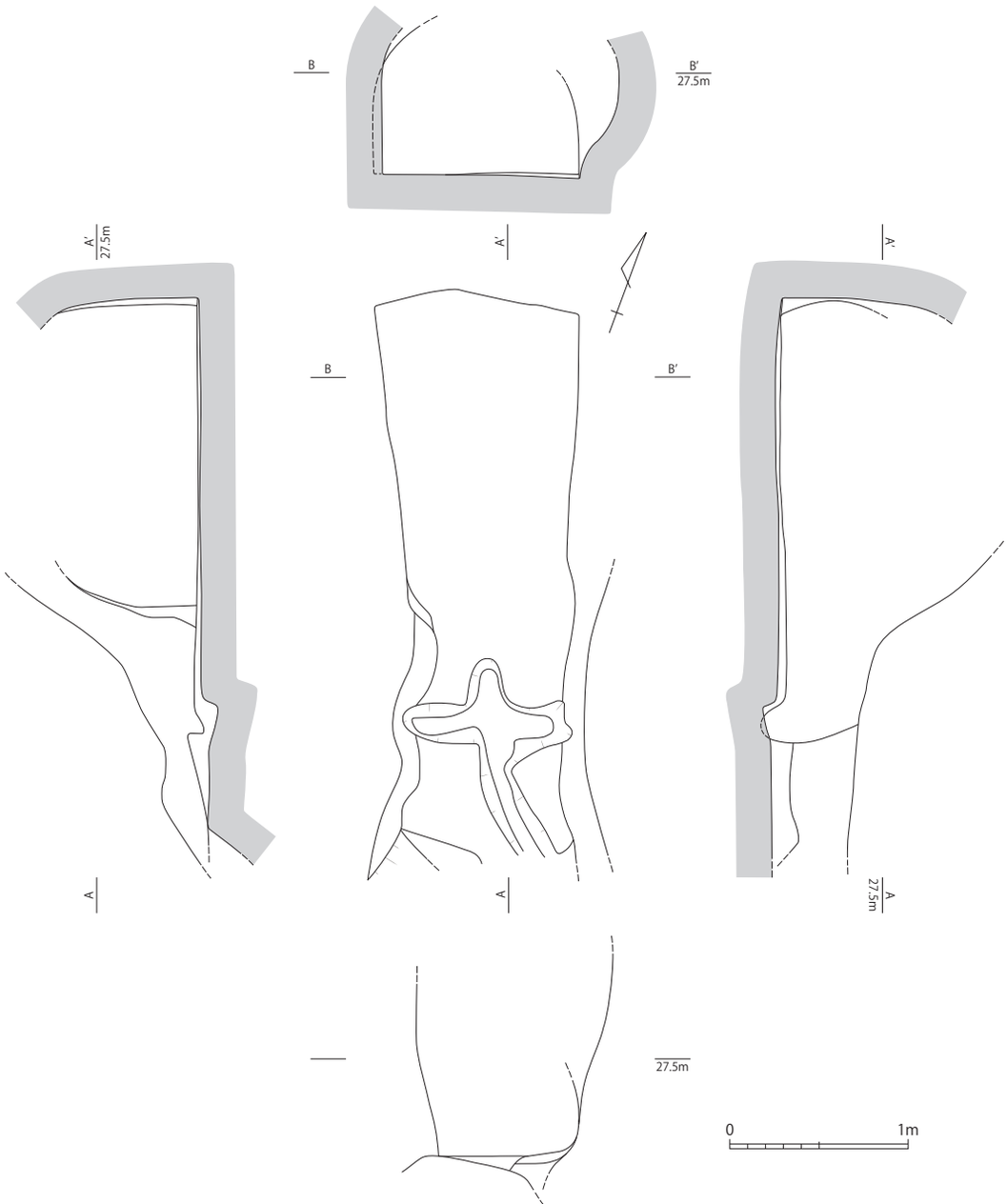
３号横穴墓から３m西に離れた地点から２m下方の位置で検出した横穴墓で、床面のレベルは標高約 26.9 mを測り、墳丘２の約３m下方に位置する。前庭部は他の横穴墓同様に流失部分が認められ、羨道部と玄室の天井部は崩壊が著しいが壁面は残存していた。床面及び壁面を手がかりに崩落土を除去しながら調査を行い、奥壁まで調査が可能であった。

前庭部・羨門・羨道部

前庭部は斜面の自然崩壊により大半が失われており、残存する規模は長さ 80cm、幅 80 ～ 95cm で羨門側が少し狭くなり、高さは 45cm まで確認できた。床面は流失等の影響によるものか現状では右壁に向かって低くなっている。羨門側に長さ 90cm、幅 20cm、深さ５cm 前後の閉塞施設用の溝が設けられ、その溝中央から前庭部右壁に向かってのびる溝が付随し、その規模は長さ 60cm、幅 20cm、深さ５cm ～ 10cm を測る。閉塞板は確認できなかったが、閉塞施設用の溝上には閉塞板の押さえとして使用されたと考えられる 30cm 前後の円礫４個が遺存し、１個は床面に密着した状態で、他の３個は浮いた状態で検出された。

羨門は幅 80cm を測り、高さは 50cm まで確認できた。

羨道部は長さ約 50cm、幅約 70cm を測り、高さは 50cm まで確認できた。床面は水平に近く、平面形態は横長長方形状を呈しているが、右側壁は真っ直ぐのびるのに対し、左側壁は内側に膨らんだ形状をしている。



第 103 図　浅柄北古墳　４号横穴墓実測図（S=1/40）

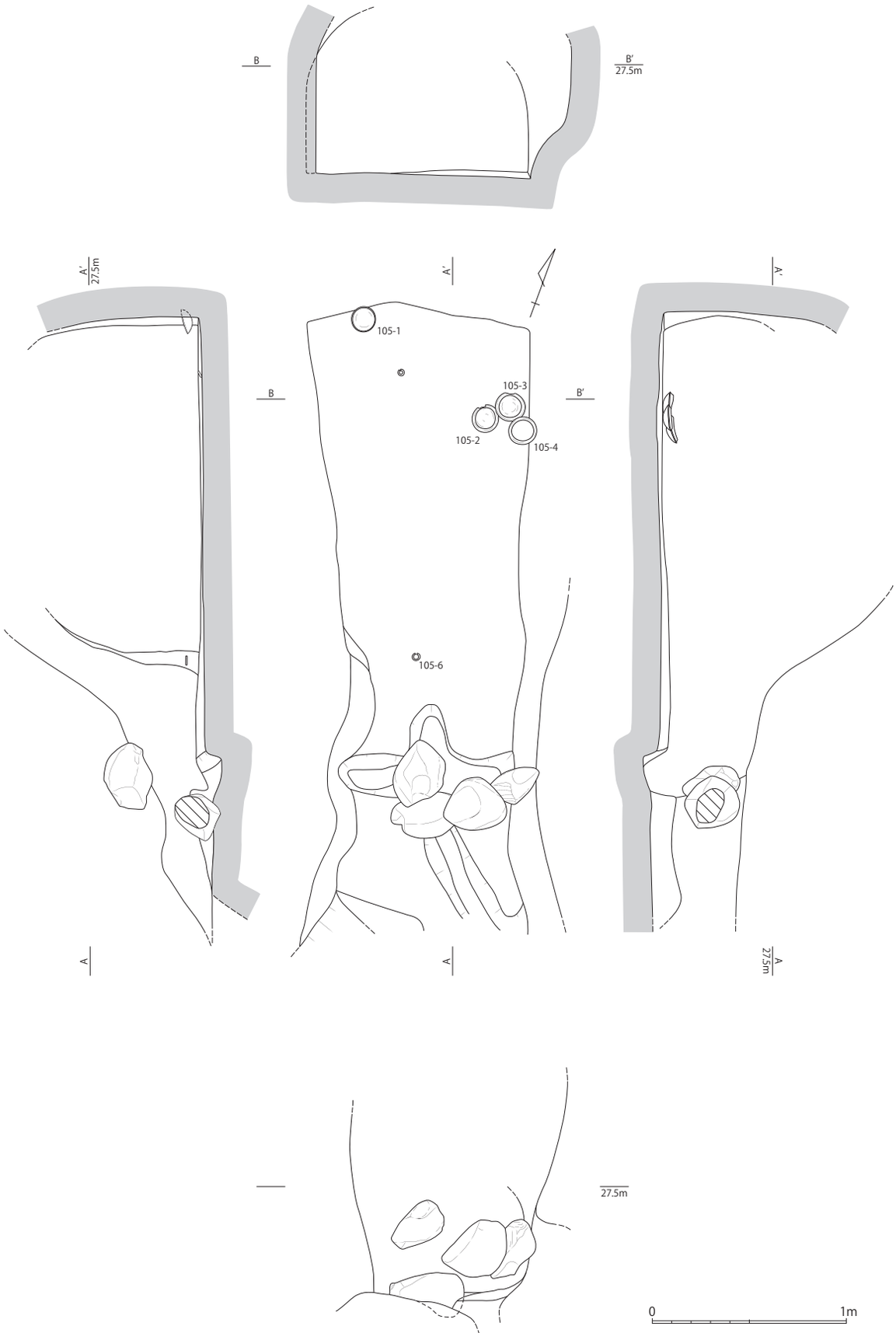
玄門・玄室

玄門は幅 80cm を測り、高さは不明である。

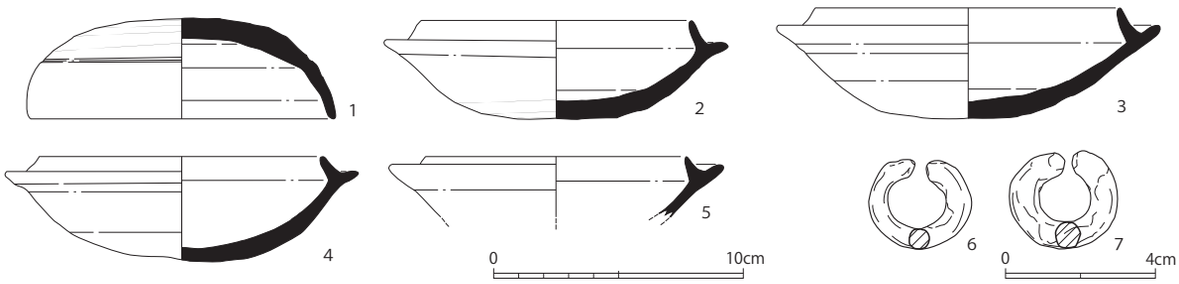
玄室は片袖式で前壁左側は約 10cm 西に屈曲して小さな袖部を造り出しているが、右側は若干カーブを描くもののやや直線的に奥壁までのびている。現存する規模は長さ 1.9 m、幅 90cm ～ 1.1 mを測り、壁高は約 80cm まで確認できた。平面形態は奥壁側が若干広い縦長長方形を呈している。天井部等の形態は崩壊が著しいため明確には判断しがたいが、横断面の形態をみると両側壁は床面から垂直気味に立ち上がり、天井部付近で内側に内湾していることが認められるため半円形状に近いものと考えられ、天井形態はアーチ形であったと推測される。

遺物出土状況

遺物は耳環２点と須恵器蓋坏類５点が玄室内から出土している。耳環は１点が玄門中央付近で床



第 104 図　浅柄北古墳　４号横穴墓閉塞石・遺物出土状況（S=1/30）



第 105 図　浅柄北古墳　４号横穴墓出土遺物実測図（１～５：S=1/3、６・７：S=1/2）

面から数㎝浮いた状態で出土し、もう１点は奥壁中央から手前約 30cm の位置で床面直上から出土している。須恵器は奥壁側右寄りで破片を含めて４点、左寄りの奥で１点出土しており、奥の１点は若干浮いているが、他は床面直上から出土している。

出土遺物（第 105 図）

１は蓋で肩部に２条の沈線を施して鈍い稜を作り出しているタイプで、天井部外面は回転ヘラ削りを施す。２～５は坏身で、内傾してのびる立ち上がりを有するが、４・５は２・３に比べてやや短い。２の底部外面は回転ヘラ削り、３はヘラ切り後若干ナデ調整、４は未調整である。６・７は耳環で現状では風化が著しく緑青が浮いている。

須恵器の様相から出雲４期～５期に属するものと考えられる。

５号横穴墓（第 106 ～ 108 図）

南側斜面の東端で検出した横穴墓で西隣上方に６号横穴墓、そのまた上方に１号横穴墓が存在している。１号墳の約６ｍ下方に位置し、床面のレベルは標高約 27.2 ｍを測り、横穴墓群中唯一崩壊を免れた横穴墓でもある。前庭部は自然崩壊の影響を受けているが、他の横穴墓と比較して残存状況が最も良く、玄室内には遺物の他に石床と人骨が遺存していた。

前庭部・羨門・羨道部

前庭部は比較的残存状況が良く、残存する規模は長さ約 1.3 ｍ、幅 95cm 前後、壁高は先端から羨門に向けて高くなり最大で約 60cm を測り、平面形態は縦長長方形を呈している。羨門側に長さ１ｍ、幅 25cm、深さ５cm 前後の閉塞施設用の溝を設けており、この溝上には閉塞板を押さえるために使用したと考えられる 20cm ～ 40cm 大の礫が十数点、床面から密着するように置かれていたが、閉塞板は確認できなかった。

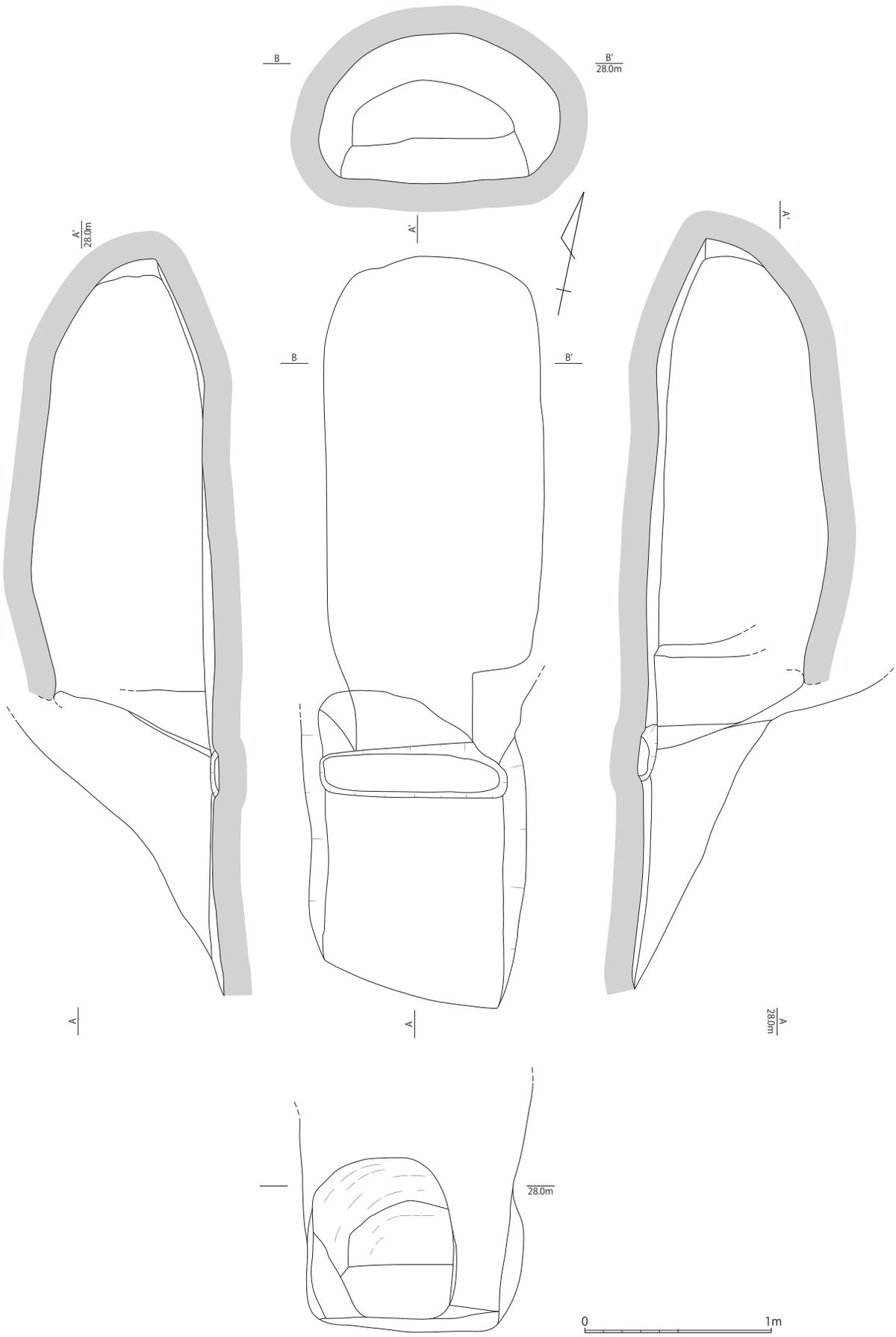
羨門は幅 60cm、高さ 80cm を測る。横断面の形状は隅丸長方形に近く、前庭部左寄りに造られている。

羨道部は長さ 40cm、幅 60cm、高さ 90cm を測る。床面はほぼ水平に造られ、平面形態は横長長方形を呈している。

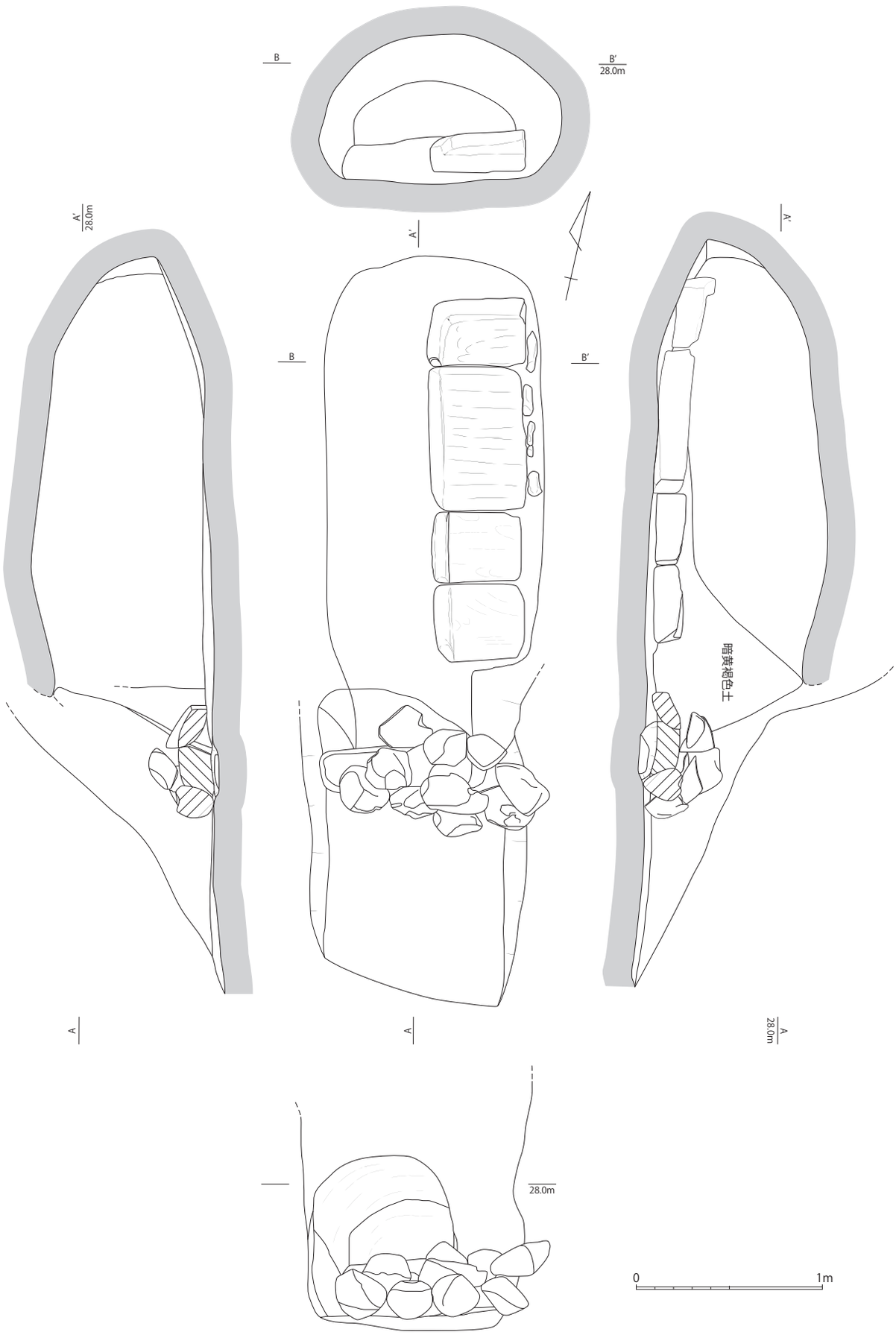
玄門・玄室

玄門は幅 70cm、高さ 90cm を測る。

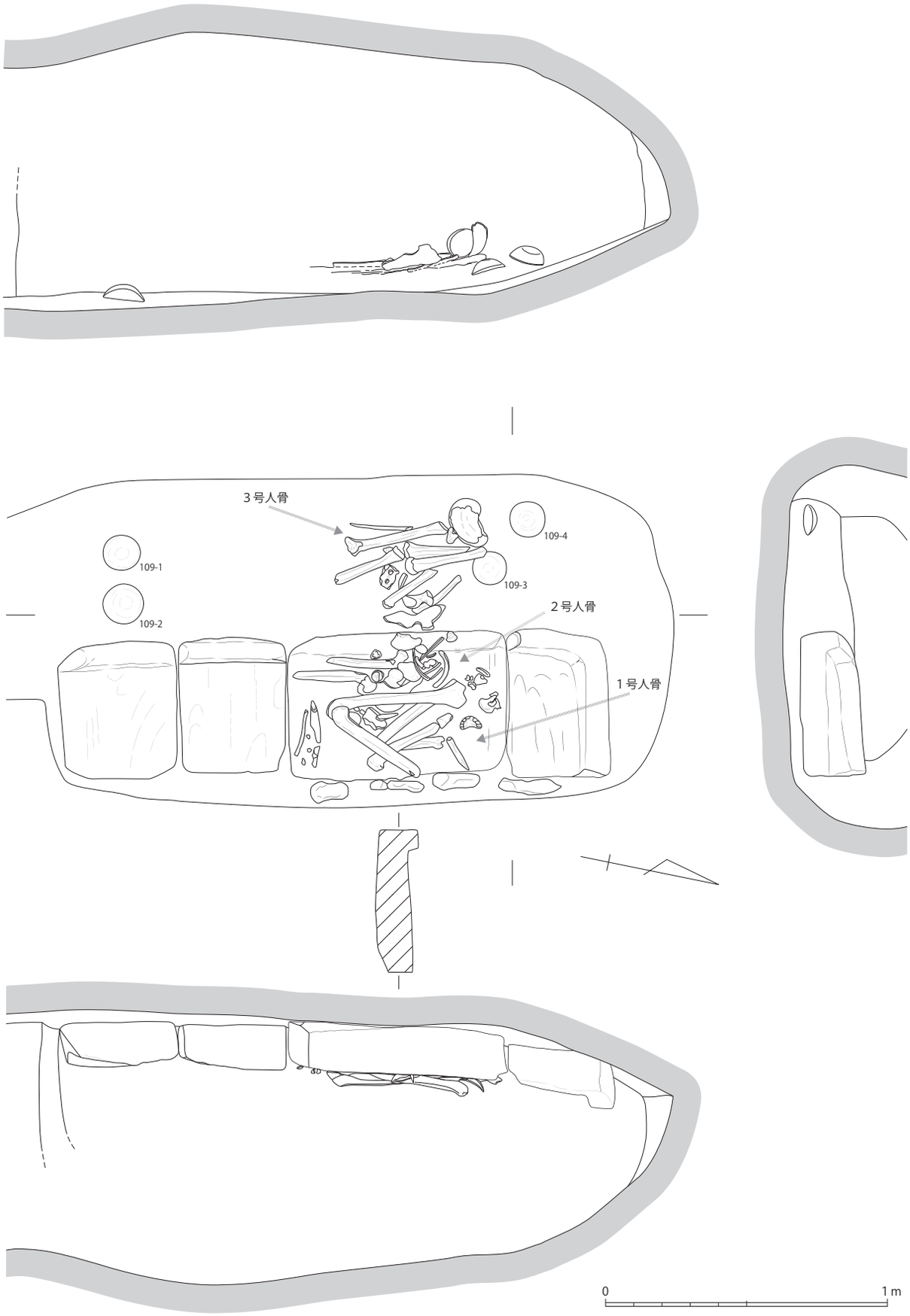
玄室は片袖式と考えられ、右側は玄門から 30cm 東に屈曲して明瞭な袖部分を造りだしているが、左側はやや西に緩いカーブを描くが右袖のように明瞭ではない。規模は長さ 2.2 ｍ、幅は中央で 1.2 ｍ、玄門側と奥壁側で１ｍ、高さは最大で 98cm を測り、平面形態は縦長の隅丸長方形状を呈している。床面は奥壁手前 70cm までは水平であるが、そこから奥壁に向かって傾斜がつき、



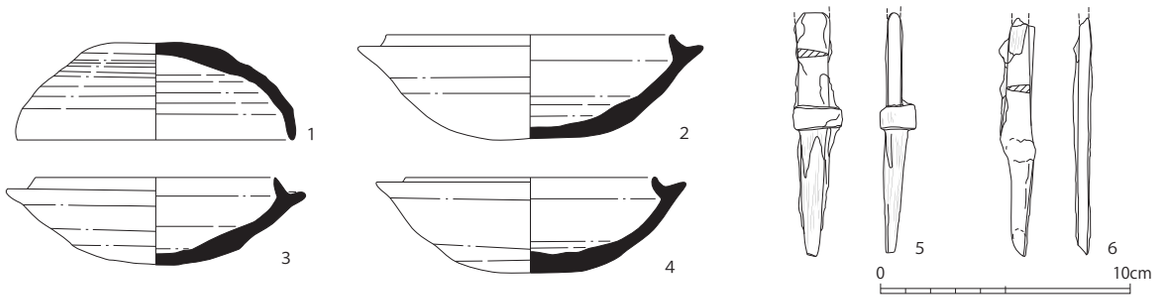
第 106 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓実測図（S=1/30）



第 107 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓閉塞石・石床出土状況（S=1/30）



第 108 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓人骨・土器出土状況　（S=1/20）



第 109 図　浅柄北古墳　5 号横穴墓出土遺物実測図（S=1/3）

奥壁側では約 20cm 高くなっている。横断面の形状は半円形状で、天井形態は奥壁が内湾して天井部との界線が不明瞭であるが、基本的にアーチ形を呈するものと考えられる。

床面には右壁側に 4 枚の切石で構成された石床が設置され、奥から 2 枚目の石床上から左壁側にかけて人骨が遺存している。また、羨道部から流入した暗黄褐色土層が 3 枚目の石床手前まで堆積していた。

壁面から天井部にかけては幅 5 ～ 8 cm 程度の明瞭な加工痕が認められている。

石床

石床は 4 枚の切石で構成され、その規模は長さ 1.95 m、幅 50cm 前後、厚さ 20cm 前後を測り、 1 枚ごとの長さは奥から 35cm、80cm、38cm、42cm となっている。石床左端は断面 L 字状に加工して縁を作り出しており、奥側の 1 枚は奥壁側にも縁を作っている。縁の厚さは 12cm ～ 18cm、高さは 5 cm を測る。石床全面に幅約 3 cm 程度の加工痕が明瞭に認められる。また、奥から 2 枚目までの石床と右壁との間には長さ 20cm 前後の割石が隙間を埋めるように詰め込まれていたが、手前側では認められなかった。

人骨

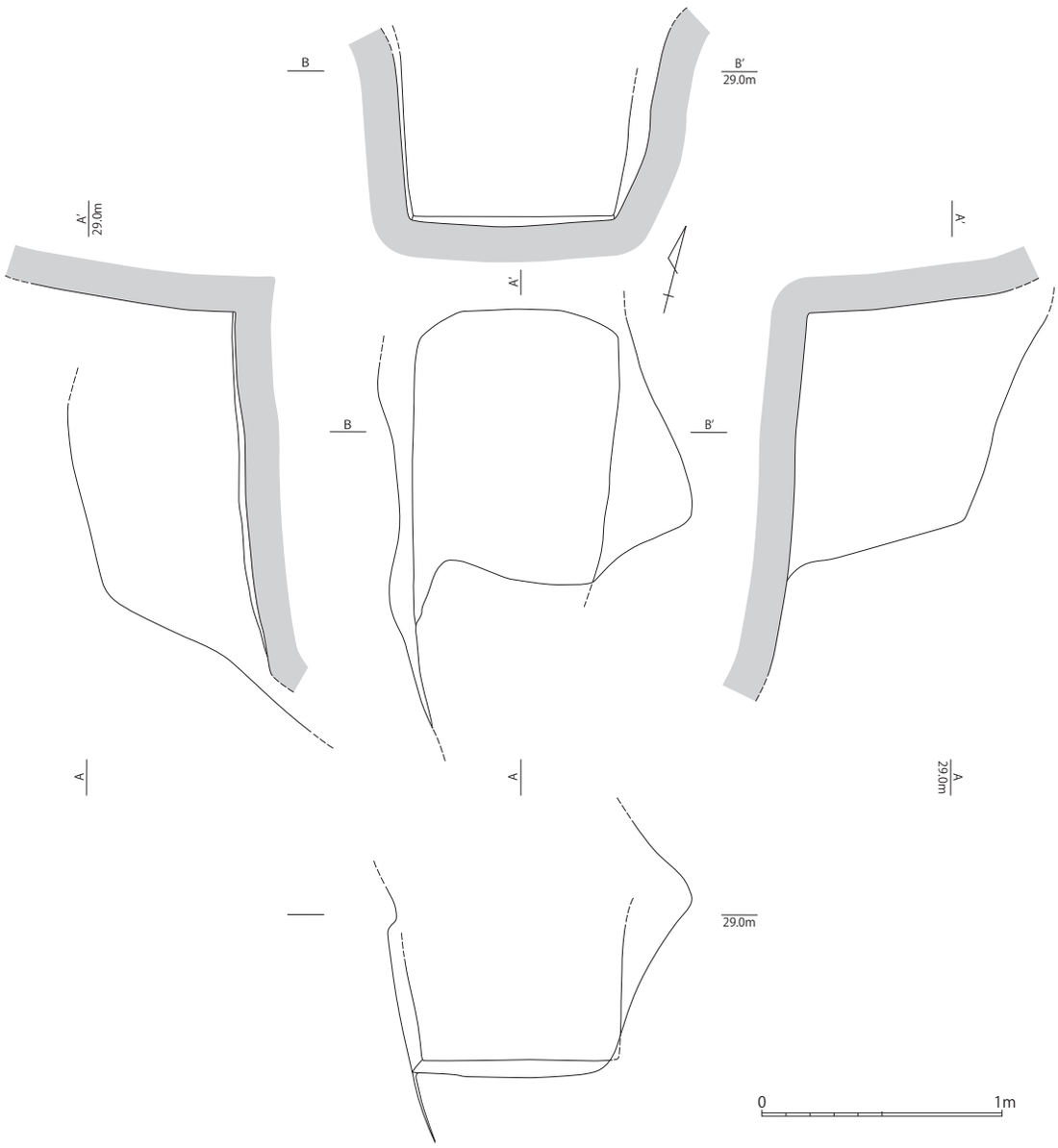
人骨は奥から 2 枚目の石床上とそこから左壁にかけての範囲に集められるような状況で検出されており、盗掘等の痕跡は認められないため、追葬等によって原位置を動かされたものと推測できる。人骨の遺存状態も極めて良く、分析の結果、 4 体分の人骨が残存していることが判明した。このうち 4 号人骨は玄門側の石床上に遺存していたようであるが、堆積土の調査中に取り上げてしまったため、原位置は不明で残存量も少なかった。残りの 3 体は石床右側に 1 号人骨、石床左端に 2 号人骨、玄室床面で 3 号人骨が遺存している。このうち 3 号人骨のみが女性で他は男性である。また、 1 号人骨は推定身長が 167.22cm と高身長で 2 号人骨は 16 歳頃の成年であることも判明している。なお、人骨の詳細については第 8 章自然科学的分析の第 3 節を参照願いたい。

遺物出土状況

遺物は須恵器蓋坏類 4 点と刀子 2 点が出土している。刀子は堆積土の調査中に 4 号人骨とともに取り上げてしまったため原位置は不明であるが、石床上にあったものと考えられる。須恵器は 4 点とも玄室左側の床面直上で検出した。 2 点は入り口付近、もう 2 点は奥壁付近と 2 箇所に分かれて出土している。

出土遺物（第 109 図）

1 は蓋で肩部に稜もしくは沈線をもたないタイプである。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整を施している。 2 ～ 4 は立ち上がりが短く内傾するタイプの坏身で、底部調整はヘラ切り後ナデで仕上



第 110 図　浅柄北古墳　６号横穴墓実測図（S=1/30）

げている。５・６は刀子で先端を欠損しているが、部分的に木質が残り、５の柄部には鏃が認められる。

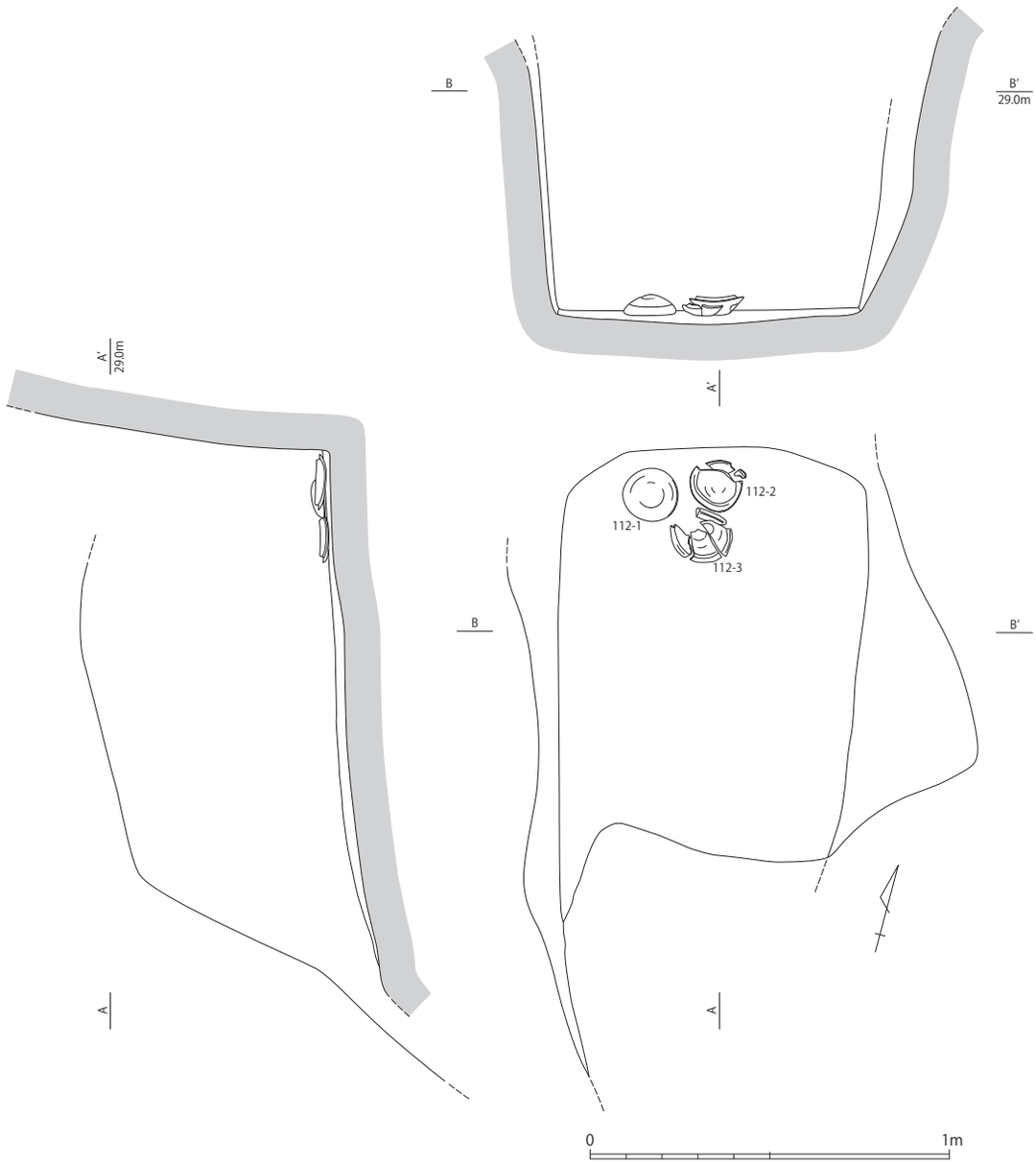
須恵器の様相から出雲５期に属するものと考えられる。

６号横穴墓（第 110・111 図）

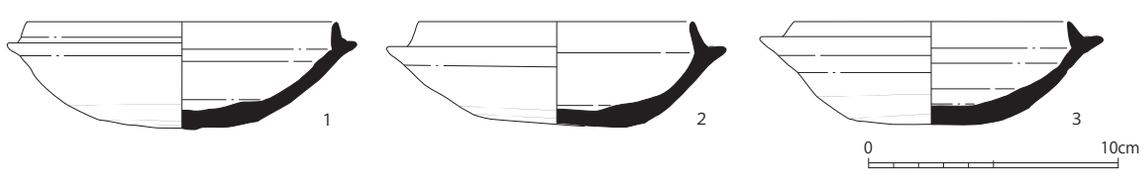
５号横穴墓と１号横穴墓の中間で検出した横穴墓で、床面のレベルは標高約 28.4 mを測る。横穴墓群の中では一番遺存状況が悪く、玄室奥壁側のみ検出した。

玄室

玄室の大半は崩壊しており、奥壁から 1.1 m手前までしか残存していない。幅は約 80cm を測る。両壁は垂直気味に立ち上がり、右壁で 80cm、左壁で 70cm まで確認できた。床面は水平に近い造りである。残存部分が少ないため明確には判断できないが、他の横穴墓の形態から推測すれば、平面形態は奥壁側がやや丸みをおびているが縦長の長方形状を呈し、天井形態はアーチ形であったと



第 111 図　浅柄北古墳　６号横穴墓遺物出土状況（S=1/20）



第 112 図　浅柄北古墳　６号横穴墓出土遺物実測図（S=1/3）

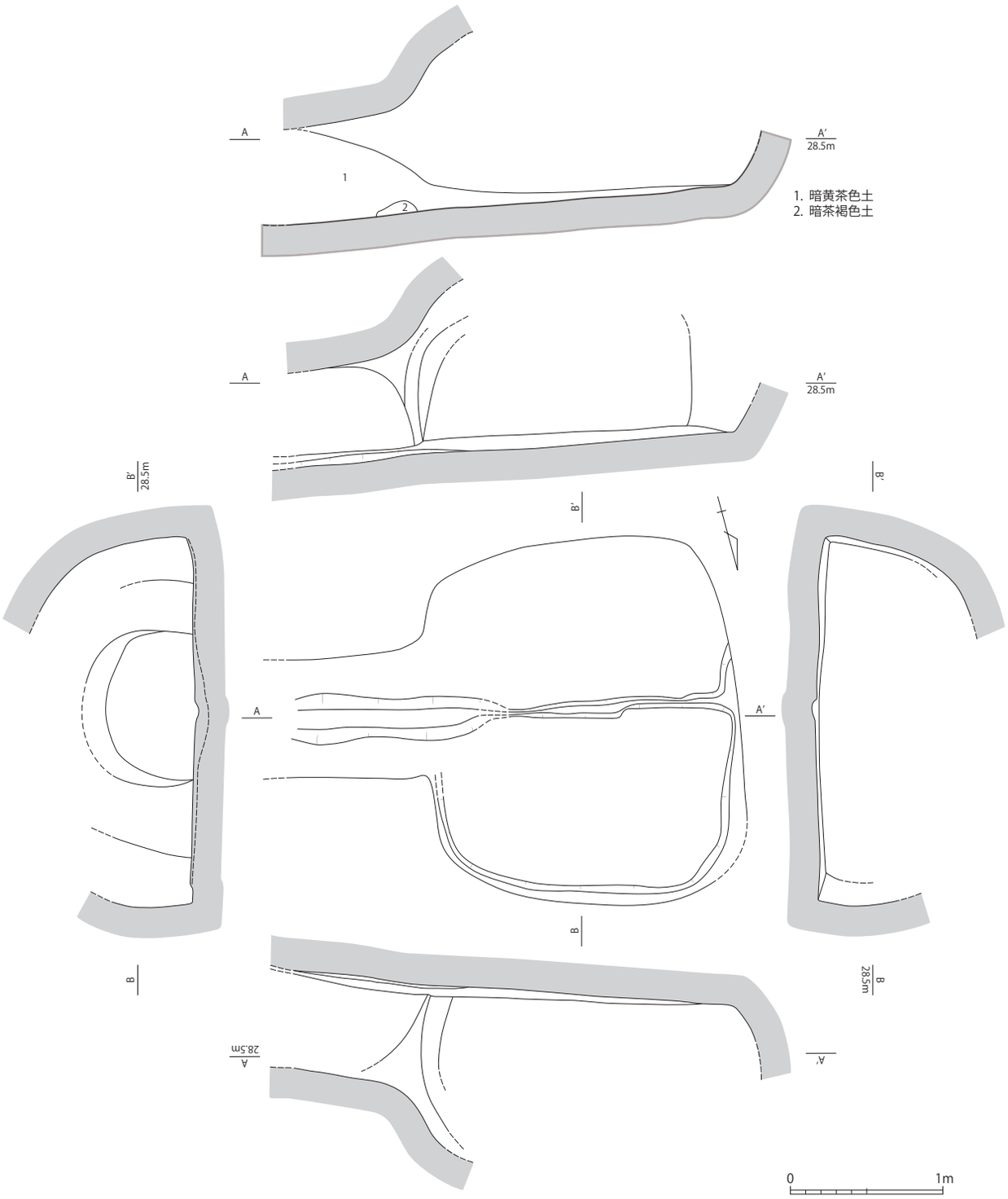
推測される。

遺物出土状況

かなり崩壊していたため遺物は残っていないものと考えられたが、奥壁側の床面直上で須恵器坏身３点が出土した。

出土遺物（第 112 図）

３点とも立ち上がりが短く外傾するタイプの坏身で、底部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、底部中央はヘラ切り後ナデ調整を行っている。



第 113 図　浅柄北古墳　7 号横穴墓実測図（S=1/40）

須恵器の様相から出雲 4 期に属するものと考えられる。

7 号横穴墓（第 113・114 図）

唯一東側斜面で検出した横穴墓である。前述したように工事中に玄室部分が開口して発見された横穴墓であるが、斜面は未掘削で急傾斜の状態は変わっていないため前庭部の調査は行うことができなかった。工事により破壊された土砂を取り除いた後には、羨道部から流入した土が玄室奥壁ま

で薄く堆積していたことから、本来は崩落を免れていたと考えられる。調査は玄室部分から羨道部まで行い、床面のレベルは標高約 28.2 mを測る。

羨道部

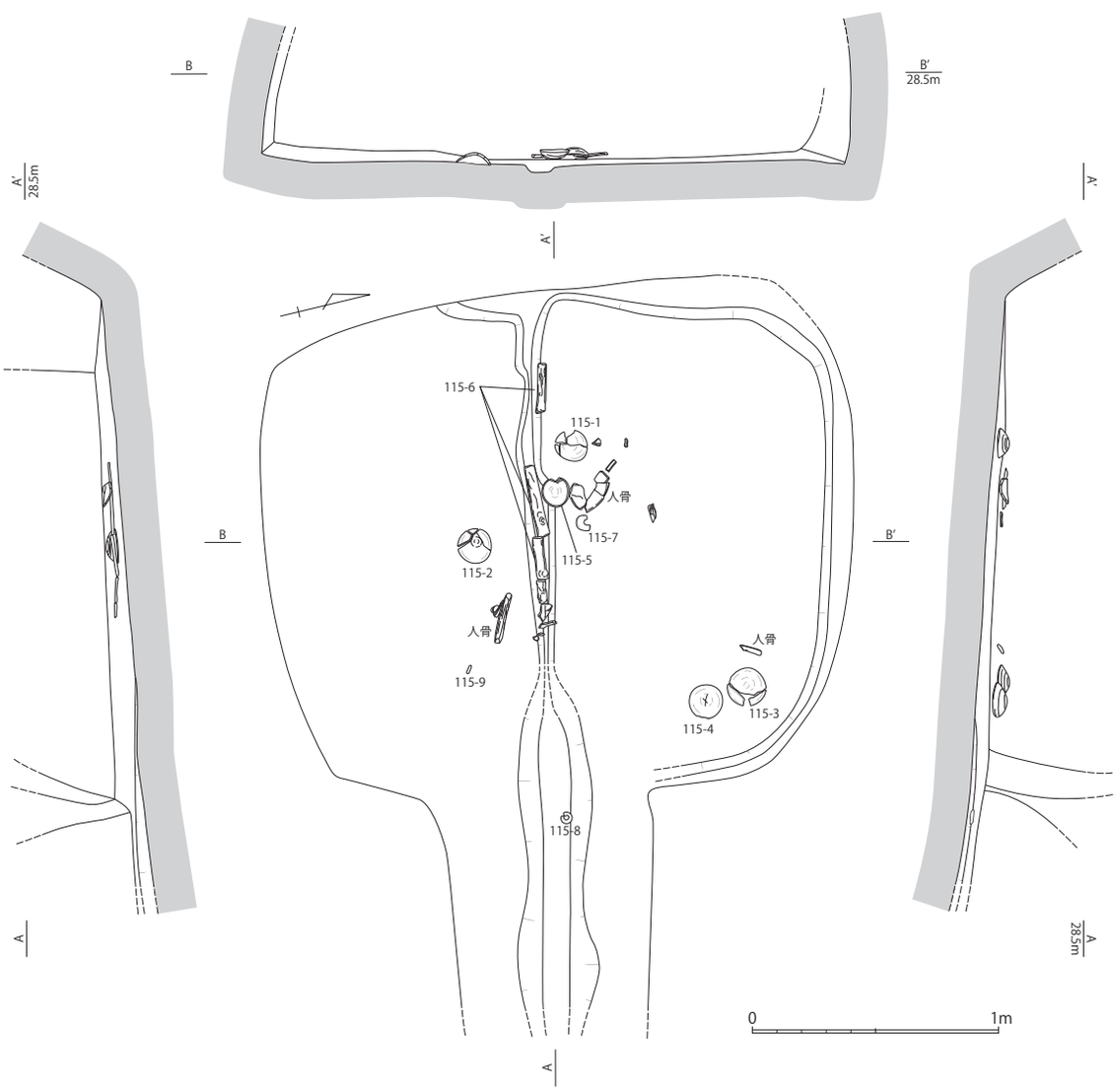
羨道部は玄室側から可能な範囲まで調査を行い、現存する規模は長さ約 80cm、幅 75cm ～ 90cm、高さ 65cm を測る。玄門側に向かって広くなっているが、平面形態は方形状を呈している。床面には玄室から続く溝が東西方向にのびており、幅 22cm ～ 34cm、深さ約 6 cm を測る。

玄門・玄室

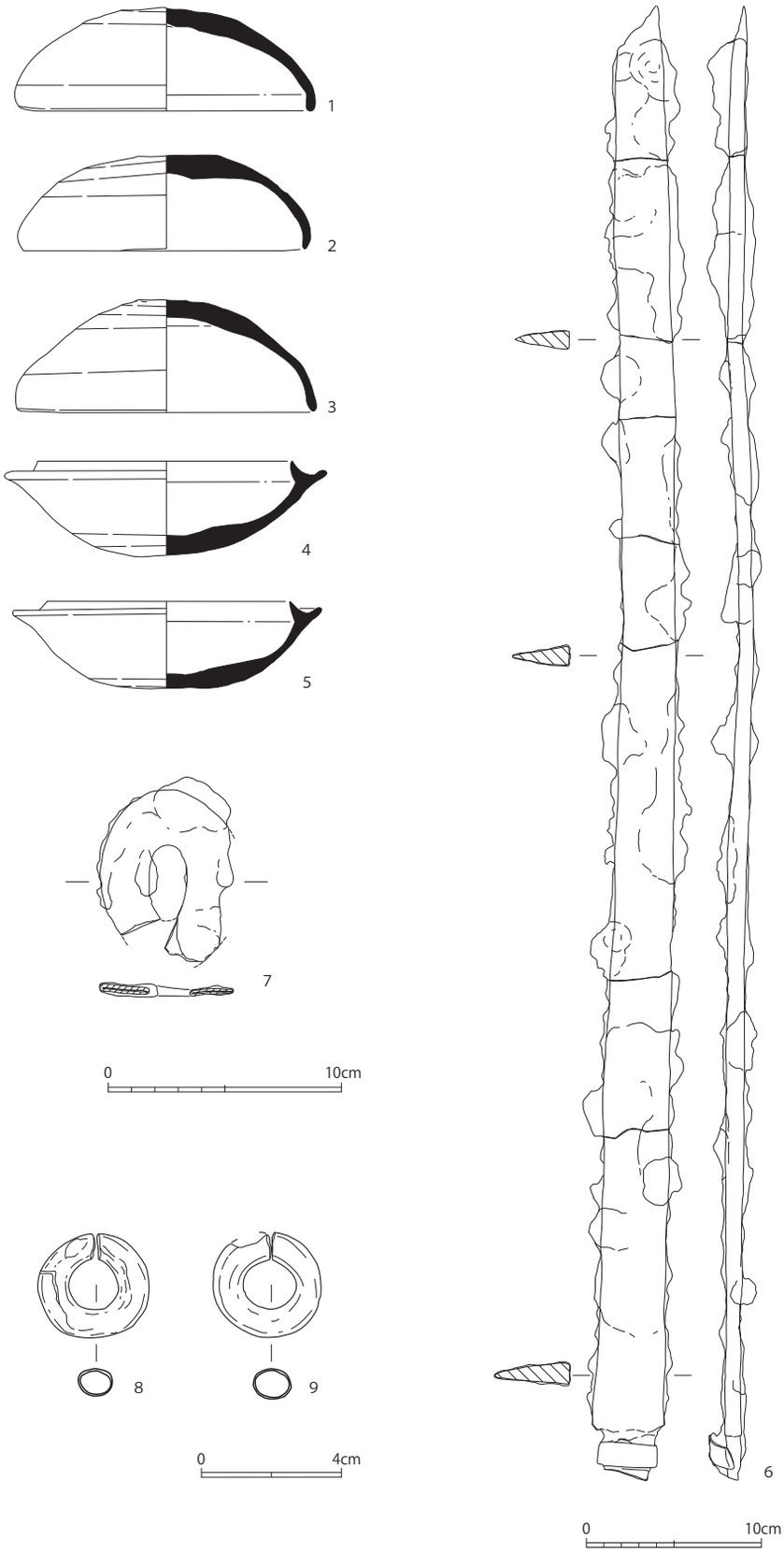
玄門は幅 95cm、高さ 90cm を測り、横断面は半円形状を呈している。

玄室は長さ 2.1 m、幅 1.9 m～ 2.4 mを測り、高さは 1 mまで確認できた。玄門側が若干狭くなるが、平面形態は横長長方形を呈している。平面形態が横長長方形をとるのはこれ 1 例のみである。袖部分は左袖が 30cm、右袖が 50cm を測り、隅丸状を呈している。天井部が破壊されているため明確に判断できないが、横断面の形態は半円形状であったと考えられ、天井形態もアーチ形を呈するものと推測される。

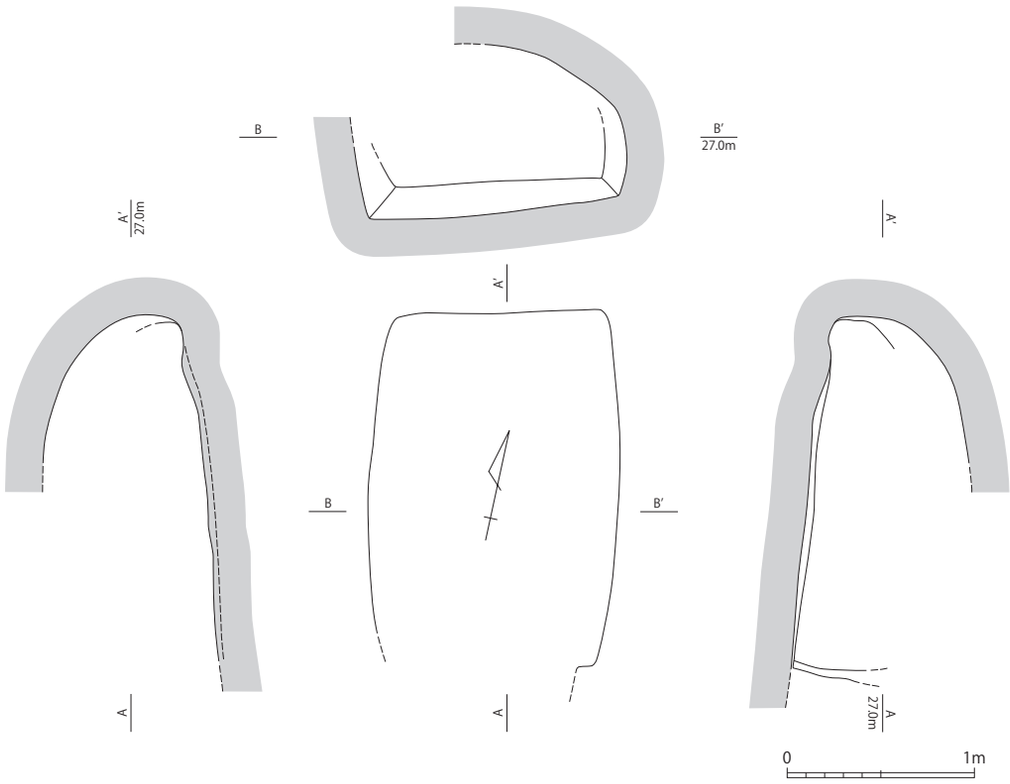
床面には玄室中軸線に沿って幅 10cm 前後、深さ約 5 cm の溝がのび、羨道部手前で広がっている。



第 114 図　浅柄北古墳　7 号横穴墓遺物出土状況（S=1/30）



第 115 図　浅柄北古墳　７号横穴墓出土遺物実測図（１～５・７：S=1/3、６：S=1/4、８・９：S=1/2）



第 116 図　浅柄北古墳　８号横穴墓実測図（S=1/40）

この溝は奥壁から右壁に沿っても廻っているが、右袖部分で消滅している。床面を２分割し、左右に屍床を造りだしたものと考えられる。

遺物出土状況

遺物は須恵器蓋坏類５点、大刀１点、鍔１点、耳環２点が出土している。須恵器は右袖及び玄室中央の床面直上で検出した。大刀は破損して数点に分割していたが、床面中央の溝に沿うような状態で出土し、鍔はその右横約 15cm 離れて出土している。耳環は玄門中央の溝上とそこから 70cm 離れた左側屍床上面から出土している。また、これら遺物とともに人骨片も少量であるが検出されたが、遺存状態は悪かった。

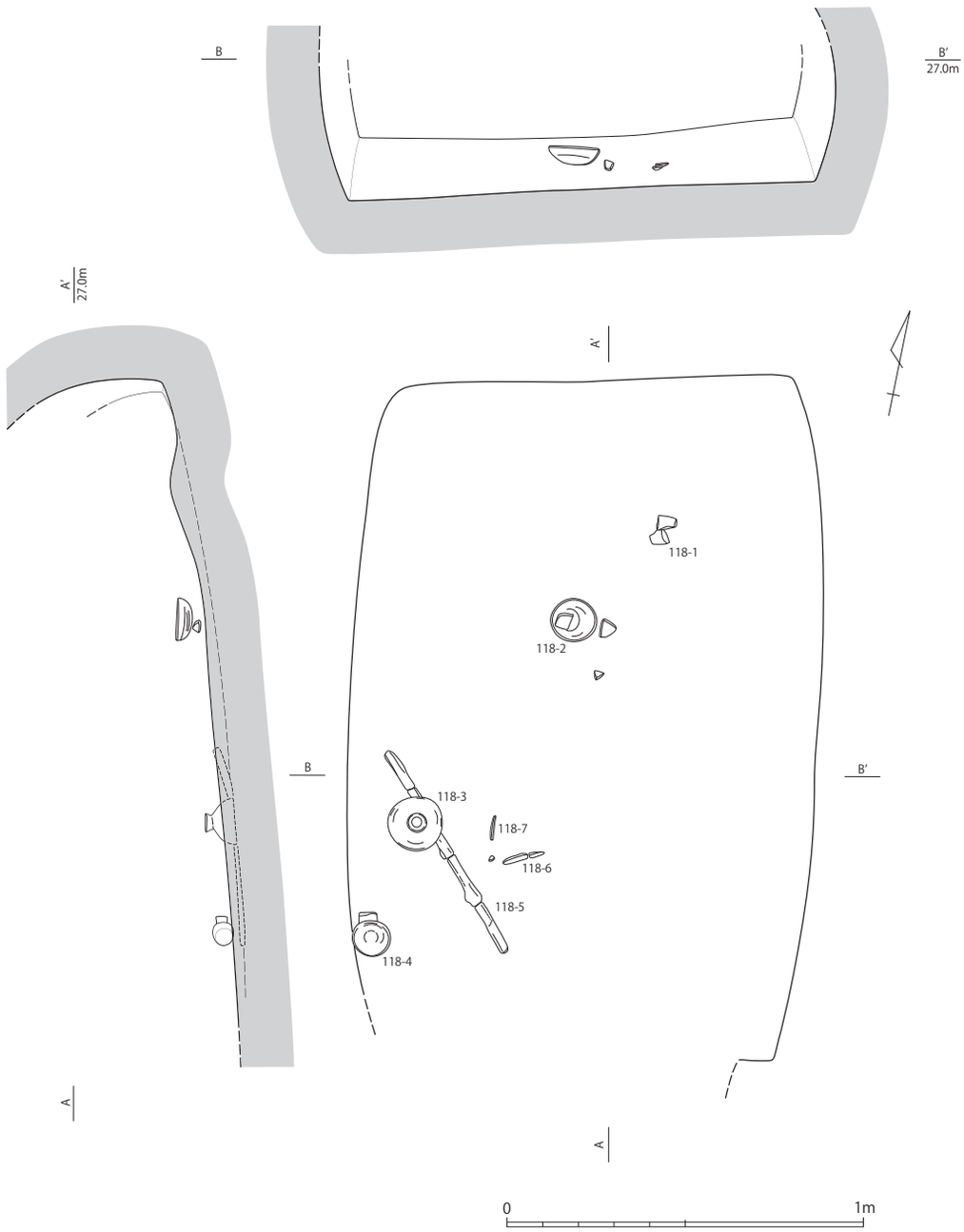
出土遺物（第 115 図）

１～３は肩部に稜及び沈線をもたないタイプの蓋で、天井部は丸みをおび、ヘラ切り後ナデ調整を行っている。４・５は立ち上がりが短く内傾してのびるタイプの坏身で、底部外面はヘラ切り後ナデ調整を行っている。６は大刀で柄部をほぼ欠損するが、長さ 84cm、幅４cm と長めのもので、柄部には鏻が残っている。７は鍔で長さ 7.3cm、幅 5.6cm で楕円形もしくは倒卵形を呈していたと考えられる。８・９は中空の耳環で風化が著しく緑青が浮いている。

須恵器の様相から出雲５期に属するものと考えられる。

８号横穴墓（第 116・117 図）

７号横穴墓同様に工事中に発見された横穴墓で、玄室天井部が破壊されていた。現地は工事が進み元の地形を留めていなかったが、検出地点が調査の終了した南側斜面であったことから、当初は完掘できなかった２号もしくは３号横穴墓の玄室部分の可能性が高いと考えられた。



第 117 図　浅柄北古墳　８号横穴墓遺物出土状況（S=1/20）

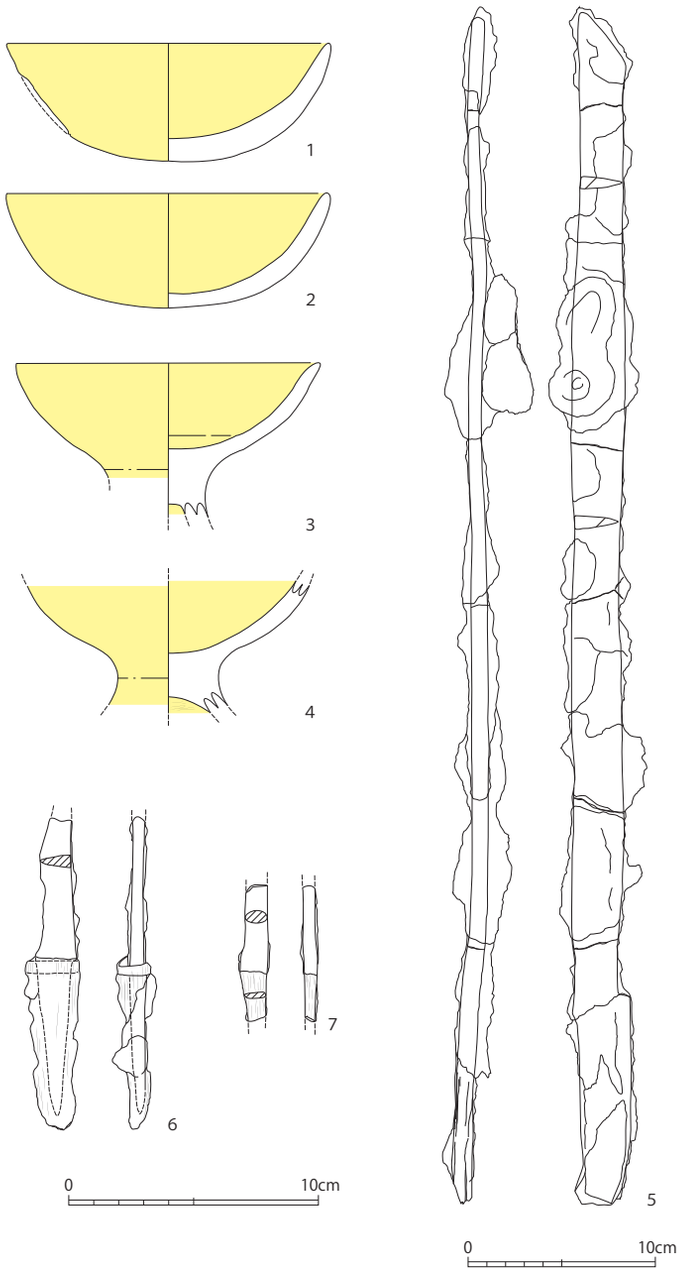
調査の結果、３号横穴墓の 2.4 m下方に位置している新たな横穴墓であることが判明し、床面のレベルは標高約 26.5 mと横穴墓群の中で一番低い地点で検出されている。また、調査は玄室部分のみが可能であった。

玄室

玄室は長さ 1.9 m、幅 1.25 mを測り、高さは 85cmまで確認できた。平面形態は縦長長方形を呈し、右壁手前に 10cm ほどの袖部分を確認した。横断面の形態は半円形状で、天井形態はアーチ形を呈するものと考えられる。

遺物出土状況

遺物には須恵器は認められず土師器碗２点と高坏２点、大刀１点、刀子２点が出土した。須恵器



第 118 図　浅柄北古墳　８号横穴墓出土遺物実測図（１～４・６・７：S=1/3、５：S=1/4）

を伴わず土師器のみであり、他の横穴墓と様相を異にしていることが注意される。

土師器は玄室中央から奥壁側で碗２点が出土し、玄室手前左側で高坏２点が出土したが、高坏の１点は大刀の上に被せるように置かれていた。大刀はこの高坏の下に置かれ、その右横約 10cm の地点で刀子２点が出土している。

出土遺物（第 118 図）

１～４は土師器でいずれも内外面ともに赤彩が施されている。１・２はボウル状の形態をした碗である。３・４は高坏で脚部を欠損する。５は大刀で長さ 63.6cm、幅 2.9cm と細身のもので、柄部に木質が残っている。６・７は刀子で柄部に木質が残り、６は鏃が認められる。

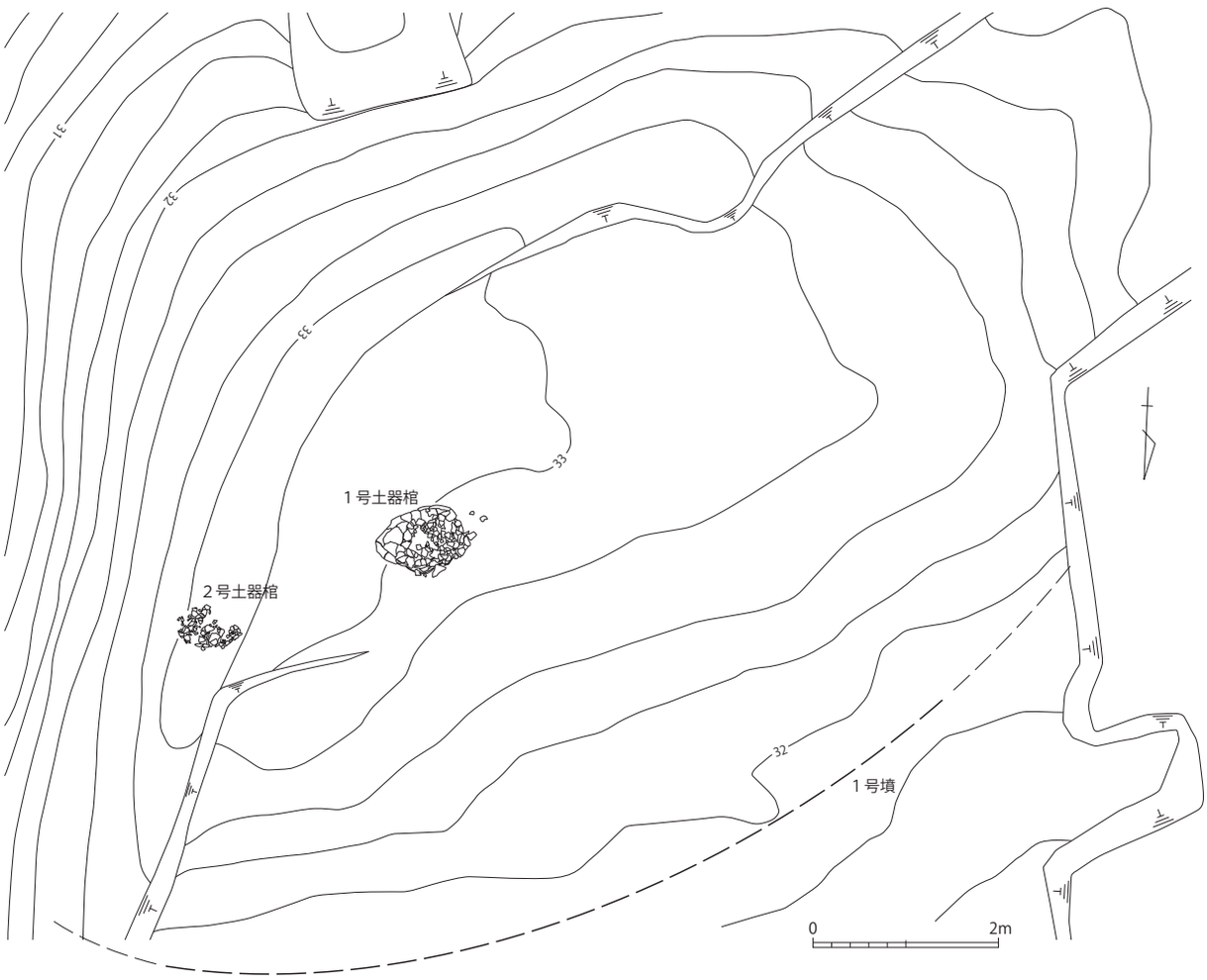
西谷横穴墓群第２支群の１号穴から須恵器とともに赤彩土師器の高坏が出土しており、１号穴は出雲４期に比定されていることから、８号横穴墓も出雲４期に属するものと考えておきたい。

第３節　古墳の調査

浅柄北古墳の最高所にあたる標高約 33 mの尾根頂部から西に向かってのびる尾根上に３基の高まりがあり、当初は自然地形の可能性も考えられたが、調査の結果、古墳及び横穴墓の後背墳丘であることが判明した。埋葬施設等の明瞭な遺構を検出したのは最高所の１基だけであったため、これを１号墳と称し、その他の２基は墳丘２、３としている。１号墳は標高約 33 m、墳丘２は標高約 30 m、墳丘３は標高約 27 mの位置に立地している。

１号墳（第 119 図）

１号墳は前述したとおり尾根の最高所に位置する。古墳であるかを確認するため、頂部に東西方向のトレンチ１本と北側に下る斜面にトレンチ１本、計２本のトレンチを設定して調査を行った。トレンチ内から須恵器甕片が散乱した状態で出土したことから、全面調査に切り替えた。その結果、須恵器の甕片を中心とする土器群とその下層から土師器の土器棺が検出された。土器棺はその様相から古墳時代前期中葉頃と考えられ、１号墳はこの時期に築造された古墳であることが判明した。また、須恵器土器群は古墳時代後期の様相を呈していたため、この古墳に直接関係するものとは考えられず、この下方には横穴墓群が存在することから、横穴墓に関連する遺物の可能性が高いと思

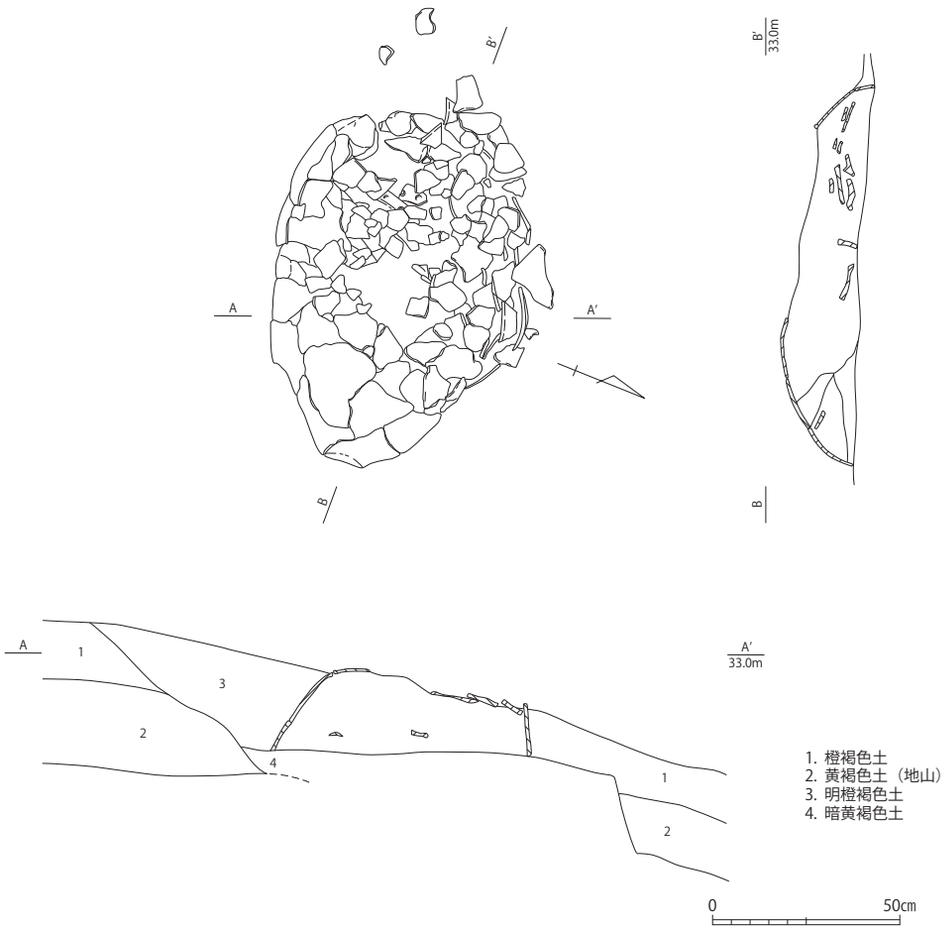


第 119 図　浅柄北古墳　１・２号土器棺出土状況（S=1/80）

われる。

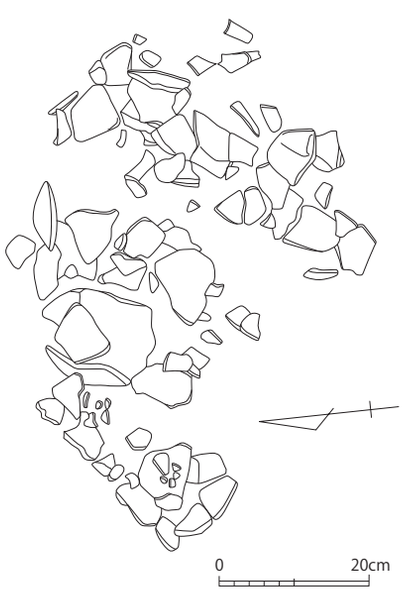
墳丘

東側及び南側は自然崩壊等によりかなり削られていることから墳丘裾も流失していたが、墳丘北側では墳丘裾と考えられるラインが、32 mの標高ラインに平行するように認められた。調査区東壁の南北セクション（第 123 図）を観察すると、地山面が北に向かって傾斜して平坦になる変換点が見て取れ、この部分が裾ラインである。



第 120 図　浅柄北古墳　1 号土器棺実測図（S=1/20）

この墳丘裾ラインから北に向かっては、やや広い平坦な地形となっており、裾部分から平坦面の地山上層には黒褐色土が認められた。また、墳丘裾部に周溝等は認められなかった。北側墳丘裾ラインのあり方から推測すれば標高 32 mのラインから墳丘が構築されていたと想定でき、規模は 12 m前後と考えられるが、詳細な墳丘規模や墳形等を特定することはできなかった。



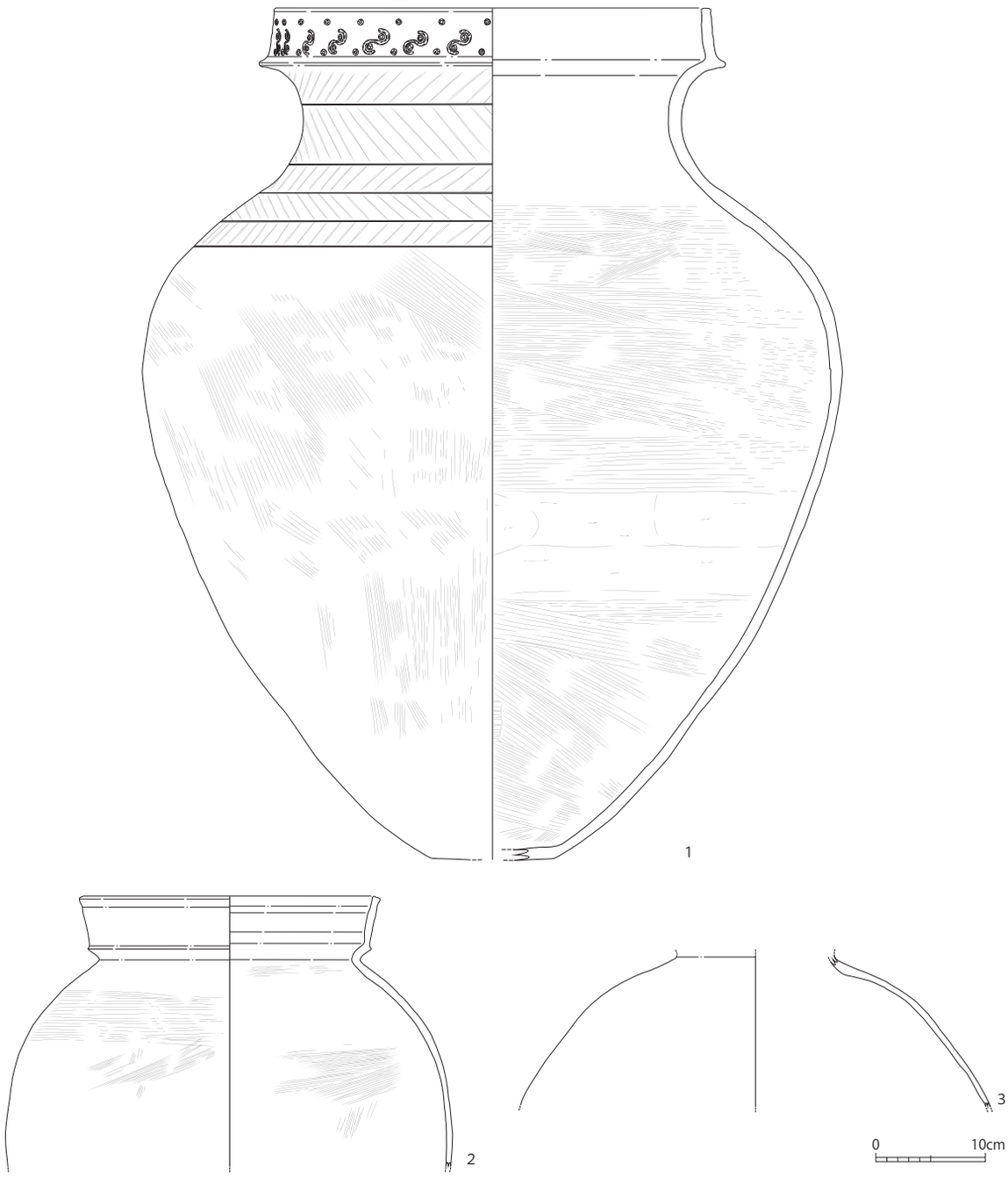
第 121 図　浅柄北古墳　2 号土器棺実測図（S=1/10）

埋葬施設

墳丘東側斜面に石棺の残骸と考えられる板石が数点認められたことから、石棺等の痕跡が確認できるものと予想していたが、墳頂部はかなり削平を受けたものとみられ、現状ではそれを検出することはできなかった。中心主体を検出することはできなかったものの、墳丘東寄りで土師器の土器棺 2 基を検出した。

1 号土器棺（第 120 図）

1 号土器棺は墳丘中央やや東寄りの標高約 32.8 m の地点で、後述する須恵器土器群 1 を取り上げた下層から出土した。平面規模は長軸 1 m、短軸 70cm を測り、大形の土師器壺形土器を縦割りにして 2 つに分

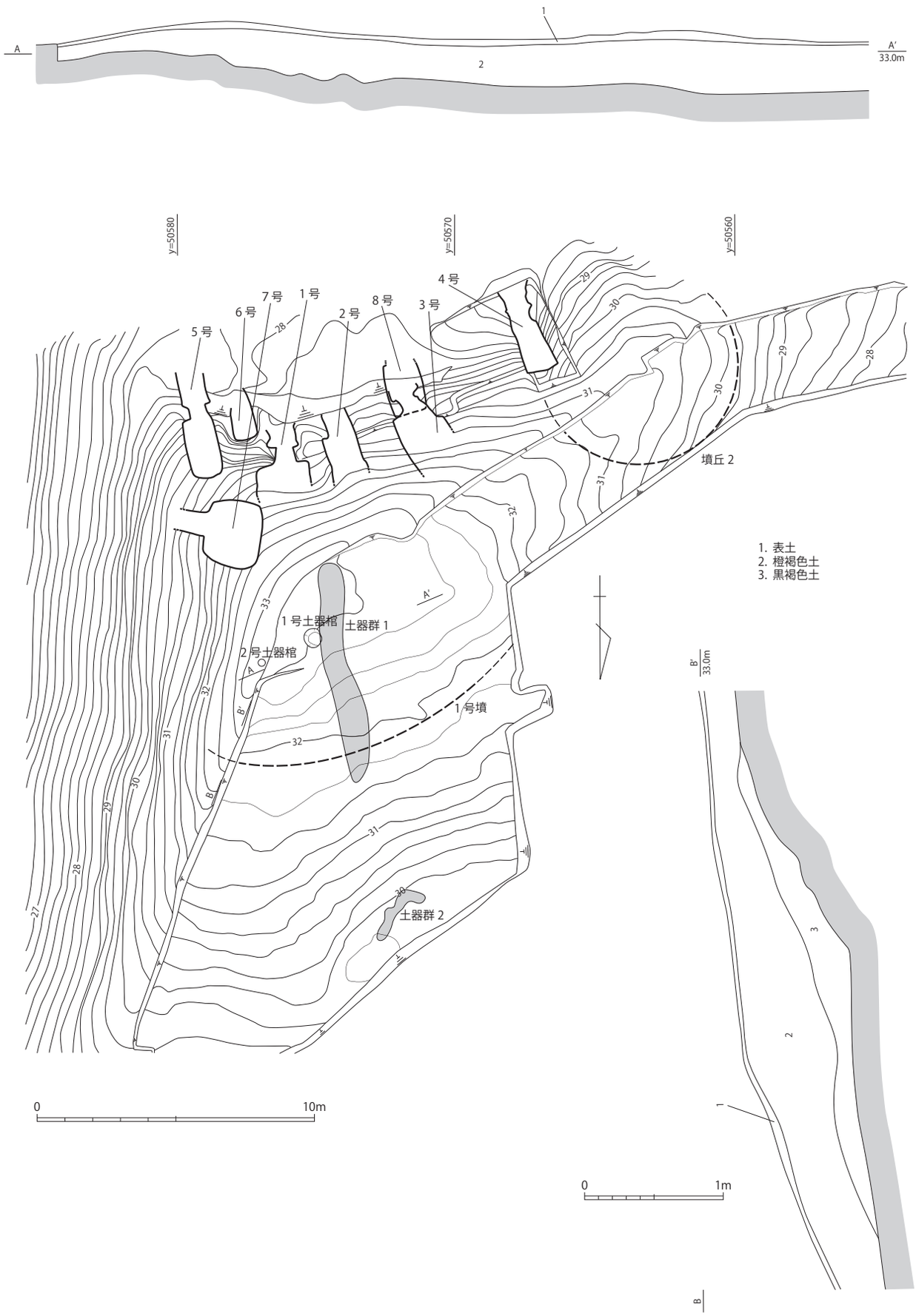


第 122 図　浅柄北古墳　土器棺実測図（1 号：1、2 号：2・3）（S=1/6）

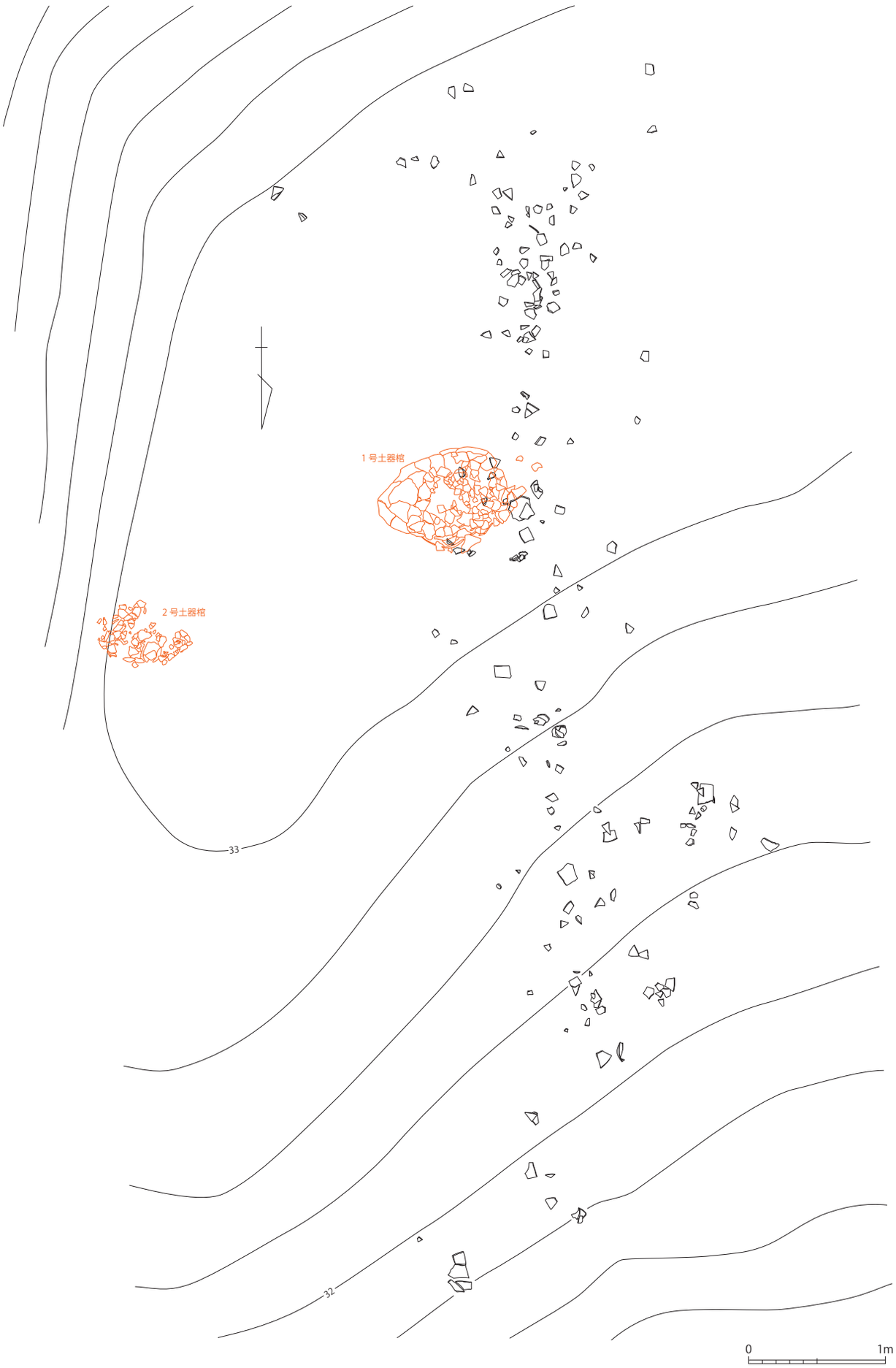
割し、その２つを口縁部を真ん中にして被せるように設置されていた。西側は土器群等による攪乱のためか残存状況は悪く、東側は比較的残りが良く壺底部も確認できた。

平面観察では墓壙のラインは不明瞭であったが、南北セクションを観察すると明橙褐色土が橙褐色土から地山面まで掘り込まれていることが分かり、墓壙が存在していたことが窺える。この墓壙の北側堀方は確認できず、平面形態も把握できなかった。規模は南北軸で 1.2 m以上、深さは 30cm 以上であったと推測される。また、土器棺設置面は暗黄褐色土であることから、墓壙を掘った後に底面を暗黄褐色土で整地し、その上に土器棺を設置したものと考えられる。土器棺内部からは何も出土していない。

第 122 図 1 に実測図を掲載した。口径 39.8cm、器高 77.6cm、胴部最大径 62.6cm を測る大形



第 123 図　浅柄北古墳　1 号墳セクション図及び遺物出土範囲（遺構図 S=1/200　セクション S=1/40）



第 124 図　浅柄北古墳　1 号墳・土器群 1 遺物出土状況（S=1/40）

第 125 図　浅柄北古墳　１号墳・土器群２出土状況（S=1/40）

の壺形土器である。複合口縁で口縁部はやや内傾して上方に立ち上がり、端部は平坦に作られる。複合口縁部の稜は横方向に長く突出している。肩部下方に最大径をもち、底部は径 11cm の平底を呈している。口縁部外面には径６㎜の竹管文が上下に施され、その間に径 1.6cm の半裁竹管文を逆 S 字状に施した後、その半円内にも竹管文を施している。頸部外面には５条の綾杉文を施している。体部内外面にはハケ目を施し、内面の一部にはヘラ削りが認められる。

古墳時代前期中葉の様相を示すものと考えられる。

２号土器棺（第 121 図）

２号土器棺は１号土器棺の約 70cm 東の東側斜面寄りの標高約 32.7 mの地点で検出した。平面規模は長軸 70cm、短軸 50cm を測り、その場で押し潰されたような状態で出土している。上面は削平を受けており、遺存状態は極めて悪かった。１号土器棺より小形の土師器壺形土器及び甕形土器２個体で構成されていたことは確認できたが、どのように組み合わせていたのか現状では把握することはできなかった。また、墓壙も確認できていない。

第 122 図２と３が組み合わされて使用された土器である。２は複合口縁の甕で口縁部はやや外傾して立ち上がり端部は若干内外に肥厚している。複合口縁部の稜は横方向に突出する。胴部中央に最大径をもつ。３は口縁部を欠損するが壺と考えられる個体で、肩部から胴部にかけて広がり、胴部中央に最大径をもっていたと考えられる。

１号土器棺同様に、古墳時代前期中葉頃の様相を示すものと考えられる。

土器群１（第 124 図）

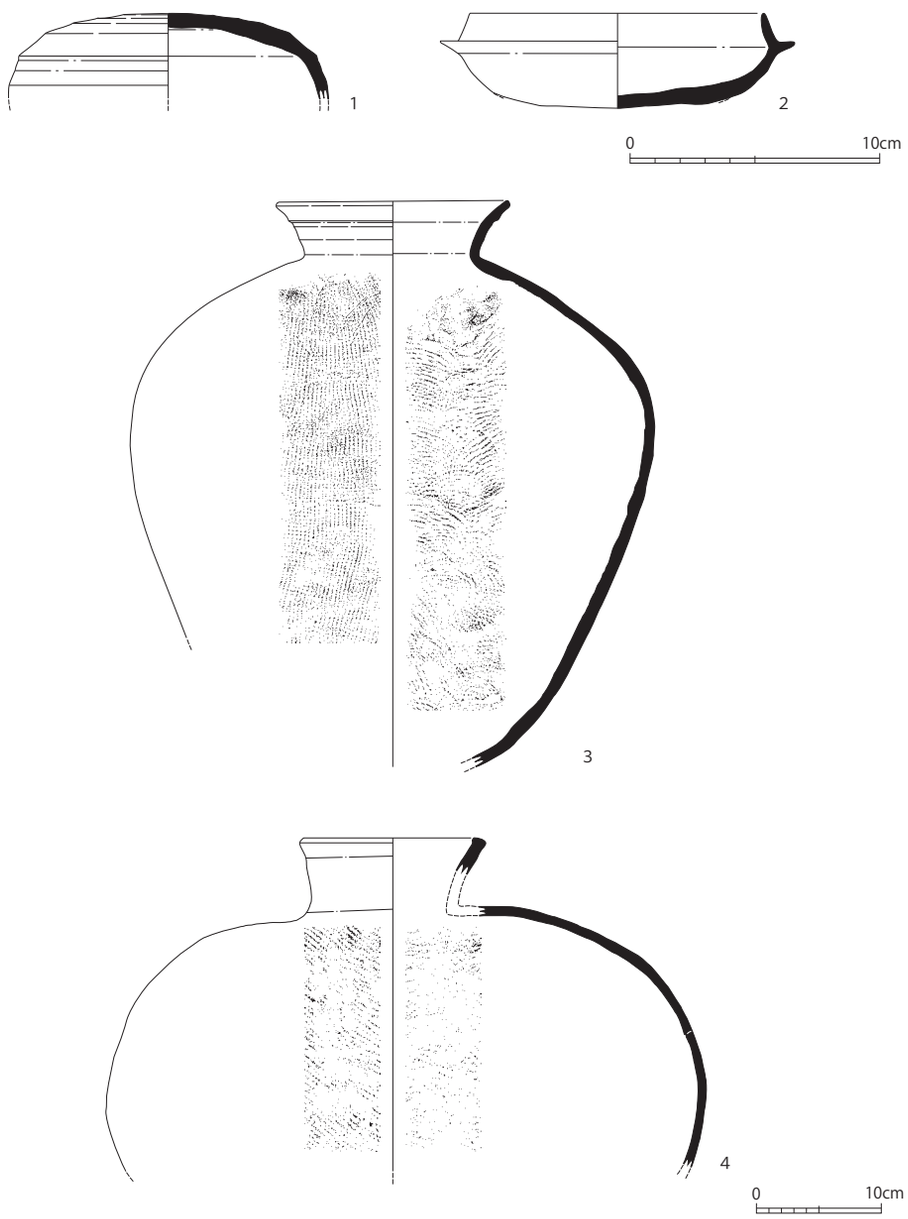
現状では１号墳の墳丘頂部中央付近から北側裾に向かって流れるように広がる須恵器甕片と蓋坏類からなる土器群であるが、南側斜面の１号及び２号横穴墓に向かっても甕片が流れ落ちていた。土器は古墳時代後期の様相を示していることから、１号墳に直接関連するものではなく、下方に存

在する横穴墓に関連するものの可能性が高いと考えられる。甕は細片化していることから意図的に破砕されたものと考えられ、横穴墓に関する何らかの祭祀行為がこの時期に１号墳上で行われたものと推測される。

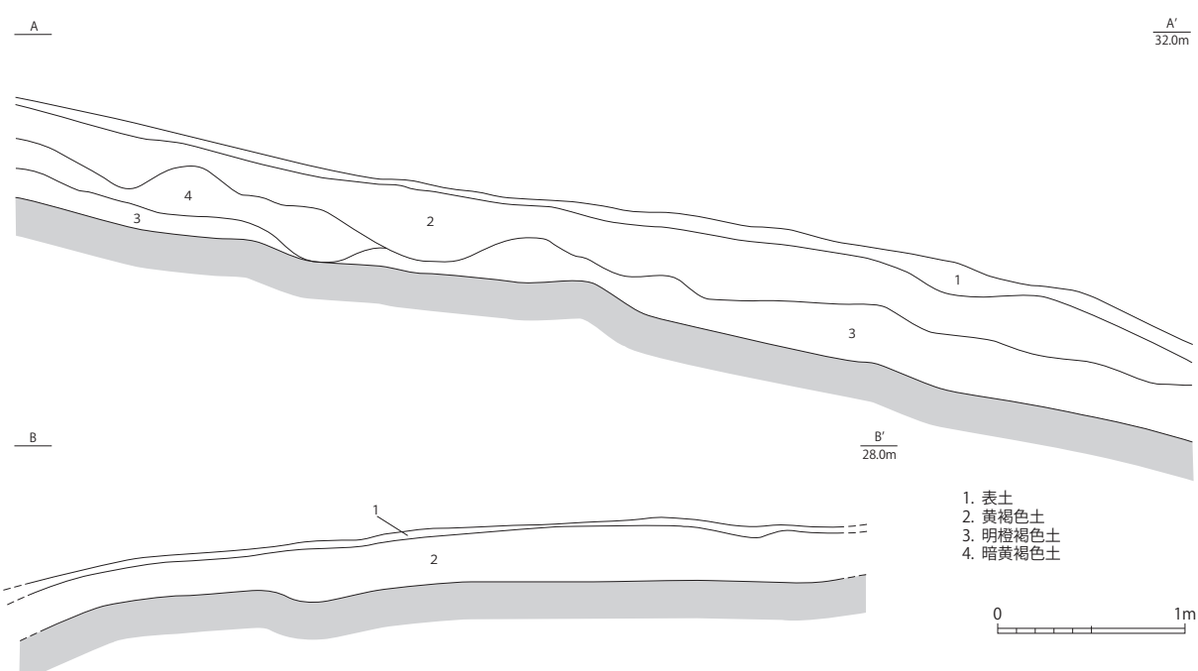
第 126 図１～３が土器群１の土器である。１は焼成不良の蓋で口縁部を欠損しているが肩部に鈍い稜をもち、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。２は立ち上がりがやや長めの坏身であるが、焼成不良のため底部外面の剥離が著しく調整は不明である。３は肩部の良く張る甕である。これらは出雲４期に属するものと考えられる。

土器群２（第 125 図）

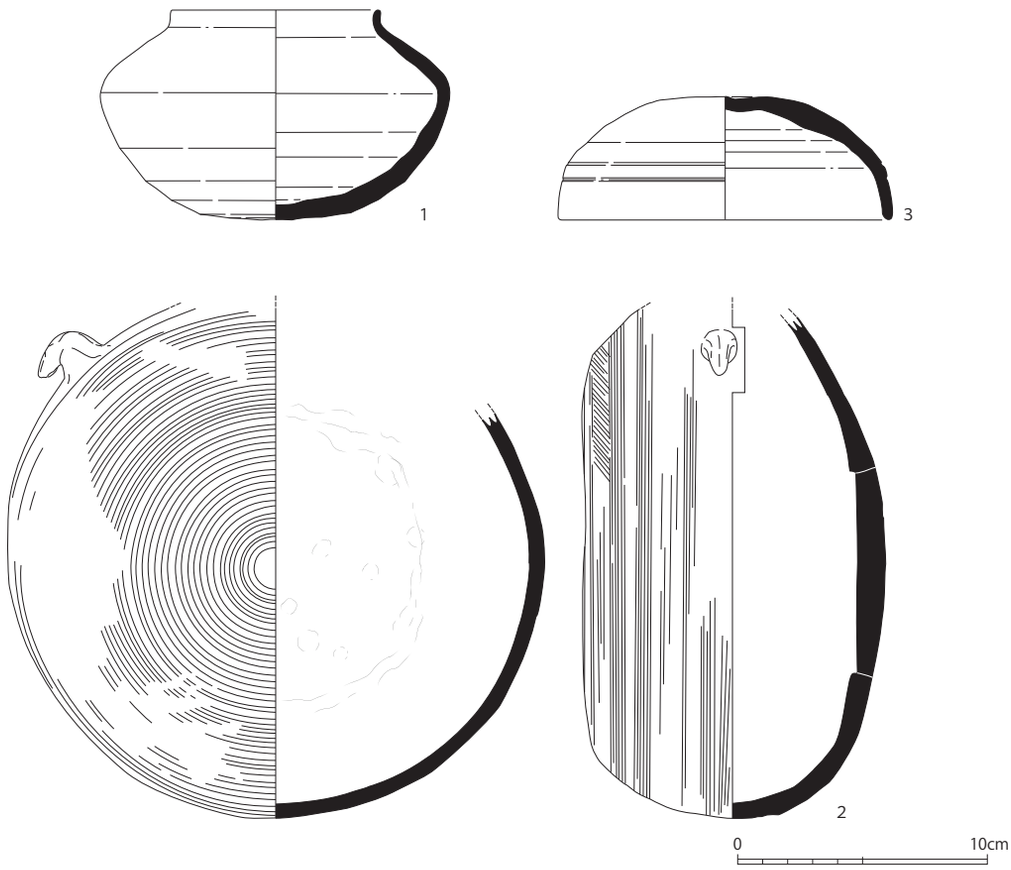
土器群２は１号墳の北側斜面下の標高約 30 mの位置で検出した土器群で、その大半は須恵器横瓶の破片である。検出面は平坦を呈しているが、この土器群の北側は市道によって削られているた



第 126 図　浅柄北古墳　１号墳出土遺物実測図（１・２：S=1/3、３・４：S=1/6）



第 127 図　浅柄北古墳　墳丘２・３遺物出土状況及びセクション図
（地形図 S=1/200　遺物出土状況・セクション S=1/40）



第 128 図　浅柄北古墳　墳丘 2・3・その他出土遺物実測図（S=1/3）

め、遺構の有無については確認できなかった。

第 126 図 4 がこの土器群の横瓶である。口縁部はやや変形しているが外傾気味にのび、端部は内側に肥厚している。

墳丘 2（第 127 図）

1 号墳の西側約 5 mの標高 30 mの地点に位置し、下方には 4 号横穴墓が存在している。墳丘と呼べる明瞭な高まりではなく、現状ではやや平坦に近い地形となっている。盛土等の痕跡や 1 号墳のような裾ラインも認められなかったため、墳形及び墳丘規模については窺い知ることはできない。また、埋葬施設や周溝等の古墳に伴う遺構も認められなかった。このことから古墳の可能性は低いと考えられるが、狭小な尾根であることから埋葬施設等は流失してしまった可能性も全く否定できないであろう。

埋葬施設等は検出できなかったが、頂部地山面から須恵器片が少量ではあるが出土していることが注意される。その前後の尾根上には須恵器等の遺物は全く認められないことから、この地点に意図的に置かれたものと考えた方が自然である。だとすれば、下方には横穴墓が存在するため、横穴墓に関連する遺物の可能性が高いと考えられ、この墳丘は横穴墓を主体部とする後背墳丘の可能性が高いと判断した。

図化できたものは第 128 図 1 に示す須恵器短頸壺 1 点だけであった。口縁部は短く直立気味にのび、体部は肩部が良く張る扁平状を呈している。

墳丘３（第 127 図）

丘陵尾根最西端の標高 27 mの地点に位置している。狭小な尾根と南側は急峻な斜面となっていることから調査範囲が限られた。現状では墳丘２より若干であるが高まりが認められたものの、盛土の痕跡は確認できず、墳形や規模、埋葬施設等についても把握できなかった。頂部から須恵器堤瓶１点が出土しており、その様相から横穴墓に関連するものと考えられるが、斜面は急峻であったため横穴墓の存在を確かめることはできなかった。このような状況で判断しがたいが、墳丘２同様に後背墳丘の可能性が高いと考えられる。

第 128 図２が墳丘３の遺物である。口縁部を欠損するが須恵器の堤瓶で、平面形状は円形に近く、断面形は扁平状を呈している。肩部に把手が付く。

その他の遺物

第 128 図３は７号横穴墓の北側で工事により掘削を受けた地点で見つかった須恵器蓋である。このことは東側斜面には７号横穴墓以外にも横穴墓が存在していた可能性を示す資料と言える。

肩部に鈍い稜をもつタイプで、天井部外面はナデ調整を施している。出雲５期の様相を示すものと考えられる。

第４節　小　結

今回の調査では横穴墓８穴と古墳１基を含む後背墳丘３基を検出した。調査区域の斜面は急峻であることから調査範囲が限られ、全面調査は不可能であったが、今回検出した８穴以外にも横穴墓が存在していたと推察される。また、検出された横穴墓の多くは玄室天井部や前庭部等が崩落していたため天井形態や平面形態の不明瞭なものや、遺物が検出できなかったため時期の特定が困難なものもあった。

横穴墓の時期は出土遺物から判断して、３号・４号・６号・８号横穴墓が出雲４期で、この内３号・８号横穴墓は出雲５期まで追葬されたことがわかる。５号・７号横穴墓が出雲５期に相当する。２号横穴墓は出雲６期の様相を示す須恵器が出土しているが、床面からかなり浮いた状態で出土していることから築造時期を必ずしも示しているとは限らず、追葬時もしくは上方からの流れ込みと考えた方が無難であるかも知れない。１号横穴墓は遺物が検出できなかったため特定できなかった。このように当遺跡では出雲３期に遡る横穴墓は認められず、出雲４期になってから造墓されていることがわかる。このことは当遺跡の北方丘陵に展開する神門横穴墓群と同じ傾向を示しており、出雲西部では出雲東部に比べて横穴墓の導入が遅れるようである。

玄室の天井形態と平面形については、崩落が著しく不明瞭な部分も多かった。残存する壁面等から推測すると、天井形態は２号横穴墓のみ不明であり、その他はすべてアーチ形を呈していたと考えられ、家形を呈するものは認められなかった。平面形でみると多くは縦長長方形を呈している。唯一７号横穴墓だけ隅丸の横長長方形を呈しており、玄室中央軸から右壁側に溝を設けて左右に屍床を造りだした構造になっている。詳細は不明であるがこのような構造は１号横穴墓にも認められ、１号横穴墓も正方形もしくは横長長方形を呈していたと考えられる。そうであるならば、１号横穴墓は７号横穴墓同様に出雲５期に造墓された可能性も考えられるであろう。

これら横穴墓上方の丘陵尾根上には３基の墳丘があり、最高所の墳丘は土器棺が出土した前期古墳で、その他の２基は埋葬施設や周溝等の古墳に伴う遺構は一切検出できなかった。３基とも墳頂部から横穴墓に関連すると思われる古墳時代後期の須恵器が出土していること、１号墳と墳丘２の下方には横穴墓が存在していることから、これらの墳丘は横穴墓を主体部とする後背墳丘であると考えた。横穴墓の位置関係から４号横穴墓だけが墳丘２を中心とするグループと考えられ、その他７穴は１号墳を中心とするグループを構成していたとみられる。１号墳を中心とするグループは密集して造られ、１号～３号横穴墓と５号・８号横穴墓の築造位置のレベル差から見て、上下２段に造られていた可能性も考えられる。本来、１号墳は古墳時代前期に築造された古墳であるが、この古墳に集中するように横穴墓が造られていることは、高塚古墳を強く意識した結果によるものかもしれない。

このように１号墳は古墳時代後期に横穴墓の後背墳丘として利用されているが、出雲平野では数少ない前期古墳である。墳形や規模等は特定できず、中心主体も検出することはできなかったが、土器棺２基を検出することができ、これらの土器の特徴から古墳時代前期中葉頃に築造された古墳であると判断した。墳丘裾部分に石棺の残骸と考えられる板石が数点認められたことから、石棺を内蔵する主体部が存在していた可能性が高いと考えられる。

出雲平野に存在する前期古墳としては今まで斐伊川左岸の大寺１号墳、神西湖東岸の山地古墳が知られる程度であった。ここ近年の発掘調査で類例が増加しており、平成 15 年度の山陰自動車道鳥取益田線に伴い調査された浅柄Ⅱ古墳、平成 18 年度の出雲インター線発掘調査において間谷東古墳が発見され、今回の調査で浅柄北古墳が新たな資料として加わったことにより、この時期の古墳の様相が少しずつ明らかになってきた。その中にはいくつかの特徴的な様相が見られ、一つは大寺１号墳を除く４例の前期古墳が神西湖東岸周辺に集中して造られていること、さらに、山地古墳、浅柄Ⅱ古墳、間谷東古墳は埋葬施設に礫床を備える特異な構造を持つことがあげられ、前期古墳が当地域に出現する背景について今後詳細に検討する必要がある。

以上のように当遺跡は古墳時代前期中葉に古墳が築造され墓域として成立し、中期の様相は不明なものの、後期になるとこの古墳の立地を利用して横穴墓が密集して造られるようになる。このことは出雲地域での横穴造墓の様相を知る上で貴重な資料となり、今後、詳細な検討を重ねながら当地域の古墳時代の様相を明らかにしていく必要がある。

参考文献

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 号　1994 年

島根県教育委員会『一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』2008 年

島根県教育委員会『山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』2005 年

出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』1986 年

出雲市教育委員会『小浜山横穴墓群Ⅰ』1995 年

出雲市教育委員会『西谷横穴墓群第２支群発掘調査報告書』2007

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
99-1	2号横穴墓	須恵器	蓋	12.6	3.4	10.4	ナデ、回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ		暗灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
102-1	3号横穴墓	須恵器	蓋	13.0	2.7		回転ナデ	回転ナデ		暗灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
102-2	3号横穴墓	須恵器	蓋	13.0	3.9		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
102-3	3号横穴墓	須恵器	坏	11.4	4.2		回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
102-4	3号横穴墓	須恵器	坏	11.2	4.1		回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ		灰色	4mm以下の砂粒を微量に含む	
102-5	3号横穴墓	須恵器	坏	11.2	4.1		回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
102-6	3号横穴墓	須恵器	坏	11.2	3.8		回転ナデ、ヘラ切り後未調整	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
102-7	3号横穴墓	須恵器	坏	11.0	3.9		回転ナデ、ヘラ切り後未調整	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
105-1	4号横穴墓	須恵器	蓋	12.2	4.0		回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ		暗茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
105-2	4号横穴墓	須恵器	坏	10.8	3.9		回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ		外面:暗黄灰色 内面:暗茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
105-3	4号横穴墓	須恵器	坏	12.2	4.4		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		暗灰黄色	2mm以下の砂粒を微量に含む	
105-4	4号横穴墓	須恵器	坏	11.4	4.2		ヘラ切り後未調整、ヘラ削り、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰白色	3mm以下の砂粒を微量に含む	
105-5	4号横穴墓	須恵器	坏	10.4	2.4		回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
105-6	4号横穴墓	鉄器(銅環)	耳環	長径 2.7	短径 2.4							
105-7	4号横穴墓	鉄器(銅環)	耳環	長径 2.9	短径 2.7							表面風化著しい
109-1	5号横穴墓	須恵器	蓋	11.2	3.9		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
109-2	5号横穴墓	須恵器	坏	11.4	4.2		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
109-3	5号横穴墓	須恵器	坏	9.6	3.5		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
109-4	5号横穴墓	須恵器	坏	10.0	3.8		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
109-5	5号横穴墓	鉄器	刀子	9.7	2.0	0.5						
109-6	5号横穴墓	鉄器	刀子	9.5	1.4	0.5						
112-1	6号横穴墓	須恵器	坏	12.4	4.3		ヘラ切り後ナデ、回転ヘラ削り、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		暗灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
112-2	6号横穴墓	須恵器	坏	11.0	4.2		ヘラ切り後ナデ、ヘラ削り、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
112-3	6号横穴墓	須恵器	坏	11.0	4.1		ヘラ切り後ナデ、ヘラ削り、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
115-1	7号横穴墓	須恵器	蓋	12.4	4.4		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	
115-2	7号横穴墓	須恵器	蓋	11.1	4.1		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		明灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	自然釉付着
115-3	7号横穴墓	須恵器	蓋	11.6	4.8		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		青灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	ヘラ記号あり
115-4	7号横穴墓	須恵器	坏	10.9	4.0		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		青灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	ヘラ記号あり
115-5	7号横穴墓	須恵器	坏	10.4	3.7		ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	ヘラ記号あり
115-6	7号横穴墓	鉄器	大刀	84	4.0	0.9						
115-7	7号横穴墓	鉄器	鐔	長径 7.3	短径 5.6							
115-8	7号横穴墓	鉄器(銅環)	耳環	長径 3.2	短径 3.0							中空

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
115-9	7号横穴墓	鉄器(銅環)	耳環	長径 3.0	短径 2.9							中空
118-1	8号横穴墓	土師器	碗	13.0	4.7		ナデ	ナデ		赤橙褐色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
118-2	8号横穴墓	土師器	碗	13.0	4.6		ナデ	ナデ		橙褐色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
118-3	8号横穴墓	土師器	高坏	12.2	6.2		ナデ	ナデ		赤橙褐色	1.5mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
118-4	8号横穴墓	土師器	低脚坏				ヘラミガキ	ヘラミガキ		黄褐色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	内外面共に赤彩
118-5	8号横穴墓	鉄器	大刀	63.6	2.9	0.9						
118-6	8号横穴墓	鉄器	刀子	12.4	2.1	0.5						木質残る
118-7	8号横穴墓	鉄器	刀子	5.4	1.1	0.5						木質残る
122-1	墳丘 1	土師器	壺	39.8	77.6	11.0	ハケ目、磨滅	ハケ目、ヘラケズリ	竹管文、綾杉文	暗茶褐色	2mm 以下の砂粒を含む	
122-2	墳丘 1	土師器	甕	27.4	24.6		ナデ、ハケ目	ハケ目、磨滅		明黄褐色	2mm 以下の砂粒を含む	
122-3	墳丘 1	土師器	壺				磨滅	磨滅		明黄褐色	2mm 以下の砂粒を含む	
126-1	墳丘 1	須恵器	蓋	12.6	3.6		回転ナデ、回転ヘラケズリ	磨滅		黄茶色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	
126-2	墳丘 1	須恵器	坏	11.8	3.8		磨滅	磨滅		淡黄褐色	2mm 以下の砂粒を微量に含む	
126-3	墳丘 1	須恵器	甕	18.2			回転ナデ、タタキ	回転ナデ、タタキ		灰色	3mm 大の砂粒を含む	
126-4	墳丘 1	須恵器	横瓶	14.8	26.7		回転ナデ、平行タタキ	回転ナデ、タタキ		灰白色	密	
128-1	墳丘2	須恵器	短頸壺	8.4	8.4		回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ		灰色	3mm 以下の砂粒を微量に含む	
128-2	墳丘3	須恵器	提瓶		21.4	12.1	回転カキ目	ナデ、指頭圧痕		灰色	密	
128-3		須恵器	蓋	13.4	4.9		ナデ、回転ナデ	ナデ		暗灰色	1mm 以下の砂粒を微量に含む	ヘラ記号あり

第６章　間谷西Ⅱ遺跡

第１節　調査の概要

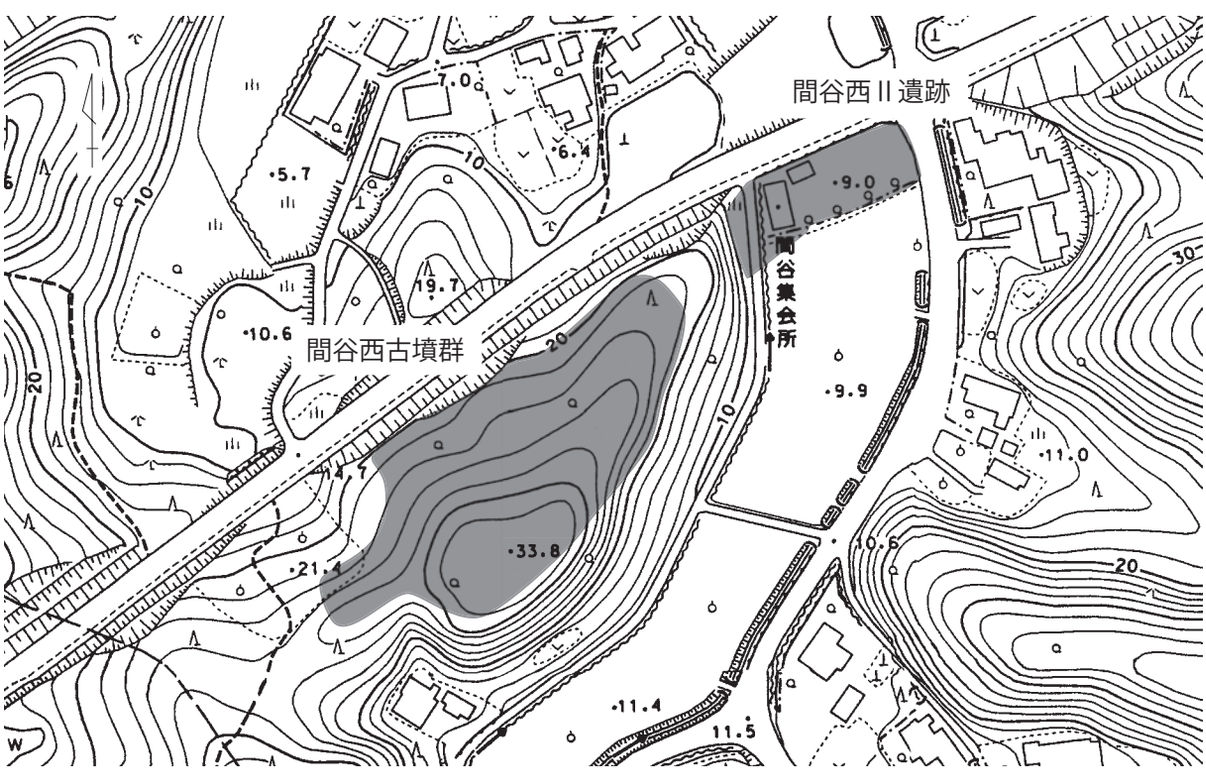
間谷西Ⅱ遺跡は出雲市知井宮町 1503-13 他に所在し、間谷東古墳の存在する東側丘陵と間谷西古墳群が存在する西側丘陵に挟まれた南から北に向かう谷間の先端部分に位置する遺跡である。調査区は南北に走る市道によって切られているため、東側をⅠ区、西側をⅡ区として調査を実施し、調査対象面積は約 1,000㎡である。

Ⅰ区では掘立柱建物跡１棟、自然流路及び４条の溝状遺構とその上面に堆積している遺物包含層を検出した。遺物は土師器、須恵器、土師質土器が混在して出土しているため、遺構の明確な時期を押さえることはできないが、大半は中世以降の可能性が考えられる。

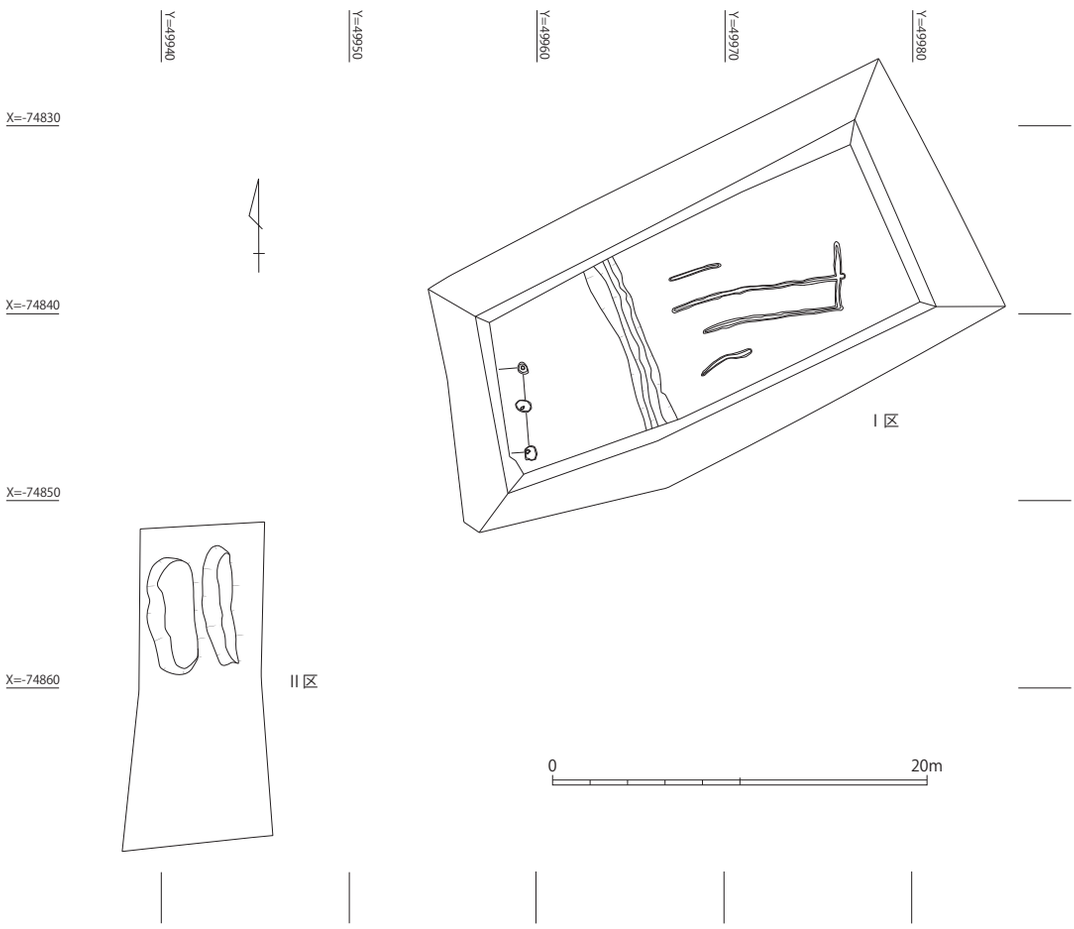
Ⅱ区では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての加工段２棟と 12 世紀以降と考えられる焼土層を検出した。

１．Ⅰ区の調査

Ⅰ区は間谷集会所跡地であったことから、約 1.5 mの造成土が厚く盛られていた。この造成土を重機によって除去した後、その下層を人力で掘り下げた。第 131 図に調査区のセクションを図示しており、第１層が造成土である。第２層の灰褐色粘質土は旧耕作土と考えられる土層で須恵器小片が少量出土したが、これはこの下層にある包含層の遺物が混入したものと考えられる。第３層の暗茶灰色粘質土と第４層の灰褐色シルトが包含層で両者ともに多量の土師器、須恵器、土師質土器



第 129 図　間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群　位置図（S=1/2500）



第 130 図　間谷西 II 遺跡全体図（S=1/400）

が混在している。本来は２層の遺物包含層として区別しなければならなかったが、調査区内が湿地帯であったことからその判別が難しく、同一の包含層として遺物は取り上げている。また、これらの遺物は自然流路であるＳＲ０１内及びその周辺に集中して出土していた。遺構は包含層下層の地山面で掘立柱建物跡１棟、自然流路１本と４条の溝状遺構を検出している。

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ０１（第 132 図）

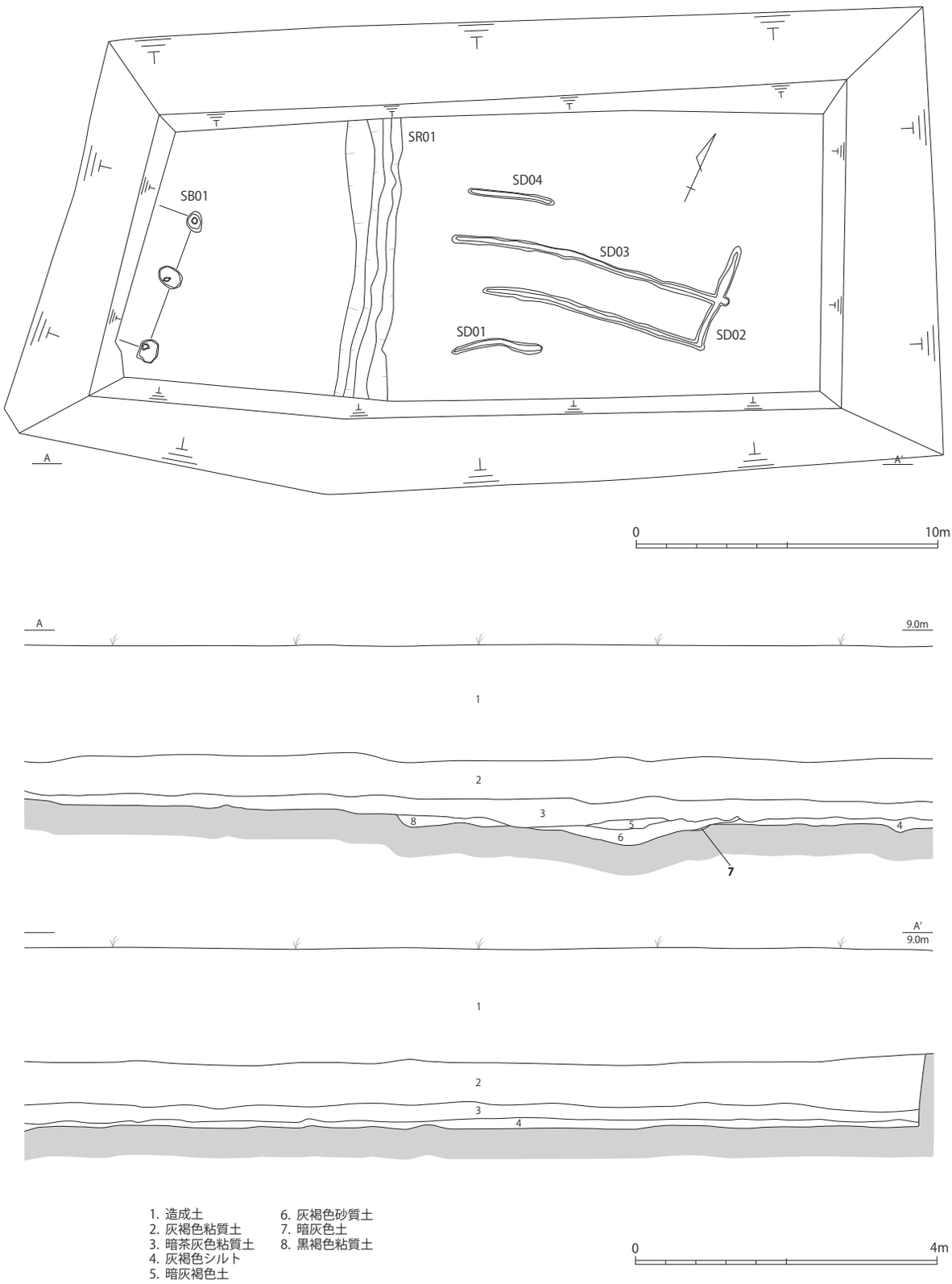
ＳＢ０１は調査区の西端で検出した掘立柱建物跡で、西側は調査区外へと続いているため、明確な規模や形態については把握することができない。確認できたのは東側柱列の柱穴３穴を検出しただけで、規模は南北 4.4 mを測り、柱間距離は 2.2 mとほぼ揃っている。柱穴の形態は楕円形状に近く、規模は長軸 64cm ～ 88cm、短軸 56cm ～ 64cm、深さ 12cm ～ 20cm を測り、底面には柱材は遺存していないが 20cm 前後の柱痕跡が確認できた。

柱穴内から遺物が出土してないため、時期については把握することができなかった。

（２）溝

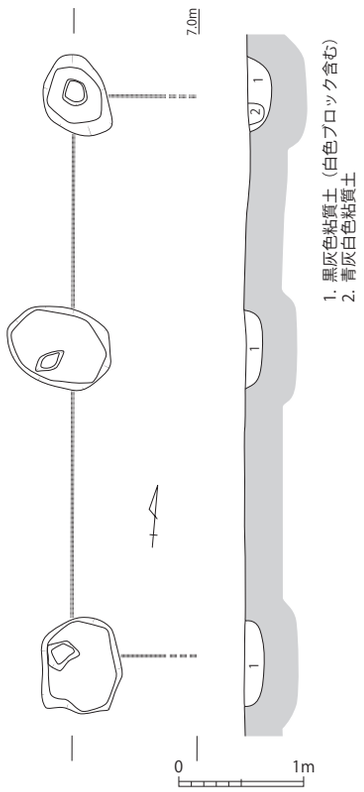
ＳＲ０１（第 133 図）

ＳＲ０１は調査区中央やや西側で検出した南から北に流れる自然流路である。長さ 9.6 m、幅は

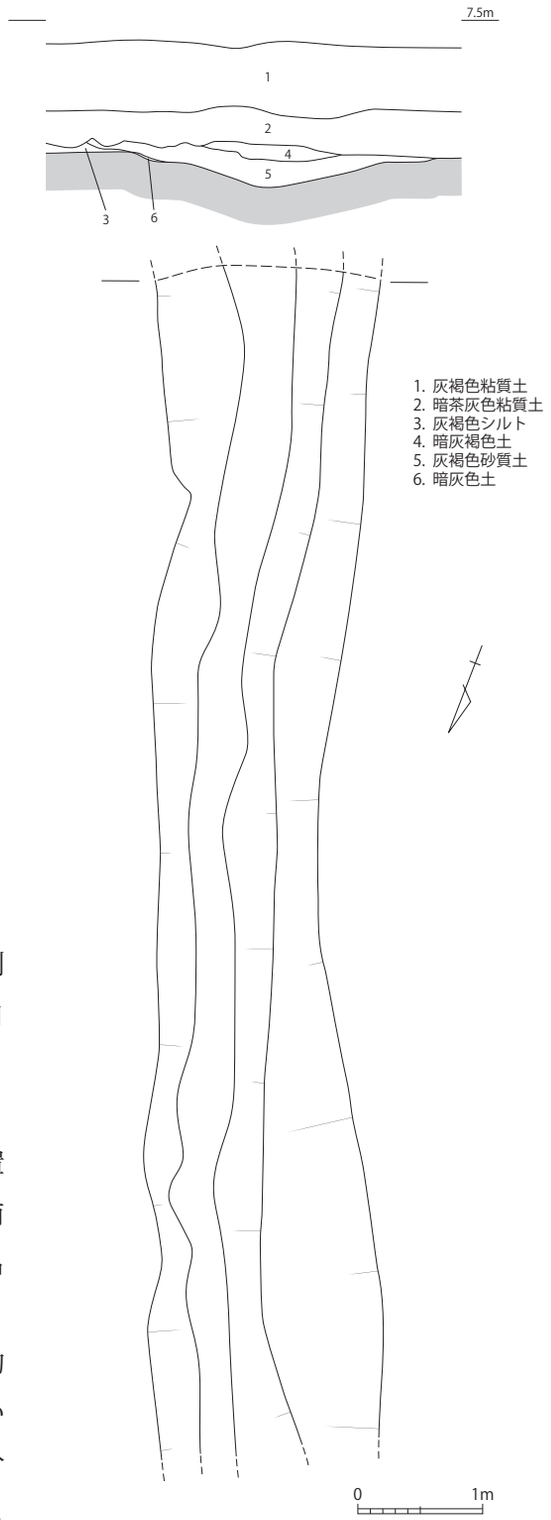


第 131 図　間谷西 II 遺跡　I 区全体図及びセクション　（全体図 S=1/200　セクション S=1/80）

南壁・北壁側で 1.8 m、中央で 1.4 mを測り、西端は平坦に近い緩い傾斜が 40cm ～ 1 mの幅でつき、そこから底面に向かって傾斜している。深さは約 40cm であるが北に向かって徐々に低くなっている。覆土は２層で上層に暗灰褐色土、下層に灰褐色砂質土が堆積しており、古墳時代前期から中世にかけての土器が混在している。これらの大半は磨滅した小片であることから、上流から流



第 132 図　間谷西Ⅱ遺跡
ＳＢ０１実測図（S=1/60）



第 133 図　間谷西Ⅱ遺跡　ＳＲ０１ 実測図
（S=1/60）

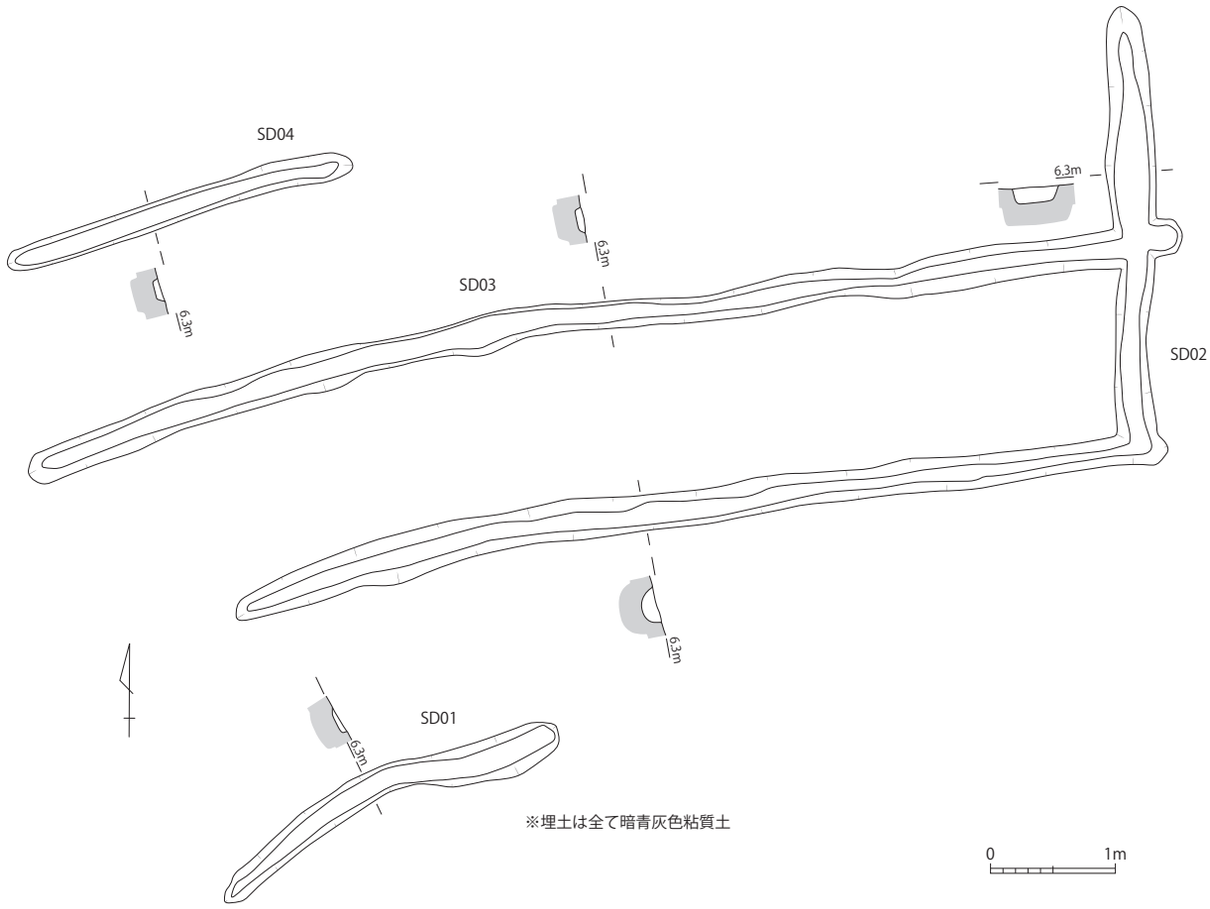
れ込んだものと考えられる。このような状況から判断すれば、ＳＲ０１は中世以降に形成・埋没した自然流路である可能性が高い。

ＳＤ０１～０４（第 134 図）

ＳＤ０１～０４はＳＲ０１の東側約 1.8 mの位置で検出した東西方向にのびる溝状遺構で、調査区南端のものを０１とし北に向かって順に０４までの名称を付けている。

ＳＤ０１は長さ３m、幅 22cm ～ 36cm、深さ約４cm を測る。ＳＤ０２は西端から 7.6 m東に向かってのびた後北に向かって屈曲している。屈曲部分からの長さは 3.6 m、幅約 40cm、深さ 12cm を測る。ＳＤ０３は長さ 9.4 m、幅 30cm、深さ８cm で東側はＳＤ０２の南北筋の中央付近と交差する。ＳＤ０４は長さ 2.8 m、幅 20cm、深さ４cm を測る。

この４条の間隔は約 1.3 mとほぼ等間隔であるが、何の用途に使用されたものか把握することができなかった。また、いずれも覆土は暗青灰色粘質土で、内部には包含層からの混入と思われる土器片が少量認められていることから、ＳＲ０１同様に中世以降の時期が考えられる。



第 134 図　間谷西Ⅱ遺跡　ＳＤ０１～０４実測図（S=1/60）

（３）集石遺構（第 135 図）

ＳＲ０１の南端やや西寄りに広がる礫群である。南側は調査区外になるため規模及び形態は不明であるが、現状では東西３m、南北 3.2 mの範囲に 5 cm ～ 20cm 大の礫が認められる。ＳＲ０１の上面で検出した礫は原位置から動いたものと考えられ、本来は溝の西側縁に密集して設置されていたものと推測される。

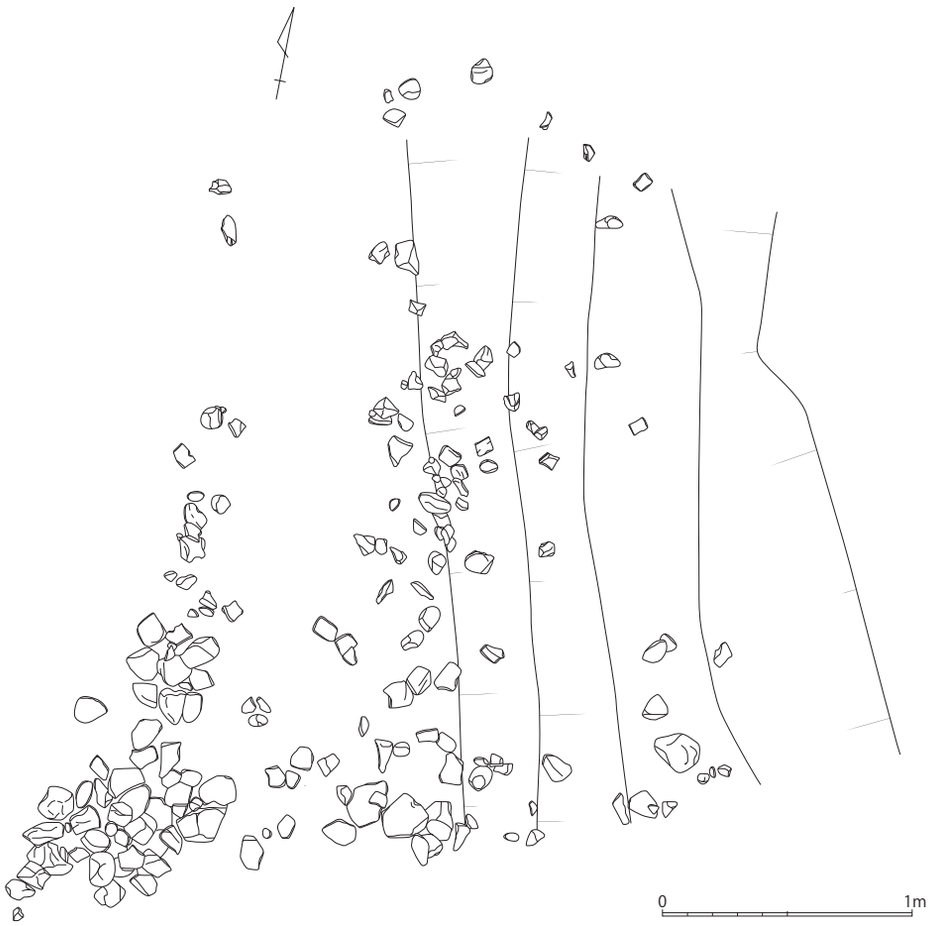
この集石は出土状況からＳＲ０１に付随する施設の可能性が高いと考えられ、護岸施設や水くみ場等の用途が想定できる。

（４）遺物出土状況（第 136 図）

遺物はＳＲ０１を中心としたその周辺に集中して出土しているが、ＳＲ０１の覆土中と周辺の遺物に差異はなく、土師器、須恵器、土師質土器が混在している。調査区西及び東側では遺物の分布が少ない状況から判断すると南側の谷奥から流れ込んだ可能性が高いと考えられる。また、これらの大半は磨滅した小片が多く図化できたものは少なかった。

（５）出土遺物（第 137・138 図）

第 137 図１～ 11 は土師器である。1 は複合口縁の壺で口縁部は外傾してのび端部は平らに近い。複合口縁部の稜はやや鈍い作りとなっている。２～５は単純口縁の甕で、２はやや長めの口縁部で



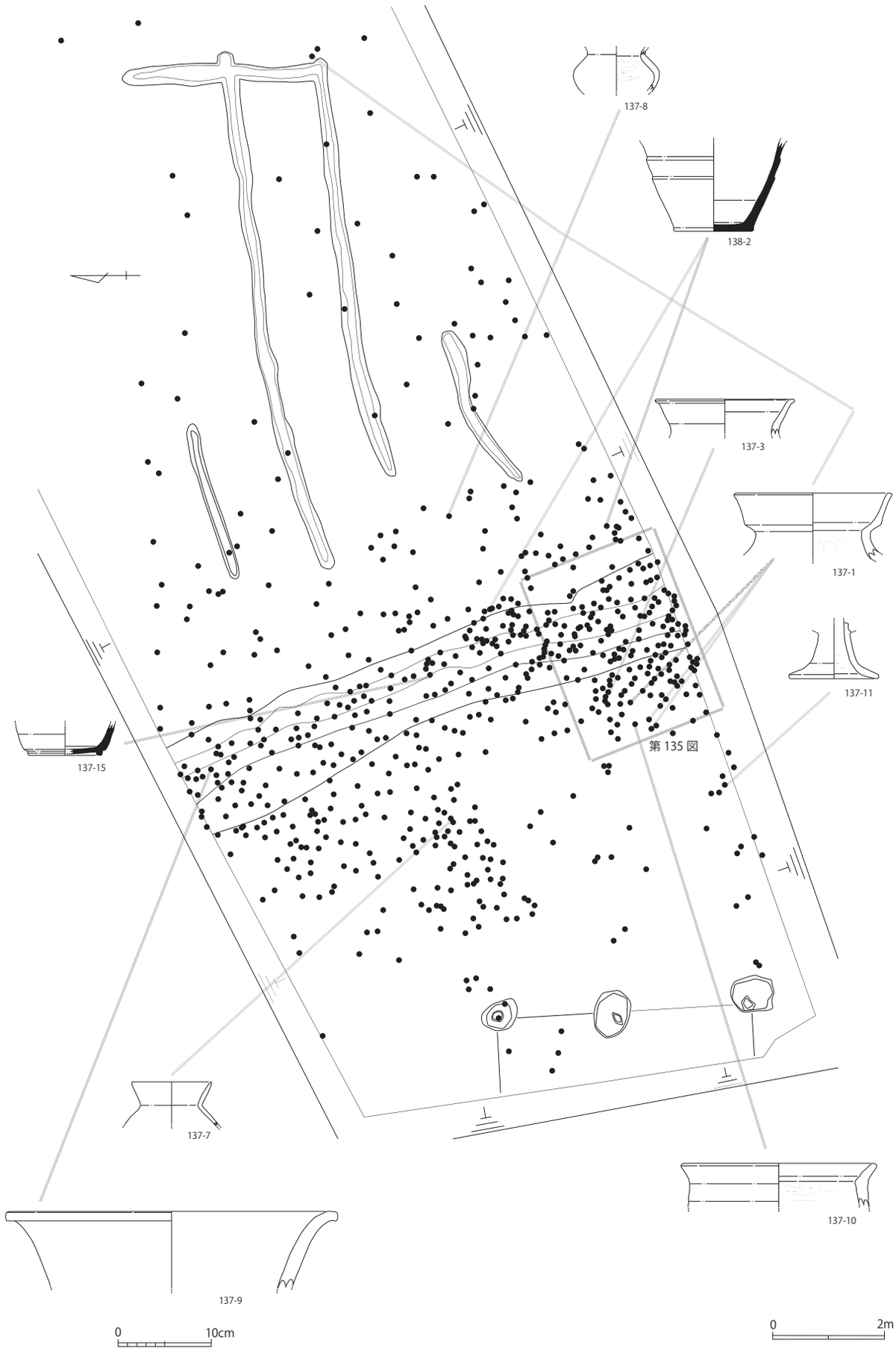
第 135 図　間谷西 II 遺跡　集石遺構実測図　（S=1/30）

端部手前から外方にやや屈曲している。３は口縁端部が外方に屈曲する。４・５は外反気味にのびる口縁部で、端部は丸みをもつ。６は単純口縁の壺で口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は外方に屈曲する。７・８は小形壺である。７は胴部下半を欠損するが口縁部は外傾してのびる。８は口縁部と胴部下半を欠損するが、肩部の良く張る形態を呈している。９は大形の壺口縁部で、口縁部は外傾してのび、端部は横方向に屈曲する。10 は甑と思われる。11 は高坏の脚部で、裾部は外方に開く。

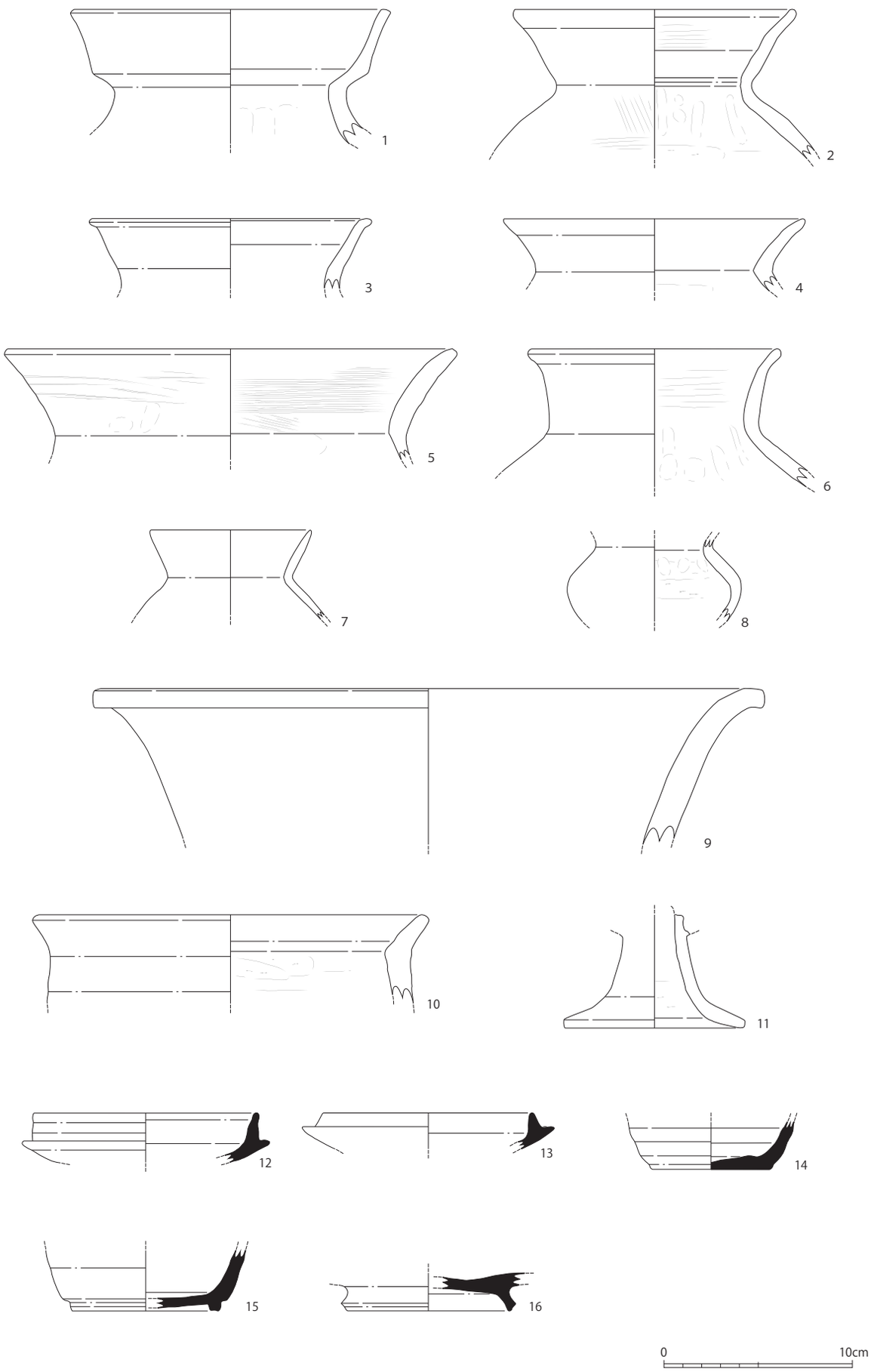
第 137 図 12 ～第 138 図２は須恵器である。12・13 は立ち上がりを有する坏身の口縁部片で、12 の立ち上がりは長く直立気味にのび、13 は短い立ち上がりを有する。14 は口縁部を欠損する坏で底部は平らに作られている。15・16 は高台付坏の高台部分で、15 は低く下方に開くが、16 は横方向にやや長く開くタイプである。第 138 図１は壺口縁部、２は壺胴部で、接合は不可能であったが同一個体の可能性が高い。１の口縁部は直立気味にのび、端部付近で横方向に大きく屈曲して端部に至る。端部には沈線が施されている。２の胴部には段がつくタイプで、２段以上施されていたと思われる。底部は平らに作られている。

３～５は土師質土器の坏である。３・４は高台の無いタイプで口縁部は外傾してのび、底部は平らに近い。５は高台付坏で下方に短く開く高台からやや直線的にのびる口縁部を有する。

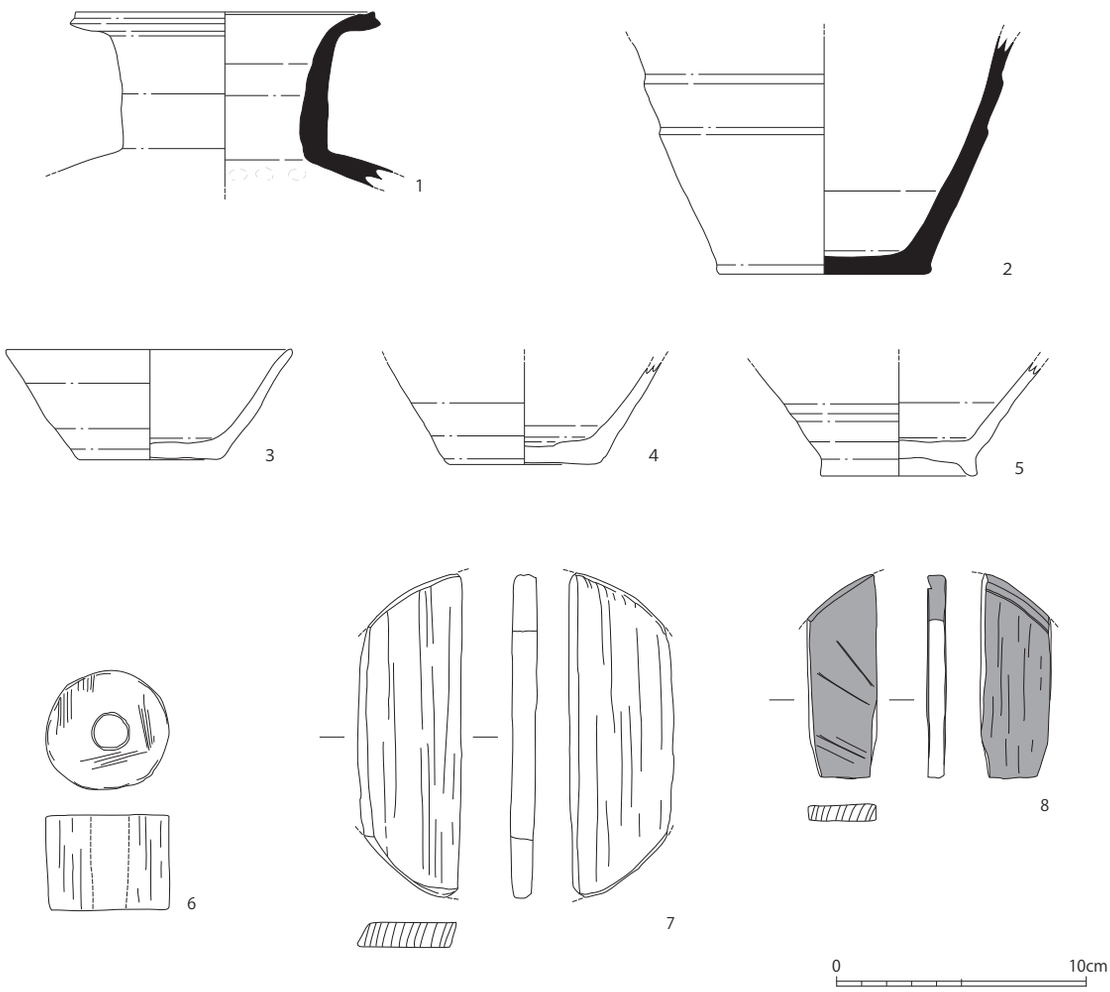
６～８は木製品で、６は低い円筒状の形状をしているが用途は不明である。７・８は曲物の底板で、８には外枠をはめ込む溝が彫り込まれ、内外面に漆が塗られている。



第 136 図　間谷西 II 遺跡　I 区遺物出土状況（遺構 S=1/100　遺物 S=1/6）



第 137 図　間谷西 II 遺跡　I 区出土遺物実測図 1 （S=1/3）



第 138 図　間谷西Ⅱ遺跡　Ⅰ区出土遺物実測図２（S=1/3）

２．Ⅱ区の調査

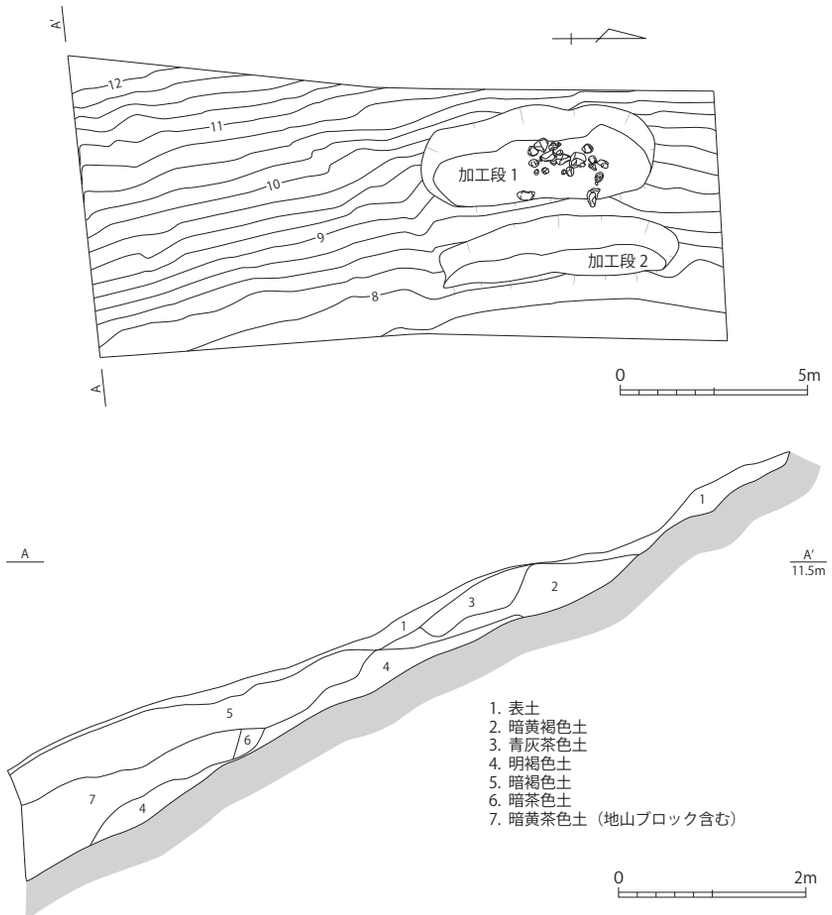
Ⅱ区はⅠ区の市道を挟んだ西側で間谷西３号墳の存在する丘陵の東側斜面に位置する。斜面上方の堆積土は厚さ約 20cm であるが、下方は約 1.2 mと厚く堆積していた。遺構は加工段２棟を検出したが、遺物が認められたのは１棟のみであった。切り合い関係等から判断して弥生時代終末～古墳時代前期頃の加工段であることが判明している。また、加工段手前に土師質土器が集中して出土している焼土層が認められたが、それに伴う明瞭な遺構は検出できなかった。

（１）加工段

加工段は調査区の斜面北寄りで２棟重複して検出した。上段を加工段１、下段を加工段２として調査を行った。

加工段１（第 140 図）

加工段１は調査区北寄りの急斜面をカットして作り出されており、床面レベルは標高約 9.1 mを測る。平面形態は楕円形状を呈しており、床面は長軸６m、短軸約 1.5 mを測る平坦面となっている。壁高は最大で 1.1 mを測るが、壁面は現状では地山の岩盤が露出して凸凹の状態である。床面中央やや北寄りには石組み状の遺構が確認されたが、床面の軸方向からやや東に振れていることからこの加工段に伴わない別の遺構の可能性も考えられる。礫には床面に密着するものと少し浮いた



第 139 図　間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区全体図及びセクション図
（全体図 S=1/200　セクション S=1/80）

状態のものも認められるが、別のものとする積極的な痕跡等も確認できなかったため断定することはできない。

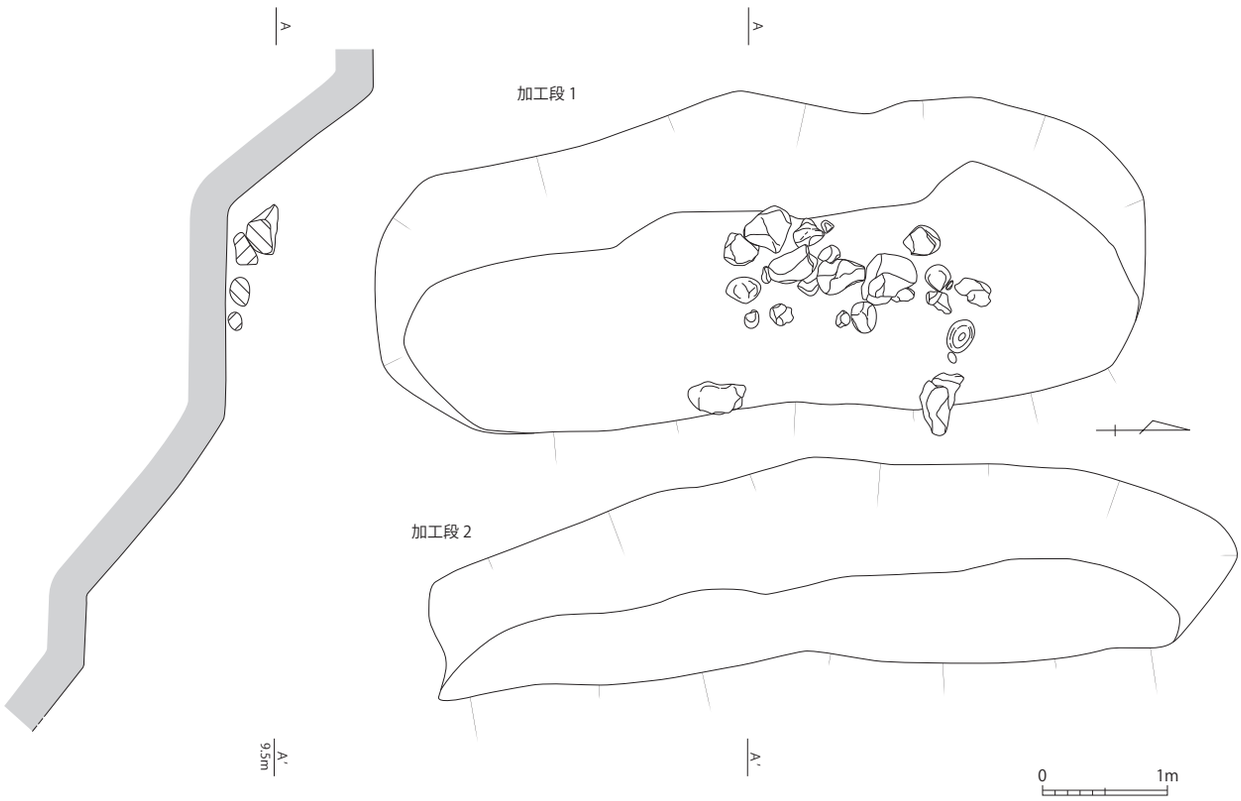
この石組み状遺構の平面形は方形状を呈しており、東側は加工段２によって切られていることから全形は不明であるが、30cm ～ 40cm 大の礫を四辺に巡らせるように設置されていたと考えられる。残存する規模は南北 2.2 m、東西 1.8 mを測り、内部などから遺物は出土せず、その性格についても窺い知ることができなかった。

また、この加工段の遺物も皆無で明確な時期を知ることはできなかったが、後述する加工段２によって切られていることから判断して、弥生時代終末～古墳時代前期初頭頃と推測される。

加工段２（第 140・141 図）

加工段２は加工段１の東側を切って造成された加工段である。遺存状態は悪く、西壁側の一部が残存している程度で床面レベルは標高約８mを測る。平面形態は細長い楕円形状を呈しており、規模は長軸６m、短軸 70cm、壁面の高さ約 1.1 mを測る。

遺物は床面上から古墳時代前期を中心とする土師器が出土しているが、その大半は高坏が占め、伏せた状態で出土したものも多く認められた。これらの土器の様相から当該期の遺構と考えられるが、高坏が大半を占めるという土器組成からみれば通常の建物とは考えにくく、何らかの祭祀に関する遺構と推測される。



第 140 図　間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区加工段１・２実測図（S=1/60）

出土遺物（第 142 図）

図化できたのは 13 点で、そのうち１点は土師器甕であるが、その他はすべて土師器の高坏である。１は単純口縁の甕で口縁部は外傾してのび、端部付近で外方に屈曲して端部はやや平らに近い。２～ 13 は高坏である。２～ 10 は体部との境に段を有するタイプで、２～４は坏部が碗状に近く口縁端部が外方にやや屈曲する。５～ 10 は平らに近い坏底部から外反気味にのびる口縁部をもつ。３～５・７は暗文を施している。11・12 は段の無いタイプで、坏部は碗状を呈し口縁端部が外方にやや屈曲する。12 は暗文を施している。13 は脚部の裾である。

焼土層（第 141 図）

加工段２の床面東側には厚さ約 15cm 前後の焼土層が東西２m、南北 2.2 mの範囲に広がっているのが確認された。この焼土層は加工段２が削平された後に形成されたものであり、それに伴う遺構が存在していた可能性もあるが、確認することはできなかった。この焼土及び周辺から磨滅が著しいが 12 世紀頃の様相を示す土師質土器が出土している。

加工段２東側出土遺物（第 143 図）

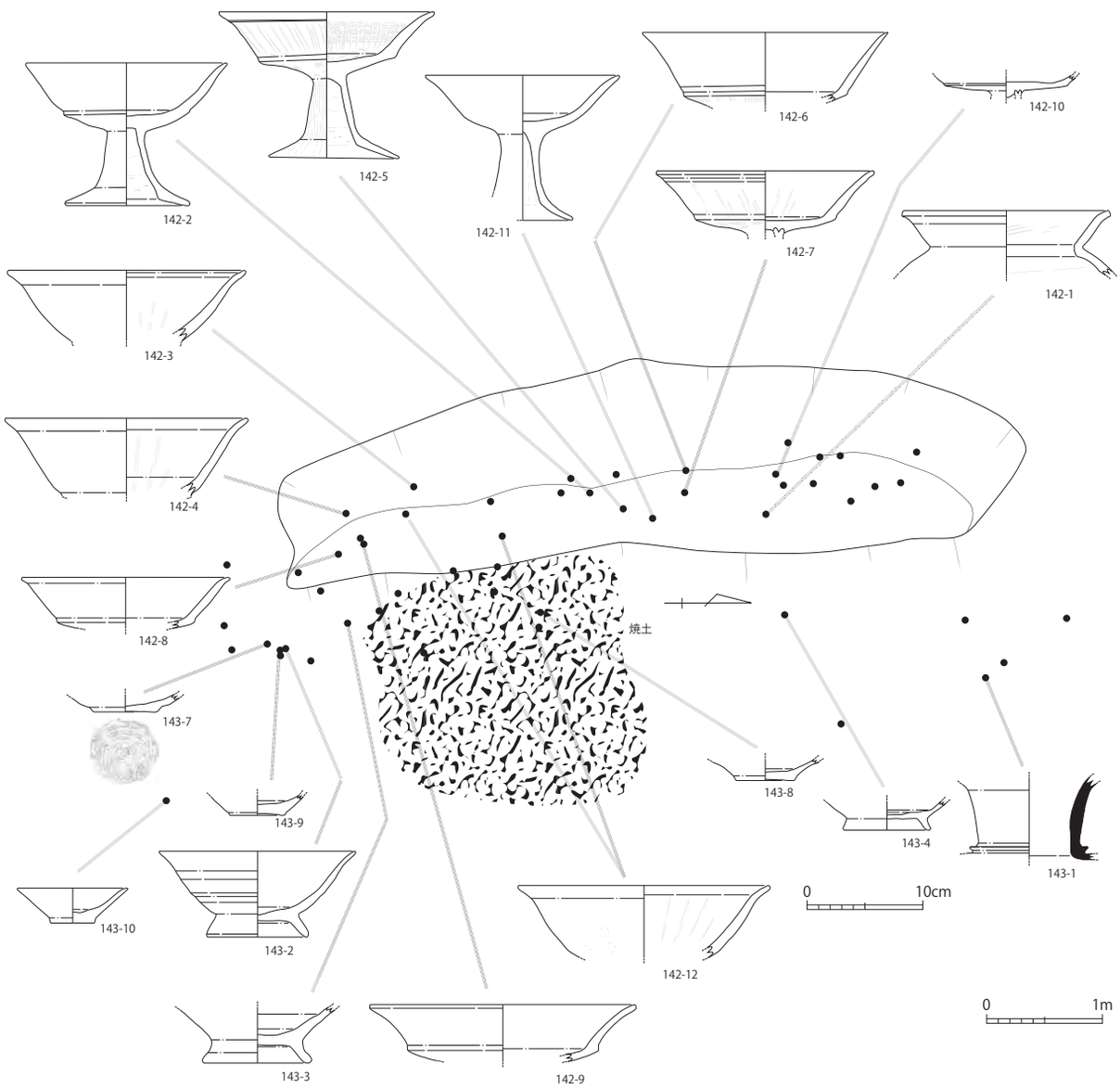
加工段２の手前に広がる焼土周辺から出土した遺物である。１は須恵器の壺口縁部で頸部に細めの突帯が廻っている。２～ 10 は土師質土器の坏及び皿である。２～５は高台付坏で、２は碗状を呈する坏部で口縁端部付近が外方にやや屈曲する。高台は横方向に高く開く。３～５は高台部分で３の高台は横方向に高く開くが、その他は低い高台を有する。６は外傾してのびる口縁部で底部は不明である。７～９は坏底部でほぼ平らに近い作りである。磨滅の著しいものが多いがいずれも回転糸切り痕が認められる。10 は皿で小さい底部から外反してのびる口縁部をもつ。

（2）包含層出土遺物（第 144 図）

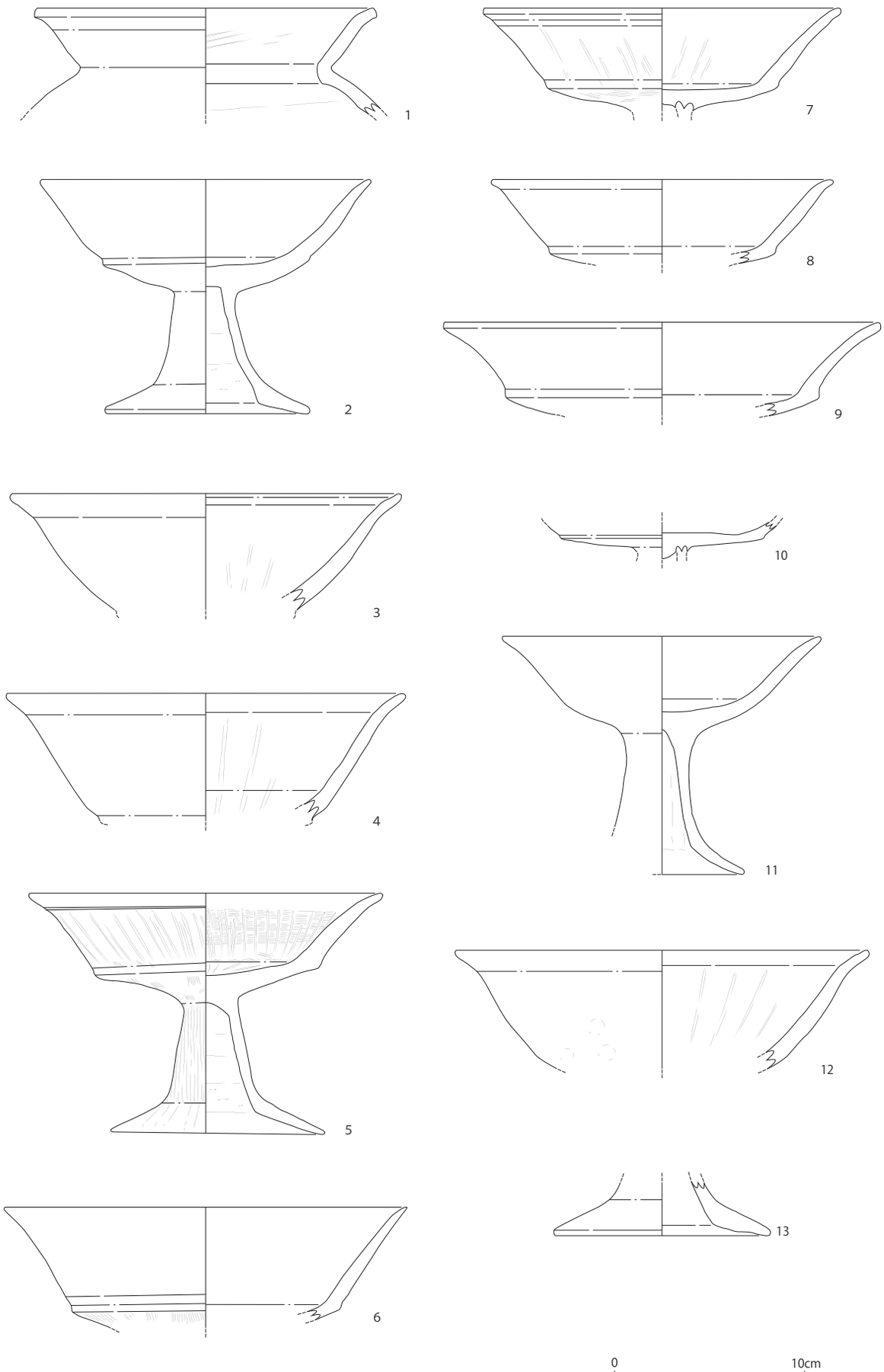
調査区南側斜面から出土した遺物を中心に掲載した。１～５は土師器の甕及び甑である。１は長胴を呈する甕で口縁部は外傾してのび、端部は平らに近い。２・４・５は「く」の字状の口縁部をもつ甕で、端部は丸みをもつ。３は甑か甕の口縁部である。６は土師質土器の擂鉢である。底部から外方に直線的にのびる口縁部をもち、口縁端部に凹面を有する。内面には擂り目が明瞭に残っている。７は土師器の小形碗で口縁部は短く外反している。８～ 10 は土師質土器の坏である。８は口縁部が直線的に立ち上がり、９は外反気味にのび、10 は内湾気味に立ち上がる。底部には回転糸切り痕が認められる。

第２節　小　結

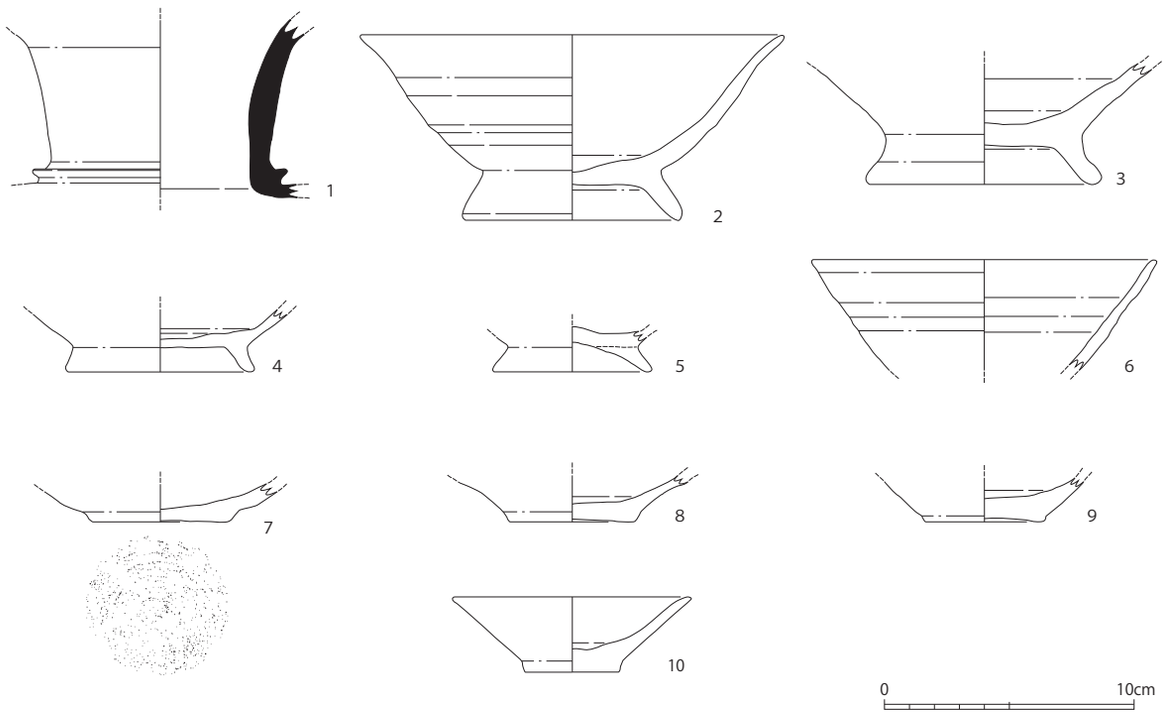
間谷西Ⅱ遺跡ではⅠ区で掘立柱建物跡１棟、自然流路１、溝状遺構４、Ⅱ区で加工段２棟を検出した。遺物は古墳時代前期～中世までのものが多量に出土したが、磨滅したものが大半を占めてい



第 141 図　間谷西Ⅱ遺跡　加工段２遺物出土状況（遺構 S=1/60　遺物 S=1/6）



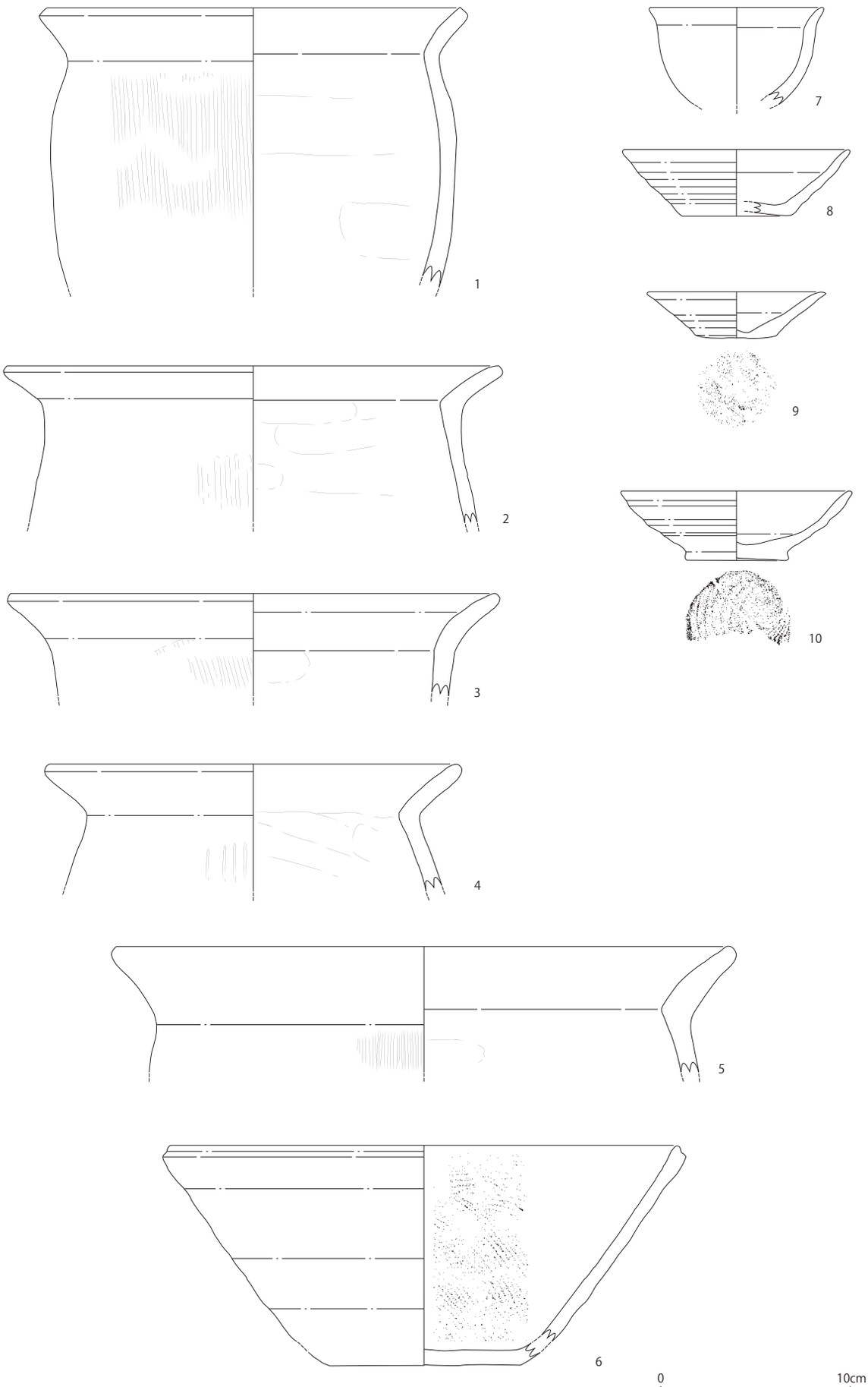
第 142 図　間谷西 II 遺跡　II 区 加工段 2 出土遺物実測図（S=1/3）



第 143 図　間谷西Ⅱ遺跡　Ⅱ区加工段２東側出土遺物実測図（S=1/3）

る。遺構のうち明確な時期を特定できたのは加工段２のみであったが、加工段１は加工段２によって切られていることから加工段２より先行する時期と判断でき、弥生時代終末～古墳時代前期初頭頃と考えた。その他の遺構では古墳時代前期～中世の土器が混在していることから明確な時期については判断できないが、中世以降に形成されたものの可能性が高いと思われる。

また、遺物の多くはⅠ区の自然流路周辺で出土している状況から推測すれば、調査区外の南に広がる谷間や丘陵に古墳時代から中世にかけての集落が営まれていたと考えられる。



第 144 図　間谷西 II 遺跡　II 区包含層出土遺物実測図（S=1/3）

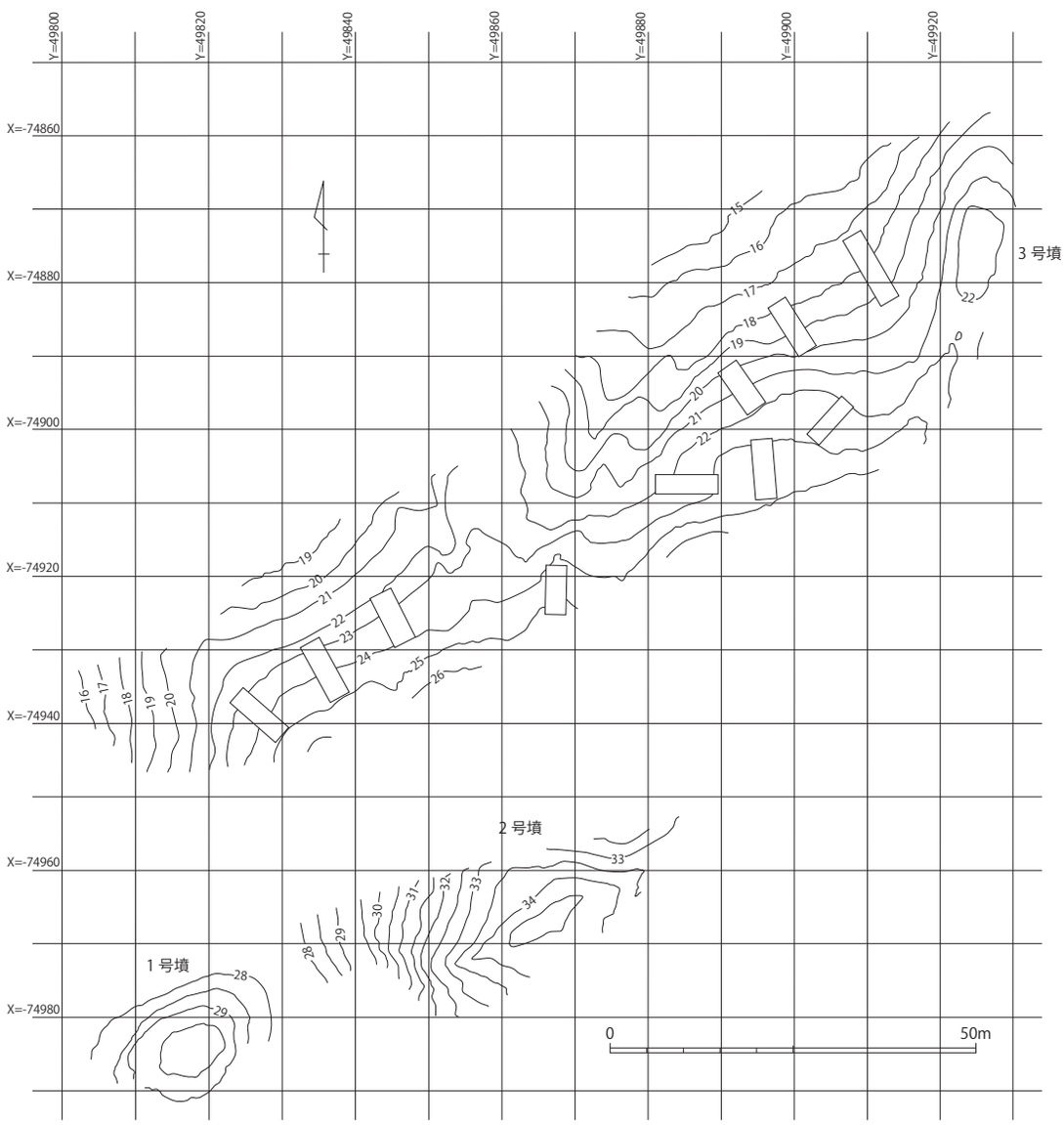
第７章　間谷西古墳群

第１節　調査の概要

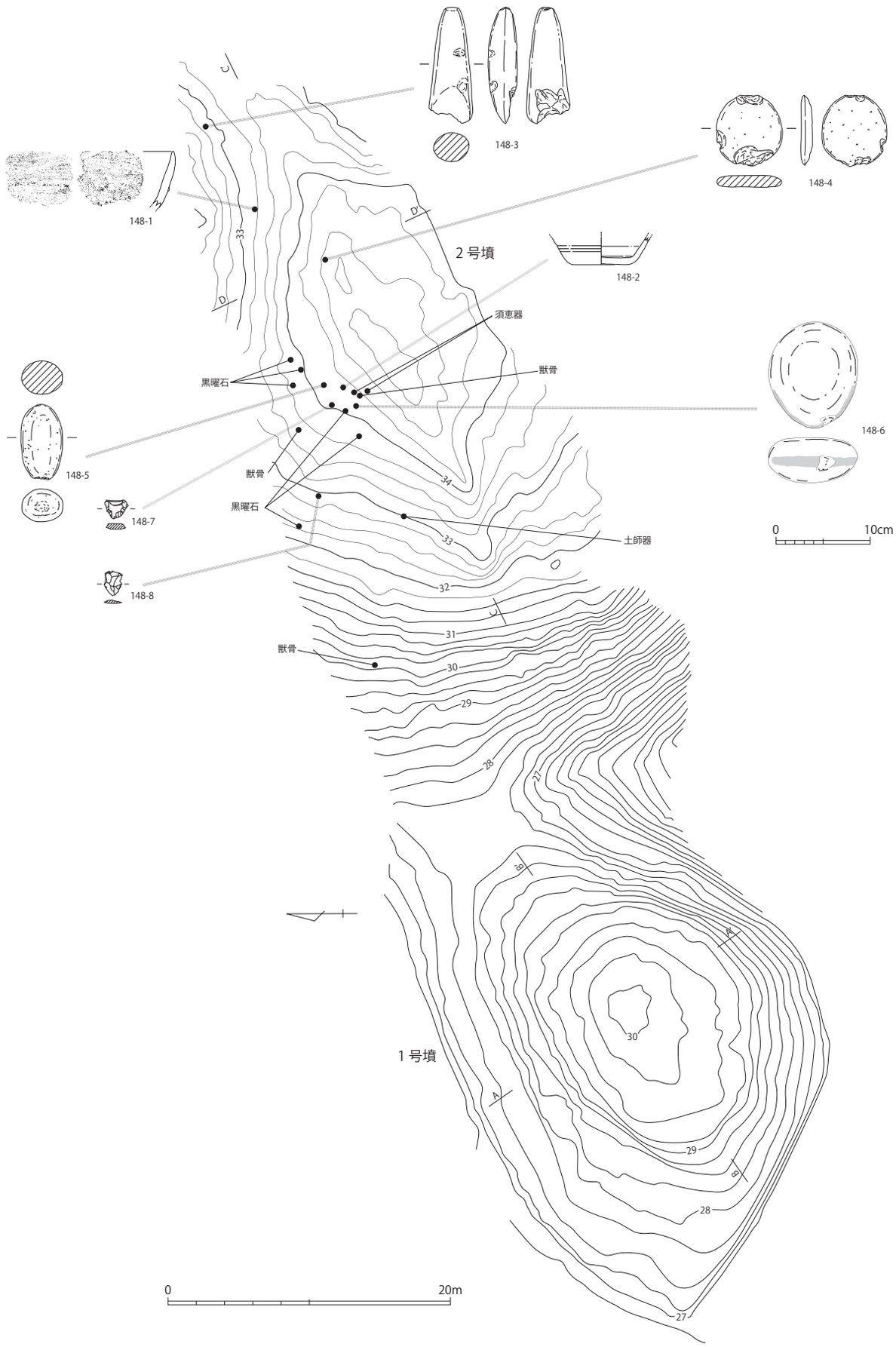
間谷西古墳群は出雲市知井宮町 2501-1 他に所在し、間谷西Ⅱ遺跡の西側丘陵の標高約 22 m～34 mに位置する５～６基からなる古墳群である。調査区域の丘陵は中央部分に民有地が東西方向に存在しているため、中央を除く南側と北側が調査区域となっている。古墳は３基が調査対象となり、１・２号墳が丘陵南側、３号墳が丘陵北側に位置しており、調査対象面積は 2,200㎡である。

１号墳（第 146 図）

１号墳は丘陵南側の標高約 30 mの地点に位置する。平面形は楕円形状を呈しているが、径約 15 m前後、高さ約１mの円墳と考えられた。しかしながら、表土下はすぐに地山となり、盛土の痕跡や埋葬施設、周溝等の古墳に伴う遺構や遺物は全く確認できなかった。

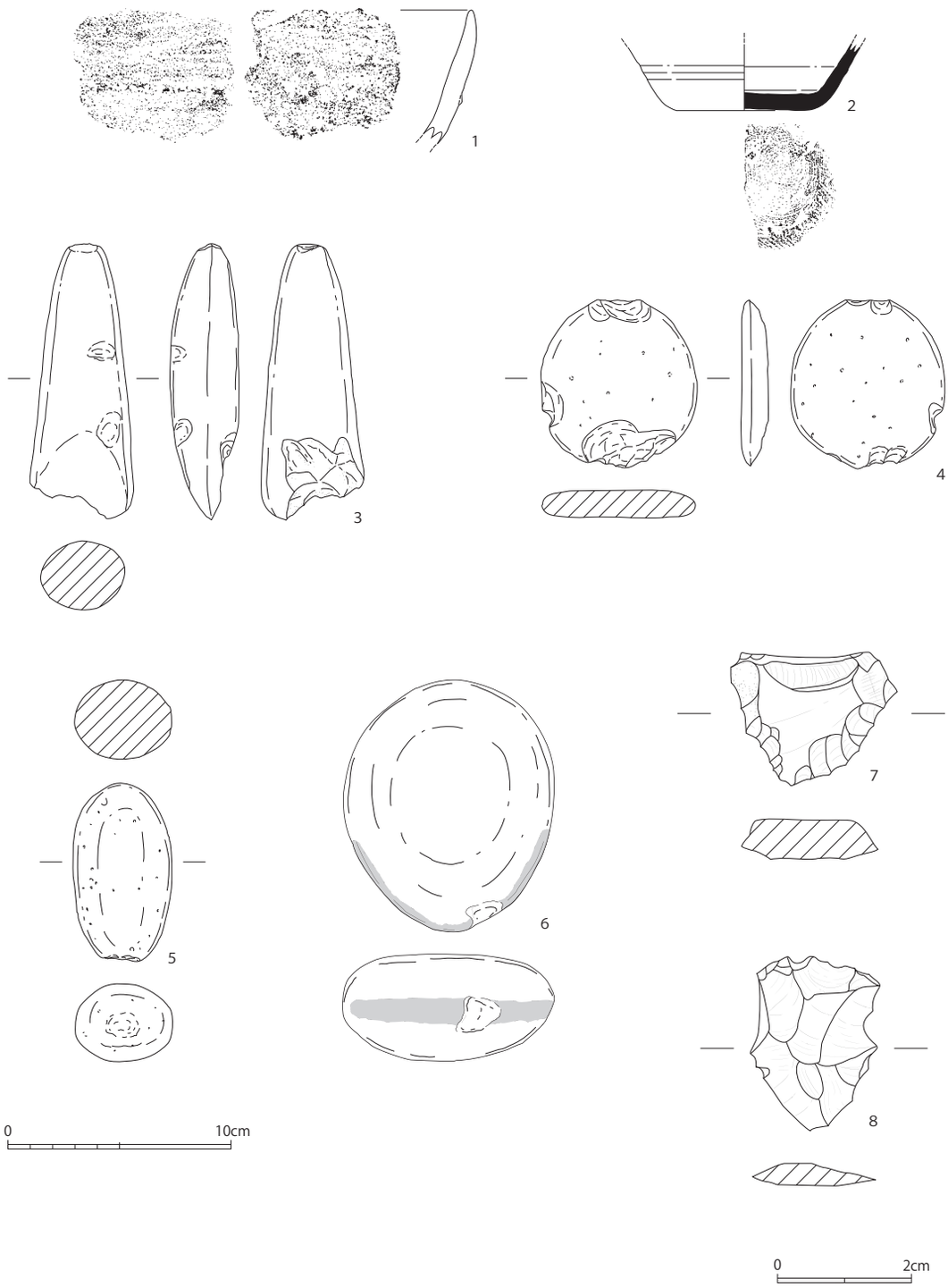


第 145 図　間谷西古墳群　全体図（S=1/1000）



第 146 図　間谷西古墳群　1・2 号墳実測図及び遺物出土状況（遺構 S=1/400　遺物 S=1/6）

第 147 図　間谷西古墳群　1・2 号墳セクション（S=1/80）

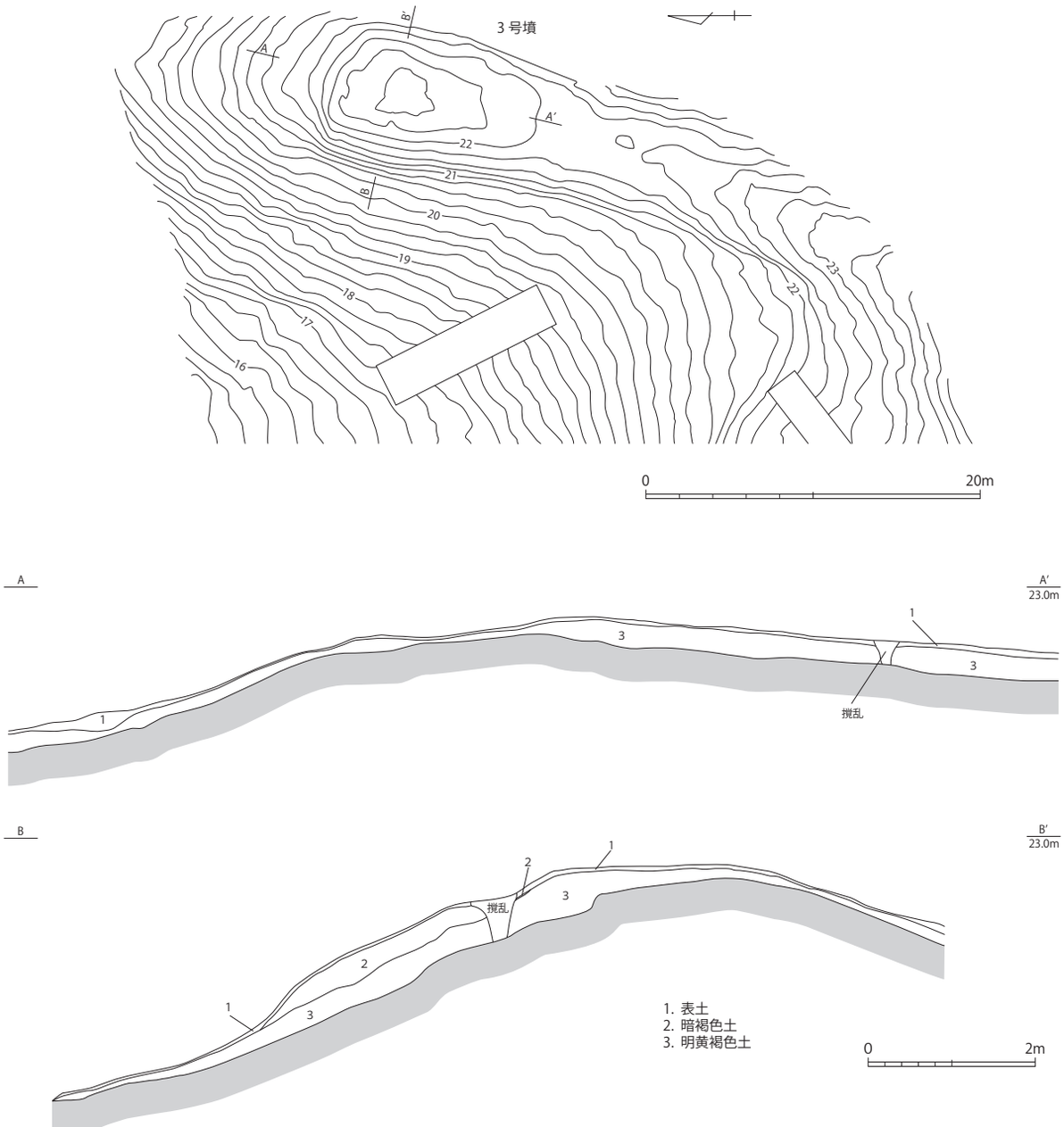


第 148 図　間谷西古墳群　出土遺物実測図（1～6：S=1/3、7・8：S=1/1）

2 号墳（第 146 図）

2 号墳は 1 号墳の東側約 50 mの標高約 34 mの地点に位置し、攪乱や自然崩壊等の影響を受けて墳形や規模等が不明瞭であった。調査の結果、地山上面には最大約 80cm の自然堆積土が認められたが、盛土の痕跡は確認できず、地山面でも埋葬施設や周溝等の古墳に伴う遺構は確認できなかった。

墳丘北側斜面では古墳に伴わない遺物であるが、縄文土器、須恵器、土師器や石器と獣骨などが数点出土した。このことから建物跡等の遺構が存在しているものと予想されたが、期待に反して遺



第 149 図　間谷西古墳群　３号墳実測図（遺構 S=1/400　セクション S=1/80）

構は検出できなかった。

出土遺物（第 148 図）

図化できたのは８点である。１は縄文土器の鉢で磨滅が著しいが、外面に突帯が廻っている。縄文時代前期前葉頃の西川津式と思われる。[1] ２は須恵器の坏で口縁部を欠損する。底部外面には回転糸切り痕が認められる。３は磨製石斧で刃部片面が破損している。４は石錘で両端に破面が認められる。５・６は敲石である。５は楕円形状を呈し片方の先端に使用痕が認められる。６は円形を呈し側面の一部に使用痕が認められる。７・８は黒曜石の剥片である。

３号墳（第 149 図）

３号墳は１・２号墳から約 110 m離れた丘陵北側の標高約 22 mの地点に位置する。長軸約 10 m、短軸約７ mの方墳と考えられたが、盛土の痕跡や埋葬施設、周溝等の古墳に伴う遺構や遺物は全く

確認できなかった。

その他の調査

２号墳の斜面から遺物が出土したことを受けて、３号墳の存在する丘陵斜面に建物跡等の遺構が存在する可能性が高いと考えられ、遺構の有無について確認調査を行った。トレンチ 13 本設定して調査を行ったが、遺構、遺物は全く検出されなかった。

第２節　小　結

今回調査対象となった３基の古墳は調査の結果、埋葬施設や周溝等の古墳に伴う遺構や遺物は確認できなかった。３基とも古墳の可能性は低いと考えられるが浅柄北古墳のように、調査区域の自然崩壊等による流出により埋葬施設が失われていた可能性も否定できない。また、周辺には間谷東古墳、浜井場古墳群などが確認されていることから、古墳が存在していた可能性は考えられ、調査対象外のものに古墳が存在していることに今後期待したい。

註１　島根県埋蔵文化財調査センター柳浦俊一氏のご教示による。

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	法量(cm)			形態・調整の特徴		文様の特徴	色　調	胎　土	備　考
				口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)	外　面	内　面				
148-1	２号墳	縄文土器	鉢				磨滅	磨滅		橙褐色	5mm 以下の砂粒を多めに含む	
148-2	２号墳	須恵器	坏		3.0	6.0	回転糸切り、回転ナデ	回転ナデ		暗灰色	密	
148-3	２号墳	石器	磨製石斧	12.3	4.5	3.1						
148-4	２号墳	石器	石錘	7.5	7.0	1.2						
148-5	２号墳	石器	敲石	7.9	4.6	3.5						
148-6	２号墳	石器	敲石	11.3	9.4	4.8						
148-7	２号墳	石器	剥片	2.0	2.4	0.6						黒曜石
148-8	２号墳	石器	剥片	2.6	1.9	0.4						黒曜石

第８章　自然科学的分析

第１節　御崎谷遺跡発掘調査に係る出土木質遺物の樹種同定

古野　毅・渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

御崎谷遺跡は、島根県東部に位置する出雲平野南西部（出雲市東神西町地内）に位置し、出雲平野南端の低丘陵に囲まれた谷間に立地する低湿地遺跡である。

本報告では、発掘調査に伴い検出された木質遺物を対象として樹種同定を行い用材について検討した。

試料について

樹種同定を行った試料の詳細は表１に示すとおりである。また、図１の調査トレンチ内平面図にグリッドの配置および木質遺物が多量に検出された土坑（SX01）の位置を示す。島根県埋蔵文化財調査センターより採取保管されていた上記試料の提供を受け、永久プレパラート作成、樹種同

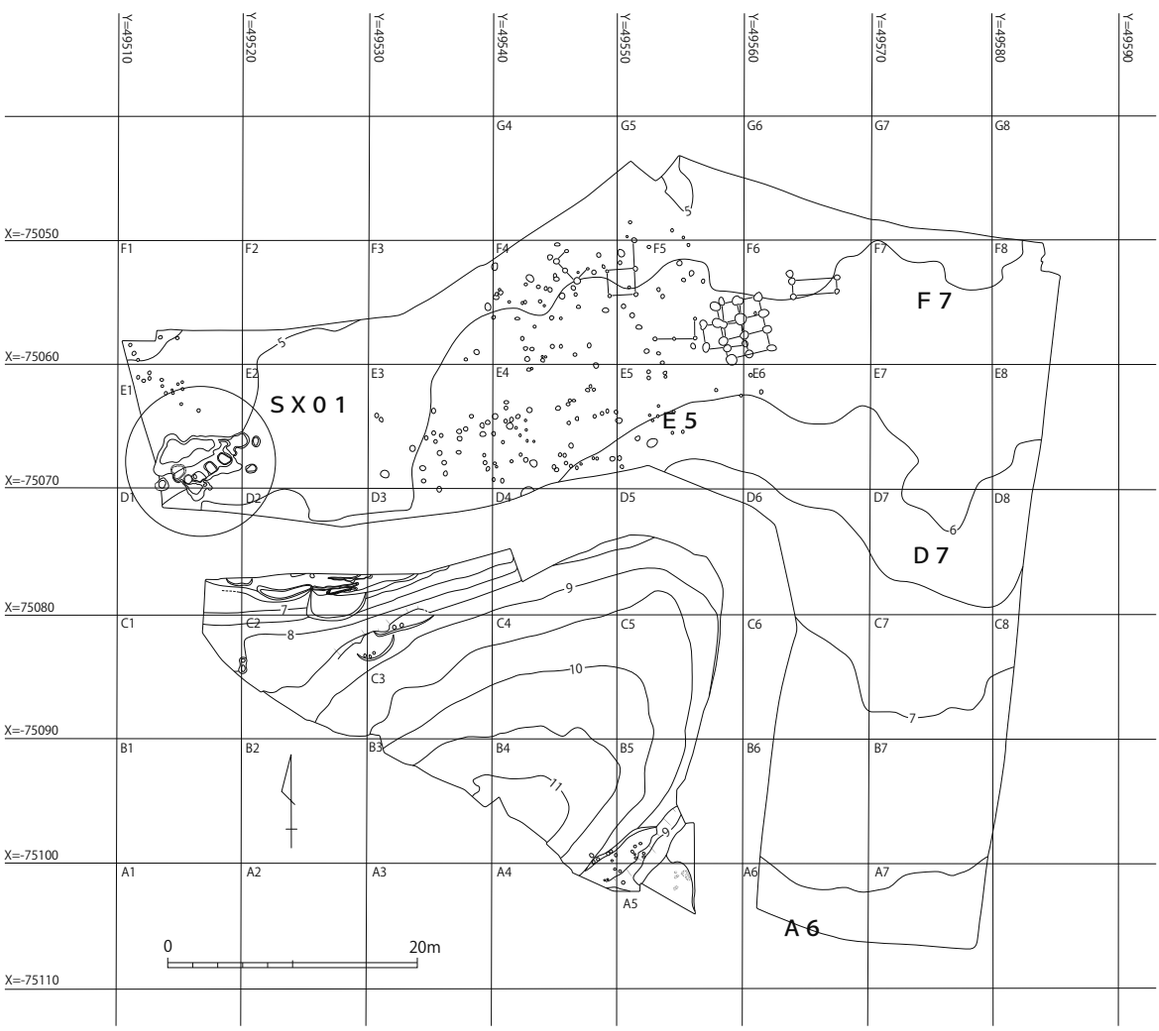


図１　調査グリッドと遺構の配置（S=1/600）

定作業を行った。

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2000）に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント (株) にて保管管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で 4 倍～ 600 倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、３断面の顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

樹種の同定結果及び記載

分類群毎に代表的な試料（下線試料）の記載を行うとともに、図版に顕微鏡写真を示した。またすべての同定結果を表 1 の一覧表に示している。

(1) イチイ？　cf. Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.　試料：M-11(W08090811)

記載：構成細胞は仮道管および放射柔細胞からなる。放射仮道管、樹脂細胞および樹脂道は存在しない。早材から晩材への移行は緩やかである。晩材幅は非常に狭い。劣化が激しいため不顕著であるが、仮道管にらせん肥厚が存在する。放射組織は単列で、15 細胞高以下である。分野壁孔は劣化のため不顕著であるが、ヒノキ型と認められる。以上の組織上の特徴から、イチイと推定される。

(2) イヌマキ　Podocarpus macrophyllus D. Don　試料：M-2(W08090802)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚および樹脂道は存在しない。年輪幅は非常に狭く（約 0.25mm）、早材から晩材への移行は緩やかである。晩材幅は狭い。樹脂細胞は早･晩材の移行部から晩材にかけて多数存在し、年輪に均等に散在している。放射組織は単列で、10 細胞高以下である。分野壁孔は不鮮明であるがヒノキ型で、1 分野に 1 ～ 2 個存在する。以上の組織上の特徴から、イヌマキと同定した。

(3) スギ　Cryptomeria japonica D. Don　試料：M-1(W08090801)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚および樹脂道は存在しない。早材から晩材への移行はやや急である。晩材幅はやや広い。樹脂細胞は早・晩材の移行部から晩材にかけて多数存在し、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は単列で、25 細胞高以下である。分野壁孔は典型的なスギ型で、1 分野に通常 2 個存在する。以上の組織上の特徴から、スギと同定した。

4) コナラ属アカガシ亜属　Quercus sub. Cyclobalanopsis sp.　試料：M-7(W08090807)

記載：大きい円形ないし楕円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースが発達している。孔圏道管の周りに周囲仮道管が存在している。軸方向柔細胞は接線方向に 1 ないし 2 細胞幅の独立帯状柔組織を形成している。放射組織は同性で、単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなり、典型的な複合放射組織である。以上の組織上の特徴から、コナラ属アカガシ亜属と同定した。

(5) ニレ属　Ulmus sp.　試料：M-9(W08090809)

記載：年輪幅は非常に狭い。大きい円形ないし楕円形の道管が単独でほぼ 1 列に配列する環孔材である。孔圏外では小道管が多数集合して顕著な集団管孔を形成しているが、孔圏外の幅も狭いため配列は不明である。道管せん孔は単せん孔で、小道管にはらせん肥厚が認められる。道管相互壁孔は交互状である。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織はほとんど同性で、1 ～ 7 細胞幅である。以上の組織上の特徴から、ニレ属と同定した。

(6) クワ属　Morus sp.　試料：28(W08090912)

記載：環孔材で、大きい道管が単独ないし２～３個放射方向あるいは斜め方向に複合して多列（４～５列）に配列している。孔圏外では道管の大きさが徐々に小さくなり、単独ないし小塊状に集合して散在している。道管せん孔は単せん孔で、小道管のらせん肥厚は不顕著である。道管相互壁孔は交互状である。道管内腔にチロースが顕著に発達している。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織は異性で、１～６細胞幅で、高さは30細胞高以下で低い。ほとんど平伏細胞からなるが、上下縁辺に１個の直立細胞が存在する。４～６細胞幅の紡錘形放射組織が目立つ。以上の組織上の特徴から、クワ属と同定した。

(7) クスノキ属？　cf. Cinnamomum sp.　試料：23(W08090907)

記載：中庸の道管が単独あるいは放射方向または斜め方向に２～３個複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管内腔にチロースが発達している。軸方向柔組織は周囲状で、道管の周りを厚いさや状に包んでいる。放射組織は異性で、１～２細胞幅である。周囲柔組織に大型の柔細胞（油細胞と思われる）が認められるが、不顕著である。以上の組織上の特徴からクスノキ属と推定される。

(8) ネムノキ　Albizzia julibrissin Durazz.　試料：18(W08090902)

大きい道管が単独ないし複合して３～５列に配列する環孔材である。配列はやや疎である。孔圏外の道管は非常に小さく、単独ないし放射方向に２～３個複合して散在している。道管せん孔は単せん孔である。道管相互壁孔は交互状である。道管内腔にチロースが発達し、また着色物質が認められる。軸方向柔組織は周囲状で、孔圏外では小道管を厚く包み、やや翼状～連合翼状を示す。放射組織は同性で１～３細胞幅である。以上の組織上の特徴から、ネムノキと同定した。

(9) アワブキ属？　cf. Meliosma sp. Sieb. et Zucc.　試料：34(W08091003)

記載：横方向（接線方向）に圧縮されているために、道管の形状はかなり扁平状になっている。道管が単独ないし放射方向に２～３個複合して年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。木部繊維は非常に厚壁である。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織は異性で１～４細胞幅であり、ほとんど平伏細胞からなるが、上下縁辺に直立細胞が見られる。以上の組織上の特徴から、アワブキ属と推定した。

(10) サカキ　Cleyera japonica Thunb.　試料：M-6(W08090806)

記載:非常に小さい角張った道管が単独ないし２個複合して年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔である。側壁の壁孔は対列状～階段状である。木部繊維は非常に厚壁で、有縁壁孔が明瞭に認められる。軸方向柔細胞が散在状に分布している。放射組織は異性で、ほとんど単列であるが、２細胞幅も存在する。放射柔細胞には平伏細胞、直立細胞、方形細胞の３種類がすべてが存在する。放射柔細胞壁は厚壁である。以上の組織上の特徴からサカキと同定した。

樹種同定結果について

同定を行った35試料の内、スギが19試料と半数以上を占めた。この外、イヌマキが４試料、ネムノキ属が３試料と続き、圧倒的にスギが多いことが分かる。

用材を考えるとき、製品と考えられる物は「曲物：M-5」、「農具：M-7,11」、「容器：M-9,13」であった。

(1）曲物

全国的にはヒノキが用いられることが多い（島地・伊東，1988）が、島根県内ではスギの報告例がやや多く、特に中世ではスギが用いられることが多くなる（文化財調査コンサルタント株式会社，内部資料）。今回の「曲物？」で平安時代後期の AMS 年代が得られていることは、このことと調和的である。

(2）農具

アカガシ亜属とイチイ？が検出された。アカガシ属亜帯は鋤鍬類の用材の 88％を占めているほか、農具の柄としても 28％を占めている（島地・伊東，1988）。記載例の少ないイチイは「横槌」であった。「横槌」の用材について島根県内（島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター，2006）では、用材に一定の傾向が見受けられない。

イチイは東北北部、北海道ではサカキ、ヒサカキの代わりに玉串など神事に用いられ、神社の境内に植えられる。また、木目が狭く緻密で美しく光沢があることから、工芸品や机の天板、天井板、鉛筆材として用いられる。歴史的には古代高官の用いた笏の用材とされた。県内の出土例としては、青木遺跡（編み具：木錐）、三田谷遺跡（匙）の報告がある（文化財調査コンサルタント株式会社，内部資料）。分布域は冷温帯から亜寒帯にかけてで、近隣では島根・鳥取県境の船通山 (1142m) に天然分布が知られている。

(3）容器

先の「曲物」も広くは「容器」に含まれるが、ここで「容器」としたものは「挽物」、「刳物」と推定される。島地・伊東（1988）ではニレ属は報告されていないものの、ケヤキやヤマグワなどニレ科と同じ「環孔材」が多用されいる。県内の例ではケヤキ、ニレ属が多く、今回の結果も矛盾するものでは無かった。

まとめ

御崎谷遺跡出土木質遺物の樹種同定を行った。この結果、35 試料が 10 分類群に分類された。10 分類群の内、最も検出量の多い分類群はスギで、全体の半分以上を占めていた。次いでイヌマキ、ネムノキが数試料認められた。また、検出例の少ないイチイが「横槌」として発見された。

木質遺物の内、用途が明確な物は僅かであったが、従来からの知られている用材がほとんどであった。イチイは全国的に出土が少なく、貴重な資料となる。

引用文献

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p.，文永堂，東京．

島地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土「木製品」総覧．296p.，雄山閣，東京．

島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（2006）島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成．島根県古代文化センター調査研究報告書 33，96p.，島根県教育委員会．

文化財調査コンサルタント株式会社（内部資料）樹種同定試料データベース．

渡辺正巳（2000）長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定．長原遺跡東部地区発掘

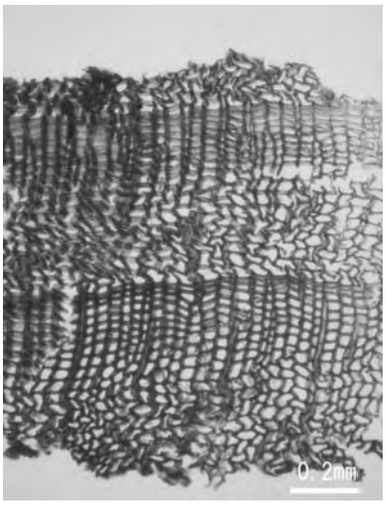
調査報告Ⅲ -1997 年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書 -，247-249，財団法人大阪市文化財協会.

試料 No. は本文挿図では以下の通り対応する。

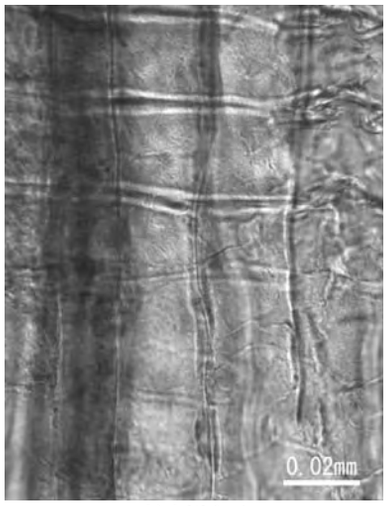
M-1： 第 87 図 2、M-2： 第 49 図 3、M-3： 第 86 図 5、M-4： 第 49 図 2、M-5： 第 86 図 4、M-6： 第 49 図 5、M-7： 第 86 図 1、M-8： 第 86 図 6、M-9： 第 86 図 3、M-10： 第 87 図 1、M-11：第 86 図 2、M-12：第 49 図 4、M-13：第 49 図 1、M-14：第 87 図 4、M-15：第 87 図 3、M-16：第 49 図 6

試料No.	整理番号	樹種名	製品名	出土地点				時代
				地区	遺構	層位	P. No.	
M-1	W08090801	スギ	部材	E5		包含層		平安後期
M-2	W08090802	イヌマキ	部材		SX01		木⑬	弥生後期～古墳前期
M-3	W08090803	スギ	部材	D7		包含層		古墳中期～古墳末
M-4	W08090804	スギ	部材		SX01		木⑫	弥生後期～古墳前期
M-5	W08090805	スギ	曲物?	E5		包含層		平安後期
M-6	W08090806	サカキ	部材		SX01		⑥	弥生後期～古墳前期
M-7	W08090807	コナラ属アカガシ亜属	農具			包含層		古墳中期～古墳末
M-8	W08090808	スギ	部材	A6		包含層		古墳中期～古墳末
M-9	W08090809	ニレ属	容器	不明				平安後期
M-10	W08090810	スギ	部材	不明				平安後期
M-11	W08090811	イチイ？	横槌	不明				古墳中期～古墳末
M-12	W08090812	サカキ	部材		SX01			弥生後期～古墳前期
M-13	W08090813	ニレ属	容器?		SX01			弥生後期～古墳前期
M-14	W08090814	スギ	建築部材	F7		包含層		古墳中期～古墳末
M-15	W08090815	スギ	部材	F7		包含層		古墳中期～古墳末
M-16	W08090816	スギ	部材		SX01		木⑧	弥生後期～古墳前期
17	W08090901	スギ				包含層	873	古墳時代前期～中世
18	W08090902	ネムノキ		不明				古墳時代前期～中世
19	W08090903	ネムノキ		E1		包含層		古墳時代前期～中世
20	W08090904	スギ		A6		包含層	木②	古墳時代前期～中世
21	W08090905	ネムノキ				包含層	木①	古墳時代前期～中世
22	W08090906	スギ				包含層	873	古墳時代前期～中世
23	W08090907	クスノキ属？		C6		包含層		古墳時代前期～中世
24	W08090908	スギ		B7		包含層		古墳時代前期～中世
25	W08090909	スギ		F7		包含層		古墳時代前期～中世
26	W08090910	イヌマキ				包含層		古墳時代前期～中世
27	W08090911	スギ		A6		包含層		古墳時代前期～中世
28	W08090912	クワ属		不明				古墳時代前期～中世
29	W08090913	スギ		不明				古墳時代前期～中世
30	W08090914	スギ		E2		包含層	688	古墳時代前期～中世
31	W08090915	スギ		E1		包含層	木③	古墳時代前期～中世
32	W08091001	イヌマキ		E1		包含層	木④	古墳時代前期～中世
33	W08091002	スギ		E1		包含層	木⑤	古墳時代前期～中世
34	W08091003	アワブキ属		E1		包含層	木⑥	古墳時代前期～中世
35	W08091004	イヌマキ		B6		包含層		古墳時代前期～中世

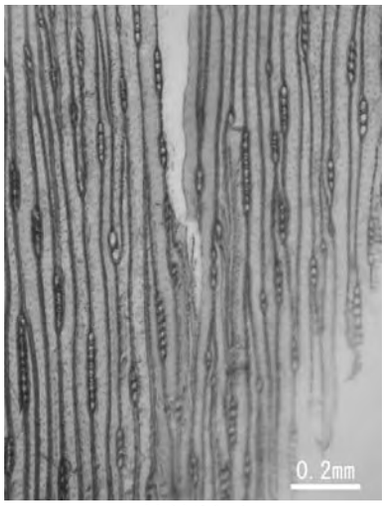
イチイ？　cf. *Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc.　試料 No.M-11(W08090811)



横断面

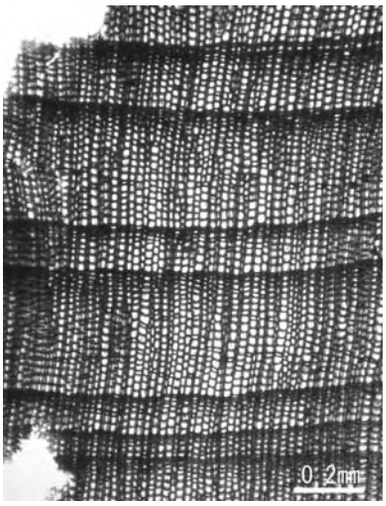


放射断面



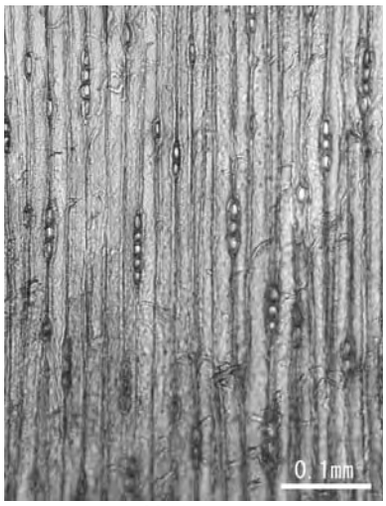
接線断面

イヌマキ　*Podocarpus macrophyllus* D. Don　試料 No.M-2(W08090802)



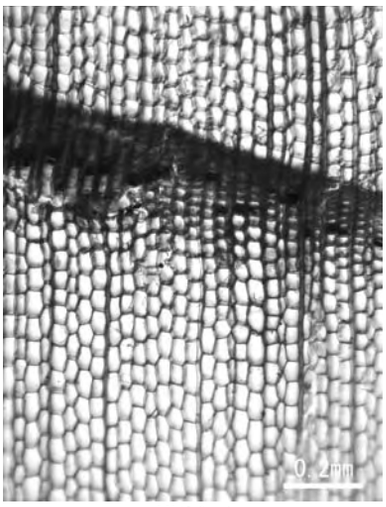
横断面

放射断面

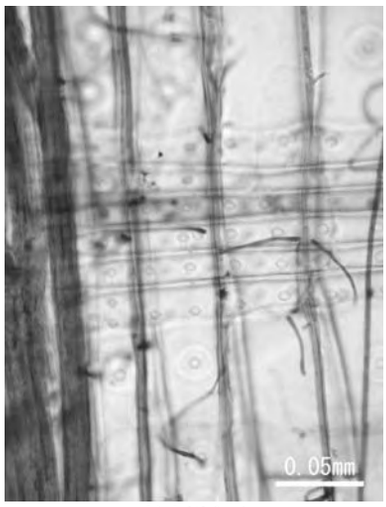


接線断面

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　試料 No.M-1(W08090801)



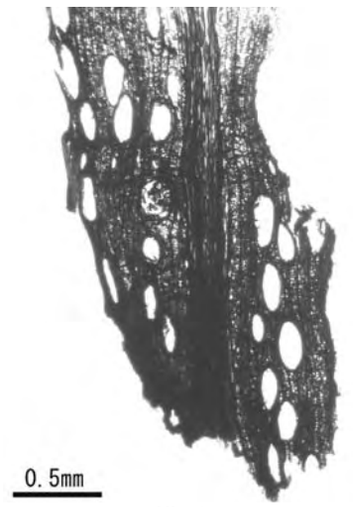
横断面



放射断面

接線断面

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus sub. Cyclobalanopsis* sp.　試料 No.M-7(W08090807)

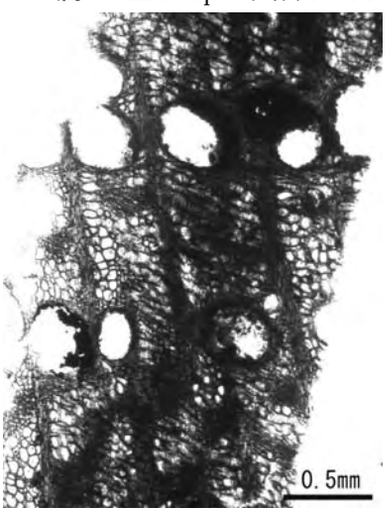


横断面

放射断面

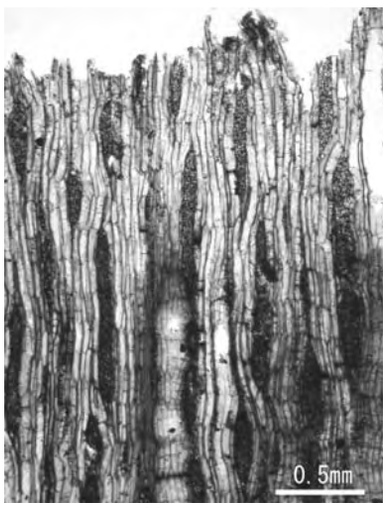
接線断面

ニレ属　*Ulmus* sp.　試料 No.M-9(W08090809)



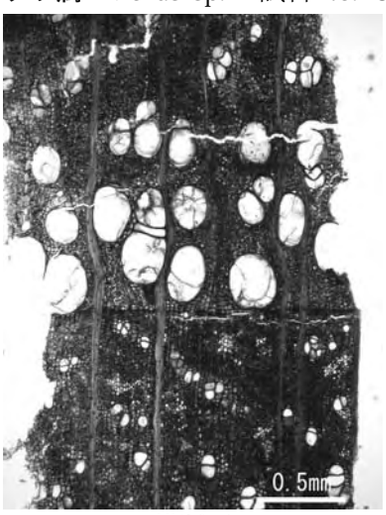
横断面

放射断面

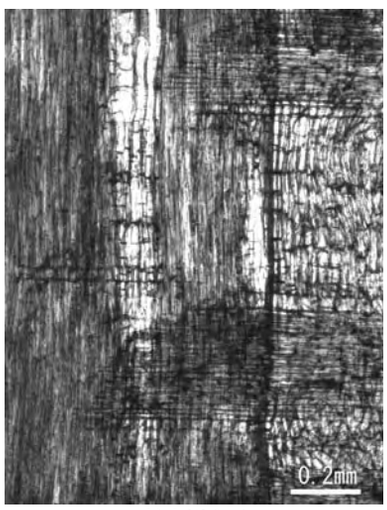


接線断面

クワ属　*Morus* sp.　試料 No.28(W08090912)



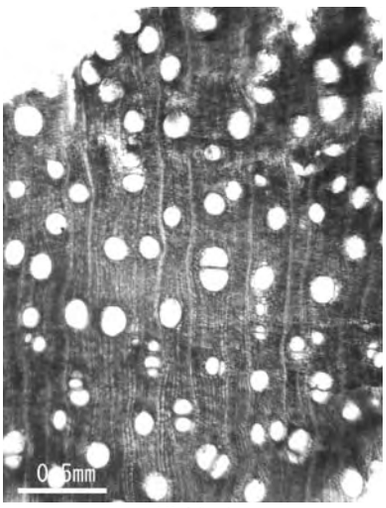
横断面



放射断面

接線断面

クスノキ属？　cf. *Cinnamomum* sp.　試料 No.23(W08090907)



横断面

放射断面

接線断面

ネムノキ　*Albizzia julibrissin* Durazz.　試料 No.18(W08090902)

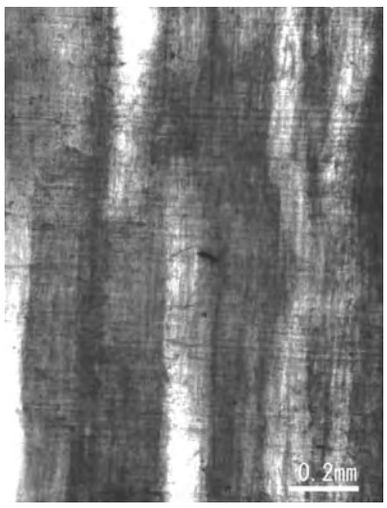
横断面

放射断面

接線断面

アワブキ属？　cf. *Meliosma* sp. Sieb. et Zucc.　試料 No.34(W08091003)

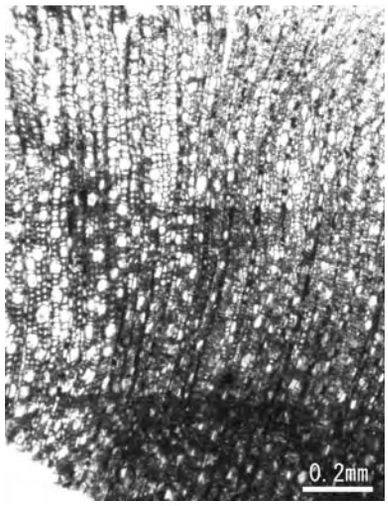
横断面



放射断面

接線断面

サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　試料 No.M-6(W08090806)



横断面

放射断面

接線断面

第２節　御崎谷遺跡発掘調査にかかる AMS 年代測定

渡辺正巳 (文化財調査コンサルタント株式会社)

はじめに

御崎谷遺跡は、島根県東部に位置する出雲平野南西部（出雲市東神西町地内）に位置し、出雲平野南端の低丘陵に囲まれた谷間に立地する低湿地遺跡である。

本報告では、発掘調査に伴い検出された木質遺物を対象として AMS 年代測定を行い、遺構(SX01) および堆積層の年代について検討した。

分析試料について

図 1 に示す SX01 埋土、および調査グリッド全体に広がる「包含層」から出土した木質遺物を対象とした。各試料の詳細、および測定結果を表 1 に示す。また表 1 には、別途実施した樹種同定結果 (古野・渡辺，2008) も記している。

前処理及び測定方法

試料に酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、石墨（グラファイト）に調整し、加

図１　調査グリッドと遺構の配置（S=1/600）

速器質量分析計（AMS）を用いて測定を行った。

AMS 年代測定結果

AMS 年代測定結果を表 1 に示す。表 1 には、３種類の年代と、δ^{13}C 値を示してある。

補正 δ^{14}C 年代は、^{14}C 濃度が環境により変動することから δ^{13}C を測定し、δ^{13}C = -25‰ に規格化した ^{14}C 濃度を求め、リビーの半減期（5568 年）を用いて年代値を算出したもの（暦年較正用年代）を 5 年単位で丸めた値である。これらの年代は、いずれも西暦 1950 年からさかのぼった年代値で示してある。

一方暦年較年代は､時代(時間)とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の ^{14}C 濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた暦年代較正データ（INTCAL04）を用いて、較正したものである。較正には OxCal ver. 3.10 を用いている。

年代測定結果について

表 1 に示した年代測定値を図 2 のようにまとめた。この図から明らかなように、年代測定値は大きく３つのグループからなる。

最も古い AD100 年から AD400 年を示すグループは全て SX01 から採取されたものであり、この間の年代を示す試料は他の遺構・層からは検出できなかった。このことから、SX01 が弥生時代後期から古墳時代前期頃の土坑であることが明らかである。

包含層出土の遺物は、AD400 年から AD600 年の値を示すグループと、AD1000 年から AD1200 年の値を示すグループに２分できた。これらの内 AD1000 年から AD1200 年を示すグループはいずれも E5 区から出土した遺物であった。したがって、包含層と一括された層準は、古墳時代中期から古代末にかけて堆積した可能性が指摘できる。一方で、２つのグループの中間時期を示す遺物が検出できなかったことから、古墳時代中期から古墳時代末ころに堆積した後、平安後期に擾乱を受けた可能性も指摘できる。現地の状況が明らかでないが、小規模な土坑や溝などが見落とされたのであろうか？

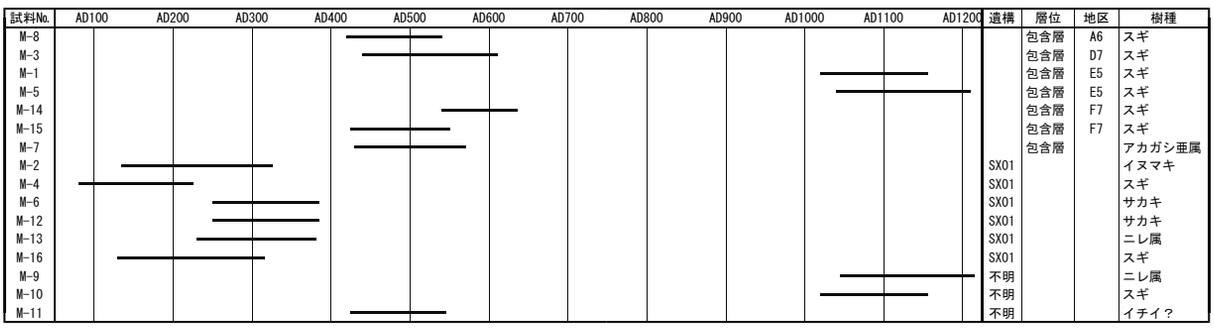
一方、検出層準・調査区不明の３試料は、包含層の２つのグループのいずれかに含まれた。

まとめ

土坑（SX01）の埋積時期は、弥生時代後期から古墳時代前期頃と考えられた。包含層は、古墳時代中期から古代末にかけて堆積したと考えられるが、古墳時代中期から古墳時代末ころに堆積した後、平安後期に擾乱を受けた可能性も指摘できる。

引用文献

古野　毅・渡辺正巳（2008）御崎谷遺跡発掘調査に係る樹種同定結果.



試料			$\delta^{13}C$	補正^{14}C	暦年較正用年代	暦年較正年代		測定番号
No.	遺構名	状態	(‰)	(yrBP)	(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	(PLD-)
M-1 (IMD－1)	SX01	生材 乾燥	-23.93±0.14	965±20	964±21	AD1024－1046(29.9%) AD1094－1120(30.8%) AD1141－1148(7.6%)	AD1019－1055(35.5%) AD1077－1155(59.9%)	11347
M-2 (IMD－2)	E5区 包含層	生材 乾燥	-30.81±0.12	1790±25	1789±23	AD172－193(9.6%) AD211－258(45.0%) AD298－320(13.6%)	AD135－261(75.4%) AD281－325(20.0%)	11348
M-3 (IMD－3)	D7区 包含層	生材 乾燥	-24.96±0.19	1510±20	1510±22	AD542－590(68.2%)	AD441－484(7.0%) AD533－610(88.4%)	11349
M-4 (IMD－4)	SX01	生材 乾燥	-26.4±0.20	1865±25	1863±23	AD88－103(11.6%) AD122－176(41.2%) AD191－212(15.3%)	AD81－225(95.4%)	11350
M-5 (IMD－5)	E5区 包含層	生材 乾燥	-26.73±0.13	900±20	901±22	AD1048－1088(36.5%) AD1122－1139(12.5%) AD1150－1173(19.1%)	AD1041－1108(45.4%) AD1117－1210(50.0%)	11351
M-6 (IMD－6)	SX01	生材 乾燥	-31.62±0.15	1725±20	1726±22	AD257－302(40.1%) AD316－346(25.2%) AD372－377(2.9%)	AD250－385(95.4%)	11352
M-7 (IMD－7)	包含層	生材 乾燥	-28.61±0.12	1550±25	1548±24	AD436－490(43.3%) AD511－517(3.6%) AD530－555(21.3%)	AD430－569(95.4%)	11353
M-8 (IMD－8)	A-6区 包含層	生材 乾燥	-26.64±0.18	1580±25	1581±23	AD432－465(25.7%) AD483－533(42.5%)	AD423－540(95.4%)	11354
M-9 (IMD－9)	不明	生材 乾燥	-28.20±0.14	890±20	888±22	AD1054－1079(20.3%) AD1153－1208(47.9%)	AD1045－1095(29.7%) AD1119－1142(9.5%) AD1147－1216(56.2%)	11355
M-10 (IMD－10)	不明	生材 乾燥	-28.18±0.13	965±20	967±21	AD1023－1045(32.1%) AD1095－1120(29.3%) AD1141－1148(6.8%)	AD1019－1054(38.1%) AD1079－1154(57.3%)	11356
M-11 (IMD－11)	不明	生材 乾燥	-25.21±0.14	1570±25	1572±23	AD435－492(49.7%) AD507－520(11.0%) AD527－536(7.5%)	AD425－544(95.4%)	11357
M-12 (IMD－12)	SX01	生材 乾燥	-29.59±0.17	1725±25	1726±23	AD257－302(39.4%) AD316－347(25.0%) AD371－377(3.8%)	AD249－385(95.4%)	11358
M-13 (IMD－13)	SX01	生材 乾燥	-27.60±0.21	1750±25	1749±25	AD245－263(16.7%) AD277－330(51.5%)	AD232－381(95.4%)	11359
M-14 (IMD－14)	F7区 包含層	生材 乾燥	-27.02±0.19	1490±25	1491±24	AD556－602(68.2%)	AD539－633(95.4%)	11360
M-15 (IMD－15)	F7区 包含層	生材 乾燥	-24.10±0.22	1565±25	1564±24	AD435－492(49.0%) AD508－519(9.1%) AD528－540(10.1%)	AD426－553(95.4%)	11361
M-16 (IMD－16)	SX01	生材 乾燥	-24.79±0.24	1810±25	1808±24	AD140－155(11.9%) AD168－195(22.8%) AD209－242(33.5%)	AD131－256(92.7%) AD303－315(2.7%)	11362

第３節　出雲市浅柄北古墳出土の人骨

松下孝幸 *・松下真実 **

【キーワード】：島根県、古墳人骨、横穴墓、高身長

はじめに

島根県出雲市知井宮町 2414-2 に所在する浅柄北古墳の発掘調査が出雲インター線に接続する国道 227 号線の拡幅工事に伴って 2007 年（平成 19 年）におこなわれ、１基の横穴墓（５号横穴）から人骨が検出された。発掘調査で確認された横穴墓は６基存在したが、５基はいずれも天井が崩落し、玄室内には人骨はまったく残存していなかった。人骨が残っていた横穴墓は比較的玄室がよく保存されており、玄門付近を除けば天井の崩落はみられない。人骨が残っていた５号横穴には盗掘を受けた形跡はなかったが、人骨は撹乱を受け、埋葬状態を保ったものは存在しない。横穴墓の場合には、このように最後に埋葬された人骨を確認することができない状態で人骨が検出されることが、しばしばみられる。本例もまた同じようにすべての人骨が撹乱状態で検出された。今回は筆者らは現地で人骨の調査をおこなうことができたので、玄室内で確認された人骨が４体分であることを確認し、頭蓋や四肢骨を個体別に判別することが可能であり、頭位や埋葬されていた屍床も推測することもできた。

筆者らが、島根県内の古墳人骨の発掘調査や人骨形質の研究に携わるのは本例が初めてである。従って、本古墳人骨の島根県内での位置づけや日本人の形質変化のなかにどのように位置づけるかを検討することはできなかったが、先学の業績を参考にしながら、本人骨の特徴を明らかにし、今後の課題などを検討してみた。

今回検出された人骨の保存状態は良好で、その特徴も明確である。人類学的観察や計測をおこない、周辺地域の資料と検討してみたところ興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

資　料

今回の発掘調査で人骨が残存していたのは１基の横穴墓（５号横穴）のみで、この５号横穴から検出された人骨を解剖学的に精査したところ、４体の人骨であった。埋葬状態を保って検出されたものは１体もない。また、関節した骨も存在しなかった。出土した人骨は表１に示すとおり、４体のうち２体は男性人骨で、１体は女性骨、残りの１体は未成人骨であった。年齢区分については表２を参考にされたい。

１号人骨と２号人骨は石で造られた右の屍床（石床）から、３号人骨は石床を持たない左の屍床から検出された。また、４号人骨は右床の玄門に近いところで、天井から剥落した土の中から検出されており、残存量は４体中もっとも少なく、大腿骨と四肢骨の骨片のみである。４体の人骨のうち４号人骨がもっとも保存状態が悪く、残存量も少ないことから、この人骨が最初に埋葬された被葬者の遺骨と推測される。残り３体の人骨の保存状態と残存量はほぼ同じであるので、３体が同時に埋葬された可能性もあるが、屍床の数と玄室の大きさから３体同時埋葬にはやや無理がある。追葬

* Takayuki　MATSUSHITA　　** Masami　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

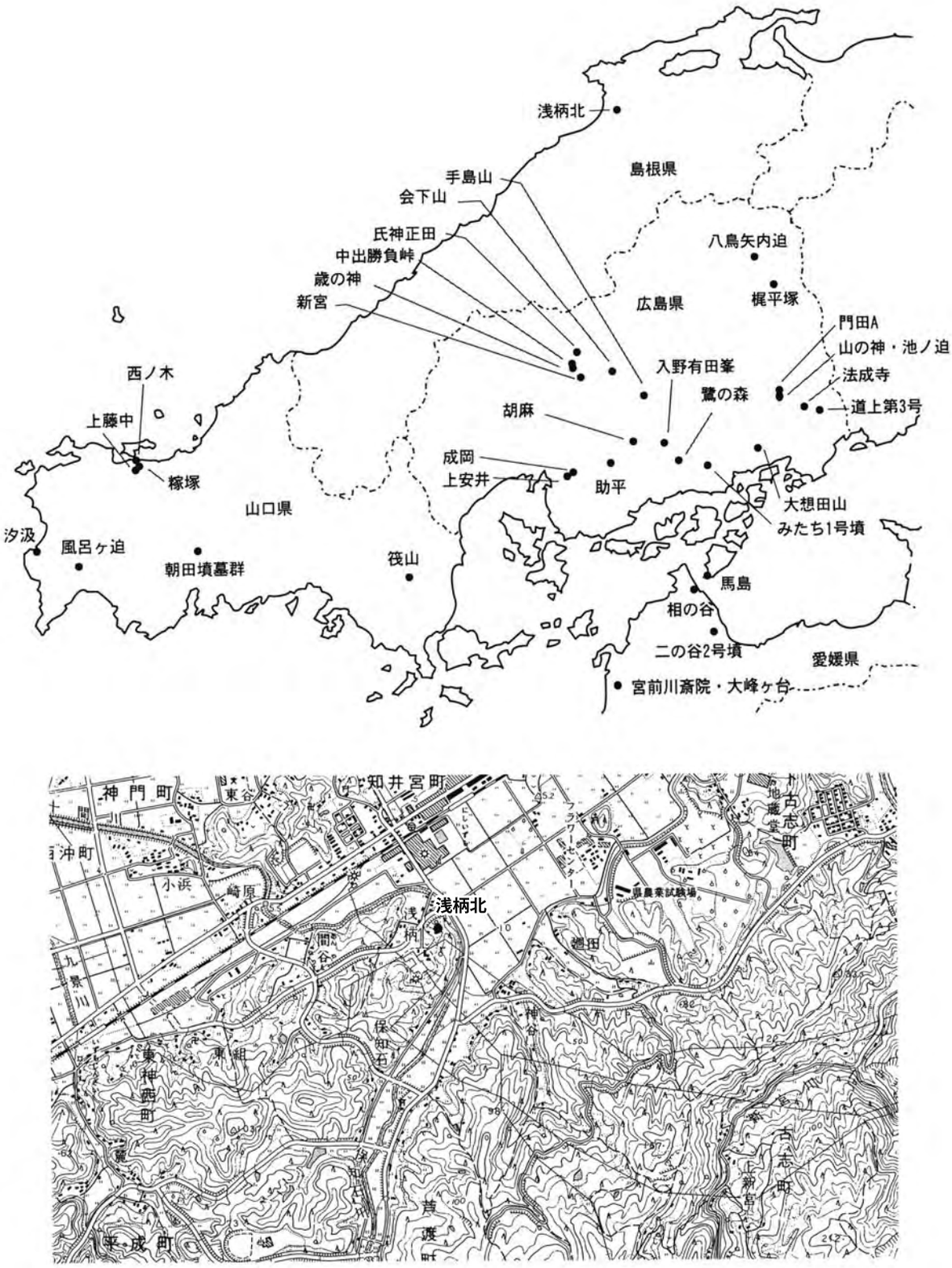


図１　遺跡の位置

（Fig.1 Location of the Asagara-kita tumulus, Izumo City Shimane Prefecture）

があったと考えたいが、その場合、追葬の間隔が比較的短かった可能性がある。

この２体の人骨は、考古学的所見より、古墳時代（６世紀後半）に属する人骨である。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

表１　出土人骨一覧（Table 1.List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢	備　　考（推定身長値）
１号人骨	男性	不明	右床から検出、167.22cm
２号人骨	男性	成年	右床から検出
３号人骨	女性	不明	左床から検出
４号人骨	男性	不明	右床の玄門付近から検出

表２　年齢区分　（Table 2.Division of age）

	年齢区分	年　　齢	
未成人	乳児	１歳未満	
	幼児	１歳～　５歳	（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～ 15 歳	（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～ 20 歳	（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～ 39 歳	（40 歳未満）
	熟年	40 歳～ 59 歳	（60 歳未満）
	老年	60 歳以上	

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

所　見

各人骨の残存部は図２に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

１号人骨（男性・年令不明）

１．頭蓋

下顎骨のみが残存していた。下顎骨は保存状態が悪く、計測はできなかった。

２．歯

下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ ７ ６ ５ ４ ３ ② ① | ① ② ３ ４ ５ ６ ７ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔１：中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の１度（咬耗がエナメル質のみ）～２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

３．四肢骨

(1) 上肢骨

上腕骨、尺骨が残存していた。

①上腕骨

両側ともに保存状態は悪い。骨体は頑丈で太く、三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は、中央最大径が 22mm（左右）、中央最小径は 20mm（左右）で、骨体断面示数は 90.91（左右）となり、骨体の扁平性はきわめて弱い。骨体最小周は 66mm（右）、中央周は 71mm（右）、67mm（左）で、骨体は大きい。

②尺骨

尺骨は両側ともに残存していた。左側は、遠位端が欠損しているが、保存状態は良好である。長さはやや長く、骨体は太い。右側は保存状態が悪く、計測はできなかった。

(2) 下肢骨

大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①大腿骨

左右とも残存していた。右側はほぼ完全で、骨頭の一部が欠損しているが、骨体は長く、骨頭の一部が欠損した状態での最大長は 452mm もある。欠落している部分を復元した最大長は（457mm）もあった。また、粗線の発達も良好であるが、骨体上部の扁平性は弱い。

計測値は、骨体中央矢状径が 33mm（右）、32mm（左）、横径は 27mm（右）、29mm（左）で、骨体中央断面示数は 122.22（右）、110.34（左）となり粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は 94mm（左右）で、骨体は太い。また、上骨体断面示数は 84.38（右）となり、骨体上部の扁平性は弱い。

②脛骨

両側とも残存していた。右側はほぼ完全で、最大長が計測できた。長さは長く、骨体は太い。ヒラメ筋線の発達は悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカのＶ型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が 372mm（右）、骨体周は 90mm（左右）、最小周は 84mm（右）、83mm（左）で、骨体は太い。中央最大径は 32mm（右）、33mm（左）、中央横径は 24mm（右）、23mm（左）で、中央断面示数は 75.00（右）、69.70（左）となり、骨体には扁平性は認められない。

③腓骨

左側が残存していた。長さは長く、骨体の径は大きい。稜の発達は良好で溝も深い。

４．推定身長値

右側大腿骨の残存している最大長 452mm から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、166.28cm（Pearson、右）、166.55cm（藤井、右）となり、この長さからでもかなりの高身長である。復元最大長（457mm）から算出すると、167.22cm（Pearson、右）、167.78cm（藤井、右）となる。また、脛骨の脛骨最大長から藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、（165.15cm）（Pearson、右）、165.88cm（藤井、右）となり、やはり高身長値である。

５．性別・年令

性別は、四肢骨の骨体が太くて長く、粗線の発達が良好であることから男性と推定した。年令は頭蓋が残っていなかったので、不明である。

２号人骨（男性・成年）

１．頭蓋

保存状態が悪く、頭蓋の左半分および顔面部が欠損しているので、計測はほとんどできなかった。外後頭隆起の発達は弱い。外耳道は右側のみ観察できたが、骨種は認められない。縫合は、三主縫合の内外両板がともに開離している。

2.四肢骨

(1) 上肢骨

上腕骨が残存していた。

①上腕骨

両側ともに保存状態はあまりよくない。骨体は細く、三角筋粗面の発達は悪い。上腕骨近位骨端がまだ骨頭と分離している。

計測値は、中央最大径が 21mm（左）、中央最小径は 17mm（左）で、骨体断面示数は 80.95（左）となり、骨体の扁平性は弱い。骨体最小周は 54mm（右）、55mm（左）、中央周は 61mm（左）で、骨体は細い。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨および脛骨が残存していた。

①寛骨

腸骨稜骨端板および坐骨結節骨端板がまだ分離している。大坐骨切痕が観察できた。大坐骨切痕の角度は小さい。

②大腿骨

左右とも残存していたが、保存状態は悪い。骨体は細く、長さは短い。粗線の発達は悪い。大腿骨頭と骨体がまだ分離している。

計測値は、骨体中央矢状径が 24mm（左右）、横径は 26mm（右）、27mm（左）で、骨体中央断面示数は 92.31（右）、88.89（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は悪い。骨体中央周は 79mm（左右）で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は 85.19（右）となり、骨体上部には扁平性は認められない。

③脛骨

両側とも残存していたが、保存状態は悪い。骨体は細く、ヒラメ筋線の発達は悪い。骨間縁の発達は良好である。脛骨近位端部の骨端線は明瞭に認められる。骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。

計測値は、中央最大径が 28mm（左）、中央横径は 22mm（右）、21mm（左）で、中央断面示数は 75.00（左）となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は 77mm（左）で、骨体は細い。

5．性別・年令

性別は、寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいことから男性と推定した。頭蓋の三主縫合が内外両板ともに開離しており、大腿骨近位端がまだ癒合していない。また、脛骨の骨端部の骨端線が明瞭であることから年齢を 16 歳前後（成年）と推測した。

3号人骨（女性・年齢不明）

1．下肢骨

大腿骨および腓骨が残存していた。

①大腿骨

左右とも残存していたが、保存状態はよくない。長さは長く、骨体は細い。粗線の発達は悪く、骨体の前方への彎曲はきわめて弱い。

計測値は、骨体中央矢状径が 25mm（右）、24mm（左）、横径は 25mm（右）、26mm（左）で、骨体中央断面示数は 100.00（右）、92.31（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は悪い。骨体中央周は 80mm（左右）で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は 85.19（右）となり、骨体上部には扁平性は認められない。

②腓骨

左側が残存していた。骨体の径は細いが、稜の発達は良好である。

２．性別・年齢

性別は、大腿骨の骨体は長いが、粗線の発達は悪く、径も細いことから女性と推定した。年齢は不明である。

４号人骨（男性・年齢不明）

１.四肢骨

大腿骨と脛骨が残存していた。

①大腿骨

両側の骨体が残存していたが、保存状態が悪く、計測はできなかった。骨体は太く、粗線の発達は良好である。

②脛骨

右側の骨体が残存していたが、保存状態が悪く、計測はできなかった。骨体は太い。

２．性別・年齢

大腿骨の骨体が大きく、粗線の発達が良好であることから男性と推定した。年齢は不明である。

考　察

計測ができた上腕骨、大腿骨、脛骨について周辺地域の古墳人と比較をおこなってみた。

１．上腕骨

表３は男性上腕骨の比較表である。中央周で骨体の大きさを比較してみた。１号人骨は 71mm もあり、表３では山の神１号墳 2-1 に次いで大きく、骨体の太いことがうかがえる。一方、２号人骨（成年）は 61mm しかなく、表３では手島山 SK-31、中出勝負峠、氏神正田についで小さく、この成年の上腕骨はやや細い。骨体断面示数は１号人骨が 91.91 で、表３では最大値となり、骨体の扁平性はまったく認められない。２号人骨では 80.95 で、表３では手島山に次いで大きく、

表3　上腕骨計測値（男性、右、mm）(Table 3. Comparison of measurements snd indices of male right humeri)

		浅柄北 古墳人 島根県 出雲市			成岡 古墳人 広島県 広島市 (松下)	手島山 弥生～古墳人 広島県 豊栄町 (松下・他)	中出勝負峠 古墳人 広島県 千代田町 (松下・他)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (吉岡・他)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (松下)	氏神正田 古墳人 広島県 千代田町 (池田)			朝田 古墳人 山口県 山口市 (松下・他)				筏山 古墳人 山口県 玖珂町 (松下)
		1号人骨	2号人骨		2号墳人骨	SK-31	5号人骨	1号墳2-1	2号墳2号	n	M	2-5	7-2	10-2	10-3		M
5.	中央最大径	22	21	(左)	21(左)	19	20	24.6	23	1	21	23(左)	22	22(左)	23		24
6.	中央最小径	20	17	(左)	16(左)	16	16	18.5	17	1	15	16(左)	17	17(左)	18		17
7.	骨体最小周	66	55	(左)	−	−	53	67.0	61	1	56	−	62	62(左)	63(左)		62
7(a).	中央周	71	61	(左)	64(左)	57	59	74.0	69	1	60	66(左)	67	66(左)	68		68
6/5	骨体断面示数	90.91	80.95	(左)	76.19 (左)	84.21	80.00	75.2	73.91	1	71.4	69.57 (左)	65.22	77.27 (左)	78.26		70.83

やはり骨体の扁平性は弱い。

２．大腿骨

表４（4-1,4-2）は男性大腿骨の比較表である。骨体中央周で骨体の大きさをみてみると、１号人骨は 94mm もあり、90mm を超え、骨体は太い。表４に示した 23 例のうち、90mm を超えているのは、浅柄北１号人骨のほかに、陣開（98mm）、糠塚 K-1（98mm）、朝田 6-1（92mm）、山の神１号墳 2-1（90mm）、八鳥矢内迫大腿骨４（90mm）の５例しかない。浅柄北１号人骨は、陣開、糠塚 K-1、朝田 6-1 に次いで大きい。一方、２号人骨はまだ成人に達していないこともあって、骨体中央周は 79mm しかなく、この値は表４では最小値である。骨体中央断面示数をみてみると、浅柄北１号人骨は 122.22 もあり、この示数値は縄文人なみで、表４では最大値を示している。２号人骨は 92.31 しかなく、朝田 3-3 に次いで小さい。上骨体断面示数は、１号人骨が 84.38、２号人骨は 85.19 で、両者間で大差はない。前者は朝田 6-1 と同値で、糠塚 K-1 と大差なく、後者は朝田 7-2 と同値である。両者の示数値は大きい方に属し、骨体上部の扁平性はきわめて弱い。

表５は女性大腿骨の比較表である。３号人骨の骨体中央周は 80mm で、山の神４号第１主体、山の神１号墳 2-2、朝田 7-3、同じく 10-2 に次いで大きい。骨体中央断面示数は、３号人骨は 100.00 となり、朝田 7-3 と同値で、八鳥矢内迫、朝田 3-1、同じく 3-4 に次いで大きい。上骨体断面示数は、85.19 で、朝田 3-1 と同値で、表５では最大値となり、男性と同様に骨体上部の扁平性はきわめて弱い。

表４－１　大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table 4-1. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		浅柄北 古墳人 島根県 出雲市		成岡 古墳人 広島県 広島市 (松下)	陣開 古墳人 広島県 本郷町 (松下)	中出勝負峠 古墳人 広島県 千代田町 (松下・他)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (松下)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (吉岡・他)		氏神正田 古墳人 広島県 千代田町 (池田)		八鳥矢内迫 古墳人 広島県 西城町 (松下・他)			
		1号人骨	2号人骨	2号墳人骨	1号	5号人骨	2号墳2号	1号墳1号主体	1号墳2-1	n	M	大腿骨1	大腿骨4	大腿骨5	大腿骨8
1.	最大長	(457)	–	427(左)	–	428	419	404.0	400.0	1	404	–	–	–	–
2.	自然位全長	–	–	–	–	420 (左)	414	401.2	397.3	1	400	–	–	–	–
6.	骨体中央矢状径	33	24	27	33 (左)	28	28	24.6	28.3	1	27	26	29 (左)	–	27 (左)
7.	骨体中央横径	27	26	27	28 (左)	27	26	25.5	28.2	1	27	28	27	–	28 (左)
8.	骨体中央周	94	79	86	98 (左)	86	85	80.0	90.0	1	84	87	90 (左)	–	86 (左)
9.	骨体上横径	32	27	31	31 (左)	29	31	33.0	–	1	29	31	31	33 (左)	32 (左)
10.	骨体上矢状径	27	23	24	25 (左)	22	24	22.4	–	1	26	24	25	20 (左)	23 (左)
8/2.	長厚示数	–	–	–	–	20.71 (左)	20.53	19.9	22.7	1	20.8	–	–	–	–
6/7	骨体中央断面示数	122.22	92.31	100.00	117.86 (左)	103.70	107.69	96.5	100.4	1	100.0	92.86	100.00 (左)	–	96.43 (左)
10/9	上骨体断面示数	84.38	85.19	77.42	80.65 (左)	75.86	77.42	69.9	–	1	89.7	77.42	80.65	60.61 (左)	71.88 (左)

表４－２　大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table 4-2. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		浅柄北 古墳人 島根県 出雲市		朝田 古墳人 山口県 山口市 (松下・他)							糠塚 古墳人 山口県 長門市 (松下)			
		1号人骨	2号人骨	大腿骨8	3-3	3-5	6-1	7-2	10-2	10-3	K-1	K-2	K-3	K-4
1.	最大長	(457)	–	–	402	–	–	418	–	–	–	–	–	–
2.	自然位全長	–	–	–	394	–	–	411	–	–	–	–	–	–
6.	骨体中央矢状径	33	24	27 (左)	25	26(左)	30(左)	27	28(左)	28	31	27	25	27
7.	骨体中央横径	27	26	28 (左)	30	25(左)	28(左)	25	27(左)	27	31	27	27	27
8.	骨体中央周	94	79	86 (左)	88	81(左)	92(左)	81	87(左)	88	98	86	81	86
9.	骨体上横径	32	27	32 (左)	32	30(左)	32(左)	27	33(左)	31	33	34	32	29
10.	骨体上矢状径	27	23	23 (左)	24	24(左)	27(左)	23	25(左)	25	28	22	22	25
8/2.	長厚示数	–	–	–	22.34	–	–	19.71	–	–	–	–	–	–
6/7	骨体中央断面示数	122.22	92.31	96.43 (左)	83.33	104.00 (左)	107.14 (左)	108.00	103.70 (左)	103.70	100.00	100.00	92.59	100.00
10/9	上骨体断面示数	84.38	85.19	71.88 (左)	75.00	80.00 (左)	84.38 (左)	85.19	75.76 (左)	80.65	84.85	64.71	68.75	86.21

表５　大腿骨(女性、右、mm)(Table 5. Comparison of measurements and indices female right femora)

		浅柄北 古墳人 島根県 出雲市 (松下・他)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (松下)			山の神 古墳人 広島県 府中市 (吉岡・他)	中出勝負峠 古墳人 広島県 千代田町 (松下・他)	八鳥矢内迫 古墳人 広島県 西城町 (松下・他)		門田A 弥生～古墳人 広島県 府中市 (松下)	助平 古墳人 広島県 東広島市 (松下)	朝田 古墳人 山口県 山口市 (松下・他)						
		3号人骨	2号墳1号	4号第1主体	4号第2主体	1号墳2-2	6号人骨	大腿骨6	大腿骨7	SK-48	2号人骨	3-1	3-2	3-4	4	7-3	10-1	10-4
6.	骨体中央矢状径	25	23	25	–	25.3	22	25	23	23	23(左)	24	24	24	20	27	26	23
7.	骨体中央横径	25	26	26	–	28.5	23	23	25	25	26(左)	23	25	23	28	27	27	24
8.	骨体中央周	80	77	85	–	83.0	72	74	76	78	78(左)	75	78	74	75	84	82	74
9.	骨体上横径	27 (左)	30	29	31(左)	–	30	29	28	–	–	27(左)	28	26	–	30	31	28(左)
10.	骨体上矢状径	23 (左)	22	23	25(左)	–	19	20	20	–	–	23(左)	23	20	–	25	23	20(左)
6/7	骨体中央断面示数	100.00	88.46	96.15	–	–	95.65	108.70	92.00	92.00	88.46 (左)	104.35	96.00	104.35	71.43	100.00	96.30	95.83
10/9	上骨体断面示数	85.19 (左)	73.33	79.31	80.65 (左)	–	63.33	68.97	71.43	–	–	85.19 (左)	82.14	76.92	–	83.33	74.19	71.43 (左)

3．脛骨

表６は男性脛骨の比較表である。１号人骨の最大長は 372mm で、表６では最大値となり、長さはかなり長い。骨体周は１号人骨が 90mm で、表６では陣開の 97mm に次いで大きく、脛骨体はかなり大きい。一方、２号人骨では 77mm しかないが、山の神１号墳１号主体、山の神２号墳２号人骨、八鳥矢内迫脛骨８よりは大きい。中央断面示数は、１号人骨と２号人骨はともに 75.00 で、新宮と同値で、山の神２号墳２号人骨、同じく１号墳 2-1、朝田 10-2、八鳥矢内迫脛骨４に次いで大きく、骨体には扁平性は認められない。

表6　脛骨(男性、右、mm)(Table 6. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

		浅柄北 古墳人 島根県 出雲市			成岡 古墳人 広島県 広島市 (松下)	陣開 古墳人 広島県 本郷町 (松下)	新宮 古墳人 広島県 八千代町 (松下)	中出勝負峠 古墳人 広島県 千代田町 (松下・他)		氏神正田 古墳人 広島県 千代田町 (池田)		山の神 古墳人 広島県 府中市 (松下)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (吉岡・他)		八鳥矢内迫 古墳人 広島県 西城町 (松下・他)			朝田 古墳人 山口県 山口市 (松下・他)		
		1号人骨	2号人骨		2号墳人骨	1号	第2古墳人骨	5号人骨	7号人骨	n	M	2号墳2号	1号墳1号主体	1号墳2-1	脛骨4	脛骨5	脛骨8	7-2	10-2	10-3
1.	脛骨全長	–	–		–	–	–	–	–		–	333(左)	–	313.0	–	–	–	–	–	–
1a.	脛骨最大長	372	–		334(左)	–	–	343(左)	–	1	323	334	313.2 (左)	329.0	–	–	–	–	–	–
8.	中央最大径	32	28	(左)	32	28 (左)	32(左)	31	38	1	31	26	24.0	30.0	28	30(左)	28(左)	28	27(左)	31
9.	中央横径	24	21	(左)	21	18 (左)	24(左)	21	20	1	19	22	18.9	24.6	22	20(左)	19(左)	20	22(左)	23
10.	骨体周	90	77	(左)	85	97 (左)	88(左)	83	78	1	80	75	64.2	80.0	78	80(左)	76(左)	76	80(左)	84
10b.	最小周	84	–		76	–	75(左)	75	–		–	69	62.5	74.0	(70)	74(左)	–	70	75(左)	80
9/8	中央断面示数	75.00	75.00	(左)	65.63	71.43 (左)	75.00 (左)	67.74	52.63	1	61.3	84.62	78.8	82.0	78.57	66.67 (左)	67.86 (左)	71.43	81.48 (左)	74.19
10b/1	長厚示数	–	–		–	–	–	–	–		–	21.62 (左)	–	23.6	–	–	–	–	–	–

4．推定身長値

表７は男性の推定身長値の比較表である。１号人骨は表７では最大値となり、比較群との差はかなり大きく、山口県や広島県の古墳人よりはかなりの高身長である。

表7　推定身長値(男性、cm)(Table 7. Comparison of estimated male statures)

		浅柄北 古墳人 島根県 出雲市	中出勝負峠 古墳人 広島県 千代田町 (松下・他)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (松下)	山の神 古墳人 広島県 府中市 (吉岡・他)		成岡 古墳人 広島県 広島市 (松下)	氏神正田 古墳人 広島県 千代田町 (池田)		朝田 古墳人 山口県 山口市 (松下・他)	
		1号人骨	5号人骨	2号墳2号	1号墳1号主体	1号墳2-1	2号墳人骨	n	M	3-3	7-2
Pearsonの式	上腕骨	–	–	–	–	–	–	1	(153.12)	–	157.17
	橈骨	–	–	–	–	–	–	1	158.21	–	–
	大腿骨	(167.22)	161.77	160.08	157.3	156.5	161.58	1	157.26	156.88	159.89
	脛骨	(165.15)	160.16	157.78	–	153.0	–	1	155.41	–	–
藤井の式	上腕骨	–	–	–	–	–	–	1	(153.56)	–	156.66
	橈骨	–	–	–	–	–	–	1	156.33	–	–
	大腿骨	(167.78)	160.62	158.39	154.7	153.7	160.31	1	154.69	154.20	158.15
	脛骨	165.88	158.49	156.50	–	155.3	156.37	1	153.78	–	–

要　約

島根県出雲市知井宮町（ちいみや）2414-2 に所在する浅柄（あさがら）北古墳の発掘調査が 2007 年（平成 19 年）におこなわれ、１基の横穴墓（５号横穴）から人骨が検出された。人骨は埋葬状態を保っていなかったが、四肢骨の保存状態は比較的良好で、観察や計測をおこなうことができた。その結果は次のとおりである。

1．調査がおこなわれた６基の横穴墓のうち１基から人骨が検出された。人骨は撹乱された状態で出土し、埋葬状態を保った人骨はまったく存在しなかった。

2．頭蓋の保存状態は著しく悪かったが、四肢骨の保存状態は比較的良好であった。人骨を解剖学的に精査したところ、４体分の人骨であることがわかった。なお、４号人骨（男性）の保存状態が最も悪いことからこの人骨が最初に埋葬された人の遺骨と思われる。

3．４体のうち３体は男性骨、残りの１体は女性骨である。また男性骨のうち１体は 16 歳頃の成年骨である。

4. この４体の人骨は古墳時代（６世紀後半）に属する人骨である。
5. 頭蓋の保存状態が悪かったので、頭型や顔面の特徴などを知ることはできなかった。
6. 成人男性の上腕骨は太くて、三角筋粗面の発達も良好である。大腿骨は長さが長く、骨体も大きく、粗線や骨体両側面の後方への発達もきわめて良好である。また脛骨も太い。
7. 女性大腿骨は、やや細く、前彎の程度が弱く、骨体は直線的である。
8. 男性の大腿骨からの推定身長値は、(167.22cm)（Pearson、右）あり、かなりの高身長である。
9. 本古墳人の頭型や顔面の特徴を知ることはできなかったが、男性の四肢骨は骨体が太く、頑丈で、大腿骨はかなり長いものであった。女性大腿骨は前彎が弱く、直線的な大腿骨であるが、このような特徴は古浦弥生人にみられる特徴でもあることは注目しておきたい。
10. 本例は、頭蓋の保存状態が著しく悪かったので、頭型や顔面および鼻根部の形態的特徴を知ることはできなかったが、男性四肢骨は長さが長く、骨体も太いものであった。大腿骨や脛骨の長さは山口県や広島県の古墳人にはみられないほど長く、骨体も頑丈であった。このような特徴が弥生時代から継続する形質なのか興味ある課題である。

謝辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた島根県埋蔵文化財調査センターの皆様に感謝致します。

≪参考文献≫

(広島県)

1．池田次郎・他、1984：広島県氏神正田遺跡出土の古墳時代人骨について。広島県山県郡千代田町氏神正田遺跡発掘調査報告：13-18.

2．松下孝幸、1984：広島市芳ケ谷３号墳出土の古墳時代人骨。広島市安佐南区祇園町所在広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告（広島市の文化財第 30 集）：61-68.

3．松下孝幸・他、1985：東広島市大槙３号遺跡出土の古墳時代・中世人骨。大槙遺跡群（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 38 集）：117-122.

4．松下孝幸・他、1986a：歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集）：201-212.

5．松下孝幸・他、1986b：中出勝負峠墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集）：213-244.

6．松下孝幸、1990：広島県の古人骨。みよし風土記の丘、№40：1-4. みよし風土記の丘友の会 .

7．松下孝幸・他、1990：広島県西城町八鳥矢内迫横穴墓群出土の古墳時代人骨。西城町教育委員会文化財報告書第２集：33-65.

8．松下孝幸・他、1991a：広島県竹原市鷺の森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨。鷺の森遺跡発掘調査報告（付編）：1-40.

9．松下孝幸・他、1991b：広島市城ノ下Ａ地点遺跡出土の古墳時代人骨。(財）歴史科学教育事業団調査報告第２集：54-59.

10. 松下孝幸・他、1991c：広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨。手島山墳墓群（広島県埋蔵文化財セ

ンター調査報告第 93 集）：61-80.
11. 松下孝幸・他、1992：東広島市助平古墳出土の古墳・中世人骨。西城第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ（東広島市教育委員会文化財調査報告書第 21 集）：127-134.
12. 松下孝幸、1993：広島県本郷町陣開遺跡出土の古墳時代人骨。陣開遺跡（本郷町教育委員会文化財調査報告書第２集）付編：1-5.
13. 松下孝幸、1997a：広島県府中市打堀山遺跡Ａ地点出土の弥生・古墳時代人骨。打堀山遺跡Ａ・Ｂ地点（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 147 集）：47-50.
14. 松下孝幸、1997b：広島県東城町梶平塚第２号墳出土の古墳時代人骨。梶平塚第２号墳発掘調査報告書（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 150 集）：53-60.
15. 松下孝幸、1998：広島県福山市法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳出土の弥生・古墳人骨。法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 166 集）：52-58.
16. 松下孝幸、1998：広島県府中市山の神・池ノ迫遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。山の神・池ノ迫遺跡群（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 165 集）：75-105.
17. 吉岡郁夫・他、1983：出土の人骨。広島県府中市府中山ノ神１号古墳発掘調査報告：29-57.
18. 松下孝幸、2000：広島県八千代町新宮第２古墳出土の人骨。新宮遺跡群発掘調査報告書（八千代町埋蔵文化財調査報告書第１集）：95-108.
19. 松下孝幸、2001：広島県海田町上安井古墳出土の人骨。上安井古墳発掘調査報告書（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 191 集）：36-40.
20. 松下孝幸、2001：広島市成岡第２号古墳出土の人骨。成岡Ａ地点遺跡（（財）広島市文化財団発掘調査報告書第６集）：71-83.
21. 松下孝幸、1998：広島県吉田町会下山古墳出土の古墳時代人骨。（印刷中）
22. 松下孝幸、2004：広島県神辺町門前２号遺跡・道上第３号古墳出土の弥生・古墳人骨。道上第２・３・５号古墳、門前２号遺跡（財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第６集）：113-119.

（山口県）

１．松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告 64）：179-206.
２．松下孝幸・他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨－総括篇－。朝田墳墓群・山口県埋蔵文化　財調査報告 69）：219-242.
３．松下孝幸、1984：宇部の古人骨。宇部地方史研究、第 12 号：1-23.
４．松下孝幸、1985：光市荒神山古墳出土の人骨。光地方史研究、第 11 号：60-66.
５．松下孝幸・他、1986a：山口県豊浦町汐汲遺跡出土の古墳時代・中世人骨。汐汲遺跡（豊浦町埋蔵文化財調査報告第７集）：75-102.
６．松下孝幸・他、1991b：山口県妙徳寺山古墳出土の人骨。山口県文化財報告第 134 集：71-76.
７．松下孝幸、1996：山口県菊川町風呂ケ迫横穴墓群出土の古墳時代人骨。風呂ケ迫横穴墓群発掘調査報告（菊川町埋蔵文化財調査報告第４集）：21-28.
８．松下孝幸、2003：山口県玖珂町筏山古墳出土の古墳人骨。山口考古第 23 号：13-26.
９．松下孝幸、2004：山口県長門市稼塚横穴墓出土の古墳人骨。山口考古第 24 号：19-30.
10. 松下孝幸、2005：長門市西ノ木古墳出土の人骨。山口考古第 25 号：25-40.

11. 佐伯和信・他、1990：山口県小野田市仁保の上横穴墓出土の古墳時代人骨。小野田市埋蔵文化財調査報告第４集：15-23.

12. 洲上直孝・佐野一、1958：山口県下松市山根古墳出土の人骨に就いて。人類学研究、第５巻第１～４号：517-520.

13. 鈴木誠・池田次郎、1951：山口県熊毛郡神花村古墳人骨。人類学雑誌、62 巻：31-33.

（その他）

1. Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429-597.

表8 脳頭蓋(mm)(Calvaria)

		2号人骨 男性
1.	頭蓋最大長	−
8.	頭蓋最大幅	−
17.	バジオン･ブレグマ高	−
8/1	頭蓋長幅示数	−
17/1	頭蓋長高示数	−
17/8	頭蓋幅高示数	−
1+8+17/3	頭蓋モズルス	−
5.	頭蓋底長	−
9.	最小前頭幅	−
10.	最大前頭幅	−
11.	両耳幅	−
12.	最大後頭幅	−
13.	乳突幅	−
7.	大後頭孔長	−
16.	大後頭孔幅	−
16/7	大後頭示数	−
23.	頭蓋水平周	−
24.	横弧長	−
25.	正中矢状弧長	357
26.	正中矢状前頭弧長	123
27.	正中矢状頭頂弧長	127
28.	正中矢状後頭弧長	107
29.	正中矢状前頭弦長	109
30.	正中矢状頭頂弦長	113
31.	正中矢状後頭弦長	91
29/26	矢状前頭示数	88.62
30/27	矢状頭頂示数	88.98
31/28	矢状後頭示数	85.05

表9 上腕骨(mm)(Humerus)

		1号人骨 男性	2号人骨 男性
1.	上腕骨最大長(右)	−	−
	(左)	−	−
2.	上腕骨全長(右)	−	−
	(左)	−	−
3.	上端幅(右)	−	−
	(左)	−	−
3(1).	横上径(右)	−	−
	(左)	−	−
4.	下端幅(右)	−	−
	(左)	−	−
5.	中央最大径(右)	22	−
	(左)	22	21
6.	中央最小径(右)	20	−
	(左)	20	17
7.	骨体最小周(右)	66	54
	(左)	−	55
7(a).	中央周(右)	71	−
	(左)	67	61
8.	頭周(右)	−	−
	(左)	−	−
9.	頭最大横径(右)	−	−
	(左)	−	−
10.	頭最大矢状径(右)	−	−
	(左)	−	−
11.	滑車幅(右)	22	−
	(左)	−	−
12.	小頭幅(右)	−	−
	(左)	−	−
12(a).	滑車幅および小頭幅(右)	−	−
	(左)	−	−
13.	滑車深(右)	−	−
	(左)	−	−
14.	肘頭窩幅(右)	−	−
	(左)	−	−
15.	肘頭窩深(右)	−	−
	(左)	−	−
6/5	骨体断面示数(右)	90.91	−
	(左)	90.91	80.95
7/1	長厚示数(右)	−	−
	(左)	−	−

表10 尺骨(mm)(Ulna)

		1号人骨 男性
1.	最大長(右)	−
	(左)	−
2.	機能長(右)	−
	(左)	−
2(1).	肘頭尺骨頭長(右)	−
	(左)	−
3.	最小周(右)	−
	(左)	
6.	肘頭幅(右)	−
	(左)	24
6(1).	上幅(右)	−
	(左)	31
7.	肘頭深(右)	−
	(左)	25
8.	肘頭高(右)	−
	(左)	20
11.	尺骨矢状径(右)	−
	(左)	14
12.	尺骨横径(右)	−
	(左)	18
S	中央最小径(右)	−
	(左)	14
L	中央最大径(右)	−
	(左)	18
C	中央周(右)	−
	(左)	33
3/2	長厚示数(右)	−
	(左)	−
11/12	骨体断面示数(右)	−
	(左)	77.78
S/L	中央断面示数(右)	−
	(左)	77.78

表11 大腿骨(mm)(Femur)

		1号人骨 男性	2号人骨 男性	3号人骨 女性
1.	最大長(右)	(457)	−	−
	(左)	−	−	−
2.	自然位全長(右)	(450)	−	−
	(左)	−	−	−
3.	最大転子長(右)	−	−	−
	(左)	−	−	−
4.	自然位転子長(右)	−	−	−
	(左)	−	−	−
6.	骨体中央矢状径(右)	33	24	25
	(左)	32	24	24
7.	骨体中央横径(右)	27	26	25
	(左)	29	27	26
8.	骨体中央周(右)	94	79	80
	(左)	94	79	80
9.	骨体上横径(右)	32	23	−
	(左)	−	−	27
10.	骨体上矢状径(右)	27	27	−
	(左)	−	−	23
15.	頚垂直径(右)	−	29	−
	(左)	−	31	−
16.	頚矢状径(右)	−	−	−
	(左)	−	26	−
17.	頚周(右)	−	−	−
	(左)	−	92	−
18.	頭垂直径(右)	−	−	−
	(左)	−	−	−
19.	頭横径(右)	−	−	−
	(左)	−	−	−
20.	頭周(右)	−	−	−
	(左)	−	−	−
21.	上顆幅(右)	81	−	−
	(左)	−	−	−
8/2	長厚示数(右)	(20.89)	−	−
	(左)	−	−	−
6/7	骨体中央断面示数(右)	112.22	92.31	100.00
	(左)	110.34	88.89	92.31
10/9	上骨体断面示数(右)	84.38	117.39	−
	(左)	−	−	85.19

表12 脛骨(mm)(Tibia)

		1号人骨 男性	2号人骨 男性
1.	脛骨全長(右)	(364)	−
	(左)	−	−
1a.	脛骨最大長(右)	372	−
	(左)	−	−
1b.	脛骨長(右)	362	−
	(左)	−	−
2.	顆距間距離(右)	347	−
	(左)	−	−
3.	最大上端幅(右)	30	68
	(左)	−	−
3a.	上内関節面幅(右)	−	32
	(左)	−	−
3b.	上外関節面幅(右)	−	30
	(左)	−	−
4a.	上内関節面深(右)	−	−
	(左)	−	−
4b.	上外関節面深(右)	−	−
	(左)	−	−
6.	最大下端幅(右)	50	−
	(左)	−	−
7.	下端矢状径(右)	38	−
	(左)	−	−
8.	中央最大径(右)	32	−
	(左)	33	28
8a.	栄養孔位最大径(右)	39	−
	(左)	37	31
9.	中央横径(右)	24	22
	(左)	23	21
9a.	栄養孔位横径(右)	26	23
	(左)	27	22
10.	骨体周(右)	90	−
	(左)	90	77
10a.	栄養孔位周(右)	103	−
	(左)	100	83
10b.	最小周(右)	84	−
	(左)	83	−
9/8.	中央断面示数(右)	75.00	−
	(左)	69.70	75.00
9a/8a	栄養孔位断面示数(右)	66.67	−
	(左)	72.97	70.97
10b/1	長厚示数(右)	(23.08)	−
	(左)	−	−

表13 腓骨(mm)(Fibula)

		1号人骨 男性	3号人骨 女性
1.	最大長(右)	−	−
	(左)	−	−
2.	中央最大径(右)	−	−
	(左)	19	17
3.	中央最小径(右)	−	−
	(左)	13	11
4.	中央周(右)	−	−
	(左)	53	46
4a.	最小周(右)		−
	(左)	−	−
4b.	頚横径(右)	−	−
	(左)	−	−
4c.	頚矢状径(右)	−	−
	(左)	−	−
4(1).	上端幅(右)	−	−
	(左)	−	−
4(1a).	上端矢状幅(右)	−	−
	(左)	−	−
4(2).	下端幅(右)	−	−
	(左)	−	−
4(2a).	下端矢状幅(右)	−	−
	(左)	−	−
3/2	中央断面示数(右)	68.42	64.71
	(左)	−	−
4a/1	長厚示数(右)	−	−
	(左)	−	−

表14 推定身長値(cm)(Stature)

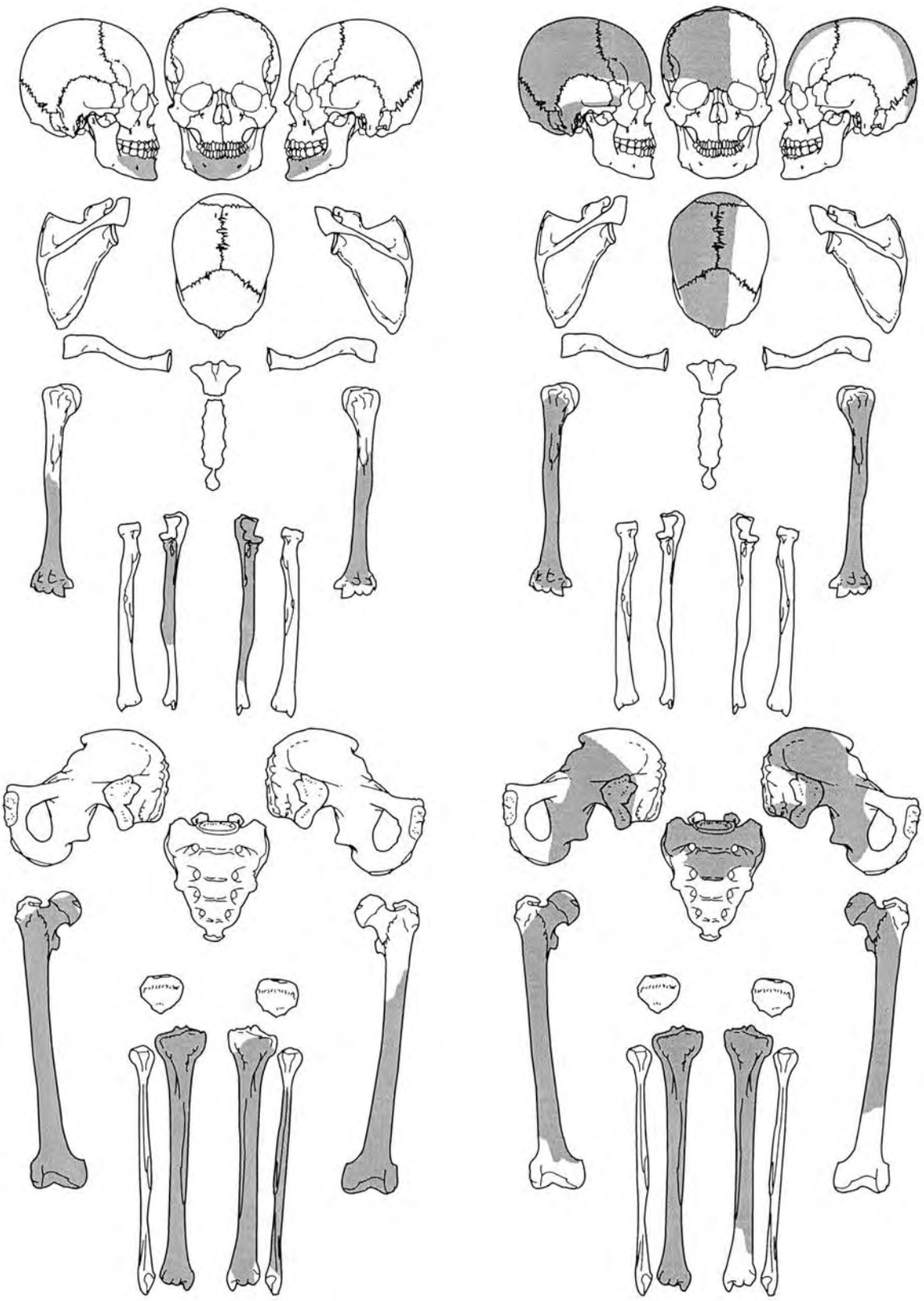
			1号人骨 男性
Pearsonの式	上腕骨(右)		−
		(左)	−
	橈骨	(右)	−
		(左)	−
	大腿骨(右)		(167.22)
		(左)	−
	脛骨	(右)	(165.15)
		(左)	−
藤井の式	上腕骨(右)		−
		(左)	5
	橈骨	(右)	−
		(左)	−
	大腿骨(右)		(167.78)
		(左)	−
	脛骨	(右)	165.88
		(左)	−

表15 中央周の比

		1号人骨 男性	2号人骨 男性
橈骨/尺骨	(右)	−	−
	(左)	−	−
橈骨/上腕骨	(右)	−	−
	(左)	−	−
鎖骨/上腕骨	(右)	−	−
	(左)	−	−
上腕骨/大腿骨	(右)	75.53	77.22
	(左)	71.28	−
上腕骨/脛骨	(右)	78.89	79.22
	(左)	74.44	−
脛骨/大腿骨	(右)	95.75	97.47
	(左)	95.74	−
腓骨/脛骨	(右)	−	−
	(左)	58.89	−

表16 形態小変異(Non-metoric crania variants)

		2号人骨 男性 右	2号人骨 男性 左
1.	Medial palatine canal(内側口蓋管)	/	/
2.	Pterygospinous foramen(翼棘孔)	/	/
3.	Hypoglossal canal bridging(舌下神経管二分)	/	/
4.	Clinoid bridging(床状突起間骨橋)	/	/
5.	Condylar canal absent(顆間欠如)	+	/
6.	Tympanic dehiscence,Foramen of Huschke(＞1mm)(フシュケ孔、鼓室骨裂孔)	−	/
7.	Jugular foramen bridging	−	/
8.	Precondylar tubercle	/	/
9.	Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen)(眼窩上孔)	/	/
10.	Accesory infraorbital foramen(副眼窩下孔)	/	/
11.	Zygo-facial foramen absent	/	/
12.	Aural exostosis	−	/
13.	Metopism(前頭縫合)	/	
14.	Os incae	/	
15.	Ossicle at the lambda	/	
16.	Parietal notch bone	−	/
17.	Transverse zygomatic suture(＞5mm)	/	/
18.	Asterionic ossicle	−	/
19.	Occipitomastoid ossicle	−	/
20.	Epipteric ossicle	/	/
21.	Frontotemporal articulation	/	/
22.	Biasterionic suture(＞10mm)	−	/
23.	Mylohyoid bridging(顎舌骨筋神経溝骨橋)	/	/
24.	Accessory mental foramen	/	/
25.	Mandibular torus(副オトガイ孔)	/	/
26.	滑車上孔(上腕骨)	−	−



浅柄北５号横穴出土人骨・１号人骨
（男性・年齢不明）

浅柄北５号横穴出土人骨・２号人骨
（男性・成年）

図２　人骨の残存図（アミかけ部分）
（Fig.2 Regions of preservasion of the skeletion. Shaded areas are preserved.）

下肢骨（Bones of the lower limb）

上肢骨（Bones of the upper limb）

浅柄北５号横穴１号人骨（男性）

（The Asagara-kita tunnel-tomb 5, skeleton No.1, male）

頭蓋上面（Superior view of the Skull）

頭蓋側面（Lateral view of the Skull）

四肢骨（The Limb bones）

浅柄北５号横穴２号人骨（男性・成年）
（The Asagara-kita tunnel-tomb 5,　skeleton No. ２, adolescent male）

下肢骨（Bones of the lower limb）
浅柄北５号横穴４号人骨（男性）
（The Asagara-kita tunnel-tomb 5,skeleton No. ４， male）

下肢骨（Bones of the lower limb）
浅柄北５号横穴３号人骨（女性）
（The Asagara-kita tunnel-tomb 5,skeleton No. ３， female）

第９章　総　括

出雲インター線建設に伴う発掘調査は、平成 15 年度に浜井場２号墳の調査を実施し、平成 17 年度から本格的に着手した。平成 19 年度までに 10 箇所の遺跡の調査を行い、数多くの貴重な成果が得られた。出雲平野南西部に位置する神西湖周辺の縄文時代～古代にかけての様相については今までその実態が不明瞭であったが、今回の調査でその一部が徐々に明らかとなってきた。全体像を捉えることはできないとしても、調査成果としては九景川遺跡や御崎谷遺跡を中心とした出雲平野における古墳時代中期前半頃の集落の一端が明らかになってきた点、間谷東古墳や浅柄北古墳など出雲平野では数少ない古墳時代前期～中期初頭の古墳の出現、出雲平野における出現期の横穴墓の様相などがあげられる。ここでは、本書に掲載した遺跡を中心に出雲インター線発掘調査で得られた成果に基づいて神西湖東岸地域の特色等について若干の検討を行いまとめとしたい。

第１節　神西湖東岸地域における集落の様相

出雲インター線発掘調査で確認された遺跡の多くは集落跡もしくは集落的様相を示すものが大半を占めている。これらの遺跡は小さな谷間及びそれに接する丘陵部に立地し、その分布状況から推測すれば大雑把ではあるが４箇所の集落域が想定できそうである。九景川遺跡、玉泉寺裏遺跡、御崎谷遺跡を中心とする東神西地区、間谷西Ⅱ遺跡の存在する谷間周辺の間谷西地区、間谷東遺跡周辺の間谷東地区、今回の調査では直接的に集落跡は検出していないが浅柄北古墳の東に隣接する浅柄遺跡や南に位置する保知石遺跡の状況から浅柄地区が想定できる。周辺にはこれ以外の集落が存在していることは当然であると思われるが、その実態を明らかにすることは残念ながらできない。以下これら集落の様相について概観してみたい。

１．縄文時代～弥生時代の様相

縄文時代では間谷西古墳群の２号墳斜面から前期の西川津式と考えられる土器が１点認められている。しかし、わずか１点であることからこの地に集落が形成されていたとは考え難いであろう。後期～晩期になると九景川遺跡と御崎谷遺跡からは遺物がある程度出土するようになり、浅柄遺跡や保知石遺跡では多量の遺物が出土している。建物跡等の明確な遺構は確認されていないが、当該期に東神西・浅柄地区の両地区で集落が出現し、特に浅柄地区では一定程度の規模の集落が存在していたものと推測される。また、この時期には神西湖南岸に位置する御領田遺跡や三部竹崎遺跡などからも多量の遺物が出土しており、神西湖周辺では比較的安定した集落が形成されていたと見ることができる。

弥生時代に入っても浅柄地区では弥生時代を通して遺物が出土しており、中小規模の集落が継続的に営まれていたようである。東神西地区では前期の遺物は九景川遺跡の土器棺しか今のところ認められず、縄文時代に形成され始めた集落は小規模化もしくは調査区外の丘陵縁辺部に移動していた可能性も考えられる。中期以降になると遺物は徐々に認められるようになり、集落が存在していたことが予想されるものの、それは極めて小規模なものであったと推察される。後期になると全体的に遺物は増加する傾向にあり、居住域は確認できなかったが、集落は拡大する過程にあったと考えられ、御崎谷遺跡でＳＸ０１などの土坑状遺構がこの時期に形成されており、玉泉寺裏遺跡の丘陵上にも土坑状遺構が確認されていることからも推測される。

一般県道出雲インター線建設予定地内遺跡一覧

調査年度	遺跡名	遺跡の内容	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良時代	平安時代	鎌倉以降
平成 15 年度	浜井場２号墳	古墳時代中期の小規模な方墳１基を調査 ２段堀の墓壙に石列区画溝と想定される落ち込み 鉄刀片ほか鉄片出土						
平成 17 年度	九景川遺跡	縄文時代～中世の集落遺跡。古墳時代中期、８～９世紀の建物跡を多数検出。古墳時代中期の自然河道における土器祭祀、中世の小規模貝塚など						
平成 17 年度	玉泉寺裏遺跡	弥生時代終末～古墳時代前期の木棺墓 丘陵頂部に立地する古墳時代中期の竪穴住居、 古代の集落など						
平成 18 年度	御崎谷遺跡	縄文時代～古代の集落遺跡 加工段や掘立柱建物跡を検出 古墳時代前期～中期を中心とする多量の土器が出土						
平成 18 年度	浜井場４号墳	地滑り等の影響により埋葬施設は確認できず						
平成 18 年度	間谷東古墳	奥才型木棺を有する古墳時代前期末～中期初頭の小規模古墳 刀子出土						
平成 18 年度	間谷東遺跡	古墳時代前期～中世の土器が出土 建物跡は不明						
平成 19 年度	浅柄北古墳	メイン主体は不明であるが、土器棺を伴う前期古墳１基 古墳下方の斜面から横穴墓８穴検出						
平成 19 年度	間谷西Ⅱ遺跡	古墳時代前期の加工段２棟 自然流路から古墳時代～中世の土器が出土						
平成 19 年度	間谷西古墳群	３基の古墳を調査したが、埋葬施設は確認できず 縄文時代～古代の遺物が少量出土						

出雲平野では弥生時代中期以降になると平野中央部や北部では大規模な集落が増加する傾向にあり、東神西・浅柄の両地区では拡大する傾向は認められるものの大規模集落としての様相はまだ見られない。神西湖周辺でも後期後半以降に三部竹崎遺跡や三部八幡下遺跡などでも遺物が確認され、西安原遺跡では木道も検出されていることから、この地域の集落も他地域同様に増加する傾向を示している。

２．古墳時代の様相

出雲平野中心部では弥生時代から古墳時代前期中葉までこの地域の核となる大規模な集落が存在していたが、その後は急速に衰退し、中期に復興するまで一時的に空白期を迎える。当該期の集落は神西湖周辺地域と斐伊川水系の北山周辺や塩冶地域に移動や再編成が行われると見られているものの、明瞭な集落跡の検出例が乏しいのが現状である。そして後期になると平野中心部は再び活性化して本格的な集落が営まれると理解されている。

神西湖東岸地域では古墳時代に入ると遺物の量は飛躍的に増大するが、それに伴う遺構は少ない。また、間谷西・間谷東の両地区にも集落が出現し始め、間谷西地区では間谷西Ⅱ遺跡から加工段２棟が確認され、間谷東地区では遺構は認められないものの少量の遺物が出土していることから付近に集落の存在を予想させる。しかしながら集落としては古墳時代を通して小規模のものであったと考えられる。

東神西地区の前期の様相としては御崎谷遺跡の土器だまりと玉泉寺裏遺跡の竪穴住居１棟があげられる。この土器だまりは何らかの祭祀行為によって形成されたものと考えられ、中期までの遺物が多量に出土している。この状況から想像すれば丘陵縁辺部で集落は営まれ、中期まで祭祀行為が継続して行われたものと理解される。中期になると九景川遺跡でも本格的に集落が営まれるようになり、確認された遺構も増加している。御崎谷遺跡の土器だまりにおける多量の土器や九景川遺跡の集落のあり方から推測すれば、当該期には九景川遺跡から御崎谷遺跡を含む周辺に大規模な集落が展開されていたものと想像できる。浅柄地区では浅柄遺跡から前期後半～中期にかけての竪穴住居などが検出され、保知石遺跡でも遺物が確認されていることから、集落は継続的・安定的に発展していたとみられるが、集落構造等については把握できていない。

また、神西湖東岸地域では前期～中期にかけて山地古墳や浅柄Ⅱ古墳、間谷東古墳、浅柄北古墳などの出雲平野では数少ない前期中葉～中期初頭の古墳が築造され、中期中葉には御崎谷遺跡の南側丘陵に出雲部最大級の北光寺古墳が築かれている。このことは前期中葉には古墳文化を受容する集落が形成され、中期には大規模な古墳を築くことのできる有力集団・大規模集落が成立していたと理解できようが、その出現の背景や集落構成等の解明にはほど遠い状況である。しかしながら、当該期の神西湖周辺地域は出雲平野の中で中心的な地域であったことはほぼ間違いないであろう。

後期になると遺物、遺構とも中期より減少する傾向が認められるものの、東神西・浅柄両地区とも集落は継続して営まれていたと考えられる。浅柄北古墳では横穴墓が築造され、周辺では神門横穴墓群や宝塚古墳など後期の古墳や横穴墓が多数築かれていることは興味深く、神西湖東岸地域では集落が飛躍的に増加・拡大していたことを物語る事象である。

３．古代～中世の様相

古代～中世の東神西地区では集落の中心は九景川遺跡に移るものと理解され、遺構・遺物が密に認められている。浅柄地区でも多数の建物跡が検出されていることから集落は継続して営まれてい

る。間谷西及び東地区でも遺物は認められるがその多くは流れ込みにより磨滅したものであることから、その中心は谷奥等にあるものと考えられる。

以上、発掘調査で判明した集落跡の様相について概観してみた。神西湖東岸地域は神門水海の縁辺部という地理的特性が活かされ、特に古墳時代では地域の核となる集落が出現していたと見ることができ、今後の調査・研究が進展して集落の実態等が解明されることに期待したい。

第２節　出雲平野における前期古墳の様相

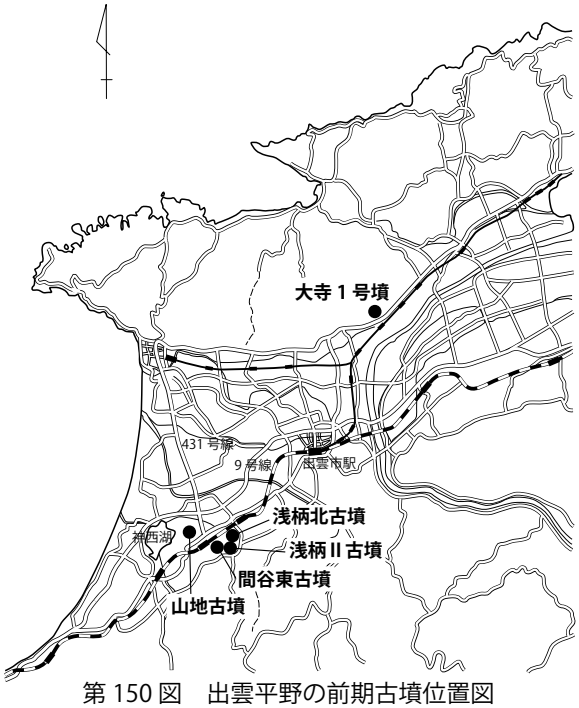
インター線発掘調査で間谷東古墳と浅柄北古墳の２基の前期古墳が確認された。出雲平野において数少ない前期古墳の発見は古墳文化の受容と普及を考える上で貴重な資料であり、出雲平野の前期古墳の様相や浅柄北古墳の位置づけなどについて検討してみたい。

１．出雲平野の前期古墳

出雲地方では安来平野や斐伊川中流域を中心に多くの前期古墳が築造されている。しかし、出雲平野に限定するとその数は少なく、前期初頭に西谷７号墳が築かれているものの、本格的な前期古墳としては斐伊川水系の北山周辺に位置する大寺１号墳と出雲平野南西部の山地古墳の２例が前期後葉になって出現することしか知られていなかった。ところが近年の発掘調査に伴い前期古墳の調査も増加し、３例の新資料が追加されることとなった。このように現在では５遺跡が知られることとなったが、それでも出雲東部に比べると少ないのが現状である。

大寺１号墳は出雲平野北東の北山山系から南に延びる丘陵上の標高 35 m前後の尾根に立地している前期後葉の出雲地方において最も古い前方後円墳である。規模は全長約 52 m、後円部の径約 27 mと大きく、前方部、後円部とも二段に築成され、墳丘全面に葺石が施されている。竪穴式石室を有し、副葬品には鉄斧、鋤先などの鉄製品がある。

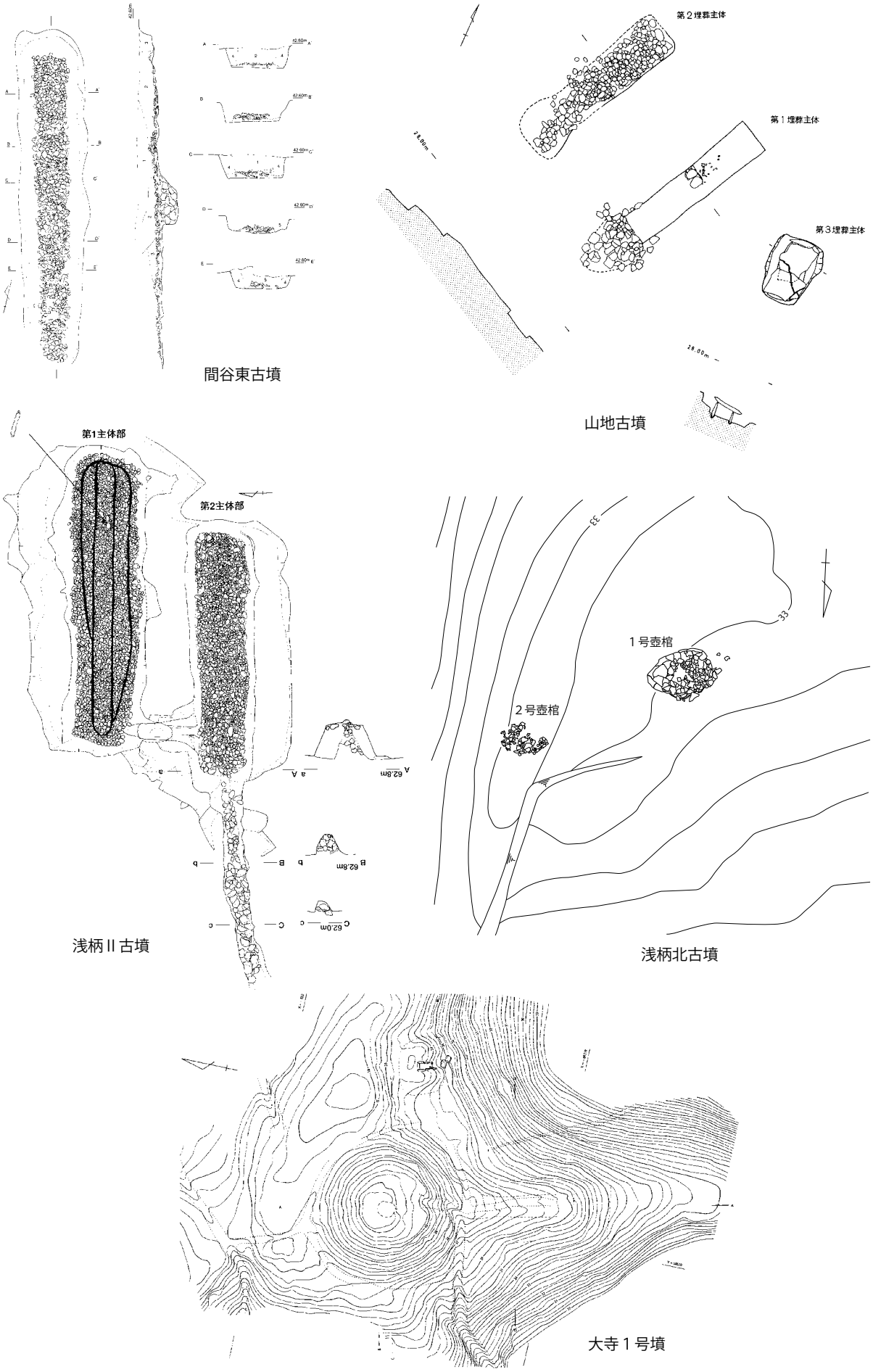
山地古墳は神西湖に隣接する東側丘陵の標高約28 mの尾根上に立地する前期後葉の円墳である。不整形であるが径約24 mの規模を測り、墳丘全面に葺石が施されている。埋葬施設は３基確認され、このうちの２基は礫床を有する木棺と箱式石棺である。これら主体部内から筒形銅器、二神二獣鏡、珠文鏡、碧玉製管玉等の豊富な副葬品が出土している。また、墳裾から壺棺も検出されている。



第 150 図　出雲平野の前期古墳位置図

浅柄Ⅱ古墳は浅柄北古墳の南方約 300 mの丘陵上の標高約63 mの尾根上に立地している。墳丘の形態や規模については不明である。埋葬施設は礫床を備える粘土槨と礫槨の２基が並行して築かれている。粘土槨から小形の鉄剣１点が出土しており、この鉄剣と埋葬施設の状況から前期中葉～後葉に位置づけられている。

間谷東古墳は浅柄北古墳の 500 m西方の標高約 42 mの丘陵尾根上に立地する。墳丘の形態や規模については不明である。埋葬施設は「奥



第 151 図　出雲平野の前期古墳

才型木棺」と称される棺内礫敷組合式木棺が１基確認されている。棺内から刀子、棺上面から土師器甕片が出土しており、これらの特徴から前期末～中期初頭頃と考えられる。

浅柄北古墳については後述するが、以上のように大寺１号墳のみ出雲平野北東部に位置し、その他の４例は対岸の出雲平野南西部に位置している。また、大寺１号墳は前方後円墳という墳形を採用しているのに対して山地古墳は円墳と推定されているが他の３例ともに墳形が明瞭ではない。このことは単に地形や地質等の制約によるものかもしれないが、対照的な様相であり興味深い。

２．浅柄北古墳の位置づけ

浅柄北古墳は出雲平野南西部の神西湖東岸の標高約 33 mの低丘陵上に立地し、北東に広がる出雲平野が一望できる眺望に優れた場所に築かれており、1 号墳はこの丘陵の最高所に位置している。現状では狭小な尾根と急峻な斜面であり、自然地形を最大限に利用して築造されたとしても地形の制約から小規模な古墳であったと想像される。このような状況であるため墳丘の大半は流失したものと考えられ、墳形や規模等については明確にすることができなかった。ただ、墳丘北側では墳裾と考えられるラインが認められており、これから推定すれば 12 m前後の規模が想定できる。

墳裾部分には石棺に使用されたと思われる板石が認められたため埋葬施設には石棺を備えているものと予想された。調査の結果、石棺やその痕跡はまったく認められず、検出できたのは土師器の土器棺２基だけである。１号土器棺は大形の壺形土器を縦割りにして２分割し、その２つを口縁部を真ん中にして被せるように墓壙内に設置されている。２号土器棺は土師器壺と甕の２個体で構成されているが、その組み合わせについては特定できず、墓壙の有無についても判断できなかった。墳丘出土の大形土器の性格については埋葬施設としての土器棺と供献用土器の２種類に大別されており（松本 1986 年）、１号土器棺はその状況から土器棺であることはほぼ間違いないと考えられるが、２号土器棺については残存状況が悪く墓壙も確認できなかったことから考えれば、供献用土器の可能性も否定できないであろう。

１号土器棺に使用された土師器は複合口縁の壺形土器で底部は平底を呈している。口縁外面に竹管文及び半裁竹管文、頸部～肩部にかけて５条の綾杉文を施し、体部内外面にはハケ目調整が施され、内面には部分的にヘラ削りが認められる。この土器の様相は松江市奥才古墳群 13 号墳出土の土師器壺や雲南市松本１号墳第３主体部出土の土師器壺に形態及び細部の手法が類似していることから、時期的に近いものと考えられる。奥才 13 号墳や松本１号墳は前期中葉に位置づけられていることから、浅柄北古墳も同時期頃に位置づけられるものと判断した。

現在、出雲平野で最も古い古墳としては浅柄Ⅱ古墳が考えられており、浅柄北古墳はこれと同時期もしくは若干先行する可能性が高く、出雲平野の前期古墳の中で最も古い古墳に位置づけられる。中心主体が不明であるため、埋葬施設の形態について、特に礫床の有無などの問題には触れることができないが、出雲平野の古墳の出現と普及を考える上で極めて貴重な古墳といえる。

３．神西湖東岸地域の特色

神西湖東岸では前述したように４例の前期古墳が集中している地域となった。浅柄北古墳を除く３例の古墳には埋葬施設に礫床を備えるという共通する特徴が認められる。礫床は出雲地方では古墳時代前期～中期前半を中心に比較的多く見られる埋葬形態であるが、出雲平野の前期古墳は５例と稀少であるにもかかわらず、その内の３例に礫床が採用されていることからみれば積極的に礫床を導入した地域とも見ることができる。山地古墳は３基の埋葬施設を備え、筒形銅器や青銅鏡など

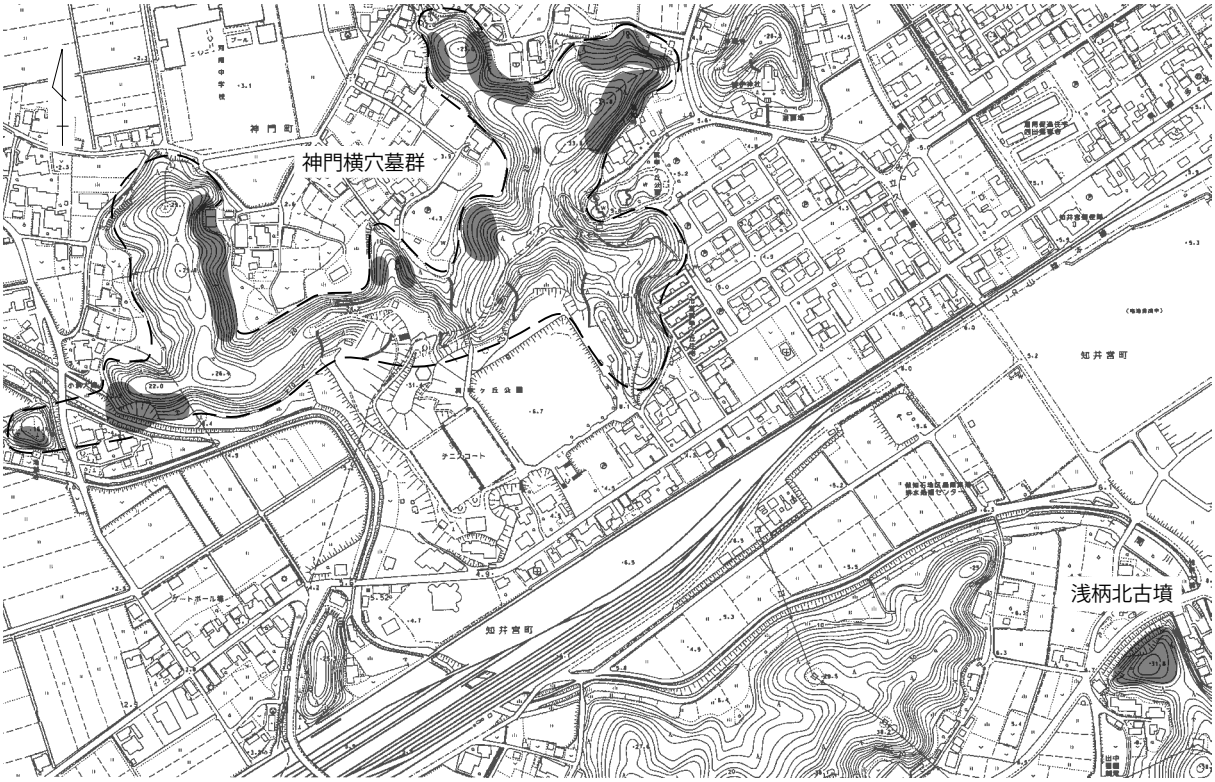
豊富な副葬品を有する古墳で、その立地から被葬者は内海航路を押さえていた首長と想定されている。浅柄Ⅱ古墳は粘土床の下に礫床を有する粘土槨を備えるという、県内では類例を見ない構造を呈するものである。間谷東古墳は木棺の底面に礫床を有する「奥才型木棺」を備えており、この木棺のタイプは北部九州から北近畿にかけて分布していることから、海上交通を中心とした広域な地域間交流が行われていたことが窺える貴重な資料である。

このように単に礫床を備えるだけでなく、粘土槨や「奥才型木棺」などの特異な埋葬施設を備える古墳の出現は神西湖東岸地域の特色といえる。神西湖が「神門水海」の名残であり、入海という当地域の地理的特性を活かした海上交通が出雲平野南西部の首長を中心に一定程度掌握されることにより様々な情報がもたらされ、その発展的過程において出現したものと理解したい。

また、中期になると御崎谷遺跡のすぐ南に位置する出雲平野全域を一望できる標高 100 mを超える丘陵上に出雲部最大級の前方後円墳である北光寺古墳が築かれている。この北光寺古墳に継続する大形の古墳は認められないが、周辺には浜井場２号墳や丁之内古墳など中期の小規模古墳が多く点在する地域でもある。以上のように特異な古墳の出現は当該期に神西湖東岸の集落が大規模化することと密接に関連するものと考えられ、集落の変遷と併せて検討していく必要がある。

第３節　横穴墓の様相

出雲平野には多数の横穴墓が存在しており、その大半は神戸川左岸の神門横穴墓群、右岸の上塩冶横穴墓群の２大横穴墓群等に集中している。出雲西部における横穴墓の出現は出雲４期の段階と考えられ、現状では出雲３期に遡る明瞭な横穴墓は確認されていない。このことから横穴墓の出現は松江市や安来市などの出雲東部より遅れると見られている。出現時期である出雲４期の横穴墓の特徴としては平面形態が縦長長方形で天井形態はアーチ形であることが指摘されており、出雲５期



第 152 図　神門横穴墓群と浅柄北古墳の位置（S=1/5000）

にはアーチ形は前段階から継続して存在するものの、家形を呈するものがこの時期に出現してくるようである。

今回の調査では浅柄北古墳から横穴墓が確認され、北側丘陵には大規模な横穴墓群である神門横穴墓群が展開する地域でもある。これらの特徴を踏まえながら浅柄北古墳における横穴墓の様相について検討してみたい。

１．浅柄北横穴墓群の様相

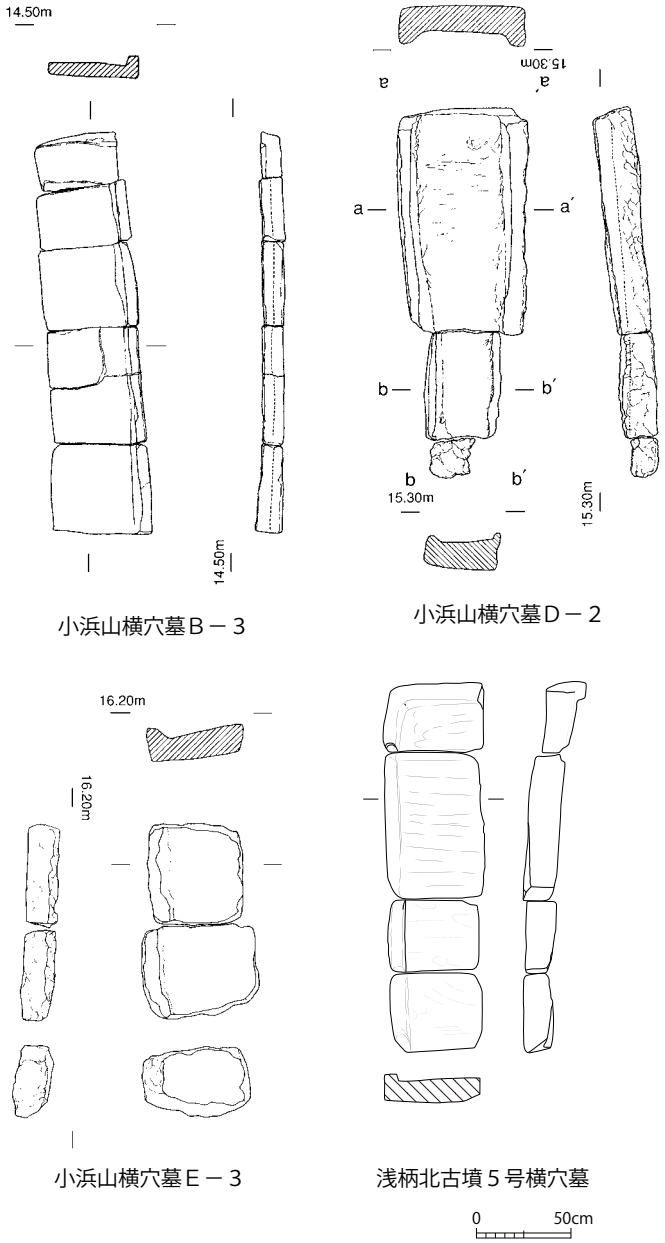
浅柄北古墳では８穴の横穴墓を検出した。第５章で述べたとおり、横穴墓の多くは天井部等が崩壊していたため天井部や平面形態の不明瞭なもの、遺物が皆無で時期の特定が困難なものもあったが、ここでは再度、簡単に整理してみたい。

出土遺物から見た横穴墓の時期については、出雲３期の横穴墓は認められず、出雲４期～５期が認められる。

出雲４期の横穴墓には３号・４号・６号・８号横穴墓の４穴がある。このうち３号・４号横穴墓からは出雲４期～５期の様相を示す須恵器が出土していることから追葬が行われたことがわかる。また、８号横穴墓は須恵器を伴わず赤彩土師器のみで構成されており、他の横穴墓と様相を異にしていることが注意される。時期についても明確ではないものの、西谷横穴墓群第２支群１号穴出土の土師器と類似していることから出雲４期と判断した。この時期の横穴墓の玄室形態は縦長長方形で基本的には前壁側に袖を有していたと考えられ、床面には排水溝や礫床等の内部施設は認められない。天井形態はすべてアーチ形である。このことは出雲平野の横穴墓と同様の特徴を示している。

出雲５期の横穴墓には５号・７号横穴墓がある。玄室形態は５号横穴墓が縦長長方形、７号横穴墓は隅丸の横長長方形を呈している。天井形態はいずれもアーチ形で、家形のものは認められない。

５号横穴墓のその形態は出雲４期の横穴墓に類似するが、細部では玄室奥壁手前約 70cm の位置から奥壁に向かって傾斜がつき、奥壁側では約 20cm 高くなるという差異が認められる。玄室内部には４体の人骨が遺存していることか



第 153 図　石床実測図（S=1/40）

ら、明らかに追葬が行われたと見られ、出土した須恵器は追葬時のものの可能性も考えられる。また、内部施設として４枚の切石で構成された有縁の石床が設置されている。このような石床は小浜山横穴墓群のＢ－３号、Ｄ－２号、Ｅ－３号穴でも確認されているが、３基とも同じ形態のものはなくバラエティーに富んでいる。有縁で２～３枚の切石で構成される石床を備えるＤ－２号、Ｅ－３号穴は出雲４期の造墓と見られ、上塩冶横穴墓と同じ定型化した石床を備えるＢ－３号穴は出雲５期と見られている。当横穴墓のものは切石の枚数に違いはあるがＥ－３号穴のものに類似しており、このことから推測すれば、出雲４期に造墓された可能性が高いと考えられる。

７号横穴墓は隅丸の横長長方形で玄室床面には中軸線から右壁側に沿って排水溝が廻り、左右に屍床を造りだした構造となっている。このような構造は１号横穴墓にも認められ、１号横穴墓は遺物が皆無であったため時期を特定することはできなかったが、この特徴から７号横穴墓と同時期の可能性も考えられようか。

出雲６期の土器が出土したものに２号横穴墓がある。遺物は床面から浮いていることから造墓時期を示すものではなく、流れ込みもしくは追葬時のものと見ることができる。崩落が著しく平面形態や天井形態も不明であることから造墓の時期については特定できない。

出土遺物から判断すれば以上のような造墓時期が推測される。１号・２号横穴墓については出土遺物から明確な時期を押さえられなかったため、他の要素から再度検討してみたい。この２穴は検出レベルからみれば群の中では最高所に位置している。横穴墓群の中で後出するものとした場合、密集して造墓が行われている状況から想像すると造墓するスペースに限りがあり、最高所という位置に造墓することは不可能に近かったと考えられる。だとすれば、出雲４期には造墓されていたものと考えた方が妥当であるかも知れない。また、直上には後背墳丘の１号墳が存在していることから、内部状況は不明であるものの「盟主的」な横穴墓であったとも推測でき、もしそうであれば、当横穴墓群の中で最初に造墓された可能性も想定できる。

このように浅柄北古墳の横穴墓群はその築造順位については把握することはできなかったが、造墓は出雲４期～５期までの比較的短期間に行われたと見られ、特に出雲４期の時期に集中的に行われたことがわかる。

２．浅柄北横穴墓群の特異性

神西湖周辺には神門横穴墓群や神待山横穴墓群、地蔵堂横穴墓群など多数の横穴墓が知られている。これら横穴墓群と当横穴墓群を比較してみても相違はほとんど認められないが、唯一様相を異にしているのは後背墳丘の有無である。当横穴墓群には古墳を含めた３基の後背墳丘が存在している。これらを後背墳丘とした根拠としては以下のとおりである。

①墳丘下方に横穴墓が存在していること

②３基の墳丘とも墳丘上から須恵器が出土しており、特に甕や横瓶は意図的に破砕された状況であることから、明らかに墳丘上で横穴墓に対する何らかの祭祀儀礼を行ったものと見られること

③１号墳を中心とするグループと墳丘２を中心とするグループが認められること

以上のことから３基の墳丘は後背墳丘であると判断した。しかし、後背墳丘は出雲東部の横穴墓には比較的多く認められる事例であるが、出雲西部の横穴墓にはこうした墳丘は認められず、特に神門横穴墓群のような大規模な横穴墓群であっても今のところ後背墳丘は確認されていない。ただし、上塩冶横穴墓群では明瞭ではないものの後背墳丘の可能性が窺える事例が存在しており、この

ことからみれば、本来は墳丘を有する横穴墓が存在していても流失等によって確認されなかったことが多いのかも知れない。今後、周辺の横穴墓から後背墳丘が確認され調査・研究が進むことが望まれる。

以上のように浅柄北古墳の横穴墓は明らかに墳丘を意識して造墓されており、特に前期古墳の立地を利用して造墓するなど、他の横穴墓群と様相を異にする特異な存在である。これが何に起因するものか明確にし難く今後の課題としたいが、出雲平野での横穴造墓の様相を知る上で貴重な資料といえる。

参考文献

出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲』1997

出雲市教育委員会『浜井場古墳群発掘調査報告書』2005

島根県教育委員会『九景川遺跡』2008

島根県教育委員会『玉泉寺裏遺跡・浜井場４号墳・間谷東古墳』2008

島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財報告書』1980

島根県教育委員会『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡』2005

湖陵町教育委員会『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財報告書』1994

西尾克己・野坂俊之「湖陵町の歴史　第１章原始古代の湖陵町」『湖陵町誌』2000

出雲市教育委員会『浅柄遺跡』2000

出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』1986

出雲市教育委員会『丁之内古墳』1981

島根県教育庁古代文化センター『大寺１号墳発掘調査報告書』2005

島根県教育庁古代文化センター『北光寺古墳発掘調査報告書』2007

松本岩雄「墳丘出土の大型土器」『山陰考古学の諸問題』1986

出雲市教育委員会『西谷墳墓群』2000

加茂町教育委員会『神原神社古墳』2002

鹿島町教育委員会『奥才古墳群』1985

鹿島町教育委員会『奥才古墳群第８支群』2002

島根県教育委員会『松本古墳調査報告書』1963

出雲考古学研究会『古代の出雲を考える７　松本古墳群』1991

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　1994

出雲市教育委員会『小浜山横穴墓群Ⅰ』1995

出雲市教育委員会『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書』1994

出雲市教育委員会『西谷横穴墓群第２支群発掘調査報告書』2007

大谷晃二・松山智弘「横穴墓の形式とその評価」『地域に根ざして』1999

島根県教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1998